

江の顔を見遣つた。自分は此女を捨てようとして居る。而もそれが一時の氣紛れではない。それなら未だ恕すべき所もあるが、豫め今日あるを知つて、永い間其計畫をつゞけて来た。唯、自分は決して此女を嫌つて居るのではない。一生を通じて隅江を忘れることは無からう。恐らく眼を瞑る瞬間に於て、自分の口端に上る女の名は隅江を指して外にあるまい。

やがて隅江は膝を下げようと、背後へ退る様にして椅子へ手を掛けた。

「隅江」と、要吉は女の名を呼んで留めた。

「え」と、振り上げたが、相手が何とも言出さぬので、「何ぞ——用で御座いますか。な。」

「うむ」と、又行詰つた。良久つて、「少し言ふことが有るんだ、眞面目に。」

「今直ぐ。」

隅江は椅子を閉めて、其脚に坐り直したが、眼の遣場に困つて、凝手と良人の顔を見返した。

「お前、明日にでも故郷へ歸るか」と、要吉は思ひ切つて言出した。

「へえ」と、言ひさして、隅江はしばらく返辭をせぬ。

要吉は女の素顔を見て、自分の言つた言葉の

意味が相手に通じたなと思つた。それと共に、人殺しでもする様に手が震へ出した。

妻を捨てるのは妻を愛せむが爲に外ならぬ。要吉は自分にもそれを承認させようとして、幾度も心の中で繰返した。別れて後こそ、妻を愛する心も無く暮らさうだらう。永く女を愛して愛するまいと思へば、其女を捨てる外に道はない。唯、そんなにして迄女は男から愛されたいものか如何だか分らない。それに附けても、男の愛といふものが、愛せらるゝ者のために愛するのでなく、愛する者自身の爲に愛するのだと言ふことは争はれない。それが又如何することも出来ないものであらう。

妻を捨て置いて、妻を愛したい。故らに妻を不幸に陥れて置いて、妻を憐れんで見たい。四川省の山深く分け入つて、永久に歸らなく成つた時、隅江の上を思ひ遣つたら何んな心持がするだらう。固よりこれは半ば空想に過ぎない。但だ空想程世に怖ろしいものはない。

が、斯んなに迄心置なく隅江を虐待することが出来るのは、心の底で此女を一番深く愛して居る證據ではあるまいか。尤も、それを又口實にして虐待を重ねようとするのだから、自分ながら淺ましい。

「隅江お前にも苦勞させたが、最う愛想が盡きたらうね。」

「何故なも？ そんな——」

見る／＼隅江の睫毛に露が宿つた。それを見るとき、要吉の眼も熱く成つた。

「お前には済まない、眞個済まない。勘忍してお呉れ、な。」

要吉はつとめて聲を濡せた。相手が眞面目なら此方は無理に出さうとしても、心持を仕向けてさへ行けば、涙は自ら出るものだ。隅江の顔が霞を透して見え出した。今一息ではらはらと頬に傳ひさうに成つた。此涙を隅江に理解されようとは思はぬが、切めて女から憐れまされたいといふ一念は失せない。要吉はじり／＼と身體をずらして、影に成つた自分の顔を洋燈の光に照し出した。

其時、急に涙が出なく成つた。あゝ人の性格は宿業にして容易に改め難い。隅江は終に良人の涙を見ずして済んだ。

二十八

折柄二臺の人力車が駈けて来た。石段の下へ脚棒を卸すと、先づ立上つたのは要吉で、續いて隅江も降りた。白い布片に包んだ五、四、三位の箱を、大切さうに、兩手に抱へて居たが、良人の後に置いて、おづ／＼石段を上つて行く。

午後十一時の發車には未だ間が有るかして、待合室にも三人の旅客しか見當らない。皆遠方へ行く人らしく、大きな荷物に凭れて坐睡つて居る。隅江は其前を擦り通る様にして、やつと片隅の倚靠に腰掛けた。それを見ると、要吉は直に立つて札賣場の方へ出て行つた。停車場の時計と自分の時計とを合せなどして、何と言ふこともなく其邊を見廻して居たが、やがて元の處へ戻つて来た。隅江は膝の上に小さい箱を載せたまゝ、しよんぼり荷物の側に坐つて居たが、良人の顔を見ると、

「未だ餘程間が有りますか。な」と訊く。

「うむ、一時間足らず有る様だね。」

隅江は黙つて眼を伏せた。要吉も並んで腰を下したが、洋杖の頭に兩手を掛けたまゝ、何とも言はない。此期に及んで餘計な事を言ふのは、女に對しても氣の毒な様に思はれたからだ。今夜子供の骨を持たせて故郷へ歸すといふもの、暫く別れて暮す約束にして、荷物も當座

入るものは大抵纏めて来た。昨夜それを言出した時に、隅江が案外物容易く承知したのを見て、一方では重荷を卸した様にも思つたが、何時に何だか物足りない心持もした。暫くと云ふ暫くが何時迄に成るか、それは分らない。要吉はこれが永い別れだと思ふ。少くとも空想の上では、一期の別れを演じて居るやうな氣がして成らぬ。それに自分だけは空想の積りで芝居を演つて居たのが、後からどし／＼取返しつ着かない事實と成つた類例は從來の経験でも数多い。そんな斯んなで、今夜八時の汽車で立つ筈であつたのを、外に準備も後れはしたが、要吉からぐ／＼と時を後らして終に十一時にして仕舞つた。併し明日に延ばす心はない。女の一人旅ではあるし、何だか心配だから明日にしてはと、小母さんが強つて止めたのも諸かなかつた。

平生人込みのする待合室だけに、がらんとして居るのが、一層際立つて見える。最う燐燐も焚かなく成つたのか、白い灰だけが鐵網越しに見えるのも、却てうそ寒い。燐燐の上に掛けた大鏡が冷たさうな光を反射して居る中に、時々白衣の人影が出没して、宛ら他界の姿を覗いて見る様に思はれる。要吉は凝手とそれを

見て居た。長い間鏡の中を見詰めながら、偶と此中へ自分と隅江と、二人の行末が映りはせぬかと云ふやうな、變な心持がして来た。今、自分の側に坐つて、微かな呼吸をして居る女と自分との間に、何かの因縁が有るとしたら、一瞬の後に別れて、一生の間再び相見する期がないといふ今はこの際、女の行末が自分の眼に映らぬとは云はれまい。

隅江は其處に居るか居ないか分らぬ程、靜に音も爲せないで居る。要吉は振向いて女の顔が見たいやうな氣もしたが、故と其儘にして女の上を想ひつづけた。いよ／＼自分が行方知れずに成つて仕舞つたと聞いた時、女は何んな心持がするだらう。恐らくは隅江自身にも解らない。固より側の人に解らう筈はない。自分にも解らず、人にも知られないで、矢張り暮れて夜が明けけるだらう。一年、二年、三年目には、人の妻と成るだらう。又新に人の母と成つて、其日々々の小さい出来事に心をなやまして暮す間には、何時となく頭に霜を置いて、腰も曲れば齒も落ちるだらう。其時に成つて、萬一年寄の夜話に若い頃の話でも出たら、何卒今夜のことか想ひ出して貰ひたい。恐らくは此女の生涯に唯一のローマンスたるべき自分との關係が、



老眼の霞を透して遠い灯でも見るやうに、ちらとぼくことが有つたら、其時は——今から願つて置く——数十年前に土と成つた自分の上に好意と温情を持つて想ひ出して貰ひたい。

不圖、足許に聲がしたので振ると、それは驛夫が水を擔ぎに来たので有つた。要吉はつと腰掛を離れて、隅江の前を彼方此方と歩き出した。こんな時もない想像に耽つて今の別れの重大な意味さへ切實に感じ得られないとすれば、自分ながら何處迄墮落して居るか方圓が知れない。今夜此女に背いて、明日から何に手頼らうとするのか。われから闇黒を求めて行く。それが最後迄堪へられるもので有らうか。こんな單純な女を空想の性とする男の心は、禽獸にあらずして何だらう。自分は怖ろしい淵に臨んで居る。泣いて哭れ、人目も構はず泣いて、取返つて哭れたら、それに依つて、此處迄切迫した二人の運命を變じ得たなら！ あ、自分の方が此女から頼れたい。要吉は腕組をしたまゝ、隅江の前に立停つた。何故泣かぬ、何故黙つて居るのだらう。此女には終に空想を容れる餘地がない。

何時の間にか、待合室には旅客が一杯たかつて来た。要吉も切符を買つたり手荷物を預けた

りした。間もなく振鈴が場内に鳴渡つた。ざわざわと人の足音が改札口へ近づいて、雪崩を打つてプラットホームを押し歩いて行く。要吉も漸と隅江を列車の中へ乗込ませて置いて、窓の前に立つて居た。

時は刻々に移る。隅江は膝の上の小箱に手を掛けたまゝ、要吉の顔から眼を離さなかつた。今でも——今でも可い、隅江が客車の中から飛出して来て、泣いて取返つて哭れたら、そして二人は救はれるのだ。要吉は女の顔を見返したまゝ、それ許り思ひ詰めて居たが、口では絶えず何とも言はなかつた。

到頭列車が動き出した。

「それぢや氣を付けて行くが可い。皆様に宜しく言つとくれ。」

「貴方も御機嫌好う。」

隅江は延び上がるやうにした。要吉も五六歩列車に隨つて歩いたが、白いベンキ種の柱の側に立停つた。と、急に踵を廻したまゝ、駈ける様にして改札口を出た。

夜半に雨滴の音を聞いて、要吉は偶と眼を覺した。暫く蒲團の中で耳を澄ましたが、

「雨だな」と、獨言を言つた。

程程隅江が今汽車で雨の中を進行して居るの

を想ひ出した。今頃は矢張りの上から小箱を離さないで、ぼく／＼眼を閉いて居ることだらう。これだけ長く抱いて居たら、肌のお味が小箱を透して、更に裏を透して、其中の死灰に傳はるかも知れない。要吉は肘を立てて、枕の上に顔を伏せたまゝ、夜の白む迄身動きもしなかつた。

二十九

毎も歸る途とは方角が違ふので、何處へ行くのかと神戸が訊くと、「え、一寸病院へ」と言つたまゝ、取澄して居る。其危険らしい白い肩が男の眼を惹く。

で、五人がひろい街の上を横に一列に並んで、が／＼言ひながら水道橋迄送つて来たが、神戸は一人別れて甲武線の電車で歸らうとした。深井は神戸に隨つて行かうか、それとも三枝子と一緒に歸らうかと、少時迷つて居たが、三枝子が「左様なら」とお叩頭をしたまゝ、ずん／＼士手について坂を登つて行くのを見ると、

「まア三枝さん、酷いわねえ」と、遠くで其後を追掛けて行つた。

要吉は朋子と二人だけに成つた。一町餘り黙つて歩いて居たが、壹岐坂の下迄来ると、

「彼方へ廻つて歸りませんか——今日も」と言ひ出した。

朋子も黙つて點頭した。

要吉は一步退る様にして並んで歩きながら、何遍同じ事をして、如何成るものと云ふやうな味氣ない心持がした。と言つて、引回す氣にも成れない。不圖、此女は毎日自分で何を爲て居たらうと、それが氣に成つて、

「此間はお銀様の祭でしたつてね。貴方が主人

役で？」

「ええ。」

「お客様は如何云ふ連中ですか？」

「親類の子や近隣の——皆がきやつきや騒いで、そりや面白御座いましたよ。」

要吉は痛と女の顔を見遣つた。こんな事を言つて、對手の話を外らかすのも此女の癖だ。

「ぢや、何です。貴方はそんな家庭の行事にも興味を有つて居るんですね」と言つたが、又二歩三歩行つてから、「で、お裁縫は誰が爲さるんです？」

「自分の事は自分で爲る様に居ます。」

如何だかと思つたが、自分でもわざ／＼自分を欺いて、餘計な事に拘らつて居るやうな氣がしたので、急に口を噤んだ。

途中、たゞ／＼話が途切れたが、それでも海鳥へ出て上野公園迄来た。正面の石段を登つて、彫義隊の碑の背後から攝鉢山の方へ、肩を並べて行く。

要吉は一人じり／＼した。何か言ひたい、言はなくちや成らぬと思ひながら、妙に心持がこじれて口へ出ない。

「貴方と會つても、私は最う幸福ぢやアなく成つた」と、打遣るやうに言つて見た。「併し會は

次に居るのはなほ苦しい。」

女は只聞き流した。男は更に言葉をつげた。

「此頃中、私は支那へ行かうと思つて奔走したのですが」と言ひ掛けて、不圖、それが此女に何の關係が有るか、急に又勇氣が挫けた。が、言ひ掛けたことは仕様がなない。

「他に人が有つて、それは駄目でした。此頃又或本屋の手代に成らうかと思つてます。左様成れば勿論、文學などは絶縁して、全く商賣に成つて仕舞ふ了簡ですから——私などに成れるか成れんか知らぬが、兎に角金業會へ出て、貴方のお目に掛るのも永くはない。」

「それよりも、肉屋の手代の方が好いでせう」と朋子は白ぼつくれたやうな調子で言つた。

要吉は思はず足を停めた。が、又思ひ返して歩み出した。何故そんな物の言様をするのか。尤も朋子の言葉が枯枝を折つて投げつける様に素氣ないのは、今更まつたことではない。それを何か深い意味でもある様に迎へて思つたのは此女が先天的の境遇に魅せられたのだ。一たびそれが他の修養から導かれるのだと知つては、そんな言葉は聞くに堪へない。

やがて、二人は兩大師の廣場へ出た。言ひ合



「何日、あの夜、一ばん終ひに別れた夜？」  
 「ええ。」  
 それきり、二人とも又黙つて仕舞つた。要吉は左様して居ても気が落着かない。對手の落着いて居られるのが腹立しい程落着かない。で、われにもなく立ちませうかと言出した。  
 朋子も直に立上つたが、何やら懶げになよなよとして見えた。  
 二人は又何もの路を戻つて行つた。要吉は歩きながらも気が苛つて、何か言ひたい、言つて仕舞ひたい様に思ひながら、儲て何を言はうにも、口へ出せば皆修辭的に成つて、今の自分の心持を本當に傳へ得ないやうな氣がして遺瀆がない。  
 谷中から團子坂へ降りる坂まで来ると、朋子は急に立停つて、  
 「先生、今日はお急ぎなんでしょうか？」  
 「何を？」  
 「いえ、此方へ廻つて歸らうかと思ひまして」と言ひながら、つと花見寺の方へ曲つた。要吉も黙つて隨いて行つた。しばらく行つても、朋子が何とも言出さぬので、  
 「ね、如何したのです」と、後から聲を掛けた。

こんな風に合體は打つたが、朋子の才走つた返辭は男の心に餘り好い感じは與へなかつた。何うせ最う此女は駄目だ、如何成るものでない知りながら、矢張如何がなして、最う一度自分の方へ引寄せて見たさに、  
 「ね、貴方は——貴方は癩癩の患者が昏睡状態に陥る際の經驗を聞いたことはないかと、女の顔を見て込むやうにしながら言出した。私はね、貴方は癩癩病者の症候が有るんだとばかり思つた。ね、左様ぢやないか。私一人で左様考へたのかも知れんが、私は如何しても貴方に左様思つて貰ひたい。」  
 朋子は黙つて五歩行き、又十歩行く。良久しうして、やつと顔を上げたが、「死の勝利」の中へ出て来る女は、矢張癩癩病を持つて居た様で御座いますね。  
 久しい以前に讀んだので、それとも心附かなかつたが、矢張知らず識らずの間に並行を求め居たのではなからうか。要吉は少時物が言へなかつた。  
 女は氣味よげに男のげつそりした顔を睨め遣つた。  
 「うむ、左様でしたね」と漸と備へを立直しながら、要吉は先に立つて歩き出した。

ずつと廣場を一周りして、又元の石の側へ戻つて来ると、前の女學生は何處かへ行つたと見えて、其邊に居なかつた。二人は石の上に並んで腰を下したが、要吉は直に又立上つて、前の木欄に凭れた。朋子と顔を見合せる。  
 あの夜のことが子供の時に見た遠い夢の様に一つ／＼戻つて来た。すべてが自分の描いた影に過ぎないやうな。あの夜女が一つとして自分の待設けないやうな事を言はなかつたのも、それが爲では有るまいか。兎に角、自分が女の上に小説を描いて居たことは争はれない。自分はその女から、自分の思想や感情を、自分の言葉と論理とで言はせて、それを樂しんで居たに過ぎない。  
 併し今此石に腰掛けた女は、あの夜の女ではなからうか。此手、此體ならしいやうな、壁く結んだ唇は自分の心の中に描いた朋子を指いて、他に持つ者は有るまい。——個と朋子が毎日も巻いてた毛皮の襟巻を止めて、別の肩掛を掛けて居るのに氣が付く。  
 「あの、毎日の襟巻は如何なすつた」と言ひ掛けて、不圖、天啓の様に頭の中へ閃くものがある。「ね、引裂いた？」  
 朋子は一寸顔を横につけて、肩掛をいちづつ

はきねど、足は自ら何日ぞやの夜の石の方へ向つた。偶と見ると、其石には女學生が一人腰掛けて、長い袖の中から襦袢の袖を出したまゝ、何やら讀んで居るらしい。二人は其御を擦り通つて、右の方へ曲つて行つた。  
 「お宅では御不幸が有つたさうで御座いますね」と朋子が不意に言出した。  
 「其んなことを、神戸君からでもお聞きできたか。」  
 「いえ」と言つた許りで、何處から聞いたとも言はない。  
 要吉は話題を轉じようとして、「ね、何時かのお手紙に淺草の親戚へ行くからと有つたでせう。あれは海禪寺のことなんですね。」  
 「ええ、あれはね」と言つたまゝ、少時口籠つて居たが、「彼處は只私が王子の友達と時々寄つて話をするために、一間借りて居るんです。そりやア坊主ばかりで、本當に呑氣ですよ。」  
 要吉はじろ／＼女の横顔を見守りながら、「ぢや、貴方は坊さんが所好なんですね。」  
 「ええ、唯想へば所好です。空に描いて見れば所好ですが、實際見ると大抵は嫌ひです。」  
 「左様、昔の物語の中へ出て来る信都や阿闍梨などは大抵好い。」

「ええ」と、女は顔だけ振向いた。  
 「如何したのです。私には解らない。」  
 「唯あの道を通るのが可厭でしたから、餘り度々通つたので——」  
 要吉は何と言ふこともなく自我の屈辱を感じた。だん／＼空模様が變に成つて、日も暮れるらしい。空際添うて、田舎に似た路がつゞく。  
 「私は一つ如何しても聞きたいことがある。良久らくして、要吉は四邊を見廻しながら言出した。朋子は返辭をせぬ。  
 「これだけ聞けば可い。貴方が九段の上で私に言つたことは——貴方自身のことに就いて——あれは事實か、それだけ聞かせて下さい。」  
 朋子は唯の様に黙つて仕舞つた。只路を急いで行く。田圃一面、途の上にも夕霧がかゝつて、しつとりと扶も萎れたらしい。  
 二人は動坂の上で別れた。別れる時も、朋子は何とも言はなかつた。

「うむ」と、要吉も息を喘ませた。  
 「ね、如何します？」  
 「如何もしない、通すさ。」  
 かう言つて、自分で出て行つた。土間に立つて居る朋子と顔を見合せて、一寸どきまきました



「何卒」と言ひながら、自分の居間へ招じた。二人は向ひ合つて座に着いた。何方からも何とも言ひ出さない。要吉は、それでも、思ひ掛けない女の来客が気がかりで、如何して来たのか、早く其所因が知りたい。が、女の突詰めた容子と、充血した眼の色と、熱病にでも罹つたやうな紅い唇とを見ると、迂闊にそんな事も訊かれない。朋子は目じろもせず男の顔を見返して居る。時々氣にしては、人並よりも引詰めた襟を無理に掻合せた、最う黙つて居るのが息苦しい。

そこへ小母さんが茶を煎れて持つて来た。二人の顔を見較べながら、二たび換を閉て出て行く。朋子は一寸其後を見送つたが、「お邪魔ぢや有りませんでしたか」と、初めて口を開いた。

「いえ、そんな事は有りません。」

其儘又話が途切れさうに成つた。要吉は机の上から象牙のペーパー、カッターを取つて、やけに類邊へ押附けながら、

「ね、貴方は如何思ふと、漫ろに言出した。一神と人間との間には未だしも融通がある。それは左様でせう、人間が神を造つたのですからね。併し人間と人間との間には、それだけの融通す

らない。一層神秘的で、一層怖ろしいものぢやアないか。」

朋子は一寸眼を伏せたまま、別に何とも言ひなかつた。

「が、併し如何することも出来ない。何うも仕方がないと、要吉は續いて打捨る様に言つた。又ひとり咳く様に、一神が人間を造つたと云ふのは誰かも知れんが、人間が神を造つたと云ふことは争はれない。」

何故こんな事を言ふのか、要吉は自分でも能く解らなかつた。が、これ隠しに強ひて理窟にも成らぬやうな理窟を並べた。朋子はそれを辛抱して聽いて居たが、其眼は絶えず、左様ぢやない、そんな談話をするためにわざ／＼此處へ来たんぢやないと、不服と輕蔑とを語つて居るらしい。要吉もそれに氣が附くと、相手の顔を見返したま、俄に口籠つた。一時上氣した血の氣も漸次に落着いて、皮膚の底に暗い色を持つた女の顔は、傷けられた傲慢の象徴たる魔王の様に近寄り難い。

朋子はなほ四半時間も左様して居たが、急に、「最う歸ります」と言つて立上つた。

要吉はそれを留めるだけの力もない。で、ぐ／＼上り樞送送つて出ると、女は下駄を

穿きながら、男の顔を見上げる様にして、

「ね、先生は是迄他人の夢を自分が見るやうな氣のしたことは御座いませんか。」

「他人の夢を自分が見る？」と、要吉は只繰返した。

朋子は少時土間に立つて思案して居る様に見えたが、急に頭を下げて、後も振向かずに出て行つた。

要吉はそこに突立つたまま、ぼんやり其後を見送つた。女の姿が見えなく成ると、つか／＼と居間へ戻つて、のめるやうに机の前に倒れた。又すつくと起直つて、何やら想出した様に机の抽斗を掻き出して居たが、やがて片々だけの女の手籠を取出した。未だ眞新しいと思つて居たが、明るみで見ると大分手擦れがして、指の頭が黒く汚れて居る。要吉はそれを眼の前へ持つて来て、唯かぞ見入つて居た。

女は来た、此處に坐つて居た。何のために来たのか、それは最う考へたくない、考へるだけの精も根もない。只、あの女に取つて自分は何だらう。要吉は初めて此問題を自分の前へ出して見た。が、答ふるに堪へない。あの女のため

に自分は弄ばれ、苛まれ、又侮られもした。併し愛されたとは——女が自分の上に興味を持

つたとは云へようが——愛されたとは幾許の愚目にも思へない。それなのに、自分は却て女の冷徹な態度を喜んだ。女が自分に對して冷徹であればある程、却て心を惹かされた。今日迄自分が女に依て興へられたものは、不安と猜疑との長い連続に過ぎない。が、この免れ難い猜疑の去つた時は、即ち女に對する興味の去つた時で、此戀を續けようと思へば、何時迄も猜疑の性となる外は有るまい。畢竟自分は性に過ぎない。而も同時に其目撃者だから堪へない、これが戀だらうか。斯んな戀はない。一種の病だ。昔から自分一人の病だ。

併しこの上幾度迷つたところで、矢張り同じ事を繰り返すに過ぎない。これを始めた者が、これを終らなければ成らぬ。それには禪學といふものに對する自分の反感を誇大して、二人の關係を茶番にして仕舞ふ外に道はない。只、それが堪へられようか。人は自分を道化視して尙生きられるものでは有るまい。

要吉は二たび茶の間へ戻つて、ひとり冷えた膝に向つた。何やら氣抜けがして、物の味も好くは解らない。で、箸を下に置くと、急に小母さんを急ぎ立てて洋服に着代へたが、「一寸其處まで」と言つたまま、街上へ出た。

最初番町の或家を訪ねて、かね／＼頼んで有る丸善の口を訊かうとしたが、折悪しく不在だと云ふので、言置をして其家を出た。新見附の上立つてぼんやり見渡すと、土手の草が青く萌え始めて、外家の電車が仕切りなしに往來する。何だか自分だけは社會の傍觀者のやうな氣がして、名狀し難い寂しさが心の底から湧くと共に、ぼか／＼と背中にも當る日影も怪しい。衣籠から時計を出して見ると、針が動いて居ない。時間も分らないが、午刻近い頃だらう。一人坂を降りて行く。

「ひとりだ、人間は終に一人だ。」

こんな言葉を口に出しても考へて見た。實際一人に成らうとして岡の上に立つて見ると、一生の長いのが今更の様に怖ろしい。

要吉は地面を見詰めたまま、こつ／＼洋杖の尖で小石を突きながら、淨瑠璃坂を登つて行つた。かねて隅江を故郷へ歸したら、自分も住み着いた丸山の家を出ようかと考へて居た。寺住ひか、一人者の世話を兒て呉れる間借りでもして、生活状態を一變したい。で、方角の知れない大路小路を宛もなしにぶら／＼歩いて居たが、一向目に留めて搜すでもなく、何時しか余丁町の先から郊外の田圃の中へ降りた。

二たび坂を上つて、四五町行つてから植木屋の垣根について曲れば、神戸の住家だ。がらがらと門のくゞりを開けたが、格子戸の前に立つたまま、主人を喚び出した。神戸は聲に應じてあらはれたが、

「まア這入りたまへ。」

「這入つても可いが、少し其邊を歩かないか。」

「左様だね」と、少し考へて居たが、やがて帽子を被つて出て来た。

二人は鐵道線路に添うて雑木林の中へ這入つた。西に向つて眞直に走る四條の鐵路が、夕日を受けて白刃の様にきら／＼と閃く。要吉は神戸と肩を並べて、久らくそれに見惚れて居たが、又想ひ出したやうに足を上げた。

「寂かだ」と、獨言の様に言つたが、「何だか人が懐かしい日だね——終りの日が近づいたやうに。」

神戸は先に立つて歩きたが、不意に、「僕の戀も終つたよ」と言出した。

「如何して」と、要吉は思はず女の顔を見送つた。

「なに、矢張り豫期したやうな結果を見たのさ」と、又一二間前へ出たが、一來月學校を卒業すると、大阪の親類へ嫁に行くといふんだがね。僕



のことだから、大概それで幕を閉ぢることだらうよ。

要吉の眼には、昨日水道橋で別れた時の三枝子の容子がちらと映つた。が、別に何と言様もない。たゞ黙々として歸て行く。

良あつて、神戶は又言出した。「此間僕がひとり教員室に居る所へ這入つて来てね、初めは唯黙つて立つて居た。それから前の椅子に掛けるには掛けたが、凝手と俯向いたまゝ、何も言はずに手に持った紙表紙の書物をぎり／＼と振つて仕舞ふんだよ。それを見た時は、何とも言はれない心持だつた。」

「左様だらう。」  
「左様だらうは、少し同情が無過ぎるね」と、一寸後ろを振り向つた。「尤も、他人の戀といふものは同情の出来るものぢや無いかも知れない。」  
要吉と神戶は顔を見合せて笑つた。が笑つた後は一層寂しいやうな氣がした。

「それぢや」と、十歩にして、要吉が言つた。「鬼に角終つたのは此方だけぢやないと思えるね。唯、僕のは最初から始まらないと云つた方が可い。」  
神戶は要吉の顔を見る／＼と見詰めたまゝ、  
「又、君の方から複雑にして仕舞つたのぢやないか。」

「女の女を愛したことが無いからだらう。」  
「如何だか」と、相手の眼を避ける様にしたがら、「僕は何時も胡粉を塗つた張子の岩に凭れて、愛詞をいふ積りで語る戀でなけりや出来な人間だらうよ。」

「だが、それはね、何んな戀にも幾分か左様ぶつた要素の含まれないものは有るまい。草刈の戀も、一面から見れば藝術だらうぢやないか。」

「まア如何でも可いさ」と、ほんやり四邊の野を見廻して居たが、「それよりも、僕は此頃何の女にも愛されたことが無いやうな氣がして成らんよ。」  
「何の女をも愛したことが無いからだらう。」  
「左様、愛しない者は愛されない。」

何時の間にか、四邊はほんのり黄昏れて、一軒家の障子に灯火が射した。二人は田の中の小徑を辿つて、ばつたり溝に行當つたが、何方を見ても橋がないので、それに添うた畦路を夕闇に包まれて行く。

「おい」と、要吉は背後から神戶を喚んだ。「君はド、キンゼイの『鴉片喰ひ』を知つてるか。」  
「知らない。」  
「僕も知らない。が、あの頃の連中はラムでもコイルリッヂでも皆鴉片を喰入したもんだつて

ね。」  
「うむ、鴉片は好い、少くともアブサンよりは好いだらう。」

「一寸飲んで見たいね。だん／＼量も多くするにつれて、意識が朦朧として、影が薄く成つて行くのは好いぢやないか。」

「漫性の自殺か、それも好いだらう。」  
二人の話はしばらく途切れた。  
村を一周りして、二たび神戶の家へ近づいた。座敷へ上り込んで、又尻を落着けたが、何うも談話が湧えない。何だか最後の言葉を言つた後のやうな氣がして、別段言ふこともない。

其夜十一時を過ぎて、要吉は漸く女の家を辭した。水道橋迄電車来て、そこから砲兵工廠の練場について歩き出したが、角の交番に人気がして居る。何心なく立寄つて見ると、一人の醉漢が巡査に小突かれて、何やら聲高に喚いて居たが、手早く突倒されたと思えて、地面に平這つたまゝ、急に聲を上げなく成つた。死んだものの様に口も利かなければ身動きもしない。

見物人は詰らなささうに一人散り二人散つた。要吉も足を留めて見て居たが、  
「此男の遺方の方が手取り早い」とひとり呟いて、又すた／＼と歩き出した。

三十一

桃の花の色を褪まして、春の雪が降つた。朝の強い日影に照されて、早やまきかけた街の上には、ちら／＼と水蒸氣の立上るのが見え

た。  
此日、要吉は小舟町の或銀行へ行つて、故郷から取寄せた小切手を金手に換へた。又泥濘の道を大通りへ出て、電車で築港町の教會迄来た。今日は此處で金葉をひらく日である。尤も、女學部は學年試験を辛へて、二三日前から春の休暇に成つた。教會の窓は百日の日の様に開かれて、玄關の戸だけ一枚開いてゐるが、會堂の中はたゞ薄暗い。要吉は街の真中に突立つたまま、少時思索して居たが、つと振り返つて、向側の珈琲店へ這入つた。朝の間だから他に客もな

い。毎時掛ける片隅の椅子に腰を下したが、其儘兩肘を立てて顔を支へながら、凝手と考へに沈んだ。  
最う一度朋子に逢はうと思つて此處へ来た。二人の關係を終るには、切めて幕切なりと好くしたい。出来ることなら言ふことも言ひ、聞くことも聞いて、すべて精算した上で二たび相見ないやうに成りたい。併しそれは無理な注文か

い。女は單純を望んでるよ。」  
「如何だか」と、相手の眼を避ける様にしたがら、「僕は何時も胡粉を塗つた張子の岩に凭れて、愛詞をいふ積りで語る戀でなけりや出来な人間だらうよ。」

も知らない。實際世の中では、何事に據らず、斯うしてぐづ／＼と片附いたとも片附かないとも分らぬ間に、何日となく済んで仕舞ふもので有らう。それを思ふと堪へられないが、其可厭な心持さへ何日迄続くものでもなからう。人間が絶望するのは未だ早い。絶望の悲哀よりも生き延びるのは堪へ難い。斯んな事を思ひつづけて、給仕の女が持つて来た珈琲茶碗の冷めたのも知らなかつた。

此時、不意に人口の戸を開けたものがある。要吉は顔に當てた手を外して、ぼんやり女の顔を見上げた。朋子は血相變へて齒を咬みしはつたまゝ、眞直に要吉を直視して、這入つて来たが、突然懐中から四角な状袋を出して、  
「今直ぐこれを讀んで頂きます」と、男の前に突附けた。

「これ迄の手紙とは違ふのですから——これが私の言へるだけの眞實の心持なんです。今朝からひとり教會の二階にお出を待つて居ました。讀んでお仕舞ひに成つたら何卒彼方へ来て下さいまし。乾度御返事が伺ひたい。」  
斯う言ひ捨て、其儘男が返辭も持たずに出て行つた。

懐中の長い手紙は終に出された。要吉はそれ

に手を懸けたまゝ、少時思ひ煩つたが、思ひ切つて取上げると直ぐに封を切つた。一寸に餘る巻紙に苛々した鉛筆の走り書きがつづく。

先達て不意に御宅へ伺ひしこと、何と思召し取り下さつたでせう。私は最う堪へられなく成つた。是迄先生を欺き、自己を偽つて、心にもなき言葉に行爲に、無造り自己を嘲まし得る積りで居りましたが、最う駄目です。私は無残に敗れた。血と肉との續く限り争つて見ましたが、最う自分で自分を制御することが出来なく成つた。此前お目にかゝつてから今日迄、一週間は全く夢中で生きて居た。徹夜も朝から家を出て、王子の友達に會ふ積りで海蔵寺へ行かうとしましたが、途中で會つても仕様がないと云ふ氣がさしたから、圖書館へ這入つて、一日人と物を言はないで暮しました。今日も一人日白僧園へ行つて、彼處の欄干に凭れて、欄の様に成つた木の間に冬ざれの田圃を瞰下して居たが、矢張り如何することも出来な、如何しても日頃の冷靜な自己を



取返すことが出来ないで、又ふらふらと其處を出て、宛もなく街の中を彷徨ふ間に、二三度も轉じて路上に倒れた。其儘意識を失つて、再び立たなかつたらと思つた程です。

此頃は家の者も心配仕出したので、取分け母の顔を見ると氣の毒で堪へられませんから、今夜も早くから自分の部屋へ閉籠つて、誰が来ても動かない様にして置きますが、私は最う駄目だ。先夜の夢は戻つて来た。何度でも繰返して執拗く戻つて来る。空虚な夢は紙に肉附けられねば止まぬ。最う抵抗する力が無い。私は永遠に失はれた。

私は失はれた。此手紙は胸に取返しの際かぬ痛傷を受けて、死者狂ひに成つた女が最後の努力である。書く、書く。この上は只書けるだけ書いて、一步でも先生に接近する道を求める外はない。

何日ぞや先生は私をスフィックスのやうな女だと仰つた。先生は最うおぼえて被坐しやらないかも知れない。が、何故私はスフィックスのやうな女に成らなければ成らぬか。敗北したことを切りに感

一日ずつと眼を通して、又初めへ戻つて二三行読み掛けたが、わな／＼と震ふ手に巻返した。終に其日が来た。自ら招いた總ての力の壓迫を一身に受ける日が来たと思ふ許りで、頭の中は白紙の様に何の考へもない。何の感情も動かない。不意に帽子を取つて立上つた。又想ひ出した様に紙人から珈琲の代を出して持った。其儘後をも見ないで街の上へ飛出したが、急に足を踏んで、

「殺せと云ふのは、斷念せよといふ他の言葉ぢやないかと、われにもなく呟いた。

兎に角教會の玄関を這入つた。一階へつゞく梯子段を絞首臺へでも上るやうに、一段づつ刻んで、像首ながら登つて行く。其時上からも梯子が降りて来た。互にそれと知りながら、なほ一足づつ近づいて、二人は梯子の途中で行違つた。要吉は下から女の顔を見上げた。見る見る女の眼の下から大粒な涙が持上つて、はらはらと頬から襟に傳はつた。朋子はそつと欄干に凭れて顔を背向けたまゝ、それを拭はうともしない。要吉は眼の當り人間の魂の苦痛を見るやうな氣がして、暫く物が言へなかつた。無言の間に五分間経つた。やがて男は女の顔から眼を離さないで一步退つた。朋子も一步隨

て来た。二人は梯子段を降りて、こゝろり其下の扉をあけて這入つた。

人氣の絶えた會堂の中は、人の肉を得て、急に四方から陰森の氣が迫る様に思はれた。要吉は椅子を引寄せ、女の座を設けたが、朋子はそれに掛けようともせず、男の傍に立つて居た。少時して、要吉は口を開いた。

「お手紙は——誰に讀みましたか。」

女は涙を一目溜めた眼に男を見返したが、只點頭いて見せた。

「貴方に接近する爲なら、私は何んな事でもする。何んな事でも歸かぬ積りだ。唯、あれぢや未だ解らない、あれだけぢや——」

朋子は屹と成つた。

「ね、あれだけぢやと、要吉は言葉を吐きかけた。あれ以上言へないのか、あれより外に言つて呉れることは出来ないのか。」

女は静手と睫毛を伏せたまゝ、何とも言はない。要吉は苛々しながら女の返辭を待つて居たが、何時迄も黙つて居られる苦しさに、

「それぢや聞かない、強ひて聞かなくとも可い」と投出す様に言つた。「私はどうせ何も知らず貴方に隨いて行くのでせうよ。」

朋子はつと男の腕に取違つた。男は片手を

じたからです。私はスフィックスのやうな態度を装つてならば、何時でも先生と握手する資格がある。けれども、今これを書く間は、先生と眼と眼を合せるところは逆も出来ない。私の苦痛は私の口から誰に向つても言へない、無論言つた所で同情同感などして呉れる人が有る筈もない。私には友達もない。家もない。一人で堪へて来た、最後迄聞ふつもりで生きて居た。若し私に自分を非我の地位に置いて觀察する習慣がなかつたら、或うに狂したか、今頃は如何成つて居たか分らない。唯、私は一方パツシオンに驅られて動いて居ると同時に、他方には餘裕のある我が見て居た。餘りに怖ろしい逸物發しきりに成ると知つた時は、大抵意力で制御して仕舞ふ。私は自分を制御する上に始終坐禪の力を藉りて居る。私は禪の思想を口にする資格はない、只自分を制御する上に使つて居る。

何日ぞや御同行した日暮里の兩忘庵は、私がたゞ物好から被處へお連れ申したとでも思つて被坐したかも知れませんが、あれは私が三年前夢中に成つて坐つて見

性した所なのです。それで先生と聞ふ時、彼の家を一度見て置きたく成つたのです。先生もお聞き及びせう、釋宗活と云ふ坊さんを。

けれど、それも最う駄目です。私は最後迄来て仕舞つた。最早私には何物も残されない、有るものは只恐怖と不安との連続である。靜に自分の最後を味つて死ぬと云つたけれど、それさへ今の状態では覺えない、最う叶はぬ。私、先生の御手にかゝつて死ぬ——殺して頂く。

勿論、日夜それ許り考へた上で極めたのですから、此決心は動かぬ。只一つ遺憾なのは、私が死んでから先生が如何變化して行くか、それを見ないのが残念で堪らないのですけれど、斯う成つた上はそれも仕方がない、思ひ切る外はない。

三月十九日夜半  
小島先生  
御許に  
眞鏡 朋

出して支へながら、「只、あの夢とは？ 夢とは何ですか。」

「一步背後へ踏けたまゝ、女は涙手と男の顔を見詰めた。

「あの夢とは、手紙の中の夢とは？」

「それを私の口から——」

「言へない？」

女は點頭いた。がたりと椅子の倒れる音がして折重るやうに、二人の……

「私は負けた。あゝ、最う私は——」

女は男を押退ける様にして立上つた。

此女の愛は——愛は此女に取つて勝利である。自分が此女から愛せられるのは、此女が負けた時である。血汐の中にたた打ち廻つて居る時である。そんな風で愛せられるのが何の嬉しからうぞ。要吉はデレマの上に立つた。少時敵意を有つた眼に女の顔を見据えて居たが、

「それぢやと、何やら不潔思ひ着いた様に前へ乗出して、「何日かの朝私の許へ飛んで来たのも——」

「矢張悪い夢に壓はれた後でした。」

男はたゞ息を詰めた。

「そりやア生死の争ひだつた——海の暴風



雨の様に怖ろしい」と、女は夢見る様にいつけ  
た。「私は最う一人で生きることが出来ない。」「  
二人で生きることが出来たら」と、要吉は相手  
の顔を覗き込む様にした。女は石の様に動か  
ない。  
「何故、如何して？」  
「この上生かして置くのは餘り酷い。一日生  
きて居れば、一日だけ悲惨な死方をするだけ  
です。」  
斯う言つて、思はず延上る様にしたが、「先生  
だけは知つて居て下さると思つた。それでな  
りや上野の森で、あんな眞似は出来ない。」  
「上野の森で？」  
「解つたでせう」と、塔から飛び下りるやうな聲  
で言つた。  
「私は最う自分の疾病と争ふのに勞れた。私の  
運命は水の墓か、癡狂院か、二つに一つを選  
ばない。」  
火か、さらば水——それは最初此女か  
ら聞いた言葉だ。それぢや、此女の正體は火  
で有つたのか、火は駄目だから水に着くと  
言つたのも、左様云ふ意味で有つたのか。火が  
着けば、自ら亡びる外に道は有るまい。  
「それで、要吉の解はかすれた。それで水

の墓を選んだのか。」  
「先生も——私を癡狂院へ送るやうな心持  
は無いでせう。」  
要吉は黙つて女の顔を見詰めた。人並外れて  
思ひ上つた女が、自他の辨別も無く成つて、鐵  
の棒を立てた檻の中で荒れ騒ぐ——そんな怖  
しい將來の運命を明かに見ながら、じり／＼  
と自分を制御する力が衰へて、負けて、狂つて  
行く。それを又自分で眼を離さず見て居る。何  
といふ奮闘を續けて来たものだらう。而も一人  
で、全く一人、絶望的に——最後の勝利は  
水の墓の外はない。  
要吉は黙つて手を出した。要吉はつと其手に  
握つたが、其儘男の膝に顔を埋めた。それが如  
何にも狂人の残酷な心から、相手を誘惑して同  
じ道に引取り込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死に  
させねば置かぬと云ふやうに見えた。  
何れにせよ、自分は性に過ぎない、此女の  
性に過ぎない。  
「私は殺せる。貴方なら殺せる。」  
他から促されてもするやうに口走つた。此  
女を失ふまいと思へば、此女を殺す外はない。  
要吉は眼を上げて、屹と男の顔を見詰つたが、  
二たび顔を伏せたまま、唇を立てて歎歎。要

吉は手を拭いて女の泣き止むのを待つて居た。  
其間、少し落着いたのを見て、  
「其日は？」と、小さな聲で訊く。  
「何日でも、先生の好きな時——」  
「早い方が好い。」  
女はむつくり起直つて、少時考へて居たが、  
「明後日の朝十時迄に、海軍寺へ来て下さいま  
し。私はそれ迄に其處へ參つて居ります。」  
要吉は起直つたついでに、袖で涙を拭いて、居  
坐ひを正した。要吉も亦んで眼を掛けたが、身  
體が甚くがつかりして、當度二人が離れて無  
人島の荒濱へ打上げられたやうな氣もした。何  
も言ふことがない。關から吹込む風に煽られ  
て、入口の扉がぱたんと大きな音を立てて閉ま  
る。又開いて、又閉まる。二人はそれに見惚れ  
て居た。  
やがて要吉が振ると、自分の顔を見て居ら  
れたので、眼に涙を有つたまま、に／＼と唇を  
絞らせたが、二たび男の顔に見えようとした。  
「最う此處を出ようか。」  
「ええ。」  
二人はつと立上つた。金葉會の連中が申  
合せた様に出て来ないので、會堂の中はひつそ  
りとして居る。で、女を降りようとした時、

何かに頭いたと見えて、要吉はよろ／＼と地面  
に膝を突いた。髪の中の根元迄顔を埋めながら、  
袴の泥を押し／＼立上るのを見送つて、  
「え、負傷をしない？」  
「いゝえ」と、傍へ寄つて来て、「此頃は好く轉  
ぶんです。」  
何やら想ひ出した様にくす／＼笑つて居た。  
要吉も片頬に笑ひながら、一町餘り一緒に来た  
が、町の曲角迄来ると、  
「ぢや、此處で」と立停つた。一人に成つてむへ  
たかつたからだ。  
要吉は津浦の道を一文字に歩いて行く。少時  
其後姿を見送つて居たが、又ぶら／＼飯田橋の  
方へ向つた。一人に成つて見ると、又何がなし  
に淋しい。未だ言残した事が有るやうな氣もし  
て後を追掛けて見ようかとも思つたが、思ひ返  
して止めた。  
飯田橋の上に立つた時、不圖、今朝出掛けから  
見舞ひに行く心算で居た或亡女の遺族のことを  
想ひ出した。今度其友の遺族を出すについて、  
本屋との交渉も略々了つたから、旁々それを知  
らせに行くのだ。其人達は牛込の奥に住んで居  
た。で、ぶら／＼神樂坂を登りながら、要吉の  
眼には去年の夏爛れたやうな後天の下に、こつ

そり女の顔を送つたらしい行列が送つて来た。  
友は人を愛せず、又人にも愛されなかつた。大  
學を出て間もなく死んだので、其名を記憶する  
人も有るまい。今頃遺族など出されるのは、故  
人の本意でないかも知れない。自分も——萬一  
そんなことに成つたら——後に何物も残したく  
ない。嘗て此土の上には足跡を印したことがない  
かと思はれる迄、清洲に此世から忘れ去られた  
い。  
友の家では母屋を他人に貸して、裏の離座敷  
めいた小家に住んで居た。阿父さんは非職軍  
人とかで、縁側に火桶を抱いて坐つて居たが、眼  
だけさよりりとして、むくんだ顔が何處やら病  
人らしい。要吉の來意を聞いて、つと安心し  
た様に重たい口からぼつ／＼と自家の事情を語  
つた。死んだ息子ばかりでなく、其兄弟が昔處  
弱で、後から／＼と一人づつ取られて行く。此  
後に男の子として季の弟一人しかいない。で、健  
康やら活許上の都合やらで、近く一家を舉げ  
て河津へ引越すのださうな。こんなじめ／＼し  
た話を聞いて居ながら、要吉は妙に心が浮つ  
て居た。何だか自分の役でない役目を勤めて  
居るやうな氣もした。

其家の門を出た時はほつと息を吐いた。根  
の根についてそろ／＼足を選びながら、甕に  
角、生前にすべき事を一つだけ済ましたやうな  
氣がした。同時にそれだけ前途が詰つたやうな  
氣もした。何時の間にか暮れたのか、毛筋のやうな  
雨が降つて居る。  
それにしても——要吉は二たび女の上に戻つ  
た。それにしても、あの女の言ふやうな、そんな  
事が有り得ようか。長い間心に被さつて居た  
重荷の除かれた嬉しさに、一も二もなく女の言ふ  
ことを承認して来た。けれど、女の通りだと  
すれば、あの女は——何日ぞやあの女の口づか  
ら、自分は女でない、如何してもそんな要求の  
起らない身だと思つた。それは全然裏腹だ。  
が、それ迄にして女が男を離す——何うも  
そんな事は考へられない。「女でない」と言つた  
のも、只わが身の苦しさに、左様云ふ境地を夢  
みながら、辛うじて生きて居るのだとすれば、  
極端から極端に走るあの女の性癖として、さ  
のみ不思議ではない。それに上野の森で見たあ  
の女の狂態も、強ひて女の言ふ様に解すれば解  
されないでもない。が、それにしてもエロトマ  
ニヤとは彼様なものだらうか。何うもた様は思  
はれない。あの女にしても、あの怖ろしい多感



性が自制を困難にして感情の暴ぶが儘に任せられた時は、自分ながら不安の念に堪へないことも有らう。それが爲に苦悶が内部に湧いて、烈しい倫理上の葛藤に對する不完全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して嘆しむ——そんな事がないとも言はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとしたら——  
「お、併し——と、や、有つて又考へた。その女の狂気を此方から癒すことが出来ないといふれば——あの女を自分の手から離すまいといふれば、あの女をあの女の言ふが儘に狂氣にして置く外はない——あの女の言ふことが事實にもせよ、想像にもせよ、何方にしても同じ事だ。自分分はたゞ一刹那あの女と同化し得れば可い。只一瞬間。それに依つて萬事休す矣。  
實際、自分は女を殺さうと言つた。そんな怖ろしい事を口にする自分は、それぢや怪物か。いや、犠牲に過ぎない。あはれな、難に過ぎない。あの女はあの女自身のために死ぬ、死はあの女に取つて一種の勝利である。それに自分は——自分はこの女を手を掛けるかも知れない。が、殺されるものはあの女ぢやない、自分自身である。あ、自分は今日迄他人が自分の爲に死ぬものだと思つて居た。自分は他人の爲

に死なうとは夢にも思つて居なかつた。何んなローマンスに於いても、自分が主人公になれると思つた。醫師の役を勤めようとは思はなかつた。が、それも成行なら仕方がない。只切めては自分が死んだと聞いたら、後から隨いて死ぬ女の一人位は有りた——要吉は後に遺して行く女の顔を一人々々心に返つて見た。そして小雨に濡れながら江戸川の終點に立つて、ぼんやり電車を持つて居た。  
「松ヶ枝町で電車から降りた時は、雨がびしよびしよと降出した。頭からぶ濡れに成つたまま明神下の横町を曲つてお種の家の格子戸の前を立つた。ことごとといふ足音を聞附けたのか、上り根の障子を開けて羽織を着た女がすりと立つた。  
「まあ大變！」  
お種は大聲に男の姿を眺め遣つたが、下駄を穿いて、格子戸の扉を外して呉れた。  
要吉は黙つて土間へ這入つた。上り根に掛かけて、雨水に濡つた靴を脱ぎ離さうにして脱いだ。女が外套を受取つて縁加の竿に掛けに行つた間に、茶の間へ通つたが、灯火が一つ點いてみり、誰も居ない。お種は戻つて来て、應てて座蒲團をすゝめた。

雨はしと／＼と降る。要吉は氣味悪さうに何れ度も半巾を出して、頸筋の邊りを拭つた。お種はそれに氣が附いたが、平時と容子が違つて居るので、時々男の顔を偷むやうに見遣りながら、其譯を聞かうともしなかつた。要吉も別に説明しようとはしない。  
「お種は——と、少時して口を開いた。  
「今一寸お湯へ——と、背後を見返つたが、又元の通りに向直つた。  
「お種お變りはないか。」  
「え、相變らず。」  
要吉は最う何も言ふことがない。何の爲に此處へ来たのか、自分でも解らなく成つた。折柄、又格子戸の開く音がした。お種の姉が湯から上つて来たものらしい。茶の間の障子を開けて、何気なく顔を出したが、  
「おや、被人しやいまして、下町の主婦さんらしい丁寧な挨拶をして、  
「何卒御免なさいませよ」と、石鹼や濡手拭を掛けに行つた。  
やがて又茶の間へ戻つて来て、長火鉢に寄添ひながら、  
「何だか鬱陶しう御座んすねえ。おや、濡れたまゝで被人した。何故前代へて頂かないんだ

え。あれが未だ一度も手を通さないから良人のあれが好いよ。」  
「私なら直ぐ歸るから」と、要吉は口を挿んだ。「まあお宜しいでせう。良人も直ぐ歸つて参りますから、今夜は何卒御寛り遊ばして。」  
「姉さん」と、お種は姉の顔を見て、「あれは如何なの？ 此間阿母さんが持つて来たのが、今日漸と仕立上つたから、未だ重しが掛けてあるけれど。」  
「左様、そんなものが有るんなら早くお出しなさりや可いのに。」  
お種は向うの部屋へ行つて、仕立板の下から浴衣の箱を持つて来た。要吉が去年着たのを洗ひ張りに出したので、何日の間にか此處へ持つて来ては立直したものと見える。要吉もそれを見て見ると、お種が二人がかりで仕立板を取つて呉れた。姉はなほ袖だの裾だのを引直つて見て、  
「好い、好い、よく出来た」と、獨言の様に言ふ。お種は下を向いてお捨てた洋服を纏んで居た。こんな夜は小さい時分の事が憶ひ出されると言つて、二人の姉妹は火鉢に燗湯をかけて、か

き餅を焼いた。お種は割合に言葉少なにして居たが、姉は一人ではい、い、い。要吉もたうとう十時頃まで居た。始終自分が如何して斯様にして斯んな話をして居られるかと疑ひながら、矢張りぐ／＼と相手に成つて居た。そして、何も言ひ出さないで、柱時計が十時を打つのを聞いて立上つた。  
雨傘をさして寝静まつた町の中へ出た。物足らぬといふ感じの外に何も感じない。何と思つて女に命ひに行つた。たゞ女の涙が見たかつた。女が遺骸の上に注ぐ涙を生前に見て置きたかつたのだ。併しこんな不純な心持が本當に死を決した人の心に泛ぶもので有らうか。選個要吉は死よりも死が齎すものを望んで居たらしい。  
三十二

中の一日は、朝からじめ／＼と雨が降り續けた。要吉は居間に閉籠つて、これ迄自分が關係した仕事の中で、早速片付けて置かねば他人の迷惑になるものだけを調べにかゝつた。平氣で死ぬ準備をするよふことに、一種の興味をおぼえながら傍目も振らず手と目とを働かせた。小母さんは一二度茶を煎れて持つて来たが、それも邪魔に成ると思つたかして、直に引退つた。夜の十一時頃迄に漸く一通り片附いたので、茶の間へ行つて見た。近頃は小母さんも年を取つたのが目に立つ。努めて何かと話しかけたが、頭に降さうで氣が乗らない様に見えた。洋燈も油が乏しく成つたと見えて、幾度心を上げて見ても見る／＼と四邊が薄暗く成つて行く。要吉は云ふべき言葉もなく、老婆の拵せて陰影に成つた顔を見て居た。間もなく居間へ戻つた。其日は来た。雨上りの空が蒼く晴れて、樹の枝に露が滴つた。彼岸の人りだと云ふので、小母さんは心ばかりの用意をした。要吉は平時の様に朝飯の膳に向つたが、何気ない體で、「今日は千葉迄行つて来ようと思ふが」と言出した。  
「千葉へ？ と、小母さんは眼を睜つた。  
「急な用事が出来たから」と、速てて言葉をしながら、「八夜は歸らないかも知れませんが、明日は乾度歸る。」  
直に立上つて身支度をした。小母さんは飽氣に取られながら手傳つた。  
要吉は小母さんの氣が附かぬ様に、一昨日銀行から受取つた金子の折半と、それが用意を指圖した一封の手紙とを用算筒の中へ入れて置いた。



門外這つかく、と急ぎ足に出て、一寸橋の上  
に立停つたが、其儘後を振向かなかつた。  
三丁目から電車に乗って、淺草の門跡前で降  
りた。わく／＼しながら、松葉町の寺を訊ね  
て行くと、派手寺は容易く分つた。門を這入る  
時、偶と自分は此寺へ何爲に來たのだらうと思  
つた。何爲にとは、要吉が最も考へるのを恐  
れた所だ。成るべくなら終ひ迄自分が何を爲て  
るかも知れて居たい。  
境内は閑かに、一株の老松が四邊を支えて  
居た。只、左の方に學校か寄宿舎か、ベッキ堂  
の不恰な建物が見えて、庭に石炭を敷いた  
のが稍うとましい。  
要吉はぼんやり玄關の前へ立つた。衛立を一  
枚立てたきりで、開放しだから奥の方まで見透  
せるが、森として物音一つしない。二三座敷を  
掛けても、誰も應ずるものがない。不圖、朋子  
は來て居ないのぢやないかと云ふやうな氣がし  
た。本當に彼の方が來て居なかつたら、最初か  
ら自分を騙したのだとしたら、只自分が騙さ  
れたといふだけで、實際にも何事も起らずに済  
む。未だそれにも覺くはない。要吉は衷心  
自分がそれを冀つて居るやうな氣がして、思  
はず後を振り回つて見た。

其時、腰衣を着けた若僧が一人、鋪石の上を  
横切つて駈けて行く。喚び留めて、これ／＼の  
人はと訊くと、直様心得て走つて行つた。女は  
矢張り來て居るらしい。  
間もなく廊下の向うから、朋子が小走りに出  
て來た。歌臺へ降りて一禮したまふ、二人は顔  
を見合せて立つた。やゝ有つて、  
「ちや、と要吉は片足引いた。  
「少し、少し待つて下さいまし、女達が來て居  
ますから、一寸左様申して参ります。  
要吉は黙つて點頭した。朋子は其儘引回した  
が、やがて二たび現はれた。  
玄關を降りる時に、朋子は小さい女靴を穿い  
た。服装は二人が初めて水道橋で出逢つた日に  
着てゐたものらしい。  
二人は門を出た。要吉は何處へ行くとも告げ  
ないで向うへ立つて歩いた。門前前から藏前の通  
りへ出て、須ヶ橋詰の或飲店の前を來ると、つ  
と其店へ立寄つた。少時経つて其店を出たが、  
路傍の柳の下に待合せた女の側へ來て、  
「ね、お鮎は賣るが彈丸は賣らないさうです。  
近頃新聞などの廣告を見て、警察の認可が無  
くとも可いことに成つたんだらうと、一人極め  
に極めて居たんですが」と言ひながら、何だ

か自分の行爲がわざとらしいやうな氣がして、  
女の手前恥かしかつた。要吉のつもりでは、只  
かうして自分をぐん／＼引返し懸い境地に連れ  
て行きたかつたのだ。  
「左様でせうと、女は平氣で居る。  
「左様だ、貴方に訊けば分るんでしたね。お鮎  
には恥度有る筈だ。  
「え、ですが父の居間に所蔵つて有るんです  
から。  
二人は足の向いた方へ宛もなく歩いて行く。  
「それでなけりや不可いんですか」と、やゝ有つ  
て、朋子は一言づつ區切りながら言つた。「短刀  
なら、私が持つて居ますが。  
短刀！ 要吉は右の腕が押撃するやうに覺え  
て、腕と自分の家の甲を見遣つた。  
「此處に？」  
「直ぐ自宅へ歸つて取つて参ります。」  
男は稍躊躇つた。  
「是非それにして、是非——私はそれが好い」と、  
女は急に子供の強請るやうな容子をして見  
せた。  
「ちや、私は何處で待つて居ませう？」  
女は願はばつた、眼を伏せたまふ、少時考  
へて、停車場なら、田端が一番近いんですが、

「田端に？」  
二人は落合ふ先を約束した。それから又電車  
に乗つて、上野山下まで來た。男は人力車を雇  
つて女を乗せながら、  
「貴方の來るまで、私が耐へさせられる苦痛を  
記憶して居て下さい。」  
朋子は眼で點頭した。女の乗つた車は見る間  
に屏風坂の方へ走り去つた。  
それを見送つたまま、要吉は二たび上野の停  
車場へ出て汽車で田端へ來た。  
岸についた坂を上つて、道の二筋に分れる處  
に、一軒御休憩所とした家を見附けた。二階  
へ上つて見たが、氣ならぬ儘に又其家を出た。  
其邊の御木林の中へ這入つて、小路といふ小路  
を隈なく歩いた。  
午後、時に成つた。前の家へ戻つて見たが、  
朋子は未だ來て居ない。何よりも考へるのが怖  
ろしいので、又引返して村の中へ這入つた。裏  
の榮畑の中に的を設けて白髪の際居と酒屋の御  
用聞きらしいのが夢中に成つて火弓を引いて  
居た。其處にも久らく立つて見て居た。  
何時の間にか、空がどんよりと曇つた。一步  
二歩と村を出て、われにもなく駒込へ行く道を  
辿つた。此邊は一體に、先頃迄田圃の中であ

つたが、兩個に新しい借家が建つて、だん／＼  
町を形造つて行くらしい。今も屋根に柿を  
掛けて、酒樽油卸小賣所と筆太に看板を書い  
て居る男があつた。犬が二疋駈けて來て、往來  
の籠中に咬み合つて居たが、又向う裏の明地へ  
駈けて行つた。何だかこんな些細な事にも心を  
取られるのが自分ながら可訝しい。  
駒込御休憩所の坂まで來て、一寸立停つた  
が、又徐々上つて行つた。  
遊藝院の側の細い路を曲つて、板敷の蓋まる  
所を這行つて見たが、又中途引返した。扉に  
添うて立てた往來安全の角燈の下に、長い間行  
き所の無い人間の様に佇んで居た。衣袋から巻  
煙草を取出したが、生憎煙草が無い。四邊は日  
が暮れる様に薄暗く成つて、雲が二つ三つ帽子  
の縁を掠めてはらく／＼と降つた。又半町許り  
歩いて、駄菓子だの草履だのを賣る店の前に立  
つた。裏口まで見送せるやうな小さい家だが、  
火の氣の無い火鉢の側に、六つ許りの女の兒が  
しく／＼と泣いてる許りで、店の人は居ない。  
「煙草をお呉れ。」  
女の兒は兩手を眼から離したまふ、戸口に立  
つた人の顔をじろ／＼眺めて居る。  
「煙草をお呉れでないか」と、要吉は故と微笑む

標にして言つた。  
つか／＼と立つて薄汚れた手に煙草を搦んで  
差出した。  
「幾許？」  
「一錢お呉んな。」  
要吉は露口から錢を出して拂つた。其處を去  
つて、富士神社の前から吉野寺の通りへ出た。  
雨まじりの雲がばら／＼と降つては、又小止  
む。  
町の角に小さい積荷家がある。此處を曲れば  
朋子の家に一町とはない。一寸足を留めたが、  
顔を見知られぬを幸ひに、其家の前まで行つて  
見ようかと云ふ様な心持に成つた。二三歩足  
を移した時、その人力車宿からつと一人の女  
が出て來た。女は朋子だった。平常着に紅い帯  
を締めて自らの使ひにでも出たものらしい。  
朋子は男と顔を見合せたまふ、側へ寄つて來  
て、「十時迄には恥度出て参りますから——十  
時迄に。  
何やら顔くさす様に見える。要吉は唯  
黙つて點頭した。そして直に踵を回した。女も  
急いで戻つて行つた。  
男を待たせて置いて、平常着に變へて平氣で  
自宅の用をして居る。要吉も變に思はずには居



られない。が、一旦家へ戻つたら、そんなに容易く出られない事情も有らう。それには又家の人達に油断を爲せる必要が有るかも知れない。左様思ひ返して、女の言ふ儘に待つことにした。

が、それにしても――要吉の考へは再び同じ所を彷彿した。此處若し朋子に逢はなかつたら、二人の運命は如何變じたらう。それは自分にも解らない。何だか此處で逢つたと云ふことだけが、二人の運命を支配して居る様にも思はれる。併しかう成つた上は仕方がない、仕方がない。

十時まで――それは何處かに時間を消さなければ成らぬ。やがて道分へ出たが、今朝出た丸山の家も程遠くない。あの家にも六年近く棲んだ。他所ながら最一度見て行きたい程にも思はれる。が、それと心を決しかねて居る間に、又大學の前迄来た。

「二たび此土を踏むことは有るまい」と、そんな思ひを味ひながら、街の上に立つて見渡した。不圖、向うから一人高い襟をした男の遣つて来るのが眼に着く。要吉を見て、遠方からにやにや笑ひ掛けたが、通りすがりに帽子を脱つてお叩頭をした。自分を知合と思つて居るらしい。

何と思つたか要吉は青木堂へ寄つて、ウキスキイの大壺を購つて下げた。又三日目へ出て、切通しの坂から池の端の賑やかな街を抜けて、二たび上野の停車場へ着く。汽車に乗つて田端へ戻つた。

崖の家の二階へ上つて、障子を開けると、冬木の樹の間から八州の平野が見渡される。窓の隅の隅に肘を突いて、暮れて行く空と野原とを見守つた。

「此日は二たび来ない。自分は取返しの出來ぬ一步を踏み出した。」  
こんな感じが背々と胸に迫つた。自分は此日を失つた、過去を失つた。總ての持てる物を抛つて、一瞬時に殉じようとして居る。其一瞬時は未だ來ないのに、既に總ての物を失つた。生れて、此日ほど取返し難いと思つたことはない。

要吉はつと立上つて、薄暗く成つた部屋の中をぐる／＼と廻り出した。そこへ女中が洋燈を持って來た。で、又其前に坐つたまゝ、腰手と火影を見詰めて居た。死刑囚が刑の執行を俟つ間の苦しみは何なんものか知らない。要吉は一生の間、此一夜を體驗した。

やがて女中が膳を持って來た。つぶの山出た。二人は二階へ上つて、少時顔を見合せたまま、何とも言ふことが出来なかつた。

朋子は終に親の家を棄てた。要吉は人の世に許されざる罪を見た。あゝ、二人とも失はれた。女は男の腕に身を委ねたまゝ長く離れなかつた。

「ちやア直ぐに、未だ終列車には間に合ふ。」  
朋子は點頭した。其儘三階を駆け降りて、戸外へ出たが、終列車は恰度凄じい音を立てて停車場へ着く。二人は縁石様にして暗がりの坂を降りた。停車場の入口へ着いた時、死ぬ場所と云ふことが此間際になつて急に頭へ泛んだ。

「山か、海か。」  
要吉は聲に力を込めて叫んだ。  
「山」と女は「言答へた。」  
直ぐに切符賣場へ行つて、西那須野驛行の切符を二枚買つた。

女は此時既に架橋を渡つて居た。要吉は後から走り着いた。車家が二人を乗込ませて、橋と戸を閉めた時、汽車は動き出した。  
二人は車室の片隅に座を占めて、ほとと息を吐いた。二三の旅客は頭を擡げて此方を見遣つたが、何やら愉げに呟いて、又背後へ凭れる

女と見えて、何かと物を言ふたびに、いっ／＼と身體を揺つて殆ど聲を立てないで笑ふ。それが側目にも苦しきうに見える。要吉は可厭な心持がしたので、笑を閉けたまゝ、直に膳を下させた。

又一人と成つた。死の覺悟して、ひとり火葬に對する人の心持は斯んなものだらうか。昔から死んだ人の心理を書いたものはない。有れば皆、死なない人の書いたものだ。自分は死なない人の理想を實現しようとして居る。死を決したから總ての物を捨てたのぢやない、死を決する爲に總ての物を捨てたのだ。何を捨ててもあの女の運命について、最も重大なものを我手に握りたいと思ふ。唯此思ひに、人間に許されざることを敢て爲ようと決心した。此決心は幽霊動搖しない積りだ。唯、此決心が動搖しなければしない程、如何いふものか、それが不合理で、奇怪で、一んで達げられない事の様に思はれた。勿論自分では、一番善い道を取つて居る、此外に執るべき道はないと信じて居るのに、自分の意志に反して、そんな心持が絶えず頭を擡げた。が、これ迄自分の生涯は一つとして此處へ到着する準備でないものはない。

一歩々々此處へ近づいて來たのだ。今日の何

のも横に成るのも有つた。何だか沙痕を彷彿い

て、商の天幕の中へでも闖入したやうな心持である。

汽車は武藏野へ出た。平野の時を劈いて走るので、車輪の音が一層大きく聞えた。それが遠く／＼成るかと思ふと又自分の身體の上へ突掛ける様に大きく成る。天井から下つた薄暗い洋燈の光を見詰めて居ると、汽車は前へ進むのか後へ退るのか分らない。

其薄暗い洋燈の下に、殺す人と殺される人とは無言で相對した。女の顔は影に包まれて動かない。男は二たび殺さるものは女ぢやない、自分だと思つた。女が憎い、汽車は此二人だけ乗せて、暗闇の中へ突入つたまゝ、再び歸らない様にも思はれる。

やがて大宮へ着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他にいくべき場所も手段も残されないうに、此處で降りたのは何の爲か分らない。二人は停車場を出て大宮を一瞬計り行つたが、何處の家も寢靜つて居る。唯一軒大戸を開けた家を見つけて、其二階へ上つた。

要吉は女中が出て行くのを待ちかねた様に、何か言はうとして、不圖女の容子に眼を留めた。

れの日も取返されないうに、明日も最は動かせれない。運命は二人を連れて行く處迄連れて行かねば止むまい。

が、併し――と、要吉の心は再びわれに反つた。此處迄出て来てから、なほ運命に依頼し、相手に依頼して居る自分は、何といふ卑怯者ぞ。此上は只朋子が待遠しい。早く朋子が來て呉れば可い。

九時を打つた。要吉は外套を被つて戸外へ出た。木下開の暗い坂を降りて、停車場の時間表を見に行つたが、十時五分に高崎行の終列車があることを見定めて戻つて來た。此家の勘定を済まして、何時でも立たれる様にして置いて、壁に凭れたまゝ眼を閉じた。

戸外の夜風が耳に清く。要吉が物音に驚いて立上つた。最後に一輛の人力車の響けて來る音がして、坂の上で停つたかと思ふと、車夫が聲高に物を訊ねる聲がして、車上の女の聲も交つた。

要吉が梯一段を駆け降りた時には、車夫が氣たゝましく大戸を叩いて、女中が處で戸を開ける所であつた。朋子は黒絨のコートを着て、せい／＼息を切らしながら土間へ這入つて來た。

要吉は女中が出て行くのを待ちかねた様に、何か言はうとして、不圖女の容子に眼を留めた。



女は座蒲團の上に端然と坐つたまゝ、一人考へて居る。何を考へて居るのか、それも解らない。が、そんな苦ぢやない、何らそんな苦ぢやない、折角言ひ掛けたことも言ひそく、少時手持無沙汰にして居たが、やがて、二人とも失はれた。今夜は再び回らないと、獨言の様に言つて居た。

「今夜ぢやない」と、女は自分の前を見詰めたまゝ、「最初お手紙を頂いた時から、私は二たび返さねえと思つて居た。」

要吉は思はず女の顔を見返した。何か言ひたいと思つても言ふ事がない。少時して、「お宅ぢや最う知れたらうか。」

「今夜は人丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとすると、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分に閉めて、わざと一枚だけ残して置いて——」

「それでお家の方の気が附かない？」

「え、でも少し狭過ぎたから、それを開けるに気が附つて、大變でした。」

男はうつそり女の顔を見詰めた。此女の無教養な小娘らしい仕業を聞くのが、譯もなく、心嬉しい。

「今日途中で止つた時は、何をされて被坐した？」

「被座だもんですから牡丹餅を作らされちやつたんです。」

それを聞くと、要吉は初めて女の家庭に面したやうな心持がして、何とも言はれなく成つた。

「一週間許り私の容子が變だものだから、内者の氣を附けて居るので、故とそんな事を爲て遣つたのです。」

かう言つて、少時考へて居たが、「私はひびぞ子供なぞを抱いたことが無い。それが子供にも分ると見えて、偶には抱いて遣らうと言つても、向うから嫌つて抱かれないうんですが、今日は如何したのか心に抱いて遣りたく成つて、姉の鼻を遊んで遣つて居ると、餘り強く抱き締めたまんだから、到頭泣出して仕舞つた。」

女の顔が目の前に見える。要吉は胸をとろかせながら聞いて居たが、「で、其おさんと云ふは、何んな方？」

「姉は私と違つて、母に似て好い女なんです。」

「貴方には一人のお姉さんでしたか。」

「私が子供を抱いてると、姉が母の御へ行つて、私のことを、何だか平常の様ぢやない、彼方の部屋で泣きかけて居たと、そんな事を言つて告

げるんです。それが聞えた時は——」

「其時は？」

「それ丈で可いのですと、朋子は急に言葉を切つた。」

そこへ宿の男が寢床を側へに来て、ついでに火鉢を下げようとするから、最少し置いて行つて呉れと頼んで見たが、「へえ最う一時を打ちましたので、階下でも昔就寝しますから——」それに、近頃は火の用心が悪い御座いますか。幾度頼んでも、ね、同じ事を繰り返して居るので、煩いから、其儘持つて行かせた。」

「ね、就寝させようか」と、要吉は後を見送りがら言つた。

「何卒、私は斯うして居ますから。」

男は思はず女の顔を見返つた。何と思つてそんな真似をするのか。女は斯うして一身を働らうとして居る。それだけならまだ可い。此期に及んでなほ自分をそんな男だと思つて居られるら——最う返返しが附かない。が、まさか此女にそんな事も有るまいと思ひ返して、

「え、それぢや私も起きて居ませう。」

春の宵ながら、夜深けては底冷えがして、曠野の一家の様に四邊が森とした。二人は膝を突合せたまゝ、少時物を言はなかつた。やがて、

「我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願はくば君と共にらざるを許せ。君は知り給ふべし、われは決して戀の爲に人の爲に死するものに非ず、自己を買かむが爲なり、自己の體を全うせむが爲なり、孤獨の旅路なり。天下われを知るものは一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば」

明治四十一年三月二十一日

宛名は王子の友にした。併し讀ませるのは相手の男で有つた。自分が息絶えて、男の心中の記憶と化した後、此遺書を讀んだとしたら、男の失望は何んなで有らう。若し又光の薄い鼠窓の下で讀んだとしたら、恐らく悶え死に死なない者は有るまい。女は自分の死後になほ男の運命を支配する力を自覺して、肩を觸んだまま、片頬に刃のやうな冷笑を泛べた。

朋子は今其時の形相を自分ながら眼に見るやうな氣がした。何でも可い、最う何でも可いから早く決行して仕舞ひたい。

「出ませう、早く此處を出ませう」と、俄に男の腕を掴んで飛立つやうにしたが、又うつとりと

「あれは、あの物は持出された」と、男の方から訊く。

女は黙つて、左の手に、懐を押へて見せた。

「それぢや、此包みは？」

「先生からのお手紙が何人つてる。」

「最初からの？」

女は點頭く、男は微笑みながら手に取上げた。

「私、先生に済まないことをしました。」

「何を？」

「あの『死の勝利』を、日記だの、其外いゝんな物を庭で秘棄する時に、つい間違へて火の中へ抛り込んで仕舞ひましたから。」

要吉は再び女の顔を眺めた。

「其方が好い」とは言つたが、何らも知らずして焚いたものとは思へない。星月夜の下に、女が半身を火影に照されたながら、反古を焼く姿が眼に泛んだ。

「貴方は始終日記をつけて居るのか。」

「え、と女は驚かに黙然としたが、「私には本當に談話の出来る友達がないから、友達と談話をする代りに日記を書く。そして三箇月位に燒いて仕舞ふんです。」

「其位讀つと、自分が書いたものの様な氣がしないから。」

朋子は急に黙つて仕舞つた。

今夜家を出る前に、女は手紙と一枚に包くつもりで、久しく捨て置いた日記を取出した。一枚づつはぐつて行く間に、不圖、一月末の或日の下に眞黒に塗消した跡を見附けて、胸を騒つかせながら、遂に其前後を讀んで見た。あゝ、あの日から始まつた、あの日から——だが、此様にして自分にさへ隠さうとした事を、何うして男の前に打明けたのか、男の手に自分の生命を委ねたのか、矢張自分は弱かつた——左様思ふと堪らない。男に對する女の情念はいよゝゝ容赦がなく成つた。女は自分を滅した男を滅さずには置かない。

日記の反古が白い灰に成つたのを見済まして女は筆を執つて二三行書下した。

三月二十一日夜

眞鍋 朋子

今一枚には



坐り直した。

わが生命を爆発させて、相手の生命を砕かうとする。男は女がそんな恐ろしい報復の手段を執つて居ようとは知る筈がない。

「如何したのです、え。」

「いえ如何もしない」と言ひながら、朋子はぼんやり座敷の隅を見詰めた。

隣の室か、それとも一つ置いて向うの室かで有らう、野郎の寝て居るやうな鮮の聲に交つて、時々前をさしむ音が聞えて居たが、

「あゝ」と、不意に遺泪のない女の聲がして、

「最う間に合はない」と明白に聞えた。

二人は思はず顔を見合せた。後はむにや／＼と寝惚けた欠伸に代つて、鮮の音もはたと止んだ。嗚方近い空気は身を斬るやうに人の肌を迫つて来た。

「お寒かア有りませんか」と、やがて女は襟を振合せながら言つた。

「えゝ」と、要吉も一寸女を見返したが、頭の中へ群がって来る感想を掃ふやうに、「ね、談話を爲ませうよ。貴方の小さい時分の話をして下さい。私、未だ貴方のことは何も知らない。」

「小さい時分の？」

「二人が現在爲て居ることとは、全然關係のない事か、ア有りませんか」と、やがて女は襟を振合せながら言つた。

「えゝ」と、要吉も一寸女を見返したが、頭の中へ群がって来る感想を掃ふやうに、「ね、談話を爲ませうよ。貴方の小さい時分の話をして下さい。私、未だ貴方のことは何も知らない。」

「小さい時分の？」

二人は身支度をして立上つた。街には朝霧がかゝつて、未だ人通りはない。人力車の立場らしい家の軒から一本の竿が出て、其頭に汚い旗がしつとりして垂れて居る。楊枝を衝いた男が車の輪を拭いて居る。

停車場の振鈴が鳴る。二人は速でて駈附けた。プラットホームに立つて、待つ間程なく、上野發の一番列車が霧の中から現はれた。

二人は又北に向つて行く。朝の夙いためか、同乗の客は肥つた商人體の男、人きりで、大きな革靴に凭れたまゝ、昨夜の夢を續けて居た。時々手枕の肘を外して、ぼんやり赤い筋の張つた眼を閉くが、直に又うと／＼と寝附く。

二人は湯婆の上に足を揃へて腰掛けて居た。最朝の寒さは一しほ身に徹へる。

「これを着ては、要吉は手に持つて居た女のコートを出した。」

「いえ、これで可いんです」と、朋子はそれを受取つて、「ぢや斯う爲ませう」と、言ひながら、二人の膝の上に被けた。其下で二人は手を繋いだ。

い事が可い。

朋子は少時黙つて居たが、

「私のこれねと襟に刺した煙銀の襟留を弄つて見せて、五つの時から失くさないで持つて居るんです。」

「そりや何です。」

「四葉の首飾でせう。これを持つて居る者は何だと云ふぢや有りませんか。」

「えゝ。」

「心遣も掛けるんだつて」と、一人で笑つた。

「私は知らない。で、それを？」

「父が佛蘭西から歸つた時、土産に呉れたので、お前の方が小さいから何方でも好きな方を先へ取れと言はれて、私は此方を取つて仕舞つた。」

要吉はまじ／＼と其襟留を見詰めたまゝ、黙つて聞いて居たが、女の言葉が途切れたので、偶と眼を見上げて其顔を見遣つた。

「それからもつと外に。」

「えゝ、姉は其時分から私に親切でしたが、私は矢張り不好性質の女でした。」

何時の間にか、客車の中へ朝日が射し出した。霜枯れた田圃の上に、煙の渦が影を落して、千足の猿が狂ひ廻る様に後へ／＼と轉がつて行く。要吉は久らくそれに見惚れて居たが、不圖女が口元に笑つて居るのを見て、

「何？」

「えゝ、唯。」

朋子の視線は前の男に注がれて居た。昨夜から初めて女の顔を日影の下で見た。朋子は一寸羽織の袖を解いて、

「こんな色、全然私とは調和しないでせう。」

「なに、單色だから？」

「えゝ、何日か紺紐の此色が所好だと仰有つたでせう。だから色々これを着て出たんです。」

女の髪には、濃いお納戸の花の紺紐が差してある。男がそれに眼を遣ると、一寸右の手を上げて頭髪を抑へる眞似をした。

「あゝ、其手髪は——」

「これ？」と男の胸へ其手を突出して、「早く一對にして下さいな。」

要吉は衣袋から手袋を出して、片方の手に一本づつ指を持つて穿めて遣つた。女は黙つて左様されながらだん／＼男の腕へ凭つかゝる様にした。何だかそんな事で男の心を繋がうと

金絲雀を殺して仕舞つたことが有るんです。矢張七つか八つ頃でしたらう。何を忘つてだつたか、今は記憶して居ません。姉の居ない間に鳥籠の中へ手を突込んで、金絲雀の頭へ留針を打込んだのです。二三度ばた／＼と羽翼を動かしたきりで、鳥は死んで仕舞つた。血も出ないし、和かい毛が被さつてるので、留針も分らない。到頭如何して死んだか知れずに仕舞つた。今でも未だ私が殺したとは誰も知りません。今でも」と要吉は息を詰めた。

「今でも」と要吉は息を詰めた。

「併し姉は覺うそんな金絲雀のことなど忘れて居ませう。」

男は兩手に女の兩手を把つた。そして、初めて見る様にしげ／＼女の顔を見守つた。

遠方一番鶏が啼く。

三十三

やがて前でも起出たと見えて、階下がたつき出した。ばた／＼と廊下を歩く草履の音も聞える。要吉は何度も女を呼んで見たが、皆忙しさうにして返辭をしない。

「如何したのでせう。昨夜一番汽車で立つたと言つて置いたが」と、又時計を出して見ながら、「最う汽車の着く時間ですね。」

するものらしい。やがて宇都宮へ着く。其時送野の音をたてて眠つて居た商人體の男は、急に眼を開いて、大革靴を提げながら、あたふたと降りて行つた。少時窓の外に物賣の聲が騒々しい。やがて汽笛が鳴つて、列車はがたりと動き出した。今度は二人の外に乗客もない。汽車は平野の中を駛つた。

何をしに行く。二人に成ると共に、一層厳しくそれが男の心に迫つた。女を殺しに行く。最初自分が「貴方なら殺せる」と口走つた時、女は一番自分に接近して来たやうに見えた。彼時から見ると、今は又ずつと離れて仕舞つた。終局に於いて人間は矢張り一人のものかも知れない。

一人だ。が、一人だとすれば、此女とした約束を果すには、自分の女に求める力——愛の力に堪へる外はない。併し離れられざる愛の力が、それ程力有るもので有らうか。

で、それが駄目だとすれば、後は只一種のエキスベリメントとして、藝術の徒の好奇心に手組るばかりだ。好奇心の犯罪——此上は只狂人に成る外はない、能達自意識を失はぬ狂人に成る外はない。男は凝手と女の横顔を見詰めた。赤い絲のや



うなもの、一筋女の首を周つて連なる様に見えた。女は喉く口を結んだまゝ物を言はない。一人で考へて居る。自分が自分の事を考へて居る様に、此女も自身の事を考へて居るので有らう。只黙つて居られるのが氣懸りで堪らない。

二人は「と、男は思はず口に出した。二人は別々の事を考へて居るのだらうか。」  
「え、と、女は何やら解らないうな顔をしたが、急に男の頸を掴んで振りながら、別々ぢやない、別々ぢやない。」

「ふむ、別々では死ねない。」  
二人は長い間無言をつとけた。汽車は小さい停車場へ着く。  
やがて又汽車の出るのを待つて、要吉は獨言の様に言出した。「二人の何が——これが、普通の金に詰つたとか、添ふに添はれぬとか云ふやうな、左様いふ原因で死に出たのなら、こんな罪道は感ぜまい。其方が何の位好いか知れないだらう。」

朋子は一寸男を見返したまゝ、返事をしなかつた。男も其儘口を噤んだ。  
幾つも同じ様な小さい停車場がつづく。新に田舎者らしい三人の客が乗込んだ。要吉はほん

やりそんな人達の容子を眺めて居たが、  
「ねえ、と、女の方へ振向いて、「貴方は東北を旅行したことがあるか。」

「え、一度平泉まで。」  
「ちや、衣川や高館の跡も見て来たんですね。」  
女は豊揚に點頭した。  
夏草やつはものどもが夢の跡。要吉は目の前に死後の長い時間と廣い空間とを透つて見た。で、何か言はうとした時、汽車が停車場へ着く。西那野驛と聞いて、女を促して、連れて客車を降りた。

うね／＼と東北の野に向つて遠ざかり行く列車を見送りながら、二人は停車場を出た。別に行くべき處もない。車夫の親方らしいのが傍へ来て勤める儘に、人力車を二臺豊原まで急がせた。豊原は此處から五里に餘るといふ。  
那須野は只ひる／＼と霜積れた草野がつづく。一面に灌木の木の葉が赤く枯れて所々に着いた松の葉が交つた。行手の山を被つた山脈から吹卸す風は春のものと思へぬ。  
一筋の街道が林野の中を眞直に走つた。上りだといふので、車夫は氣々と歩いて行く。因より何んな人を乗せて行くかは知る筈もない。薄い日影が女の肩を照して居た。

原の眞中で、朋子は俄に人力車を停めさせた。  
「如何かした？」と、後の人力車に乗つた要吉が訊く。

「いえ、只風が眼に沁みて痛いから。」  
二臺の人力車は又駛り出した。山の麓に杉の樹立がある。此村に來れば道の半ばだといふ。少時そこで休息んだ後、いよいよ坂道へ差懸つた。雨の降つた後で泥濘が多い。  
山路は九十五折に折つて、深い谷底には帯川の流も見え出した。湯の宿へ近づくにつれて、山の氣が冷々かに、山巔に雪が積つて、木の葉の落ちた枝が黒い胡の様に凍なつた。車夫はくどく／＼と豊原の名勝を説く。煩いから黙つて居ると、心得て更に言葉を續け。

日近しく湯の宿に着いて、二臺の新しい座敷に案内された。山國の朝夕寒く、大火鉢に炭火の青い炎を上げるのが懐かしい。二人は其側へ寄つて坐つたが、固く凍れた様で、向ひ合つたまま物を言はない。一夜の合前知らぬ同志が泊り合せたら、斯んなものかも知れない。  
下宿が來て、「お風呂へ御案内しませう」といふ。山國の男が着るやうな袴を穿いて居る。  
要吉は黙つて朋子を見返つた。女は頭振を掉

つたので、

「後にするから」と、斷ると、

「それでは、直ぐ御膳を差上げます。」  
白い圓笠の西洋燈が持出された。二人は其下で夕餉の箸を上げた。

「私は是迄貴方の前で何處物を喰べたらう。彼時此時、殆ど數へられる。これからも何處喰べるか。」  
朋子はたゞ下を向いて居た。

やがて食事を終つた。長い廊下は寂として、客は二人の外に有りとも覺えぬ。早くから兩戸を締つたが、山嵐は絶えず庇を吹きまくつて、早瀬の音が耳につく。  
「一寸其手紙を見せて下さい。」  
「え、是れ？」

女は包を開いて手紙の束を男に渡した。  
「随分有る」と、要吉は自分を冷笑ふやうに言つた。  
「尤も、でも私達はそれより烈しいことが有つた。一日に二本のこと。」  
二人は洋燈の下に頭を寄せた。要吉は其中の一本を手當り任せに取つて中味を抜き出さうと

したが、偶々今見たら修辭的な誇大な文句許り並べて、死んだ人の墓銘を見る様に、空虚な文字に代つて居るやうな氣がしたので、手に持つたま／＼と躊躇した。  
「何だか出して見るのが怖い。寧ろ止めませうか。」  
「お止めなさい」と、女は引たくる様に取上げた。

そこへ宿の主人が出て、茶代の禮を述べてから、宿帳を出して引退つた。要吉はそれを取上げて、有體に二人の住所姓名を記けた。

朋子も傍から見て居たが、に／＼と笑つたまゝ、何とも言はなかつた。又自分一人の中へ引込んで、相手の男のことも忘れた様に見えた。要吉は少時それを見守つて居た。何も言ふことがない。強ひて言へば、此場に應はしくない聯想を招くのが心苦しい。

「湯へ入らうか」と、やがて男が堪へかねた様に口を開く。女はたゞ頭振を掉つた。  
「汽車の煙にも吹かれたから、一寸汗を流して置いた方が可い。」  
「お留守番をしますから、先づ行つてらした。」  
「ちや、後からね」と、男は立上つた。

「え、清冽な湯だつたら」と、道掛ける様に言ふ。

それを開捨てたまゝ、手拭を下げて湯殿へ降りる。板の間に着物を脱いで、浴槽の中に立つた。槽は木の臭ひのする程新しい。湯は絶えず繩を傳つて流れて來て、槽の縁を越して落ちて行く。天井の下に立置めた湯氣は夜深の寒さに凝つて、一しほ息苦しい。

要吉は片肘を槽の縁に託したまゝ、柱に掛けた洋燈の火影を見詰めて居た。濃い湯氣の玉が其前をぐる／＼と廻つて、月暈のやうな輪を成がく。眼を離さないで、凝手とそれを眺めて居ると、だん／＼と燈火の光が遠く成つて行く。かうして幾重にも白い湯氣に包まれて、其奥に閉籠められたまゝ、自分は二たび歸られないので有らうか。だん／＼と氣も遠く成つて、繩を落ちる湯の音だけが、山の猪が來て水を飲むやうに、べちや／＼と聞えて居る。只、それだけで此世に繋がれて居るやうだ。此儘、水の上に泛んだまゝ、二たび眼を開かなかつたら——二たび二階に残した女を見なかつたら——

不意に湯殿の戸の開く音がして、われに歸つた。誰やら這入つて來たらしい。恰度洋燈の下に立つて居るので、男とも女とも見分け難い。



何か物を言つたらしいが、好くは取れなかつた。間もなく、板仕切を距てた女湯の方から、ひそやかに湯を使ふ音が聞えて来た。

要吉は匆卒に濡れた身體を拭いて風呂場を出た。薄暗い廊下傳ひに、裏梯子から二階へ上つた。何の部屋も灯火が點いて居ない。

座敷へ戻つて見ると、有明を一つ點火して、二つとも寢床が延べてあつた。何處へ行つたのやら、朋子の姿は見えない。要吉はひとり火鉢の前に坐つて待つて居た。

やがて女も湯から上つて来た。髪を洗つたと見えて、ちりれ毛が肩に波を打つて居た。其足で衣桁に濡手拭を掛けて来たが、眞中へ鏡臺を出して、其前に坐つた。

油氣のない髪だから直に束ねようとするらしい。要吉は只その女らしい手附を眺めて居た。あの長い髪をあの細い頸に巻附けて、力任せに引いたら――ふらふらと、そんな心持にも成つた。

恰度女は彼方を向いて居る。何だか腕の力が抜けたやうな気がして、纔に擡げた腰を下した。今自分が何を爲て居るか、それを知つて居て人殺しが出来ようか。無意識に成る外はない、一瞬の誘惑に驅られる外はない。自分の力で、自由意志を以て、人間が人間を殺せるものか。殺すものは――何

か知らぬ――自分以外の或物だ。或物の道具と成らなかりや殺せるものでない。

「ね、髪を束ねないで、其儘で居て下さい。」男が急に聲を掛けた。

「え」と、朋子は振返つた。

「髪を垂れた方が美しい。」

女はつと立上つて男の側へ来た。男は女の背へ手を廻して抱へた。指が濡れた髪の中へ這入る。不圖それが血汐のぬめりのやうな気がした。其時女は男の腕に身を委ねたまゝ、そつと懐の短刀を出して、男の手に握らせた。

有明の灯に透して見ると、黒鞘の短い懐劍である。

「早く、早くして。」

男はそれを握つたまゝ、思はずたじろくと成つた。此儘では――此儘では如何することも出来ぬ。

「ねえ、貴方は」と、水に濡れる人のやうに、女の手を掴みながら、「貴方は私の爲に死に、私は貴方の爲に死ぬ。左様言つて下さい。私を愛すると、唯一言。」

其一言で自分は揺はれるのだ。我を忘れることも出来る。そしたら――けれども、女は只黙つて居る。

い、又人間の一生の様に短い夜で居つた。二人は又次の日の光を見た。

有明の丁字が落ちて、ぼつと薄白い炎を上げたが、其儘夢の様に消えた。火皿に油が盡きたのだらう。何處かで兩戸を疑る音が聞える。

「言へない、え、言へない？」

「其時迄、其時迄言へない。」

要吉は女を引起して、護手と其顔を見入つた。女は其眼を避けるやうに、彼方此方自分の顔を

持扱ひながら、つと男の膝に突伏して泣く。涙は着物を透して煮える様に熱い。

男は女を抱へたまゝ、何とも言はれない苦悶を経験した。何故言へない、何故其一言が此女には――が、言へぬものなら仕方がない。今更何と言つた所で、それが如何なるものか。女は一直線に思ひ込んで居る。それに自分は――自分

は生温い水だ、熱くもなければ冷たくもない、基督の口から吐出されるやうな生温い水だ。一種の實驗として、人殺しの出来るやうな超人でもなければ、又われを忘れて狂暴を敢てするやうな狂人でもない。矢張自分には人間以上の力はなかつた。そんな物が有る様に思つたのは、眞個一時の妄想に過ぎない。あゝ、自分は一生の危機に臨んで居る。何と言つた所で、自分は此女を失ふ外ないかも知れない。此女を失ふばかりでなく、自分といふものの靈魂をも――

斯くて夜の白むまで、二人は此姿勢の儘動か

なかつた。それは人間の一生の様に長たら

い、又人間の一生の様に短い夜で居つた。二人は又次の日の光を見た。

有明の丁字が落ちて、ぼつと薄白い炎を上げたが、其儘夢の様に消えた。火皿に油が盡きたのだらう。何處かで兩戸を疑る音が聞える。

女は男の腕に顔を伏せたまゝ、息があるものとも思へない。要吉はそつと身體を搖振つて居た。

「ね、又夜が明けた。」

「女は動かない。」

「今頃御宅ぢや――阿母様には何んな夜が明けたらう。」

「そんな、そんな事を言ひ出しちや、可厭だ。」

女は男の口を閉ぐやうにして、泣く。

「貴はね」と、要吉は女の背に手を掛けた。まゝ、一夜が明けたら御宅へ電報を打つて、迎への人に来て貰はうと思つて居た。其人達に貴方を渡して置いて、私は――矢張り北を向いて、山越えに行ける所まで行かうと決心した。

「そんな事をされちや耐らない」と、女は頭を上げて、手當り任せに御喘みつく。

「其外に仕様ない」と、投出す様に言つた。「おは思ひ違ひをして居た。死ぬ時は、互に手を取つて、めそ／＼泣き合つて、落けて行くやうな心

持に成らなかりや死ねない。私の爲に泣いて呉れる相手でなきや手は下せない。」

「何か言ふだらうと思つて待つて居たが、女は突伏したまゝ、返辭をせぬ。又じろ／＼女の耳の後ろを見守りながら、

「貴方は未だ私に對して敵意を持つて居るんだ。」

「敵意？」と、聲の下に呟く。

「敵意さ。昔から打解けたことのない――兩性間の舊い恨恨」と、ぼつり／＼言つたが、「敵同士ぢや一緒に死ねない。」

「左様ぢやない／＼。そんな事は十九日から解つて居て呉れた筈だ――あの手紙を読んで呉れたら。」

「それぢや何故――」と、男は思はず腹を立てた。

不意に襖を開けて、下女が有明を下げに來た。二人はつと座を聞いたが、顔を見合せたまゝ、少時物を言はなかつた。

やがて女は想出した様に、男の手を執つて搖振りながら、

「私に行く、先生の被行しやる所まで行く。」

「權太迄も？」と、男は女の顔を見返した。

「何處へでも。」

「死ぬ處まで。」



風な湯の宿が何軒も並んで居る前を、がら／＼と町外れ迄曳いて行つたが、後の車夫は急に振り回つて車上の人を見上げながら、

「もし、旦那、何方へ着けませうか。」

要吉は夢から覺めたやうに四邊を見廻した。

「うむ、最う可いんだ。此處で卸して呉れ。」

「でも、何方かお宿を——」

「うむ、可いんだ。此邊を散歩してから勝手に宿を取るから、最う歸つても可いんだよ。」

「左様ですか。」と、車夫はしぶ／＼と棒を卸した。

町の山外れに、壊れかゝつた木の橋がある。

二人は橋の袂に立つて、空車が歸つて行くのを見送つて居たが、其影が見えなくなると、速くて橋を渡つた。又北へ向つて行く。

麓の村迄は三里だといふ。二人は落人の様に道を急いだ。街道は碓氷川の上流に添うて緑の様に濃く、早瀬の水の濁む邊りに、二人の男が岩の上に踏んで、禪定に入れる人の様に黙々として絲を垂れて居た。十二三の女の子が、背中に赤ん坊を結び附けながら、弟の手を引いて来た。二人とも裁附を穿いて居る。其外には滅多に人にも出逢はない。

空が晴れて、雪の積つた山の嶺が白くくつ

きりと際立つて見えた。あの山越しに行くのである。朋子は袂を上げて顔に滲む汗を拭いた。山から吹いて来る風は冷たいが、日はぼか／＼と暖かい。

谷合の平原はだん／＼追つて、やがて麓の小村へ着く。村外れの軒家で、菅草を吊して、障子に煙草の葉の描いてある家を見附けて、要吉は女をかへり見ながら、つと園を跨いだ。ついで女も這入つて来た。其後から直に障子を閉て切つた。

「一寸休ませて貰ひますよ」と、縁鼻に腰を掛けたが、誰も應ずるものがない。家の中はがらんとして居る。

不圖園裡の側に蹲つて居る爺さんに目を附けて、最一度聲を掛けて見た。

「ねえ、一寸休ませて貰ひましたよ。」

「え、ウツと、爺さんは頓狂な顔を上上げた。眼の縁が赤く爛れて居る。

「これは、お出なされや」と言ひながら、急須の茶を煎れて、二人の傍へ持つて来た。

「如何でせう、峠は未だ雪が深いでせうね」と、要吉は爺さんに眼を附けながら訊いた。

爺さんは耳が遠いらしい。要吉は聲を大きくして最一度訊いて見た。

「お出なされや」と言ひ捨て、又のそ／＼と行く。不圖、女の袖紐が水に落ちた。くる／＼と渦を巻いて、見る間に下の巖へ隠れた。女はそれとも心附かない。

二人は又雪を踏んで登つた。谷間の行詰つた處に、二つ三つ炭焼小屋が見え出した。其前迄辿り着いて、小屋の中を覗き込むやうにした。土の中へ團裡を切つて、自在に煤びた茶釜を懸けてある。燃えさしの桶の灰が白い。

要吉は入口に立つて、二三度聲を掛けた。

「お、と小屋の裏から炭焼の女房が出て来た。

「湯が一杯無心したい。」

「湯かいなと、女房は無愛想な返辭をしたが、茶釜の湯を汲んで出した。

二人は小屋の前の丸太に腰を掛けた。樹の間を洩れる日影がち／＼として、茶碗に練は入つても中の水は美しい。

上の山路から、五つ許りの女の兒が素足に藁沓を穿いて、よち／＼降りて来たが、二人の前に立停つた。時々汗を吸り上げながら、日陰をきもしないで、代る／＼二人の顔を見上げて居る。

朋子も莞爾して、

「あ、峠か」と、爺さんはきよ／＼ととして、峠の開くのは、左様ぢや、月を越して十日も経つてからかの」と言ひながら、二たび園裡の側へ戻つた。

其儘うつら／＼として居たが、又急に眼を開いて、

「左様ぢや。一昨日もな、一人旅商人のやうな若衆が峠を越すと云うてぢやで、俺が強つて留めたが、無理に振切つて出掛けたぢや。あれも無事に越せりや可えがと、案じて居るぢやわい。」

「でも、戻つて来なけりや無事に越したのでせう。」

要吉は口を挿んだ。が、爺さんは矢張り聞えないらしい。

「裏山が難所だ、獨言のやうにつゞけた。一上り一里に下り三里、三里の下りが難所だ。それに午前ぢやと未だ可えが、これから日が下りかけると、雪の下が緩んでな。裏山の雪崩れ、此奴が怖ろしいぢや。」

要吉は朋子と顔を見合せて點頭き合つた。雪崩れの下に葬られる——自然の手に身を委ねるほど容易いものは有るまい。自然の前に人間の意志はない、不和も憎悪もない。凡てを混沌の

「何か遣りませうか。」

「左様。」

「でも、何も有りませんのね。」

「お錢でも可いでせう。」

女は鼻口から銀貨を出して、子供に持たせようとした。

「お出な、これを上げるから。」

子供は手を出さぬ。立上つて、側へ行かうとする、わつと泣き出した。

「何を泣くんだよ、これを遣るとぢやに。」

小屋の中から女房が出て、連れて子供に代りに受取つた。此女房が取上げて、汗臭い巾着にきり／＼巻いて、何時迄も所蔵して置くらしい。

要吉は息苦しいやうな心持をした。

日も傾かう。二人はやがて其處を立つた。本道へ出る路だと教へられたまゝ、小屋の裏から坂を登りかけたが、勾配の急な上に、未だ人の通つた跡もない。三町とは行かぬ間に、路が雪に埋もれて、何方へつゞくとも分らなくなつた。少時途方に暮れて立つて居たが、丁々と音を叩く音が響いて、谷の向ひの雪の上に木を伐る黒い男が見えた。

「おうい」と呼べば、や／＼有つて、

「お、と應へる。

裡に押ることが出来る、暗黒の裡に——あゝ、未だ此處に最後の手段が残つて居た！

二人は少時思ひ／＼の考へに耽つて居たが、やがて一人が、

「立ちませう」と言出した。

一人も直に立つた。

要吉は幾許かの茶代を下に置いて、

「爺さん、何うもお邪魔でした」と聲を掛けた。

爺さんは眠つて居るのか返辭をしない。其儘其處を出ることにした。

二人は又目の前に山を見て急いだ。村を抜けて板橋を渡れば、直に山路へかゝる。本道は未だ人が通らない。炭焼小屋の在る處まで、技路の方が却て道が開いてると聞かま、山の麓から右へ折れて、谷間に隨つて登る。山は浅いが、鳥も啼かぬ。雪の下行く谷水に流うて、炭焼の通路は枯木の中を縫うて走つた。

水の中の石を傳つて、背負梯子に炭依を背負つた男が、むず／＼と谷川を渡つて来た。二人は此方の岸に立つて待つて居たが、其男は通りすがりに、被つた手拭を取つて、

「御免なされや」と挨拶した。

「炭焼小屋まで、道程は何の位かな」と訊く。

「左様さ、最う五六町も有らうかな。つい其處







初戀

私が十三の歳であつた。恰度濃尾に大地震のあつた二三年後のことである。

私は或町の片田舎に母親と二人で淋しい生活をして居た。そこへ、一日東京から着いたと云つて、一人の男が訪ねて来た。脚絆を脱いで座敷へ上つて、「私は此處の家の御新造の弟だ」と云つた。母親の弟なら、私のためには叔父である。私が母方の身寄と云ふものを見たのも、これが初めてである。

母親が何んな心持で此叔父を迎へたのか、何にせよ、小さい時分のことだから私には分らない。只、其時母親が私に云つたことだけ覚えて居る。三人の同胞の中で、只一人の男の子の弟が、十六の歳に家出をしたまゝ、盲目の方知れない。両親もたづね他んで、到底死んだものと諦めて、葬禮送出した。後々の法事法要も懇に弔つた。それが、両親も此世を去り、妹も後を追うて二十年も経つた今日に成

つてから、ひよつこり出て来たのだと——私に其話が面白かつた。併し叔父の顔を見ると、何かぎす／＼して、左の腕には狐の面の刺青さへあつた。何だかそれが怖らしい。

兎に角、無人ではあり、それに父方の親類と云つては祖母の里が一軒あつたが、久しく往來も絶えて居たので、叔父は其儘私の家に居つくことに成つた。別段仕事もないので、私の相手を折鶴を教へたり、釣竿の修繕をしたりして、毎日ぶら／＼として居た。一二箇月左様して居る間に、如何云ひくるめたものか、母親の手許から若干の金子を引出して町へ出て商賣を始めた。尤も其商賣が普通の商賣ではな

い。五六年前から、此町にも鐵道がついて、それと一緒に遊廓が出来た。監獄裏の裏から洞川に沿うて下つた畑中に建てられたので、大門もあれば、本通りには柳の樹を植ゑて、夕ざれば張店と云ふことをする。凡て吉原の様子を寫したものださうな。一時は物珍らしさに全盛を極め

たが、大地震からこちらへはつたり火が燃えた様に寂れた。中には、景氣の立直る迄持たへることが出来ないで、店を閉める家もあつた。其中の一軒を叔父が引受けたのである。

こんな商賣を始める位だから、叔父と云ふのは行方の知れなかつた間何處で何をしていたのだらう。一切私には分らない。母親も何と云つてそれに同意したものか、別に聞かうと思ひなれば聞いたこともない。只思ひの外に金子が入ると云ふので、母親が折々思案に暮れた容子を見かけたことがある。田地を抵當に入れて金子を借りる所なぞも、他所ながら見聞きした。

私は母親から變人だと思はれて居たらしい。又多少憚られて居た。別段變人な譯はないが、他の子供と違つて朝夕机に凭れて本を讀む。それだけで最う母親などの眼には變な子だと映つたらしい。本を讀むと云つても、其頃私は活版本の岩見武勇傳と自雷也物語とを讀んで、それに味を占めたので、土蔵の隅からよれ／＼に成つた觀家阿闍梨怪原傳を搜出して、晝夜それに讀み耽つた。固よりそれが曲亭馬琴の作だとも、挿畫が北齋だとも知る筈がない、讀んでさへ居れば何でも可いのである。

ある日、學校から歸ると、見慣れぬ女のお客さんがあつた。髪は結び様、着物の着こなし迄、其風俗が此邊の在所には見かけない。と云つて町の女とも違ふ。併し子供にはそんな事分らう筈はない。只妙な女だと思つた。日常りの好い縁側で、母親と向ひ合つて、袂の長い着物の上に襦袢掛けをしながら、不器用な手附でふち豆の筋を取つて居る。それを取つては籠の中へ入れる。左様しながら、二人で何やら話をして居た。「只今」と云つて見たが返辭がない。

私は上り框に片足掛けたまゝ、少時立つて居たが、其儘顔を背けて奥の間へ這入つて行つた。机の上に木袋を抛り出して、靜手と坐つて居る。やがて、「亮さ、歸らしやつたかえ」と母親の聲が聞えた。

私は黙つて返辭をしなかつた。「亮はま？」と云つたのは、其女の聲らしい。其後は能く分らなかつた。何やらぼそ／＼と云ふ話聲が聞えて居たが、急に二人とも聲を揃へて笑ひ出した。私は何だか自分が笑はれて居るやうな氣がして、此儘退出したい位に思つた。

で、違つて讀みかけの觀家阿闍梨を取出して、其上に眼を曝した。それにしても、あの女は何處から来たのだらう。今度叔父の持つた家にはいろ／＼の女が居ると聞いた。女ばかりの家だとも聞いた。何うも其中の女らしい。初めて見た時から何うもそんな氣がして成らぬ。私の眼は本の上に注がれても、文字一字心にとまるのではない。

「何を見てらつせるの」と不意に頭の上で其女の聲がした。私は理由もなく氣後れがして、いよ／＼本の上に顔を伏せて仕舞つた。「精出して勉強しやすなもの。」から云つて、女はやをら机の端に坐つた。そして、自障落に片肘出して煙草を突いたまゝ、涙手と私の容子を見守つて居るらしい。私は出来るだけ女の方を見まいとした。女も如何したのか、何時迄経つても動きさうもない。

私は只何となく、三年も前から私を知つて居るさうな此女の素振が氣に成つた。其中から初めて女の女らしい臭ひをおぼえたやうな氣もした。勿論子供だけに、それとは分らぬ。分らぬ

ながら心が吸いた。一つは女氣のない、紅も白粉も見つたことのない在所の家に育つたためであらう。「亮さや」と、背戸で母親の喚ぶ聲がした。「あゝ」と、大きな聲で返辭をした。「此處へ来て、無花果摘つてお呉れや、土産に持たせて歸すのぢやに。」

「あゝ、摘つて上げよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駈出した。「田毎も見に来やあせ」と、二たび母親の聲がした。田毎と云ふのは其女の名らしい。三人は井戸端の無花果の樹の下に立つて、尻が紫色にはじけて、ほと／＼と液汁の滴れさうなのを見附けては、物干竿の先ではたき落した。それが小さな手籠に一杯に成る頃には、私も其女と平氣で口を利く様になつた。

間もなく、女は迎ひに来た腕車に乗せられて戻つて行つた。立ちしなに私を喚んで、「貴方や、叔父さまの家へも遊びに入らつせ。御馳走しますぜえ」と、こんなお愛想らしいことも云つた。後で此女が叔父の家のお職女郎で病氣して休んで居たのを、保養がてら遊びに来たのだとも聞いた。田毎といふ源氏名は忘れても、一



緒に無花果を喰った女のことは長く忘れなかつた。

此話はこれだけで済んだ。其間に、秋も暮れて冬の初めに成つた。私の家は地震の時に倒れかゝつたのを、突支棒をか

ある日、私は本袋を肩に掛けたまゝ、叔父に連れられて行つた。町つゞきの畑の中に、二階三階と一際高い屋根の折衷なつた一郭がある。何

一つ聞えぬ。只街の真中に味噌の波井戸があつて、其側で洋犬が二疋戯れ合つて居たが、二疋とも何處かへ駆け行つて仕舞つた。

叔父の家は直ぐ前にあつた。「此處だよ」と云はれて振向くと、入口に淡黄の暖簾を垂れて、「神風樓」と白く染抜いたのが見え

「おい、起きないか。お前からしてぐたぐた寝てちや、外の者のしめしが附きやしねえ」と口小言を云ひながら、叔父は一團張の机を提出

う入りやあなたなもと、にたゞ笑ひながら私の側へ寄つて来た。此女は叔父が此商賣を始めるについで、急に買つた細君ださうな。

其晩叔父は帳場に坐つて、ちびり／＼盃を舐めて居た。私も其側で夕飯を喰べたが、いち早く箸を下に置いた。そして所在なきに、帳場のうしろに貼つてある藝子の引札を一つ／＼讀んで見た。雙つ一とあるのが、何のことやら分らなかつた。

「早よ入りやせんか。お可厭かい」と、叔母さんは私の顔を見い／＼上つて来たが、赤く成つた鼻の先を長火鉢の上に突出して、「なま、お前はま、梅本ちや又新子が用るぜえも」と、今度は叔父の方へ向いて云つた。

「他所のことは如何でも可いやな。梅本だの、高だのと云つたつて、何だ。本元からして、高が新地のおき屋ぢや無えか。神風樓と云やアお前、關東ぢやの儀なもんだな。」

叔父は酔つて、何やら語の分らぬことを云つて居た。後で聞いたが、何でも十三人居る位どもの中で、五人迄病院へ入つて、今日の検査でも又一人取られたと云ふので機嫌が悪かつたのださうな。

私が二階からいゝんな女がぞろ／＼と下りて来た。皆髪を被つたやうな髪結をして、白壁の襖に白粉を塗つて居た。段梯子を降りきると、言合せた様に論折つて居た。中前の襖を下して、べちや／＼と饒舌りながら、一人づつ張店の方へ出て行く。

午後の一時期、裏木戸を開けて一人の客を送り出した女があつた。その後妻が何日ぞや宅へ来たあの女らしい。二たび鏡を叩いて此方

を向いた所を見ると、欠眼な様であつた。庭下駄を穿いたまゝ、私の居る座敷の直ぐ前を通つたが、何か心の急ぐことでもあるのか、振り返つて見ようともしなかつた。其儘とん／＼と裏梯子から上つて行く。私はそれを見送つたまゝ、何だか物足らぬ心持がした。

少時左様して居たが、不圖思ひ立つて、二階へ上つて見る氣に成つた。わざと梯子を遣へて、帳場の前から上つて見た。表二階の十畳間にはしつぽく臺と大きな電面の火鉢が置いてあるきりで、何一つ見當らない。其隣の部屋では、四五人の女が寄つて、何やらべちや／＼饒舌つて居るらしい。私はそつと反れて裏の方へ廻つた。行燈部屋の前で豆どんが洋燈掃除をしてゐるのを見かけた。其他を避けて通つて、廊下の外れ迄行つて見た。女の部屋の前には、黒塗の札に各自の名が書いて下けてある。私は一つ／＼つそれを讀んで行つた。一番奥の部屋で「田毎」と云ふ字が見當つた。私は何がなしにはつと思つた。

おづ／＼其間から覗いて見た。上置のつい／＼障子の前に、一人の女が彼方向きに成つて耳の邊り迄捲巻を引被つたまゝ、寝て居る。あの女だ、あの赤ちやけた髪の方々としたのが、あの女に違ひない。客を送り出して、其儘部屋へ歸つて寝たものらしい。部屋の中は森閑として、時々長火鉢に掛けられた口から有るか無きかの湯氣の輪の上るのが見える。

私は物珍らしさうに凝手と女の寝態を見守つて居たが、つと眼を反して、うしろ向きに廊下の欄干に凭れた。此家の裏は黒板塙の下に一間幅の洞川が流れて、それに沿うて田舎道が通つて居る。其道の向うは一面に霜枯の田野がつゞく。黒い桑の葉がごろ／＼として、薄い午後の日影は當つて居ても、何となく風が寒さうである。不圖見ると、正面のや／＼黄ばんだ森の外れに、ぼか／＼と煙が湧く。つゞいて轟と地面を撼がすやうな音が聞えた。

「あ、汽車が——」私は思はず口走つた。そして此方の森から彼方の森迄、田圃に沿つてうね／＼と駛る汽車を見送つた。「亮はま、何時入りやアた。」背後で女の聲が聞えた。振り返つて見ると、何







びて、首を擡げた様に行燈の油を舐めたり、小  
 瓶の水を呑み出たりする。それで眼が覺めて  
 見ると、當人は一向知らぬと云ふのである。ま  
 さか頭まで伸ばす譯には行かぬが、切めて油を  
 舐める眞直でもしたら、向うから愛想を盡かし  
 て出て行くと云はれまいものでもなからうと云  
 ふので、早速其支度に取りかゝつた。毎晩男の  
 寢息を窺つてこつそり床を抜けて出る。それか  
 ら行燈の向うへ廻つて、此方へ影が映るやうに  
 しながら、びちや／＼と皿の油を舐めた。勿論  
 出来るだけ男には氣附かない様にした。男  
 が身動きでもしたら、びつたりと止める。腕手  
 と息を殺して、男が寢附くのを持つて、又そ  
 ろと出掛ける。随分氣の長い話ではあるが、  
 そこが手際の入る所である。斯うして、毎晩根  
 氣よく續けて居る間に、男も氣が附いた。そつ  
 と女の寢床へ手を遣つて見ると居ない。はてな  
 と、四邊を見廻したが、枕元に置いてある有明  
 の中へ首を突込んで、びちや／＼と油を舐めて  
 居る。それが明るくも續く、其又明るくも  
 つゞく。左様なると男も怖氣が附いて来た。幾  
 許決心を掛けた女でも、左様云ふ女では家に置  
 かれぬ。で、何氣なく女を喚んで、少し都合  
 があつて眼を遣るから、お前に當てがつた物は

「如何したんぢやい」と訊くと、  
 「え、と」と梯子段を降りて仕舞つて、「田舎さん  
 が酒に酔つて、叔父さまと喧嘩したんぢやぞな。  
 そりや一時えらかつたに。」  
 「何故そんな事したんぢやろ。」  
 「何故つて、そりや云ふに云はれん譯があるの  
 さな、まア可えに、一遍二階に行つて見てりや  
 アせ。」  
 「左様」と云つて、二階を見上げたが、女が酔  
 つて居ると聞いたので、思ひ切つて直ぐに上  
 へ見ると、少時うじ／＼して居たが、一段づつ梯子を上  
 つて、そつと引附を覗いて見た。そこに五六人  
 の女が立ったり坐つたりして、何やらぼそ／＼  
 と話して居たが、一人が振向くと外の女も皆一  
 齊に振向つた。  
 私には直に奥の部屋へ行つて見た。女は懐手  
 をして兩脚を投出したまゝ、筆筒の抽斗に凭れ  
 て居たが、上眼にじろりと私の顔を見たり、  
 直ぐに又眼を伏せて、何時迄待つても何とも云  
 はぬ。毎もとは容子が違ふので、私から何か云  
 はうとしても口へ出ない。少時立つて見て居た  
 が、あきらめて階下へ降りて来た。

したのかしら——  
 「それが訊きたいと思つても、如何しても口へ  
 出ぬ。私はだん／＼女の側へ近づいた。女の  
 顔を見詰めたまゝ、じり／＼と側へ寄つて行つ  
 た。云ひたい、云ひたいと思ふことが如何して  
 も云はれない。  
 「如何しやアした」と云ひながら、平常の様に  
 両手で私を引寄せた。私は女の頸の下へ頭を押  
 附けたまゝ、一人ぼろ／＼と泣いて居た。  
 其後、油瓶の一件は嘘にも出さなかつた。  
 師走の二十一日に、祖母の法事がつとまると  
 いふので、私は一寸自宅へ戻つたが、冬休  
 の間は其儘自宅で居ることにした。一月餘り  
 もあんな賑やかな生活に慣れただけ、母親と二  
 人、それに作男を加へても三人鼻を突合せて膳  
 に向ふのが、何となく淋しかった。殊に喉物が  
 不味かつた。小さい時から喰ひ慣れた、お節  
 にお醬油をかけて御飯に添へて喰べるのが何  
 も可厭で堪らない。  
 それでも、暮の二十八日には例年の餅搗きを  
 した。今年叔父の家分も一所に揃いて、町  
 からも手傳ひに來ると云ふので、朝から大騒ぎ  
 をした。日暮から搗き始めて、夜通し杵の音が  
 して居た。そして、明の午近くやつと搗きを

除夜、元日、何事もなく済んだ。  
 二日の朝、秘めて神風樓へ行つて見た。大門  
 を這入ると、廊の中は門松で林の様に見えた。  
 何處の樓も切刻き竹に根こぎにした松や梅の古  
 木をあしらつて、盛砂に景氣を添へてある。毎  
 も雪間は藁として人通りもない街の上へ、派手  
 な裾襦袢の雙つ一らしいのが、印半纏の上に雙  
 子の羽織を引掛けた男と一緒に成つて、羽織を  
 突いてきやツキやと騒いで居る。赤い顔をして  
 梯子先をぶら／＼歩いて居る男も見える。私は  
 あわてて叔父の家の軒下へ駈込んだ。  
 見ると、家の中が森閑として居る。少時梯子  
 段の下に立つて居たが、誰も出て來ない。何だ  
 か當の外れたやうな氣もした。  
 そこへばた／＼と例の叔母さんが二階から降  
 りて來たが、  
 「あ、亮、はまか」と云つたまゝ、此方へとも云  
 はず、あたふたと奥へ這入つて行つた。  
 私は氣に取られて立つて居た。ついで、  
 のそ／＼と隻眼の仲居が降りて來たので、

悉皆持つて行くが可いと言ひ渡した。女は思ふ  
 處に依つて來たと云ふ心持を色にも見せず、そ  
 れでは是非が御座いませんからと、體よく其場  
 を下つて、身のまはりの物は小片布一つ残さず  
 持出した。そして、又元の古巢へ舞ひ戻つて、一  
 箇月も経たぬ間に同じ家から勤めに居た。男の  
 方も、後で一杯喰はされたと氣が附いたらう  
 が、大家の主人ではあるし、それ限りになつて  
 仕舞つたさうな。油瓶りと云ふ異名はそこか  
 ら出た。  
 其後、半年餘り新地に居たが、神風樓が出来る  
 と一緒に移居して來たのだと云ふことである。  
 こんな話を録回して、  
 「それでも、よく／＼可厭ぢやつたと見えるわ  
 なも。あの女が、本當に菜種油を舐つたんぢや  
 ろか」と、仲居は片眼を光らしながら云つた。  
 「そりや此とは嘘へも行つたのさな。」  
 「は、は、と二人は笑ひながら立上つた。  
 私は少時其後に立つて居たが、急につか／＼  
 と二階へ上つて、女の部屋へ行つて見た。女は  
 今日も蒲團の上に寝轉んで居たが、足音を聞く  
 と眼をばつちり開いて、お出／＼をするやうに、  
 夜着の片袖を持上げた。  
 あの口で油を舐めたのか、本當にそんな事を

ふて居たさうだが、それでも午過ぎに馴染の  
 客が來たと云ふので、其男を相手に陽氣にはし  
 やいで居た。三味線や太鼓の音も聞えた。そん  
 な譯で、私は女の座敷へ行、ことも出来ず、一  
 人勤工場の側の吹矢へ行つて、吹矢を吹いて暮  
 した。そして、明の朝早く自分で歸つて仕舞  
 つた。  
 此後、私はたまに叔父の家へ行くことはあつ  
 ても、長く逗留して學校へ通ふやうなことはな  
 かつた。女の部屋へも滅多に行かなかつた。  
 私には能く解らないが、家の稼業も思はずしくな  
 く、だん／＼店も寂れて行くらしい。叔父自身  
 他所の樓へ上つて騒いで戻つて來て、それが悶  
 着の種子に成ることもあつた。  
 そんな風で二三箇月経つたが、陽氣がぼかぼ  
 かとして桃の花の吹く時節に成つても一向景氣  
 が立直らない。其間叔父は内密で店を人に譲  
 つて其金子を持つて、夜逃げ同様に名古屋へ上  
 げ越して行つた。そこで小料理屋の様なもの  
 を始めたと云ふことだが、それからと云ふものは  
 私は一度も叔父の顔を見ることがない。又、勿  
 論私の家へ顔を出したこともない。  
 一年許りして、叔父が酒毒のために死んだと  
 云ふ噂が傳はつた。其時は最ら小料理屋の店も



閉めて、何處かの裏長屋へでも遁入つて居たものらしい。例の叔母さんは如何したらう。「あれも感心な女ぢやぞえ。貞次が死ぬ迄側に置いて居て面倒見たのぢやさうな。」  
母親はこんな事を云つて居た。

二

私は十四の春を迎へた。其頃から、私は俄然大人びて来た。身長もずる／＼と伸びて、一人前の小男よりは高かつた。子供らしい遊びにはすつかり興味を失せて、同級の仲間なぞが夢にも知らないやうな、大人の世界に對して苦しい憧憬を感じて来た。そして、一人寂しい日を送つた。勿論早熟だとは云はれよう。併し私には左様云ふ時期に際して男だてら邊幅を氣にしたり、女と云ふ女が氣にかゝると云ふやうな心持は知らなかつた。日常目に觸れるやうな女は、私とは縁もゆかりもない。私の心にとまる女は、只小説本や講談の中に棲んで居た。たとへば花見の歸りに若衆を見果して、戀わづらひをしたり、それから乳母の仲立てやう／＼思ひが慥つたり、慥つたかと思へば又別れたりして、惡戯に勾引かされるやら、宮界へ身を洗めるや

ら、さまざま憂目を見た擧句、二たび男に返り合ふと云つたやうな女であつた。此一年間に、私は何れだけ小説や講談物を読んだか知れない。尤も作者の名も知らず、表題さへ知らずに讀むのだから、後では一つとして覚えて居らぬ。只大から次へ讀みに讀んだ。高潮に達した所へ來ると、明けの鐘を聞いて床へ遁入つたことも一度や二度ではない。夜も盡も夢を見て居るやうな心持がついて居た。其中へ入り込む女には、只一人廓で知つた女があつた。

其後、あの女のことを忘れるともなく忘れて居た。それが何時となく、二たび心にかゝる様になつた。あの當時の事を一つ／＼想ひ出して、二たび眼の前に浮べて見ることもあつた。あの女も、一日廓を出てしばらく桑名で藝者をして居たが、それも面白くなかつたのか、此頃又金津へ舞ひ戻つてつとめをして居ると云ふ噂もうす／＼聞いた。併し逢ひたいと思つても、わざ／＼逢ひに行つて見るだけの熱心はなかつた。昔から稗史小説の作者は、遊女を申しもの、擯斥すべきものとして教へない。寧ろ威嚴のあるもの、押の利くもの、女と生れたらあやかりたい位のものにした。私も左様は思はないまで

も、決して賤しむ氣はなかつた。それに、あのやうな事情からあのやうな種類の女を知つたので、普通の人の持つやうな、女郎を憐れむべからざるものとするやうな心持は、悲しいかな、一度も持つたことがない。只現實に見る女郎には物の本で讀む浮川竹の女に見るやうな、水仙の根を切つて花瓶に挿したやうなしをれがない、萎れた寂しみが無い。そこに一種の反感を持たせるものがある。

兎に角、小説や稗史を讀みながらも、時々あの女の姿が紙の上にならなかつて、雪の降る夜、裏庭の松の樹に縛られて遣手に折檻されて居る遊君をあの女だと思つたり、それを私が脚を乗り越えて助けに行つたりするにはしたが、未だ錢を握つて遊廓へ足を踏み入れるだけの度胸はなかつた。そんなにして、其年も無事に暮れた。明けの年の春、私は鶯谷の小學校を卒業した。此儘田舎に歸つて百姓に成らうか、それとも上京して學問をしようかと云ふことが問題に成つた。年貢米を買つて、冬は鹽鏡を擔いで林の中をあさつたり、夏は寫眞器でも肩にして、水邊をぶらついて、一生のらくらして暮すのも氣樂で好いかも知れぬ。只、それでは何だ

か殘惜しい。見ない所も見たい、知らない所も知りたい。殊に此儘田舎の用使には成りたくない。四圍の男や女とは違つたものに成りたい。違つたものとして迎へられたい。私はいろいろ思ひ悩んだ擧句、卒業したら買ふ宮の鹽鏡と寫眞器とを捨てて、一人知らぬ旅路に上つた。上京して、初めて志した學校へ行つて見た時、私はその狭いと汚いと惘れた。芝口に宿を取つたまゝ、一週間許り通つて見たが、先生も生徒も教へることも話らない。全體東京の街からして思つた程に美しくもなければ、立派でもない。これぢや如何しても長く居つく氣がしない。いよいよ故郷へかへるつもりになつて、同宿の男に案内を頼んで、上野淺草と見物して廻る間に、其男は私の紙入を渡つて宿屋の二階に私を置去りにした。仕方がないから、宿の主人に事情を打明けて、故郷へ書留郵便を出した。電報では意を盡さぬし、書留郵便なら普通の郵便よりも早く着くだらうと思つたからである。

二三日して故郷から一人の男が出て来た。其男に作られて私は初めて下宿屋と云ふもの軒をくゞつた。其處から又元の學校へ通ふことに成つた。下宿屋の起臥程味氣ないものはない。私の夢は宵々に故郷へ飛んだ。不思議なことに、私の夢に入るものは故郷の家を守る母親でもない。勿論遊び仲間の友達でもない。あの女だつた。廓に居る女であつた。夏の休暇に成つた。遊學と歸省、此二つの言葉位當時の私に快くも懐かしく響いたものはない。而も遊學に失望した私は、何の位歸省を待ちかねたらう。明日の朝立つと云ふ前の夕、銀座で少々の買物をして、革靴に詰めて、枕頭に置いて眠りに就いた夜は、私の一生の間でも、實際幸福な夜であつたらしい。

が、いよいよ汽車が故郷の町に着いて、改札口を出た時、私は最上種の物足らなさに驚はれた。歸省する位なら、停車場へは弟や妹が迎へに來て貰ひたい。妹の年は十三で、弟は九つ位で有つて欲しい。併し一人子の私には弟も妹もない。妹の連れで、最一人同い年の妹にも來て貰ひたい。其頃讀んだ小説に魅せられて、心滑かに許嫁の女を描いて居た私には、それが無いのも、何とやら物足らなかつた。私を迎へには、家の作男が荷車を引いて來て居たに過ぎない。毎日、家にぶら／＼して居ると、一層物足り



「私は立上つてつか／＼と側へ寄つた。女は少時私と眼を見合せて居たが、「部屋へ入らつせ」と云つたまま、くるりと背後を向けた。そして急ぎ足に廊下を引回して行く。私は胸を躍らせながら其後に従つた。いきなり障子を両方へ開け放して、「暑いに、開けて置からうかい」と、べつたり長火鉢の前に坐つた。私にも向ひ合つて坐らせながら、「本當に好う来てお呉れたなも。如何して此處が分つたな。え、叔母さんに聞きやしたのかな。」私は只相手の顔を見ながら笑つて居た。「あ、左様だ、それで解つた」と、頓狂な聲を出しながら、「此間の晩途中で叔母様に逢つたら、田毎さんの昔の好きな人に逢つて来たよと云つて、如何しても名を云やアせんのだが、それぢや、屹度それが貴方のことに違ひない。」私はくすぐつたいやうな気がしながら、それでも嬉しかつた。「これ如何しようなも」と仲居が引附に忘れて来た編笠を持つて来た。「あ、それか」と云つて、私は傍から引たくらうとした。

「何だ、それは」と女は笑つて見て居る。「釣に来たものだから。」  
 「好え物釣りに来たやいな。」  
 二人が聲を合せて笑つた。私は眞赤に成りながら、相手の女が憎いやうにも思つた。女は何と思つて居るのだらう、何と思つて私が此處へ来たと思つて居るのだらう。  
 「左様かえも」と、女は笑ひ止んで、「此お人知りやアせんか。私が元居た家の息子さんだぜえも。」  
 「へえ、神風樓の。左様かい」と仲居はじろじろ私の顔を見て居る。  
 「左様ぢやないや」と私は遠くで取消した。  
 「え、息子さんと云ふ譯でもないけれど」と、女はいろんな當時の事を言出して、「毎日一緒に手習ひをしたでしょ。貴方も記憶えて居やアすか。」  
 併し、私はあの頃の私ぢやない、あの時分の私だと思つて貰ひたくない。左様思はれるのが可厭さに、仲居が、  
 「何ぞ取つて参りましょか」と云つた時にも、直ぐに、  
 「私は酒が飲めるんだぜ」と云つた。  
 「お酒上りやすの。」

「あ、東京ぢや誰でも呑むんだよ。」  
 から云つた時には、自分ながら嬉しかつた。仲居が出て行つた後で、  
 「さ、浴衣と着代へやアすな」と、單筒から筒のごは／＼したのを出して、背後から被せた。帯迄結んで貰つて、二たび座に着いたが、両方の肩から襟の邊りを振回つて、何だか影護たいやうな心持もした。子供扱ひにされるのは可厭でも、こんな所へ来る並の客の様に遇はれるのも好い心持ではない。  
 やがて三つ、井に鏡子をつけて持つて来た。「御面倒さま」と女はそれを受取つたが、「私達二人で好え様にするに、ほかつて置いて休んどくりやア。」  
 「へえ、そんなら御氣障に」と、仲居は其儘引下つた。  
 私は蓋を取上げて二つ三つ續けざまに乾した。女も黙つて其後から注いで居たが、急に鏡子を引くやうにして、  
 「最う止めて置きやアせ。無理に飲むと、後で苦しいぜえも。」  
 「ぢや、上げよう」と、私は出した蓋を相手に突き附けるやうにした。  
 「私最う澤山」と、大衆に顔を覺めたが、手に

人懐こいやうな表情をした。  
 「え、と云つただけで、別に云ふ言葉を知らない。」  
 「彼時から、阿母はまは御機嫌よろしいかなも。」  
 又、「え」と云つて、少時黙つて居たが、「僕は、此春から東京へ行つて居るんだぜ。」  
 「東京へなも——矢張勉強にかいも。」  
 私は只點頭して見せた。  
 「あ、今は夏休みで歸つてらつせるだなも」と私の顔を見て居たが、  
 「一遍金津へ遊びに来やアせんか。田毎さんも居りやアすぜえも。」  
 私は心持顔が賑く成るやうに思つた。少時して、「何と云ふ家に居るの」と訊いて見た。  
 「田毎さんかな。」  
 「うむ、叔母さんでも——何方でも。」  
 「え、田毎さんはなも、金波樓知つてりやアすぢやろがな。角のあの家に居やアすに、一遍逢ひに行つてりやアせ。」  
 から云つて叔母さんはにや／＼笑つて居る。随分さまりの悪い思ひをしながら、それでも何處やら嬉しさうな心持を隠し切れなかつた。

其夜、家へ歸つてからも、同じ事ばかり思ひつづけて居た。夜が明けても、未だ同じやうな心持である。  
 午過ぎ、例の小舟を誘つて、大川へ釣に出て見た。だん／＼船を下へ流させた。下るにつれて、遊廊が近づいて来る。此邊から堤へ登れば、廊の裏までは四五町もあるまい。  
 「おい、一寸向うの岸へ船を着けて呉れんか。」  
 「何處ぞへ行くのかな。」  
 「うむ、町へ買物に行つて来る。」  
 小舟は云ふが儘に、船首を堤の下の砂地に着けた。  
 「此處に待つちよるのかな。」  
 「なに、歸つて来たら喚ぶで、何處へなと滑いで行つて居るがよい。」  
 から云ひ棄てたまま、堤の腹を駆け上つた。堤の上に立つて、一寸向うに見える屋の棟の高さ一郭を見渡したが、其儘又駆け下りて、田圃の中につゞく小徑を一般に走つた。誰か見て居るやうな気がして、只もう走らずには居られなかつた。日光が頭の上から照り附けて、田の水も沸立つやうな目である。  
 裏門から廊の中へ入ると、傍目も振らず、金波樓の門口へ来た。流石に一度は通り越したが、

二度目に其前迄戻つて来て、つと軒下をくゞつた。土間に突立つたまま、  
 「おい／＼と喚んで見たが、皆寝て居るもして居ると見えて、一向返辭をしない。」  
 「おい／＼、誰も居らんのか。」  
 二たび泣出しさうな聲を出して喚んだ。  
 「へえお出やす」と直ぐその腰高障子の中から寢惚けたやうな、頓狂な聲が聞えた。やがて亂れない風をした女が上り框へ出て来て、  
 「お出やす、何うも御無禮しました」と云ひながらじろ／＼私の姿を眺めて居る。  
 「上つても可いかい。」  
 「え、何卒」と遠くで云つたが、藁草履を穿いて、編笠を抱へた私の様子が、何うも胸に落ちぬらしい。私は構はず梯子段を上つた。後から跟いて来た女中に向つて、  
 「田毎と云ふのが此家に居るんだね。」  
 「あ、見えます、田毎さん喚びましょかなも。」  
 「一人引附に残されて、ぼつねんと待つて居ると、やがてはたん／＼と然然した重草履の音がして、  
 「まア」と云つたまま、女は間の前に立止つた。



持った鏡子を下に置いて酒を切り上げることにした。

私は思はずどきりとした。

「ね、それで可成りしよ」と囁いて云はれて、私は女の云ふ儘に成つた。やがて女は、

「一寸待つて下さいな」と、其儘下へ降りて行つた。何をしに行つたのだらう。何だか看護婦が患者でも取扱ふ様に、物置れた扱方をされるのが怖ろしいやうでもあり、又物足らぬやうでもある。

少時して何やら鼻唄をうたひながら廊下を戻つて来た。そして、  
「些との間、かうして置からうかい」と云ひながら、廊下の障子を両方からびたりと閉め切つた。

二人は部屋の中に閉籠つた。

「幾つに成りやしたい」と、女が訊く。

「十五」と私は小さい聲で云つた。

「私より八つ下だな」と云つて、女は笑つた。

一時間許りの後、二人は又長火鉢の前の向ひ合つて坐つた。私はうつとりとして女の顔を見つめた。女の容子がまるで違つて見える。私の眼には最早元の女ぢやない。女も私のことを何

と思つて居るのだらう。それが聞いて見たい。それが知りたい。

とは云へ、女は別に何とも思つて居ないらしい。細帯のまま立膝をして、重たさうに鐵瓶の湯を湯さましへうつしたか、其儘朱羅子の煙管を引寄せて、一服ゆつたりとひ込んで、ふうと鼻の孔から吹出した。私には出来ぬ氣當である。私の吸へぬ煙草を吸つて、私の出来ぬことをする。それが忌々しい様もある。

私は何時迄も黙つて居る。只、目が暮れてどきどき仕出してから廊下を出るのが可厭さに、思ひ切つて立ち上つた。女は裏木戸迄送り出したが、

「阿母はまに、私に逢つて来た」と云やアすか」と、わざとらしく笑ひながら訊いた。

「そんな事は云はないさ。」

「左様、それなら好えわな。」

私は木戸を出ると、又一散に駈出した。街の角を曲らうとして、一寸振向いたが、女は未だ元の所に立つて居た。

大川まで一息に駆け戻つた。小作はこも持ちくたびれたやうに、堤の下へ船をつけて、ぼんやりして居た。

「些のア捕れたかい」と訊いたが、只氣の無ささ

らに、  
「え、云つて棹を突張つた。  
晴がりの水の上を半里盛り漕いで上つて、百姓家の夕飯過ぎに自宅へ戻つた。寝床へ入つてからも、ちやぶく」と船櫓を洗ふと波の音が耳について離れなかつた。

明くる朝、目が覺めると先づ廊下の女を思つた。昨日迷ひに行つて、又今日も行くと思ふことが、先の女に對して氣取かしいやうにも思つたが、幸抱が出来ずに、例の小作をそのかして船に乗つて出た。

女は私の顔を見ると、只淋しさうな笑ひ方をした。私はそれが氣にかゝつた。何處やら前に知つて居た頃の其女とは違つて居るらしい。

が、何時迄そんな事の心にかゝる年頃でもない。その日も、何をしたらやら知らぬ間に日が暮れて、いや／＼送り出されて戻つた。

それから毎日の様に廊下を閉めた。毎日、同じ時刻に船に乗つて出て、同じ時刻に戻つて来た。晝間だから、何日行つても、樓中が森として、女も私一人を待つて居るやうに見える。

何時の間にか、私は女を自分一人のものに思ひ出した。始終眼は離れて居ても、丸で物の見えない年頃の私は、自分の火の手さへ高

まつたら、相手も一緒に燃えるものと思つて居たらしい。又、左様思ふのを、誰一人妨げるものもなかつた。

いよいよ夏休みもをはりとなつた。

八月三十一日の朝、町の停車場から汽車に乗つたと見せかけて直に引回して、女の許に隠れて居た。此一週間位夢心地に酔つて居たことはない、一生あるまい。自分で何をして、何を云つたかも覚えて居らぬ。女が何んな事を云つたかも知覚えて居らぬ。只、二人は起調と云ふものを取交した。小指の血を滴しながら、同じ文言を二通に書いて、一通づつ別けて持つた。

尤も、これは女から言出したのだが、如何云ふ氣で、あの女がそんな事を言出したものか、今でも分らない。

一週間経つて、私は半分身體を残して行くやうな思ひをしながら、扉を立つた。

東京へ来てても無暗に手紙を出した。返事が来れば、直に又其返事を出した。側の思はくなどには未だ氣が附かない。當人は何と思つてそれを受取つたらう。兎に角、後れがちなが返事は来た。それが五通とたまり、十通と重つて、

三

終ひには東にして藏つて置いた。かうして一年の間ついでいた。

又夏休みが間近に成つた。恰度五月の節句の頃である。半月餘りたよりが絶えたと思つたら、不意に其女から一通の手紙を受取つた。裏書に名古屋市門前町何十番戸とあるので、先づ胸が痛んだ。開けて見ると、去年の暮から二三度出た老人の客に、不圖した話のはずみから急に引かされて、十日程前に此地へ来た、相手は造酒舖の隠居である、年寄のことではあるし、ほんの出来心で引かせて貰つたのだから、長く長く管はない、晩くて二三箇月したら暇が貰へるだらう、そしたら貴方の側へ行つて、縱令何んな苦勞をしようとも乾度添ひ違けるから、必ず思つて呉れるなと云ふ知らせである。

私は生れて最初のデイスイリュージョンに出逢つた。遊女と云ふ名には何處か満ちがある、たよ／＼とした所がある。併し人の妾が何だ、妾には同情も絲瓜もない。遊女は畜生に劣つた境涯かも知らぬが、未だしも人の子が成る。妾には畜生が成る。あの女が隠居の妾に成らうとは思はなかつた。

私は眼が眩んで、四邊が暗く成るやうに思つ

た。一日一夜興奮した擧句、直ぐに其家を出よと書いて出した。愚圖々々して出なけりや、何も彼も捨て置いて、此方から出かけて行くか書き添へた。彼方からは、今にも如何かするから短氣を出さずに待つて居て呉れと云ふ、煮え切らない返辭だが、其頃は自分も納まつて、直に出掛けて行く程でもなかつた。

其後は此方から出す手紙も間遠に成つた。何うも標子が宛名の所には居ないらしい。それなのに居所も知らせぬ。何處かへ消えて行つて仕舞ひさうな氣もして、心も心ならず日を送つた。其間に、やつと休暇が来た。

夏の朝、旅装もそこ／＼にして新橋を立つた。かねて打合せもしてあるから、笹島の停車場へ着くと、ろろ／＼場内を見渡したが、如何したのか女の姿が見えぬ。くわつとして、矢庭に腕車を備つて駆け出さうとした時、

「もし」と、背後から聲を掛けたものがある。「まア連れて何處へ行きやアすか。」

何處へ行くものかと思つたが、好く／＼見ると女の容子が何處か窺れて、服装も思つた程好くない。何だか當が外れたやうな心持がして、思つたことも口へ出なかつた。其儘腕車をかへして、女に伴れられながら、とある裏小路の



旅人宿に泊つた。  
 「私は初めて此女が素人の風をしてゐるのを見た。併し最早私のものぢやない。左様思ふと堪らなかつた。如何して可いか解らない。他人に身受をされるものなら、何故其前に一言知らせて呉れぬか。其前に知つて居たら、私だつて如何にか成らぬことはない。母親の前に出て、斯うした譯だと有様を白状したら、それ位の身代金は出して呉れぬこともなからう。私は母親を見くびつて居たから、本當にそんな事が出来る様かと思つた。縦令出さぬ迄も出させて見せる。命にかけても出させて見せる。そんな事情は女の方でも分つて居る筈ではないか。女にして、隠居の妾に成るよりは、私の家へ来る方が仕合せであつたらう——」  
 「私は思ふさま言ひまくつた。  
 「そんな事云やアしても」と、女は口を挿んだ。「阿母はまに、私お目にかゝることの出来ん譯があるでなも。」  
 「何故々々、如何してそんな事を云ふんだい」と詰り寄せた。  
 「如何してと云つて、そりや、いろ／＼譯が有るわいも。」  
 「解らない、私には解らない。二人が夫婦に成

るものなら、お前が阿母さんに逢はぬ譯には行かんぢやないか。それとも私の許へ来て呉れると云つたのが誰かい、お前は私に誰を云つたのかい。」  
 「いゝえ」と頭を振つたまゝ、何とも言はぬ。私も少時黙つて居たが、「ちや、最う云はない。清んだ事は云はないから来てお呉れ。私の許へ来て呉れるのが可厭なら、私から行く。何處へでも隨いて行くよ。」  
 「貴方えも、今年十六に成りやアたなア」と不意につかぬ事を女が訊いた。  
 「何故歳見たいなものを訊くんだい。」  
 「でも——貴方が三十に成りやアすと、私は幾歳に成らんぢや。かうつと、今年辰の二十九ぢやで」と、眼を瞞つて指折り数へながら、「恰度四十三だぜえも、そんなお婆さんでも好えかい」と、うそ／＼笑つて居る。  
 「四十三にはさのみ驚かなかつた。私も何時かは四十三に成るのだ。併し女は確か私より八つ上だと覺えて居る。女の口からも左様聞いたやうな覺えがある。」  
 「如何しやアた。何を考へてらつせるの」と二たび女が訊ねた。  
 「何も考へてやせん。歳なんぞ幾つだつて可い

ものなら、お前が阿母さんに逢はぬ譯には行かんぢやないか。それとも私の許へ来て呉れると云つたのが誰かい、お前は私に誰を云つたのかい。」  
 「いゝえ」と頭を振つたまゝ、何とも言はぬ。私も少時黙つて居たが、「ちや、最う云はない。清んだ事は云はないから来てお呉れ。私の許へ来て呉れるのが可厭なら、私から行く。何處へでも隨いて行くよ。」  
 「貴方えも、今年十六に成りやアたなア」と不意につかぬ事を女が訊いた。  
 「何故歳見たいなものを訊くんだい。」  
 「でも——貴方が三十に成りやアすと、私は幾歳に成らんぢや。かうつと、今年辰の二十九ぢやで」と、眼を瞞つて指折り数へながら、「恰度四十三だぜえも、そんなお婆さんでも好えかい」と、うそ／＼笑つて居る。  
 「四十三にはさのみ驚かなかつた。私も何時かは四十三に成るのだ。併し女は確か私より八つ上だと覺えて居る。女の口からも左様聞いたやうな覺えがある。」  
 「如何しやアた。何を考へてらつせるの」と二たび女が訊ねた。  
 「何も考へてやせん。歳なんぞ幾つだつて可い

やがて、十時頃に朝飯を済ましたが、私は如何しても此處を立つ氣がしない。何時迄も此處に居たい、女も此處を止めて置きたい。  
 「私一遍、自宅へかへつて来ますぜえも」と、云ひ出した。  
 「いやだ、未だ歸つちや可厭だ——」  
 「そんな事云やアしても。」  
 「ね、今日一日だけは可いだらう。切めて日暮迄も」と、私は哀願するやうに云つた。  
 「それが、昨日も出られぬのを無理に出て来たのだでなも、如何しても今日は歸つて居らんと——えゝ、何と云やしても。」  
 女はきつぱり云つた。  
 「だつて」と相手の顔を見詰めたまゝ、「其人は十日に一度か、半月に一度しかお前の許へ違つて来ないと云ふんぢやないか。そんなら何もそんなに違つて歸らなまきや成らぬ筈はない。」  
 「えゝ」と云つて、私の顔を見返したまゝ、少時何とも云はぬ。  
 「ちや」と云ひ掛けたが、頭の中はびくりと動いた。「左様ぢやないと云ふんだね。」  
 女は黙つて點頭した。  
 「這酒舖の隠居だと云ふことも。」  
 二たび女は黙つて點頭した。

「ちや、何だい。其人は何だい。」  
 「本當は——本當は博奕打ちやす人でも、其方の親分だと云ふことだぜえも」と、一寸私の顔を見ながら、又早口に言葉を繼いで、「それだでなも、こんな事が知れようもんなら、何んな目に遭ふか——ひよつとしたら殺されて仕舞ふかも知れんぜえも。萬一そんな事にでも成つて、私だけなら可えが、貴方に逢——」  
 「私は飽氣に取られて、何とも云ふことが出来なかつた。如何思つて可いかも分らない。  
 「だで、如何しても今日は歸らな——好えかいも、其間又都合を見て逢へるやうにするでなも。貴方も一度自宅へお歸りやアせな、悪いぜえも。」  
 さう云ひ、片側纏子の帯を締め直しながら、「私もそんな顔を見て歸つて行くと、何日迄も氣がかりだでなも。好えかいも、蛇度来月の五日過ぎには、私が實家へ行くと云つて内を出るでなも、其時に貴方も四日市迄来てお呉りやアせ。え、左様して頂戴なも。」  
 少時返辭を持つて居たが、  
 「そんなら、最う行くぜえも」と、女は一足づつ部屋を出て行つた。  
 私は少時顔も上げなかつた。

んだ。歳のことなぞ考へやせん。私は只お前と別れたくない。お前が来て呉れなけりや、本當に私は如何なるか分らない。」  
 「そんなに云やアすと」と云ひかけて女は言葉を送切らしたが、「だが、今は左様思つて居りやアしても、三十に成つてから考へて見やアせ、蛇度思ひ當りやせえも。」  
 「そんな、そんな人間だと思つて居らんかい。私はそんなぢやない、そんな薄情な人間ぢやない。」  
 「えゝ、そりや分つて居ますとて。」  
 「分つてるなら、何もそんな——」  
 「まアそんな話は止めて置かうかいも。折角私も無理をして来たんだに、しつぱりと違つてお呉れやさんか」と、つく／＼相手の顔を覗き込むやうにして、「こんな事をしたりや、まるで帯屋の逆見たいだなも。」  
 「何だい、そりや。」  
 「何でも好いわなも。」  
 「私は又女のするが儘に成つた。二人は徹宵ぼそ／＼と絶間なく話して居たが、明方に成つてうと／＼とした。敷置圍は汗でしつとりとして眼を覺ました時にも、半ば夢心地が離れな



女の云ふ所に依れば、其男は北海道の空知太へ移住する計畫を立て、今度もそれが爲に旅行したので、旅先から歸れば、直に此土地を引拂ふ手筈に成つて居る。勿論女も伴れて行く。今も云つたやうに、此際男の言葉に違ふなどとは思ひも寄らぬ。何處迄も云ふが儘に成つて連れて行かれる所へ隨いて行く外はないといふのである。

空知太と聞いて、私は此女が死んで行くやうに思つた。最う争つて見る勇氣もない。只一生懸命に女の身體を放すまいとした。

「本當にそんな所へ行く氣かい、行くつもりに成つて居るのかい。」

「最う何も言はずに氣いよくして頂戴」と、女は涙に噎れた聲をして、「これから未だ七八日あるで、其間好きな事して遊ばうかいも、何でも相手に成りますぜえも。」

私はそれを嫌だとも云ふ勢もなかつた。明くる朝に成つて、伊勢詣りでもしようかと云はれたが、何うもそんな氣はない。何日迄も此處に居りたいと云つた。そして、毎日遺瀬なげに女の顔を見てばかり暮した。

七日目に其處を立つて渡島の停車場へ戻つたが、前に泊つた旅宿屋に立寄つて、女は其儘別

れて行かうとした。私は如何しても最一度逢ひたいと言ひ張つて、女も承知した。

他人目を憚つて、女の後から見え隠れに隨いて行つて舞津の隠れ家も突きとめた。とある二階の隣の露路の木戸を叩いて、「一寸強回つたま、女はつと姿を隠した。其夜、暗がりに紛れて、二三度其家の前を通つて見たが、空家の様に森として物音一つ聞えない。夜露にしつとりと袂も濡れた頃、やつと諦めて宿へかへつた。

次の日、かねて示し合せた時刻に例の露路口に行つて、ほと／＼と木戸を叩いた。やがて誰やら足音を忍んで近づいたかと思ふと、細目に木戸を開けて、女がそつと顔を出した。そして何にも云はずに手招きする。

私は黙つて木戸の中へ這入つた。何も木青桐の立つて居る中に吉びた茶席めいた平家があつて、女はそこへ連れて行つた。其内側は案外こぢんまりと人の住む様にしつらへて、長火鉢には鐵瓶の湯も沸つて居た。

「昨夜は淋しかったよ、私には逢も堪へられさうもない。」

私は座に着くと、直ぐにかう云つた。

女は手を上げて制するやうにしたが、

「能く来て頂戴したなも、怖ろしいことなかつたかい。」

「怖かつたよ。」

「誰も見えなくて可えわいも。」

つと立上つて、側へ指寄りながら、私を帯の上から抱き寄せるやうにした。私は戸口を見詰めたま、がた／＼と涙を流した。

日暮前に、女は木戸口から私を送り出さうとした。私は女の袂を握つたま、離さなかつた。仕方がないので、途中送送つて来た。私は田圃道をぐる／＼廻りながら、何時迄も別れようとはしない。とつぷりと日も暮れた。

何處迄行つても同じ事だ、最う歸るぜえも」と、女は幾度か繰返した。

私は其都度何とも云はずに女の袂を握んだ。日が暮れて、人顔が見えなく成つてからは握りづめにして離さなかつた。

「一遍そこ離して頂戴。最う歸つて居らんと悪いでなも。」

「いやだ／＼、如何しても離さない。」

「そんな無理な事云やアしても」と、女は立止つて引振斷るやうにした。

「何方が無理だ。如何してもお前は私を捨てる氣かい、捨てて行くつもりかい。」

た。

明くる日、午前中待つて見たが、未だ来ない。午後は此村に盆の村芝居があると云ふので、私は奇々しながらそれでも氣を紛らしに行つて見た。例の如の中に席を引張つた小屋である。宿の女中に案内をさせて棧敷についたが、幕間の賑々しいこと夥しい。物賣がわめく、子供が泣く、棧敷がひしめく。寢不足の頭にはぐわんぐわん響くやうな騒動である。私は幕開きも待たず這々の體で逃げ出した。

かへりには宿の前を通り過ぎて、一町許り行つてから氣が附いて引返した。廊下で行き逢つた女中が、

あの四日市からお待ちかねの方が」と告げた。

私ははつと思ひながら襖を開けた。

「お歸りやす」と、女は身體を振向けながら、「何うもおそく成りまして——大變待つて頂戴したさうだなも。」

「うむ」と云つたま、座についた。

私は女の顔を見ると、二たび逢へないものに逢つたやうな氣がして、云ひたいことも、口へ出ない。一緒に酒を飲んだり海に入つたりして、ぐづ／＼と日が暮れた。

それでも女が私の前で平氣で其男のことを

云ひ出して、顔が強いから一度も外へ出して呉れない、今度初めて十日許り留守に成つたので、早速買家へ行くと言ひ置いて出て来たのだなどと、事もなげに話すのを聞いては尙更堪らない。私は奇々する心を抑へながら、

「そんな男が、お前は好きなのかい、好きでそんな男の許へ行つたのかい」と詰るやうに訊いた。

女は意外な面持で見返したが、

「いや、好きぢやない。誰もあんな怖ろしい人の好きなものがあるか。」

「ぢや、何故そんな所へ行つたんだい。好きでないものが、何故初めに左様成つたんだい。」

女は唇を噛んだま、黙つて居た。少時して、

それが因果だわいも、私の因果で——今更仕様がないわいも、しめやかに言つた。

其顔を覗き込む様にしながら、「ぢや、矢張り好きだと云ふんだね。」

「いや、嫌ひでも仕様がな。被様云ふ男に見込まれたが最後、幾許可厭だと思つても逃れ様がない。未だ貴方には解らんがえも、あゝ云ふ人達と云ふものは、一旦見込んだら、縱令殺してでも自分の思ひ通りにせな置かんのだぜえ

も。又殺さうと思つたら殺し損ひはない。それが可厭なら、あの人達の云ふが儘に成つて、思ひ通りにされて居るより外に仕様がな。」

そんな事があるだらうか、そんな無法な事が此世の中にあるだらうか。私は相手の顔から眼を離すことが出来なかつた。

「それぢや、お前は其男の云ふが儘に成つて居るんだね。此後成る積りなんだね。」

女は黙つて居る。

「如何しても」と、私は泣聲に成つて相手の身體を揺振つた。「如何しても私を捨てて行くのかい。これ、最一遍私の許へ来て呉れることは出来んのかい、如何しても出来んのかい。」

堪忍して頂戴と、女も泣聲で云つたま、疊に顔を伏せて仕舞つた。

「いや、堪忍しない、私は何處までも堪忍しない」と、頑足ないことを言ひ張つて、

「それよりも、私の云ふことを請いてお呉れ、私の云ふ通りに成つてお呉れ。」

「そんな事云つてりやアして」と、女は又むつくり顔を上げて、「私が急に居らん様に成つたら如何しやアすか。不意に姿を隠したら——」

「そんな事をする積りかい」と、私は吃驚しながら、おづ／＼と相手を見守つた。



自叙傳

私は惹煙の中に坐つたまま、ぼろ／＼と涙を流した。流れる後から、涙は夜風に乾いた。其後から又新しい涙が流れた。女も側に躍んで背中を撫でて居た。「私はいやだ、お前に捨てられるのは可厭だ」と、時々想ひ出したやうに云つた。煙の畔を人が通るたびに、二人は聲を呑んだ。時間は何れ程経つたか分らない。「最う行くが可えかい」と、女の聲が聞えた。私は黙つて居た。何時の間にやら女は其處に居なかつた。それから十三年に成る。私は二たび其女を見ない。此後も恐らく逢ふことはなからう。側には何處に居るやらと思はぬこともない。當時、本當に北海道へ行つたものと諦めたが、今に成つて見りや、あの女の云つたことは皆誠で、つい近所に生きて居る様に思ふこともある。青柳の中の家は、其後行つて見ぬから分らない。

そのうちドストイェフスキイなどの心理的な描寫が氣に入り出した。こゝでも矢張り刺戟の強いのが氣に入つた様である。例へば「罪」と題の主人公ラスコルニコフが、金貸しのお婆さんを殺しに行つて、戸口の鍵の穴から部屋の中を覗き込むところの描寫に、心臓の鼓動が強くなつて、しまひには心臓以外の肉體は消えてなくなつてしまつたやうに感ずるといふやうな句がある。それなどもその刺戟のラスコルニコフの氣持を寫すには實に巧い文章ではあるが同時に刺戟の強いのが私には氣に入つたのである。それから同じ主人公が金貸しを殺した後になつて、その家の前を通ると急にまた自分の犯罪の跡が見舞ひ度くなつた。で、三階か四階かに昇つて行くと、ラスコルニコフの心では、殺された金貸し婆がまだ血塗れになつた儘倒れてゐるやうな氣がしてゐたのに、大工が入つて柱を削つたり、壁を張替へたりしてすつかり元の形がなくなつてゐるのを見て呆氣にとられたやうな顔をしたがら、「あの血はどうしたんだ」といふやうなことを訊くところがある。あれなども非常な

實際の緊張した心理を最も適確に描いたものであらうが、同時にまた極めて刺戟の強い文章が好きなんではせう。恐らくは私の神経が麻痺して鈍になつてゐるからとも言へよう。恐らくはまた私の神経が麻痺しなければ止まない程に鋭敏であるからとも云へよう。どつちでも説明はつく。一方に決めて貰ひ度くない。がその後私もドストイェフスキイのやうな描寫に入り細に互つて、情調を顧みないやうな文章は本當ではないやうな氣がして来た。矢張り小説の文體としてはトルストイあたりが最も本流を代表するやうな中心の文章ではないかといふやうな氣がしてゐる。トルストイに刺戟の強い、官能的な文章は決して少くないが、ダンスンシオのやうにこれでもか／＼と、後から／＼盛りつけられるやうな度はない。サイコロジイを描くと云つても、ドストイェフスキイのやうに、他の事は投棄らかして置いて十頁も二十頁も同じ人の變則な心理を説明すると、つたやうなところは少い。心理描寫と官能描寫が相俟ち相助け、小説の文體としては上乘の模範をなしてゐるやうな氣がする。

好きな文章 (抄)

夜が明けた、山の中の夜が。あゝ、あの夜があの儘明けなかつたら——  
うと／＼と眠つたやうな、眠らないやうな心持がして、薄ら眼を開いたが、相手の女は雪の上に坐つたまま待つて居た。私は女と顔を見合せた。月の光で見た女の顔を二たび朝の光で見た。唇も色を失つて、まるで頬の色と變らない。何うやら身體中の血が心臓にあつまつて、そこで凝結して仕舞つたやうにも思はれる。ぐざと短刀で突刺しても、一滴も血は流れなからう。  
私は覺えず眼を反した。よろ／＼と立上つて、二足三足元来た道を取つて回した。裏山の木立は鈍染んだやうな灰色の中に沈んで、明方の空の色は眞珠貝の裏を見るやうな。  
山の中は一夜の間に三たび空の氣色が變つた。日の暮れる頃から眞黒な雲が空一杯にひろがつて、どつと風が出た。一木一草を止めぬ雲

の山から山へかけて只吹きに吹いた。山は悲鳴を上げた。眞夜半まで暴れつゞけて、風はぱつたりと止んだ。一時に天地が森とした。間もなく月が出た。風に吹き拂はれたのか、空には一片の雲の影さへ見えぬ。山々は月の光に照されて、宛ら大波濤が其儘米つたやうにも思はれた。二人は其時まで洞穴の中に隠れて居たが、月明りに透つた雪を踏んで一足づつ路を辿つた。行先は暗闇の外にない——人生の行手が暗闇であるやうに。二人ながら物を言はぬ。何だかそれが夢の様に思はれた。かうして女を伴つて雪の中を辿ると云ふことが、すべて實在性を失つたやうな、同時に何か象徴めいた深い意味があるやうにも思はれた。  
あゝ、あの暗闇の中へ迷ひ込んだまま、永劫歸つて来なかつたら——左様したら、少くとも鋭曲的效果の感能を満足させるやうな、藝術的な終局を見ることが出来たらう。併し本當の悲劇といふものは、極めて散文的な非藝術的のもので、そんな誤向のキヤタストローフなぞ



「捨てた？ 何處へ。」  
「谷底へ」と、私は機械的に云つた。  
「ふむ、女は何處へ行つた。伴出の女が一人ある筈ぢや。」

此時急にわれに返つて、「女も居る、併し失禮な事のない様にして貰ひたい。相應に身分のあるものだから、二人とも。」  
「それは黙頭いた。」  
「それも承知して居るが、全體何處に居るのか。」

私は思はずあの女を坐らせて置いた方を振り回つた。  
「え、何處に、何方だ。」

黒い樹の蔭に女の袖が見えた。巡査はつかつかと其方へ進む。私は足を釘附けにされたやうに立止まつたまま、只その爲さむ様を見守つた。

何んな問答をしたのか、やがて巡査は女を連れて来た。白い雪の上に立つ黒い樹の幹の間を彼方此方に縫うて——丁度捕手の役人に引立てられて花道を出て来る人質の女でも見るやうに。  
私は詫びるやうな眼附で女の顔を見守つた。女は一寸見返したまゝ、直ぐに眼を反した。

「それでは兎に角町迄引返して貰ひませうか」と、巡査も安心したのか、言葉が尋常に成つた。

「賁下方と一緒には？」  
「え、左様です」と無造作に言つて、最一人の男と共に先に立つて山路を下つた。最早有無を云つた所で仕様がな。

私はわざと二二間後れて、女の側へ寄添ひながら小聲で、「少時休めて居て下さい、ね。今に乾度如何かするから。」

女は其儘返辭をせずに歩行いて居たが、急に想ひ出したやうに黙頭いて見せた。何か外の事を考へて居たのであらう。

私も物を言はなく成つた。  
平な、風に吹き飛ばされた雪の中に、一筋来る道につけた二人の足跡がつかつか。追手は此足跡を履けて来たものらしい。

やがて路傍に白樺の木が一本道に迷つた様に立つて居る下へ来た。巡査は其根のところを杖にした木の枝で掻き廻しながら、「此處で焚火をしたんだな」と呟く。

二人の手紙を焼いたのだ。永久に過去を葬つたのだ——  
巡査はずん／＼行く。

誠だとしたら、今斯うして歩いて居るのが誠だとしたら、氣の迷ひに過ぎないとしたら——  
下りの山路は思ひの外に抄取つた。

間もなく谷間の炭焼小舎へ着く。炭焼小舎の主婦さんは、不時の客來にきよと／＼しながら、自在鐵に掛けた眞黒な茶罌から茶を注いで出した。  
「味噌漬でも上がるかね、何もお茶うけ無えだか。」

小さい土瓶の井に入れた物を持つて来て、書記と巡査との前に備めた。  
私は腹箱を懐へながら片隅にしやがんで居た。

そこから麓まで、炭焼の藪香がつけた小徑がうね／＼とつづく。谷川に雪融の水がちよちよると溢れて、木の枝は下の雪に透して黒い網のやうな林の中には鮮のないためか鳥も啼かぬ。

谷川が太く成るに伴れて、麓の里へ出た。川添ひの堤の上を後先に成つて歩きながら、一體、賁下方は来る道ぢや何處でお休みだつたかと、巡査が訊いた。  
「何處と云つても」と口籠りながら、二人が草鞋を買つて穿いた茶店の様子を覗した。

「あゝ、彼の家でしたか。いや、あの噂アめ、怪しからん奴ぢや。彼れ程訊くのに向見掛けませんぞと、圓太くしを切りやアがつた」と口汚く罵つて、「此後の事も有るから、一番小ツびどく痛しめて遣らなくつちや。」

私は思はず眼を上げた。二人のために隠して——それは二人が店先に捨てて行つた古靴なぞから後難を恐れたためであらうが——思はぬ奇禍を購つた上さんをあはれに思ひながら、口へ出しては何とも云ふことが出来なかつた。

やがてその家の間近に来ると、巡査は一足先に新出して行つた。  
二人は並んで行く。村の書記は少しく離れて前に立つた。私は女の横顔を見い／＼何か云はうとして、幾たびか口の端迄出た言葉を嚙み下した。女は充血した眼を据ゑて、堅く唇を結んだまゝ、物を言はぬ。何を一人で考へて居るのだらう、今朝からの出来事を何んな心持で受取つたらう。それが知りたい。私は身に降りかゝつた出来事よりも——出来事夫自體よりも、それが女に與へた影響の方が氣にかゝつた。何だか水を一杯入れた玻璃の盃を兩手で掲げて、おづ／＼足を運んで居るやうな心持もした。

道々昨宵からの話を仕始めた。昨夜おそく宇都宮の本屋から電話がかゝつて、これ／＼の落人二人を捕へよと云ふ命令を受けた。それから温泉場の宿屋を軒並にしらべて、やつとそれらしい見當が着いたので、たづねたづねて此山の麓の村迄辿り着いた。直ぐに村役場の書記を叩き起して案内を頼んで徹夜抜道を駆け登つた。此人がそれだと云ふこと。  
「昨夜からまんじりともせずに睡いなら」と云つて、巡査は口を噤んだ。

中道跡されて居るとも知らずに居たのか。斯う成つたのも自分一人の所爲の様に思はれて間の惡さの持つて行き所かじい。それだけに又一朝も早く此不面目な状態から女を救ひ出さねば成らぬ。左様思ふ中から、何うやら斯んな事が前にもあつた——女を伴れて逃げて、途中で巡査に捕まつて引かれて行く——こんな事が、これと寸分違はぬ事が、前にも一度有つたやうな氣がして成らぬ。四邊の物の様子から巡査のあの横顔までが、何うも初めて見たやうに思はれぬ。

併しそんな事が有らう筈はない。若しそんな事が有つたとすりや、何方か片方は誰だ。前のが誰だと云ふのなら構はないとしても、後のが

間もなく巡査は背後から駆けて来て、「は、は、噂アめ、弱つて居やアがつた」と笑ひながら村の書記と肩を並べた。  
山から一里の餘、名なしの板橋を渡つて、橋の袂の休茶屋に立寄つた。

これも裁附を穿いた六十餘りの婆さんが土間の處の前にしやがんで居たが、巡査は知合と見えて、  
「やア今日は酷い目に逢つたぞ。婆さま、玉子酒を一本つけてお呉れなと聲を掛けながら、どつかりと縁鼻に腰を下した。

「あゝ、それから」と巡査は土間に立つて居る女の方を振り回つて、「此方の着物の裾が濡れて居る様だから乾かして上げて貰ひたいが——さ、何卒此處へお掛けなさい。」

裏の方から色目の若い女が出て来て、六つ位の男の兒が煩く乳房に纏るのを隠し／＼、婆さんと二人して、女の脱いだ上着の袂や裾を引張合ひながら、焚火で乾かして呉れた。

壁際に倒れて、ちく／＼痛む脇腹を抑へながら、私は裏手とそれを見て居た。あの二人は何と思つて、あゝして他所の女の着物を乾かし居るのだらう、あの二人の眼には、山から連れて居るのだらう、あの二人の濡れしよばれた様子



が、何んなに映るだらうなぞと、そんな事を心に思ひ廻らしながら――

「如何なさいまして」と、女は私の側へ寄添ふやうにして訊ねた。

「なに、最う好いんです。」

「雪あたりぢやないか」と、巡査はちびく紙めて居た盃を下に置いて、早く宿へ着いて湯へお入んなさるが可い。え、婆さま、町まで遣つて貰ふのだが、馬は明いて居ないかな。」

「左様だねえ、男どもは野良へ出て居ねえけんど。」

「うんにや、お前達が曳いて行くさ。」

二人は駄馬に乗せられて其家を出た。時に雪はあつても、里には田圃の水がぬるんで、春の日はぼか／＼と馬の背に當つた。長い袂を眼の上に晒した女の後姿が繪のやうな。羣香を穿いた馬は街道の乾いた土の上をかつば／＼と歩む。

やがて古ぼけた温泉場の町へ這入つた。とある宿の軒下へ馬を曳き込むと、番頭があわてて踏臺を持つて来て、女を抱く様にして下した。

巡査は宿の主人を喚んで、何かひそ／＼と指圖をして居たが、「それぢや私は一度駐在所へ寄つて、直に又何ひますから」と、二人に挨拶

をして、門口から引回した。

二人は女中に伴れられて、二階の間へ通つた。女中は何事も知らぬらしい。靜に座蒲團を出して、それから茶と菓子とを俯めて置いて引下つた。

二人は初めて差向ひに坐つた。

何と云つて可いか、何と言出したものであらうか。私は身體中の神経が刻々に弛緩して行くやうな疲勞を感じながら、只相手の顔を見守つた。女の下唇はびく／＼と戦へた。

「如何か爲ようか、直に。」

「如何でも爲るわ」と、女は待設けて居たやうに膝に取附いて、「直に、これから直に。」

「あの巡査は今電報を打ちに行つたのでせうね。」

「家の者などに遣つて來られちや――私、堪らない。」

「だが、此處でぢたばたして又遣損つちやア」と、私は相手の顔色を見い／＼言葉をついで、縦令迎への人に貴方を渡して置いて、私だけには二たび東京へ歸らうとは思はない。」

女は私の手を解いて起直つた。

「貴方は――最一度家が出られるか。」

「出られます。」

「乾度？」

「え、乾度。」

斯う云ひながら、女は自分で何を云つて居るか知らないやうな風に見えた。互に出来ない事を出来ない事ながら約束して居る様な氣もした。女も白けた容子に氣が附いたのか、急に振返つて、「出られる、乾度出られる」と聲に力を入れたが、又うつとりとして黙つて仕舞つた。

大宮に泊つた夜、あの夜から冷たい白い物が二人の間に立つた。何物かそれは知らぬ。只心中する男女と云ふものはこんなものぢや有るまい。だが、そんな事を云つた所で仕方がない。最早今と成つては無理にも行く處まで行く外はない。

折柄がちや／＼と梯子段に劍尻の觸れる音がして、「や、此室でしたか」と、巡査が障子を明けて這入つて來た。洋袴の腰を新居さうに曲げて坐つたまゝ、彼時から腹痛はどうかぞと尋ねて、「いや、山では驚いた。女が岸からでも落ちて、男一人歸るにも歸られず自殺でもしようとして居るのぢやないかと疑つたのですよ。それだから最初に懷中を調べたのでした」と、言譯らしく云つて、「それぢや奥の座敷を掃除さ

せて置くから、其間に湯へ這入つておいでるが可い。」

二人は手拭を下げて、廊下傳ひに、河原へ突出した湯殿へ降りた。二つある戸を別れ／＼に開けて這入る。硝子窓から日光が湯槽の中へ射し込んで、黒ずんだ板に荒い木目が浮いて見えた。湯殿を周つて雨の様な河瀬の音がざ／＼と絶間なしに聞える。

不意に入口の戸をこつ／＼と叩くものがある。私は湯の中に浸つたまゝ振向いた。三寸程開けた戸の隙間から、女の乳房から上が見えたが、あわてて引込みさうにしながら、「彼方は湯がまるで水の様で、それに垢が一杯浮いてるから堪らないの。」

「ぢや、此方の湯へ被入しやいな。」

「可いんですか、行つても。」

私は只點頭いた。

頭がぐら／＼とした様に思つて眼を開いたが、何時の間にか女は傍に居なかつた。一人湯から上つて濡手拭を持つたまゝ、一足つつ裏梯子を上つて行つた。奥の座敷の前迄來て、何氣なく障子を開けたが、

「や。」

「お。」

神戶が來て座敷に待つて居た。

「大變な事をして呉れたな」と、神戶は私の手をとつたまゝ坐つた。私は何とも云へなかつた。

「併し最う何も云ふまい。貴方も」と、其處に居た女を見返りながら、「私が來た以上は安心して居て下さい。二人の意志は何處迄も立てるから。」

あゝ、二人の意志と云ふやうなものが有らうか。それが有つたなら――

神戶の云ふ所に據れば、前の晩から宇都宮へ來て居たのださうな。「お内からは阿母さんがお出です、阿母さんに來て貰ふことにして置きました。」

女は只黙つて居た。

「ぢや、僕は一寸駐在所の巡査に逢つて打合をして來るから」と、神戶はわざと席を外した。

女は二たび鏡臺に向つて、一度解きかけた髪を解きにかゝつたが、急に振向いて、

「今の間に――何處へも行かないで、此場で。」

「此場で？」

「最う母などに會はない。」

斯う云つて、男の膝に顔を伏せた。死を決した女の男にしなだれかゝる有様程、何とも言様

のないものはない。

女の異議を許さぬ顔色を見ると、私は思はず一握りの髪を掴んで、ぐる／＼と女の頸に捲きつけて見たが、

「髪の方が短くて足りない。」

「切つても可い、此鉄で切つて繼いで可い。」

私は其儘黙つて手に力を入れた。女の顔は見る／＼充血したが、こんな事で人の命が取られようと思へない。

「紐でも可い、何んな紐でも」と、女は仰向けに成つたまゝ云つた。

此時位私は女の言葉の俗惡なのに打たれたことはない。又此時位痛切に自分の遣つて居ることが一種の遣つて見づくだなど感じたこともない――私は冷たい風が通つたやうな心持がして、思はず手を離した。

「私は駄目だ、自分の力ぢや如何することも」と云ひかけて、少時黙つて居たが、「あの人の影が邪魔に成つて、如何することも出来ない、何處迄もあの人の影が着纏つて離れない。」

女は可憐な顔をして見返した。

「あの女の影」と、二たび力を入れて云つた。

「時子さん？」と、いきなり起直つたが、「あんな人何でもない、あんな人に意味はない。」



「併し去年の一月にも貴方は自殺しかけたと云ふぢやないか。其時の事はあの人だけが知つて居るのでせう。」

「其時のシークエンスなら——それを二たびするだけなら、私の地位は詰らない、餘りに意味がない。」

「違ふ、去年とは違ふ。そんな事は十九日から分つて呉れた筈だ——あの私の手紙を讀んで下さつたら。」

「ぢや、怒のためだと云つて下さい、只一言。」

「怒以上——怒なぞと云つては足りない、足りない。」

「併し二人の間が再び遠ざかつた様に思つた。二人は手を組ませたま、何方からも物を言はなかつたが、やゝ有つて、

「未だそんな事を思つておいででしたか」と、女が想ひ出した様に訊く。

「あゝ。」

「一緒に死んで下さい、乾度一緒に。最う二人でなけりや死ねなく成つた。」

「私を愛するために？」

「そ、そんな事を云はれると、不安に成つた、不安に成つた。」

二人の話帯は三時頃迄絶えなかつた。神戸が寝入つてからも、私は一人天井を眺めながら、まじり／＼起きて居た。此上に寝て居る筈の親と子と二人の上も思はれた——夜もすがら話し明かしたらしい二人の上も。

「もし」と呼ぶ者がある。目を上げると、兩の眼が充血して、思ひ入つた様な女の顔が目に附く。二人は直に其室の中へ這入つて障子を閉て切つた。

「昨夜は何んだつた。え、如何でした」と、女の肩に手をかけながら、急ぎ込んで訊いた。

「酷かつた、酷い目に逢つた。徹宵寝かさないで。」

「阿母さんが？」

「何故、何故そんな事を云ふのです。」

「何時迄も女は答へない。廊下に神戸らしい足音がして、がらりと障子を開けたが、

「恰度今阿母さんがお着きでした。三階へ通して置いたから、貴方も後から来て下さい」と言ひかけて、後へ下つた。

「女は黙つて立上つた。二足三足廊下へ出たが、急に又戻り戻つて来た。」

二人は立つたまゝ相抱いた。

「ぢや、最う其目でなけりや會はないから。」

「女は堅くうなづく。あとは一人に成つた。室の中をぐる／＼廻つて居たが、又ぐつたりと真中に坐つた。坐つたかと思ふと、又立上つてぐる／＼と廻つた。何を考へて居たのか、頭の中は白紙を見るやうで、自分にも分らなかつた。何れだけ其間に時間が経つたか、それさへ夢の中の様に一切分らなかつた。」

「たうとう手渡して来た」と、神戸はさも厭倦な様子に云つて這入つて来た。

「左様と、私は只眼を上げた。」

「彼のしつかりした奥さんが、娘の顔を見ると、眼に一杯涙を溜めて居たが——片方は平氣な

「私が悪いんだ。嘘、私のことを——悪い奴だと思つておいでせうね。」

「そんな事はない。憎めば私を憎むのです、私がいけない女だと云ふことは、よく知つて居ますから。」

「斯んな事を云ふ間に、段々顔色が落着いて来た。」

「母は貴方と一緒に御前でも啜べて、よくお話が出来た」と云つて居ましたが、小娘らしく首を傾けて、「私も皆と一緒に御前が喋りたい——只、神戸さんが中間へ這入るが、可厭だけれど。」

「私は女の心持を測りかねた。」

「そんな事を云つても——」

「私は古い鏡の中を覗いて、思はぬ自分の影を見た様にひやりとした。」

「神戸はなほも二人が家出した後の内の人達の狼狽やら、友達達の奔走やらの顔末を咄して、あの阿母さんと云ふ人とも、始終一緒に歩いたが、落着いて、分別のある、あんなのが賢婦人と云ふのだらうなと云つた。新聞は一々手を廻して留めて置いたから其方は安心せよとも云つた。」

「私はそれを聞きながら、それが皆な自分の仕事だとは思はれない位、餘所事の様に聞き做された。併し自分だけは最う別者に成つた、他人は皆な自分を別者にして見て居るのだと云ふ感じは善々と胸に迫つた。神戸も最早元の同じ鍵に繋がれた囚人ではない。」

「其夜、二人が床に就いてから、神戸はあの日或女が自分の家へ訪ねて来る約束があつたのだと言出した。遠方へ嫁に行く前に、最後に一度逢ひに来るのだが、たうとうそれも滅茶々に成つた。これで最う逢はず仕舞ひに成るのだらう。新緑の木の間に、日傘の華やかな紫が白い顔に映つたのを目に見るやうなときみ／＼云つた。私は只黙つて聞いて居た。」

「其日が来る迄逢はぬと云ふこと——そんな事は逆も出来ない。」

「私は二たび女の心持を測りかねた。前と同じ足音が忙しさに戻つて来て、今度は三階へ梯子段を上つて行つた。」

「神戸さんでせう。」

「左様。」

「女は涙手と天井を見詰めて居た。」

「ぢや最うこれで——」

「私は倒れかゝる様にして、女を抱へた。棺に納めた死體を抱く様に——」

「女が去つてからも、私は少時其室の中に坐つて居た。山から歸つた後、女の態度が變つた。何處か人懐こいやうな素振が見える。それが却て何氣味にも思はれるけれど——併し最う何も考へまい、萬事が去つた、二人の間に萬事が去つた。」

「私は裏座敷へ歸つて一人物思ひする女の様にしよんぼり柱に凭れて居た。」

「間もなく神戸が三階から降りて来て、一緒に朝飯の膳に向つた。」

「何うも彼の一緒に来た伯父さんとか何とか云ふのが分らるので、丸で普通の淫奔して逃げた若い男や女を捕まへて云ふ様なことを言ふん

「何を。」



だから、僕達が不愉快に成った。併し世間は彼の伯父さんと同じ眼で見ると云ふことは覺悟しなげや成らんね。

私も仕方なしに笑った。「阿母さんの方は、最初から私どもには一向方角が附かんからと云つて、一切任せて居るんだが、只最う娘の命が如何か成りやしまいかと、それ許り心配してねえ。見て居ても、氣の毒なものさ。」

神戸は此後の事を語つた。東京へ歸つてからは事が面倒だから、凡て此處で解決をつけて行く積りだと云ふので、或處へ電報を打つた。其返事を持つて居るのだといふこと。

午後、其返事の都合で急に王子送引回すことに成つた。私は最う自分の意志で動くことは出来ない。只他人の爲すがまゝに成る外はなかつた。

六人乗りの田舎馬車に乗つて宿を立つた。おぼえのある、同じ道をがた／＼と歸つて行く。あの女、女の母、伯父さんと云ふ老人、神戸と私、それに最一人宇都宮から隨いて来た男、都合六人が乗つて居た。車中では、誰も物を言はぬ。時々老人が大切さうに一本づつ巻煙草を出しては喫つた。

那須野ヶ原に一筋直な街道が続く。原の中では一人一人達はなかつた。

やう／＼小さな片田舎の停車場へ着いた時には、日影も薄かつた。汽車の時間表を見ると、上り列車は未だ二時間も待たなければ成らぬと云ふので、前の休み茶屋の二階へ上つた。

其間女は人目も憚らず私の側へ来て居た。如何云ふつもりか、此次に逢ふ迄のかたみを呉れよと云はれて、考へて見たが何も持つて居らぬ。手垢に擦れた一冊の本をあづけた。

汽車が着く時刻だといふので、吹き出しのアラフトフォームに立つた。日が暮れてから、少しほづつと燃立つた野原の上に、雲氣を含んだ霧雲が被さつて、見る目にも薄ら寒い。

やがて汽車が着く、青森發の列車の屋根には白い雪がうす／＼と積つて居た。一行の外には乗る者も降りる者もなかつた。

天井から下つた洋燈が一ついかに氣の滅入りさうな。それ／＼兩側に旗を掛けたが、葬式の行列でも見る様に物を言はぬ。時々母親といふ人を見かねて、病身らしく大儀さうにしながら、何かと言出して、直に言葉尻から熄えて仕舞つた。

「何うも冷えて参りましたねえ。年寄は仕方が

から、其つもりで。」

他の二人は車外へ出て待つて居た。「早く、早く出て下さい。」車掌に嗚鳴られながら、女はあたふたと降りて行つた。

汽車が出た。間もなく上野へ着く。東京の夜の町は、深けて、ばら／＼と雨が降つて来た。

二

其夜一時頃床に入った。床に入る前、今夜もどうやら眠れない様な氣がして居たが、枕に就くや否やぐすり寝込んで仕舞つた。――そりや、大宮の夜、温泉宿の夜、山の夜、次の温泉宿の夜とつゞけて、殆ど寝なかつた爲もあらうけれど、明くる朝、はつと思つて目が覺めた時には、何とも云はれない可厭な心持がした。如何にも自分と云ふものの眼に似た剛が遺憾なく現はれたやうな氣がして――つまり自分の前に恥ぢた、歌として盡いて居る自分の前に。

私は逆も他人には云はれぬやうな、不快な心持を隠して起上つた。そして朝飯の膳に向つた。それが何處だと云ふことは――昨夜何處の家へ落着いたかと云ふことは、凡て略して置く。

有りませんと、下の湯薬に兩足の爪先を掛けながら私の方を向いて、「貴方もお載せなさいませんか。」

私は其聲の引入れられるやうな調子を何時迄も忘れなかつた。汽車はご／＼と音を立てて闇の中を走る。薄暗い洋燈の下には、皆な顔が意味ありげに黒ずんで、物の形も平常よりは大きく見え、物の音も大きく聞えた。何時の間にか汽車が停つたまゝ、動かぬ様に思はれた――又急に走り出したやうにも。

私は歸るのだらうか、二たび生きて歸るのだらうか。つと立上つたまゝ、一人離れて窓際に来つた。闇を透して視ると見詰めて居たが、汽車の動搖に伴れて、硝子窓に頬を押し附けながら、ぼろ／＼と泣く。

私は泣きたかつたのだ、泣きたたくて泣いたのだ――この凡てを背景にして、何と云ふ不都合な涙であらう。

神戸が背後へ来て、肩に手をかけた。「あの何が行つて造つて呉れと云ふから来たんだ。え、如何したんだい。」

「何でもないよ、最う好いんだ」と、故とらしい

朝飯が済んで、皆な人が座を立つてからも、少時そこに坐つて居た。

昨日の朝から自分達の事が最う新聞の三面種に成つたとは、昨夜歸つた時に聞いた。今朝はそれが一層甚だしく、何の新聞も一段二段、中には一頁近く其記事で埋めたものもある。

私は同じ事なら新聞など見ないで済まさうかとも思つた。が、又思ひ返して其邊に落ち散つて居る一二葉を取上げた。見るものも／＼皆間違つて居た。心持に立入つたのは云ふ迄もない、表面の事實が間違ひだらけであつた。私の名も知らぬ父親が生きて居たり、甚だしいのは私と神戸とがさかさまに成つて、神戸が飛んだ迷惑を享けて居るのもあつた。併し何方かと云へば男よりも女を主として書いてあるだけ左様いふ事情は女の方に餘計有つたらう。

私は案外平氣であつた。一々讀んで仕舞つた時は讀まぬ前よりも心持が平氣であつた。一方には斯んな馬鹿らしい間違ひは永続するものでないと思ふ自信もあつた。又一方には人間は他から此位の程度にしか理解されるものでない、此位な間違ひは日常事實として通用するものだと思ふやうな素直な考へもあつた。併し實を云へば、私の心の中はそれ所ではない、も

笑顔をつくつて俯向いた。私は女からも懼れられた、憫れられるやうな境遇に立つたのだ――「ねえ、君」と、私は少時して顔を上げた。「僕はこの母子の人情が被擧して坐つて居る所を見ると、どうも氣の毒で堪らんがね。今夜王子で泊るなどと云つて、何だか理窟に合はぬ様に思ふから、君から左様云つて直に家へ歸る様に上げて呉れたまへ。僕の事なら如何でも可いんだから。」

これが當前に自己犠牲の心から出たものであらうか――私は只極端に憫れな地位に自分を置いて見たかつたのだ。そして自分の影を憫れんで見たかつたのだ。「だつて、そりやア」と、神戸は聲に力を入れて、「阿母さんが歸りたくないと思ふんだから――子供の意中を十分に糺して、安心の出来るまでは自宅へは歸りたくないと思ふんだ。」私もそれきり黙つて仕舞つた。

王子へ着いたのは、夜の十一時頃でもあらう。どや／＼と乗客の旅客が込み合ふ中に、「最う行きますよ、行きますよ」と、女は私の前に立つて送別した。

「では最う其目送はない」と、私は女の顔をみ上げたまゝ、「勿論手紙なども遣取りしない



つと忙しい事が外にあつた。別に私の心を占領するものが——私には女の事を思ひつゝ、

其朝、白山裏から使の人が来て、神戸へあてた手紙が届いた。披けて見ると、昨夜王子に泊つて、今日神戸と會見する事に成つて居た、彼方の人達は、一晩でもあんな所に留めて置く譯に行かないから、昨夜の間に迎への人を遣つて自宅へ引取つたと云ふ簡単な挨拶であつた。

私は初めて現實の腕をちらと見たやうな心持がした。山の中で巡査に逢つても、私の夢は覺めなかつた。温泉宿でも、汽車の中でも、いゝもすれば、却て現實の見るもの聞くものを夢の中へ引入れようとした。それだけに泣いたり笑つたりしても、別段痛くない。感情は動いても、結果の自覺がない。今朝新聞の記事を見て、案外平氣なのも、それが爲であらう。此手紙を見て、初めて女の周囲と云ふものが眼に映じた。現實の人間と人間との交渉に氣が附いた。急に自分の手で爲たことの結果を見るやうな氣がした。

としたものを、二たび文字に書けと云ふのか。私は自分の疾しい所に指を觸れられたやうな心持がした。

「此男も世の中から奪られたんだから、小説でも書く外に生きる道はなからうと、此家の主人が云はれた。」

誰一人返辭をするものはなかつた。「木の芽田樂が喚びたいな」と、少時して前の男が口を切つた。「菜の花のおひたして冷酒をあふるのよ。私やア疾うから奥さんに約束してあるんだがな。」

「勝手にお遣りなさいよ、私は知らないから。」  
「だつて、それぢや仕方がない。ね、庄司さん、又彼所へでも押掛けて行かうかなう。一遍此處に居る皆なを引張つて行かうぢやないか。」  
「は、は、は、又庄司から一々講釋附きの御馳走に成つて、君の氣焔を聴かされるんぢや仕様がな。」

庄司と呼ばれた何處やら殿上人めいた顔をしたのは、只にや／＼と笑つて居た。  
「そんな事は仕やしませんぞ、え、と一寸庄司の方を振向いたが、「ありやア如何したのか。彼の人からは未だ手紙が来るんか。」  
「彼の人からと云つて、それだけぢや解らない

頼みとする外はない。女一人を頼みとして、二たび空想の世界に後戻りする外はない。女は如何して居るだらう——何んな夜が明けたらう。

昨夜神戸は一度自宅へ引取つて、午過ぎる頃又遣つて来た。此手紙を讀んだ時には自分が此事件について餘計な骨を折らされたと云ふ自覺があるだけ、一々自分の指圖を待たなければ何事も爲ないものと思つて居たので、ひどく出抜かれたやうな心持がしたらしい。併し自分が負けたとは、滅多に口へ出さぬ質なので、「ぢや、僕は先方へ一度挨拶に行つて来るから」と出て行つたが、其日は其儘歸らなかつた。

私は永い日を一日片隅に坐つて居た。一週に一度木曜日に其家へ集る友達の日暮前からぞろ／＼遣つて来た。茶の間の火鉢を圍んで雑談に耽りながら、殆ど何事も起らなかつた。私に私を其仲間へ入れて呉れた。中にはそれが不自然だと思つたのか、

「今度よりは驚かされたぞ。私にや迷も出来な事を遣つてのけた。一昨日それと聞いてから私は一日中興奮して居た。そんなに小さく成つて居るなよ。頭を上げて歩け。私なら昂然として街の中を闊歩して居るんだがな」と、一人の女が云はれた。

「あれか、彼女は最う居ない。去年の暮に田舎へ嫁に行きましたね。」

「左様か、能く讀めたもんだな」と又遠い所を見る様な眼附をしたが、「私やア彼の人のことを思ふと可憐で仕様がな。新しい障子の側で、毎日針仕事をして、針仕事を止めては手紙を書き、手紙を書き終つては又針仕事をし居る女の様な氣がして成らんが——一度も逢つたことはないけれど。」

「未だ有つたでせう、京都の人とやらが、彼の女からは来るんでせう。」  
「どうも皆ながら左様云はれちやア」と、頭を掻いて居たが、「え、来ますとも、毎日の様に來ますよ。」  
「侯爵家の御君とか云ふぢやありませんか。」  
「ところが今年二十七の出戻りだと云ふんだから——」

「だつて、そんな人から附文をされるんだから、庄司さんも偉いわ。」  
「え、餘程變ですよ。」

寄せた男が力味回つて云つた。

「そんな事を言ふな、可憐に」と、小早川と云ふのが留めた。

「馬鹿云ふな、私や本氣で云つて居るんだぜ。誰だつてあんな女に出逢つたらあんな事を遣つたかも知れない。あの心持が私には解るんだ」と、何か旨い比喩を考へ出さうとする様に、眼をして居たが、「併し最初から此男は死にやしないと思つた。如何しても死ねる男ぢやない。それだから偉いんだ。あれきり死ぬ様ぢや下らない。」

私は黙つてそれを聞いて居た。自分の遣つて来た事が只遣つて見づくだと云はれたとて、なに辯解の辭があらう。いよ／＼露木庵に臨んだ其最後の瞬間迄は自分でも分らないぢやないか。私は矢張りボール紙を貼つて糊粉を塗つた岩に腰掛けて、白紙を刺した針を降らせた。でも間に合つた人間かも知れない。併し他人には云ひたくない、他人の前では白狀したくない。

「新聞なぞ氣にするな、新聞なぞ何と云はれても構はない。書けよ、書けよ、自分で書けよ」と、前の男が云つた。  
何を書けと云ふのか、一たび血を以て寫らう

斯んな話が煙草の煙と一所に渦を巻いた。そして散會したのは夜の十二時を過ぎる頃であつた。

私は一人暗がりの寢床の上に坐つた。眼を開いたまゝ、暗闇を見詰めて居ると、淋しさが込み上げて来るやうで堪らない。他人が自分の顔を見せへすれば、「お前は本當に死ぬ氣だつたのか」と、うそ／＼笑ひながら云はれるやうな氣がして成らぬ。そんな事が——心から死ぬ氣であつたなぞと云ふことが、死ぬまでは、死體と成つて歸らぬ迄は如何して云はれうぞ。

併し何も思ふまい。何も思ふ必要はない——あの女さへあれば、あの女さへ自分を離れなければ、左様思ふ傍から——

あの女は自殺しやしないからうか。始終氣に掛つて始終抑へ／＼して居ることが不圖心に泛んだ。私の手を離れてからは——如何するか分らない、何んな事を仕出來すか分らない。

私はそれを目の前に見ながら如何することも出来ない様な心持がした。  
併し一人で死ぬ——あの女にそんな權利はない、そんな事をして私を窮地に陥入れる權利はない。



私は心の中に幾度も叫んだ。水の底に沈んで、其儘が寒る様に思つたら眼が醒めた。天井の明り窓はうつすら白んで居た。私は寢床の上で起直つた。女が死んだら——夜の間に死んで仕舞はれたら——私は一人後に残された自分の死ねにも死なれず生きるにも生きれぬ不見目な有様を想像して、思はず身震ひした。聲を上げて、女の名を喚びたい様な心持もした。何時迄左様して居たか知らぬ。やがて湯殿へ下りて含嗽してから茶の間へ出て来ると、

「おい、彼方の女が何か云つてるよ」と、一葉の新聞紙を渡された。

「へえ」と言つて、私はそれを受取つた。「禪學合議の告白」と云ふ標題が煮入る様に目につく。初め十行程は何が書いてあるか読みは讀んでも頭に殘らなかつた。やつと、

氏は「娘が歸つて来ましたから一切の事實を當人から聞いて下さい」とて——子を呼ばれしに、徐に襖を明けて現はれし美人こそ云々。

此邊りから心を落着けて讀み出した。社員の間に応じて語るやう、「私が家出しましたのは全く自分の精神を貫く爲です。

先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。私は自分の主義を曲げぬ爲に死ぬのは厭ひません。若し先方が私を殺せば刑事上の罪人と成つて所刑されるは當然ですが、私は被が所刑される位では満足しません。私は命を棄てても構ひませんから、彼の死ぬのを見届けたいと思つて家出したのです。二十一日は終列車で大宮に向ひ、翌二十二日朝朝車で藤原に向ひ、其夜升田屋に一泊しました。情の爲に逃げたのではありませんから、宿泊中は袴も取らず夜もねむりませんでした。二十三日の朝朝車を雇ひ、一甲足らずも行つて、八幡神社の前で降り、尾花峠の山中で死ぬ覺悟で雪を踏んで山深く分入る途中警官に押へられました」と、どうも要領を得ぬことを語りて立去りたり云々。

次にそれに就て父なる人の意見と云ふものと女が家出する前に、友人木下時子の許へ遺書と一緒に預けて行つたといふ、私へ宛てて書いた手紙で、其儘出さなかつたものらしいのが載せてあつた。

別の新聞を見ると、矢張女の家を訪ねた記事載せて、それには彼の目女が自宅に殘して出

た云ふ遺書が寫眞版に成つて出た居た。いは我生涯のシステムを貫徹す、我がC.M.S.によつて斃れしなり、他人の犯す所にあらず。

三月二十一日夜

又時子に宛てたものは、

拜啓、我が最後の筆蹟に候。學校に行きませんと申せしは實は死すとの事に候。願はくは君と共ならざるを許せ。君は知り給ふべし、余は決して戀のため人の爲に死するものにあらず。自己を買かんが爲なり。自己のシステムを全うせんが爲なり。孤獨の旅路なり。天下余を知るものは君一人なり。余が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば。

四十一年三月二十一日

木下時子様

私は何気ない體に、そつと新聞を下に置いた。ばた／＼と自分の周囲の城郭が壊れて行くやうな、壊れて行く音を聞いて居る様な気がした。

此遺書——私はこれを否定しようとは思はない。

そして女の純潔と云ふこと許り氣にされる云ふのも、親の身として、是位無理からぬこととあらうか。

併しあの女が兩親と同じ様な態度で、宿屋に泊つても、夜も寢ぬの持も取らぬのと、記者に向つて云つて居るのを見た時は、私は殆ど大空から引摺下されたやうな、意外の感に打たれた。

それ所ぢや無かつたのではないか。

大宮の夜、女はそんな事を考へて居たのか、それで袴を脱がなかつたのか——馬鹿な。

あの夜、二人の中に白いものが立つた様に思つたのも、そんな心持で對して居られたからであらう。次の日も、其次の日も、何處やら他人に許さぬやうな面持が見えたのも——

私はそんな警戒の念を抱かれながら、女と一緒に歩いて居たのであらうか。

それで一所に死ぬか?

二人が山の中で明かした一夜も、其實そんな滑稽なものであつたのか——あの思ひ上つた夜も。

私は生れて初めて其戲曲的效果を味ふ暇のない感情と云ふものを體驗した。私は餘りに

先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。私は自分の主義を曲げぬ爲に死ぬのは厭ひません。若し先方が私を殺せば刑事上の罪人と成つて所刑されるは當然ですが、私は被が所刑される位では満足しません。私は命を棄てても構ひませんから、彼の死ぬのを見届けたいと思つて家出したのです。二十一日は終列車で大宮に向ひ、翌二十二日朝朝車で藤原に向ひ、其夜升田屋に一泊しました。情の爲に逃げたのではありませんから、宿泊中は袴も取らず夜もねむりませんでした。二十三日の朝朝車を雇ひ、一甲足らずも行つて、八幡神社の前で降り、尾花峠の山中で死ぬ覺悟で雪を踏んで山深く分入る途中警官に押へられました」と、どうも要領を得ぬことを語りて立去りたり云々。

次にそれに就て父なる人の意見と云ふものと女が家出する前に、友人木下時子の許へ遺書と一緒に預けて行つたといふ、私へ宛てて書いた手紙で、其儘出さなかつたものらしいのが載せてあつた。

別の新聞を見ると、矢張女の家を訪ねた記事載せて、それには彼の目女が自宅に殘して出

た云ふ遺書が寫眞版に成つて出た居た。いは我生涯のシステムを貫徹す、我がC.M.S.によつて斃れしなり、他人の犯す所にあらず。

三月二十一日夜

又時子に宛てたものは、

拜啓、我が最後の筆蹟に候。學校に行きませんと申せしは實は死すとの事に候。願はくは君と共ならざるを許せ。君は知り給ふべし、余は決して戀のため人の爲に死するものにあらず。自己を買かんが爲なり。自己のシステムを全うせんが爲なり。孤獨の旅路なり。天下余を知るものは君一人なり。余が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば。

四十一年三月二十一日

木下時子様

私は何気ない體に、そつと新聞を下に置いた。ばた／＼と自分の周囲の城郭が壊れて行くやうな、壊れて行く音を聞いて居る様な気がした。

此遺書——私はこれを否定しようとは思はない。

そして女の純潔と云ふこと許り氣にされる云ふのも、親の身として、是位無理からぬこととあらうか。

併しあの女が兩親と同じ様な態度で、宿屋に泊つても、夜も寢ぬの持も取らぬのと、記者に向つて云つて居るのを見た時は、私は殆ど大空から引摺下されたやうな、意外の感に打たれた。

それ所ぢや無かつたのではないか。

大宮の夜、女はそんな事を考へて居たのか、それで袴を脱がなかつたのか——馬鹿な。

あの夜、二人の中に白いものが立つた様に思つたのも、そんな心持で對して居られたからであらう。次の日も、其次の日も、何處やら他人に許さぬやうな面持が見えたのも——

私はそんな警戒の念を抱かれながら、女と一緒に歩いて居たのであらうか。

それで一所に死ぬか?

二人が山の中で明かした一夜も、其實そんな滑稽なものであつたのか——あの思ひ上つた夜も。

私は生れて初めて其戲曲的效果を味ふ暇のない感情と云ふものを體驗した。私は餘りに



人生を蔑にした。此人生を只詩として見て居た、劇として味つて居た。何んな場合にもしみじみと感情を身に占めることが出来ないで、只其感情が齎す戯曲的效果を味つて居た。而して終に人生から呪はれた、手痛い復讐を受け

成程、私は今度の事でも只詩を作つて居たのかも知れぬ、空想を描いて居たのかも知れぬ。併し其詩の中へ、空想の中へ身自ら没入し去らうとしたことだけは——他人の前とは云はぬ——自分自身の前でも云ふことを憚らない。女を犠牲にする前に、自分を犠牲にしようとした、只それだけは——併しそんな犠牲が他人の前で云へようか、世間で通用しようか。私は口を噤む外はない。

世間の前に——新聞記者の前に、立派に言ひ聞きの出来る様な口實を持つて居る女は幸ひであらう。

併しあの女が健在だと云ふことは此記事で分つた。毎朝新聞を見るたびに、若しやあの女が死んだと云ふ報でも出て居はせぬかと、思はず手が震へたものだが、最うそんな心配はいらぬらしい。

と云つても分らんが、鬼に角僕の見た所だけを喋りて置かうよ。」  
「一日下の様ぢや、僕からは如何することも出来ない。何分好い様に計つて呉れたまへ。」  
昨日神戸が先方の家へ行つた結果に就ては、別に何とも云はなかつた。彼時から和強樂堂へ廻つて演説をしたのださうな。豫て講演の約束があつたのだが、急に演説を男女二人の爲に辯ずると取代へたと云ふこと。

神戸は私を誘ひ出して、月夜の江戸川端を歩きながら、君を保護する事は君自身よりも僕の方が好く知つて居る。昨日は二三の先輩や友人も来て居たが、あの人は少しも君の價値を認めて居るのではない。こんな事をするのも、單に僕が君に對する友情だと思つて居るらしい。それで演説が済むと、或人はこんな際に能くも彼の二人の爲に辯ずる勇氣が有つたもんだと云つて憫れて居たよ。何も君方の爲ではない。

衆が笑つた時には——僕が此演説を掲げて壇上に立つと、衆ははくすく笑つたよ——其時は他人の事ぢやない、僕の利害だと考へ出した。」  
少時黙つて歩を移したが、「何故笑ふか、君等も近代人の片破れぢやないか。此問題は取てあ

出した。  
「此人が私に？」  
女中は點頭いた。  
名刺の表は今朝女の談話を載せた同じ新聞の記者で何某とあつた。

「ふむ」と、主人の人もそれを見て居たが、「先方は先方で自分の立場を齎る様な態度に成つたのだから、君も何か云ふことがあるなら會ふのも可い。又精解をしない氣なら會はなくても可い。併し會ふにしても、元來君の方から先方の家へ對して——女に對してぢやないよ——不名誉と損害を興へて居るのだから、無法な事を云つちやア成らん。」

「いえ、精解なぞしません。」  
「ふむ。」  
「併し一會つて見ようかと——」  
會ふなら會つても可い。」

女中に持たせて置いた記者を別室に招じた。縮輪の兵兒帯に銀時計の金鎖を絡ませたのが目に着く。何か言出される迄私は胸の中がざわついた。  
記者は型の如く今度の様な事を仕出来した動機を語れと云つた。

「それは申しかねます」と云つたが、一總て世間の二人の問題ではない、君等自身の問題だぞと嗷鳴つて遣つた。聴衆も、終に燃を正して聴いたよ。」

私は只黙々として隨いて行つた。何とか云はなけりや済まぬと思ひながら、何とも云ふことが出来なかつた。それを焦躁しと思つたのか、神戸は又、「勿論君は君で信ずる所があらう。又自分さへ信じて居ればそれで可いのかも知らんが、世間の人と云ふものはそんなものぢやない。」

「僕だつて何も——と口を挟んだ。  
「いや左様だよ、確かに左様だ。君に比べると、未だ女の方が餘程世間的だ。現に世間的にも自ら齎る手段を取つて居るぢやないか。」  
あゝ女が、あの女が——あの女さへ自分を信じて居て呉れたら——私はそつと側を向いた。  
「昨日は狭山にも逢つたが、小島君も結婚する氣なら、外に仕様もあつたらうに、愚な事をしたものですなと云つて居たよ。左様ぢやなからうと云つて精解はして置いたが、世間の人は皆左様思つて居るんだよ。」  
「併し——と云ひかけて、私は言葉を途切らしたが、併し人間が途方もない馬鹿げた事をした

の評と云ふものは本人の意見を参考にしない、又それが當然でせう。既に世間から非られた私が今更自分を辯護する必要もないが、妄りに私の心事に迄立入つて解釋をせられるのは迷惑でないことありません。今朝貴方の社の新聞に出た記事も見ましたが、實際あれ位の記事は云ひかねない婦人です。恐らくあれ以上の事も申させよう。併し自分の爲た事について世間へ精解の必要が有るやうな、そんな下らぬ女でない」と云ふことは前迄信じて居ります」と述べた。

此話は次の日の新聞に出た。  
私は何故新聞記者などに會つて、こんな話をしたのか。只記者を通じてあの女に物が言ひたかつた、其外に物を言ふ道がなかつた。  
併し新聞の記事と云ふものが何れだけ眞實を傳へて居るものだらう。かうして他人の手に取られて、互にじり／＼と遠ざかつて行くかと思へば思ふだけでも堪らない。

其夜神戸が遣つて来た。用向は、此頃中神戸がいろ／＼介走した爲に、却て思ひも寄らぬ誤解を受けて迷惑をするから、一應此方からも實情を新聞社に喋りて載せさせよう」と云ふので、  
「君は僕に向つてさへ何も云はないから、實情

時には、其動機は大抵疾しくないものだと思ふこと位、彼の人なら解つて呉れさうな——」  
「左様さ。尙且小説家として見て居るのぢやない、世間の人として見て居るのだからな。まあ、そんな事は可いさ。他人の問題ぢやない、君の問題だ。君自身の心掛について云つて居るのだ。」

二人は少時無言の歩歩いて居たが、「昨日君はあの女に會つたのか」と、私は思ひ切つて訊ねた。  
「うむ」と云つて、少時経つてから、「随分自尊心の強い女だね。何時逢つても鼻ツ張が強いばかりで、弱味を見せたことがない。あゝいふ女としても、僕はどうもそれを好まんがね。」

私は黙つて考へに沈んだ。  
「どうも始終一貫して鼻先が荒いと神戸は重ねて云つた。或時はケプリナスに泣いて喚いて、平凡な女に成つて呉れなくつちや、僕達には些と困るね。」  
あの女が泣く——あの頭の無い女が、あの傲慢な、人を遣寄せない女が。山から歸つた後、あの女は何んなに成つて居ることだらう。私はあの女の緊張した、齒を咬ひしつた顔を見るやうな氣がした。



併し私はあの女の泣くのを見たのだ、あの女の眼に涙を見たことがある。

何で泣いたのか。何が私の前であの涙を釣出したのか。想ぢやない、勿論だとは思はぬ。併し両親も知らぬ、友達も知らぬ、誰も知らぬあの女の秘密に自分一人が觸れたと思はなければ、如何して今度の様な事が出来ようぞ。又自分一人が觸れたと思つたら、貴方はそれぢや一人で寂しい道を行きなさい、私は私で此方の道を行くと、情なく袂が分たれようぞ。

それが誰なのか。左様思つたのが、私一人勝手に書いた夢なのか、幻影に過ぎなかつたのか。幻影でも可い。あの虚幻影の中に消えて仕舞ふことが出来たら、二たび戻つて来なかつたら。

女は何を云ふぞ。

「全く自分の精神を貫く爲です。先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。

私は自分の精神を枉げぬ爲に死ぬ——」

誰だ。あの女の云ふことは誰だ。あの自尊心の強い女が誰を云ふ——そんな事が考へられようか。

成程、あんな風でおめく〜と生きて戻つたら、あの女の自尊心は傷けられたかも知れぬ。併し

仕向様一つで、コンスタンシイを失はぬ女が何處にあらう。良人の方で殘酷な手段を取つて、段々妻のコンスタンシイを失はせるのは、斯んな場合に妻を自殺せしめるよりも卑劣だよ。自分の非を遂ぐる爲に——

私は何時の間にか神戶の腕を握つて居た。神戶も涙を流して泣いた。

「僕の計だつて、明日からでも妻の貞操を失はせる位譯はない。併に僕の仕向様一つで持つて居るんだ。それ程に女と云ふものは弱いものだ。僕だつて、何もそれに依つて得る所はない。只弱者を勞つて遣つたと云ふ愉快さ、それだけで満足して居るんだよ。」

二人は涙を順にたれたまま、當度もなく暗がりを見詰めて居た。何時迄も、時も所も忘れなやうに——

蒼空には三つ星も傾いた。

「最う歸らうか。」

斯う云つて、私は襟を掻き合せた。涙も風に乾いて居た。

「あ、歸らうね。」

神戶も立上つた。

やがて私は江戸川端を二人とぼく〜と戻つて行つた。一時に感情が激した後とて、頭の中

し其創傷は、新聞記者の前へ出て、あの周囲の人達が、

「男に迫られて止むを得ず家を出した」と云ふやうな卑近な言葉に裏書をして、それで思められる様なものであらうか。

偽善者——あの女の云ふことは宛然偽善者の言葉だ。何んな平俗な解釋でも下せる言葉だ。あの女を偽善者にする位なら、寧ろ病人にせよ、氣狂にせよ。騙して偽善者ぢやない。

あの遺書が眞實に弱者の強がりなら、弱者が商を咬ひしはつて勝利を叫んで居るものなら——

あ、幻影は破られた、無残にも破られた。併し幻影でも可い。私に取つては動かし難い事實だ、一生を賭した事實だ。今は只あの幻影に肉を與へよう、血を與へよう。そして客觀的にも動かし難い事實としよう。それ迄は私は死ぬにも死なれない。

こんな時、人間は藝術の力に依頼する外はない。藝術に依つて幻影に客觀性を與へる——此外に道はない。私は不圖、忠臣蔵の大星由良之助が大石内藏助よりもより多く實在性を持つた人間の様に思つた。永遠に生命のある人間の様に思つた。愚癡に成つては、こんな事迄本當に

は大雨で洗ひ流した様に澄んで、目の前にありありと自分の姿を見るやうな——死んでから自分の一生を振り返つて見る様にも思はれた。雨上りの霧は水の面を包んで、前後に人の影も見えぬ。

私は許し難い人間だ。

世にも不人情な、冷酷な、而も自分では知らずに——

私は妻を捨てた。「思ひに捨てることが出来ないで、先方から愛想を盡かすやうにも仕向けた。併し其様にすればする程、私は一しほ妻を愛した、一日も忘れる隙はなかつた。此心持が解つて呉れたら——私は妻を捨てた、けれど妻が私を捨てようとは思はない。

こんな主我的な考へがあらうか、又こんな心持に同情して呉れる女があらうか。

併し今夜は餘りに良心を弄んだ。今の様な境遇にある私の心を傷けて血を流させる位容易いことはあるまい。何を云うても返らぬ今と成つては、行き掛けた道を行く外はない。私は行く處迄行く。

只世間的に——私は世間的に何れだけ他人に負うて居ることであらう。

不圖今自分の歸つて行く家と思つた。山から

考へた。

藝術の力。自分の腕の力。私は腕が萎えるやうな心持がした。

併しこれを書くと云ふことは、即ち二人の關係に終局を置くことではないか。それを覺悟しなければ、何も出来ない。一字も下すことは出来ない。

私は牛込見附の橋の欄干に突伏したまま、何時迄も両手で顔を抑へて居た。

「君は國許へ何とか云つて遣つたのか」と、神戶が不意に訊ねた。

私は思はず顔を上上げた。

「いや、未だ別に。」

「先方からも未だ何とも云つて寄越さんのだね。」

「さ——僕の行先が分らんのかも知れんが。」

「左様か」と云つたまま、神戶は暖手と漆端を周る電車の灯を見詰めて居た。漆の中の水は只平に動いた。

「併し先方の人ぢや、最う何とも云つて寄越さぬ積りかも知れんよ。」

私は黙つて下を俯向いた。

「隅江さんは最う君に對するコンスタンシイを失つたかも知れない。僕は左様思ふ。併し男の

四月に入つて、大雪が降つた。電話線がずたずたに切れて、一時に市内の交通が止まつた。工夫が歴死したり、立場が凍えて死んだのもある。只春の雪は解けるにも早かつた。雪が解けた



後には、櫻の花が着るめて花の幽霊の様に見えた。八重などは殊に汚かつた。三春の行樂が始まらうとして居た時だけ、都は全體に寒装したやうにも思はれた。

二週間後、私は築土の寺へ引移つた。本堂の裏手にあたる隅の六疊で、窓を明けると直に墓場が見えた。墓場の向うは崖に成つて、谷を越えて、一帯に小日向臺が見渡された。

朝は早く窓の障子に日が當つたが、申刻下りには部屋の中が薄暗く成つた。窓の間に肘をついて、夕日の斜す向ひ側の高臺を眺めて居ると、大日坂をのぼり下りする黒い人影が、他界の消息でも見て居るやうに眼に映つた。

私は本當に最う他界の人ぢやないのか——此世界と没交渉な。

こんな時鐘るものがあるれば随つて見たい。神佛に縋れない身なら切めて人間にでも——あ、此情の定住が欲しい。

本堂で八重しく鐘が鳴出した。人の神經を苛立たせるやうな、病人なら直に氣狂にでも成りさうな鐘の音がつゞく。其後で長たらしい時むさうな讀經が始まつた。私はその呻くやうな、泣くやうな讀經の聲を聞き、臺の上に倒れたまゝ、寢入つて仕舞ふこともあつた。

其鐘の音を聞くのが可厭さに、夕暮から好く戸外へ出た。街を歩くと、そんな管はないと思ひながら、人から顔を見られる様な氣がした。買物をするにも、停車場の改札口で驛犬に電車の切符を渡すにも、何となく顔が背向けられた。

或時神戶に連れられて、初めて人の家を訪ねた。其處に居合せた知人は昔心置なく待遇つて呉れた。併し心置なく待遇ふ中にも、つとめて左様して呉れるやうな、年下の者まで、社會上、處世上の知恩の優つて居るものが劣つて居るものを容れて呉れるやうな風に見えた。私は出獄人が初めて世の中へ出た時の様な思ひをした。それからと云ふもの、私は人の家を訪ねることが億劫に成つた。

神戶に對してさへ、私は此心持が失せなかつた。私は最う——それが當前の事でもあらうが——自分と同じ位置に立つて話をする者が一人もない。今度の様な事が有つたら、神戶とは愈近づくべくして却て遠ざかつた。神戶はそれを怪しからぬ様に思つたであらう。私は如何することも出来なかつた。神戶は併し根氣よく私を容れて呉れようとした。或時などはこんな事迄云つた。

「僕は、君から見たら、或は僕が君の爲に盡したことを大きく云ひ、君から受けた損害を誇大して云ふやうに思はれるかも知れんが、これは、先方に自分が感じて居ると同様にイムプレッションを與へたいと思ふからで、左様しなければ、何うも徹底した様に思はれんのだ。僕の性分だから仕方がない。」

私は神戶として道理な言分だと思つて聞いた。併し心持はそぐはなかつた。其頃、新聞に「天神藝者殺し未遂」と云ふ標題で、三日許りついでに出た。何でも相手の男と云ふのは萬木義手義足製作所の職人で、戦後好い工手間の取れる所から、つい茶屋酒の味を覚えて、近所のつまらぬ藝者に引かゝつた。たうとう金子に請つて、不義理な借財も構む。お定まりの心中といふ段取に成つて、興染の袴袴の二階にしつぱりと談れの盃を酌んだが、いよいよ其場に臨んで、急に女の方で變心した。何とか言ひ留めて階下へ下りようとするのを、何となく悟つた男はさきさきと梯子段の上から斬りつけた。手許が狂つて僅に女の小腹を擦つただけ、あれ々と云ふので、一時に家中の騒動と成つた。男は警察へ突出され、検事局へ送られて裁判に成つた。證人として喚出された女

は負傷も癒つたと見え、酒徒々々として、一々男の口邊を否認した。元よりそんな深い感傷でもなければ、夫婦約言などは勿論ない、心中しようなどと云ふ意志は毛頭ないと云ふので、これを聞いた男は極木につかまつたまゝ口惜し泣きに泣いたが、其儘有守に引かれて行つた。女の云ふことが本當か、それとも主婦にでも入習慧されたか、其處は能く解らないかと書添へてあつた。

これを讀んだ時、私は不快な心持のしたことはなかつた。此記事を讀んで自分の身に思ひ當るやうなもの、私の外には無かつたかも知れない。併し私自身が此男のステューピッドな地位に同情したと云ふだけでも堪へられぬではないか。

あゝ、何んな人間にもそれな、悲劇はある、悲劇はある。其悲劇は富人の思つて居る程表面目なものではないかも知れぬが、又側から見ると程滑稽なものもあるまい。富人の心持に成つて人情を取扱ふものは藝術の外にない。傍觀者が嘲笑したり、若しくは冷眼に見過す間に、ひとり藝術のみは當事者と共に泣いたり笑つたりして呉れるものである。私は書く、何處迄も書くのだ。

かう思ふ傍から、私は腕が萎える様に思つた。そして、二日経つても三日経つても、乃至一週間経つても何も書かなかつた、又書かうともしなかつた。

あの女の情報については、殆ど聞くことが出来なかつた。只一度或家で元あの女と一談に金葉會などへも来て居た女に逢つた。其女が歸つて行つた後で、

「今の君、例の人に逢つて来たさうだよ」と、主人が云つた。  
「へえ、私は只左様言つたが、故とらしく見えるが可厭さに、如何して居るのでせうね」と附加へた。  
「左様さ、と、にや／＼笑つて居たが、何うも君にはアンフェボラブルな報告だね。あんな如くい人はないとか、嫉妬心が強いとか云つて居るさうだよ。」  
私は返辭の仕様もなかつた。  
「誰にでも言ふ様子だね。些ともしよげた所がないつて、驚いて居たよ。」  
「左様でせう。」  
私は其處を辭して歸る途すがら、矢張あの女のことを考へて居た。あの女が假勢を張つて、他人に聴した所を見せない、其心持は分つて

居る。併し何の爲に今尙自分を追究するのだから。私は何日ぞやあの女に向つて、何うも私はジェラスだ、貴方に對して最う嫉妬の念を持つ様になつた、これは思つて居る、戀でなけりや斯んな心持に成る筈はない、かう云つたのを其儘同して居る。此外あの遺書の文句を見て、友達に預けたと云ふ手紙を見ても、あの女の云ふことは皆私の云つたことだ。私の云つた言葉を其儘使つて、私の論理で私を攻撃して居る。そこが女らしくもある。

併しあの女は何處迄も一人であつたことにして置きたい。あの女以外の他の要因から影響を蒙つたといふことは——例へば神學のやうな——逆も堪へられない。いや、私自身の影響を受けたと云ふことも、餘り有難くはない。

あの女は眞實一人であつたのだ。一人であの女の頭の中に暴れ狂ふ或物と闘つて居るのだ。他人はそれを見て居ながら如何して遣ふことも言ふことも出来ない。あの女に取つては、自分の物狂ほしい情熱を征服すること夫自體が勝利だと考へる外はない。他人から見れば、それが無意義であつても、ナッシングでも、それに意味があると考へる外に生きる道は



ない。

成程これを禁慾主義だと云へば、世の中に禁慾主義位俗悪な勢持は無からう。彼等は何物をも意欲せずに居ることが出来ないから、切めてはナッシングを意欲しようとして居るのだ。彼等は他人に對して暴虐を振ふ譯に行かないから、切めては自己に對して暴虐を振はうとするのだ。何でこんなものが彼の女の本性ぢやらう。そんなものに捕はれて居る女ぢやない。併し——若し生れながら其外に生きる道のない女なら、それを手頼る外に生きて居られないやうな身であつたら——勿論外來の勢力なぞあの女に對して何の力もない、併し自分で自分が當に成らぬやうな身であつたら——そして今日迄とにかく一切の誘惑に打克ち、一切の欲望を征服することによつて、辛うじて危い生涯をつゞけて来たものだとしたら——何と云ふ凄じい、壯烈な一生であらうぞ。

あゝ、あの女には一切が許される。歸京後、あの女が昇奮して、いよ／＼爲我的に、復讐的に成つたのも無理はない。あの悪魔のやうな冷やかな物笑も——それにしても、偽善者か、男溺しか、抑又物狂ほしい情熱に悩まされながら生きて居る女なのか。恐らくはその皆なであらう。私はあの女の上に戯曲を書いた。凡て男の戀は皆女のの上に戯曲を書くものだ。私も其例に洩れなかつた。紙の上に書くべきものを生きた人間の上に書いた。あの女は又私の豫期した通りに物を言ひ、豫期した通りに泣いたり笑つたりして呉れた。私の豫期しない様なことは一つも言はなかつた、又言ふことが出来なかつた。あの女は私の影に過ぎない。私は自分の影を抱いて、山迄死に行つた。

只日の前の此事實を如何したら可からう。併し——あの女にいさ／＼かなりとも私に對する愛情と云ふやうなものが残つて居ようとは思はぬ、そんなものが有らうとは思はれぬ。併し未だ一幕あるべき女だ。これ限りに成る女ぢやない。私はこんな事迄考へた。それも、何時迄かあの儘あゝして居たら、如何變つて行くことであらう。一度、只一度で可いから逢ひたい、逢つてあの女の本心が糺した。

を私の手に渡した。

私は直に其筆蹟に眼を留めた。

「中を見ても可いかい。」

「あゝ」

先生は私の友達に成つて遣ると仰有つて下さつたから、それにお頼り申してこんな事を申しますが、これは私が今後家出の際の口實なども有之候ま、此事は決して母の耳には御入れ下されまじく候。

私は故意に差上げました。あれは小島様に私を心から軽薄な者と思はせて、存分に冷笑して頂きたかつたからの所業でした。ところが駄目でした。いかに其邊中大論を言つて見ても、自分を欺くことは全然失敗にをはりました。最う今は筆が盡きて居ます。小島様に對して何の興味も持つて居ませんでした頃、私が唯一の興味は自分の死、死の瞬間の思ひでした。そして必ず一人で死を決行し得るものと信じて居ました。所が、今日の境遇に置かれ、今日の心状態と成りては、今如何しても獨りで處決することが出来なく成りました。幾度か企てても見られけれども以前の様なクリアーナ頭で、靜かに死を味つて死ぬことは出来さうもない。死ぬにしても實にこれでは遺憾で成らぬ。

のならば、今迄の女間的關係を全然忘れて、私を捨てて呉れと頼みました。承知して呉れました。これだけの境遇にまで進めて見ました。が、未だ不可ません。殆ど堪へ難い不安に生きて居る。此上は最う如何とも致方ありません。小島様の御口から思ひ切つた冷笑、罵倒、其外何でも、どんな事でも宜しう御座いますから發表して頂きたい——私は小島様以外のお方から何と云はれても、てんで痛痒を感じられないものですから、私は小島様に愛を捧げることも、如何することも出来ない身で、又候こんな事をお願いするのは、誠に申しにくいことでも有り、又申された筈のもでもないとは能く承知いたして居りますが、最うこれが最後の一策だと思ひますから、何とか先生より御取計ひに預かりたく、偏にお願ひいたします。



ん自分でつくつて行く外はない。萬事を捨てて眞の孤獨となれば、自分の生命を深くしみんと感じられよう。さすれば死が唯一の興味である。かう成れば、以前の我にかへつて、三年以來のわが夢を實現し、氷獄に端坐して凍死することも出来るかと思はれます。今の儘にては生きることも死ぬることも出来ません。殆ど堪へられないと云ふより外に言葉がない。

親戚知己其外世を憐れむことに於て成功したと信するだけ、自分を欺き得ないことが痛切に感じられて堪へられせん。今迄先生をも偽つて居りましたことは、幾重にも私の心状を御推し下されて、お計して頂きたい。誠に何とも申しかねましたが、これが最後の御依頼だらうと思ひますから、何とも小鳥様まで御傳へ下さいませ。小鳥様御自身の御筆蹟にて、何とか一言最後の鐵錘を下して頂きますか、それとも御口づから承はられませうか。それも出来れば、雜誌新聞などを通じてでも宜しう御座います。何とか宜しき様に、先生にお願いたします。それ

にて私は萬事を決しますから、何卒々々最後の御手数と思召して御取計ひ下さいませ。様々くれぐれもお願ひ申上候。  
四月三十日  
神戶先生 御前に  
あの女の名

神戶は私が一通り讀みをはるのを待つて居たが、何の事だか、僕には解らないねと、投出す様に云つた。  
「左様と云つたまま、私は手紙を巻回した。  
「第一何だ、今迄は他人を欺いて居たが、これから宜しく頼むと云ふやうな無様な言分はない。そりや君達の間ぢや欺くとも如何にもするが可い。併し中間に立つた者を只欺いたと云ふんぢや、全然法が着かぬではないか。」  
私は思はず神戶の顔を見上げた。  
成程、これが本當なら、あの女の非世間的なことは私にも讀まない。世間の人はそれ程に忙し。みんな自分々々の興味に忙殺されて居る。あの女の云ふことなぞを、正面から引受けて眞面目に聽いて遣るものが、私の外にあらうか。

「うむ、未だ有つた。これも見るなら見たまへ」と云つて、神戶は衣籠の裏を掻探したが、「い

や、無い。確に持つて出た筈だが——」  
「何だ。」  
「なに、此後に最う一本来たのだよ。僕は何と云つて遣つたのか、記憶えても居ないが、素晴らしく怒られて仕舞つた。」神戶は急に砕けたやうな言葉を吐いた。  
「仕様が無いねえ。」  
「どうせ暫くの間は黙つて居るもの、臨分有難い役廻りだぜ。」  
神戶は苦笑して云つた。  
二時間許りして、神戶は歸らうとした。二人は違ひさへすれば夜が夜迄談しつづけたものだが、此頃はつとめて話題さへ捜す様に成つた。  
「ちや、此手紙は最少し借りて置いて可いかい。」  
「ああ、可いよ。何なら君の言に置いて呉れたまへ。」

「左様か。ちや、借りて置くよ。」  
私は神戶を送つて神樂坂を下りた。午後の日影は冬支度の私の背にはちか／＼と曇かつた。新に道普請をした後の小石が下駄の裏にころころして歩きにくい。  
「些と大久保へも遣つて来たまへ」と、神戶は坂の上に立つて云つた。

居るのだらうか。恰も左様云ふ権利をアツシユームして居るやうではないか。  
併し、あ、併しそんな事が私の口から云へた義理であらうか。自分のためには有らゆるものを犠牲にしても願ひなかつた私の口から——まゝよ、同類は同類に行く。私は矢張あの女の行く所へ行く外はない。  
私は壁の上へ仰向けに倒れた。倒れたまゝ、眼をぎろ／＼と開いて居た。雨戸を繰りに来た小僧が「お早う」と聲を掛けて、洋燈を吹消して行つた時にも、私は振向いても見なかつた。  
午近く、やつと起上つた。そして日記帳を出して、其書き終ひの所へ丹念に前の手紙を寫し取つた。尤も日記と云つても日附が有る譯ではない。此頃の寂しさを紛らすために、その日その日の心持を一人て問ひ一人で答へる様に、其弊紙の中に小さく書いて来たのであるが、其手紙を打割めにして、此日からふつつり日記をつけなくなつた。

「ああ、有難う。」  
「あの寺も住心地はいいのか。」  
「矢張寂しいね。何處に居つても同じことではあらうが。」  
「左様かな」と、二足三足歩んで歩いて居たが、何と思つたか、お互に熱のない癖に熱のあるやうなことを言合つて来た後は、寂しいものだよ。」  
私は牛込停車場の入口に着くまで、別に口を利かなかつた。  
二人は其處で別れた。  
寺へ歸ると、直に最一度前の手紙を出して讀んだ。これが本當なら——本當でも本當でなくとも、私はこれを本當だと信する外に救はれる道はない。私は自分自身よりもあの女を信じて居る。寧ろ自分を信ずることが出来ないから、あの女を信じて居る。山で別れる時にも、「私は貴方を信ずるが故に、自分自身を信ずることが出来る」と云つた。あの女もあの約束を忘れはしなからう。

それにしても此手紙の中に、何處か稚氣の失せなやうな所が見えるのは何の爲だらう。あの女に取つて、女子大學が何であらう、木下が何であらう、一大事を決行する上に、そんな物

が何の煩ひに成るのであらう。  
併しそれは直に思ひ返した。夜の白々と明けの頃まで、巻紙を幾巻となく書いては破り書いては破りした。夜が明けても、未だ何も書いて居なかつた。  
窓の障子が薄白く成るに伴つて、洋燈の灯がだん／＼赤く成つた。終ひには笠も火屋も朝の光にはつきりと見えて、其灯だけ小さくとぼれた。何處からともなく、雨氣を含んだ朝風がすうと肌を沁みわたる。私は手を運ばして窓を明けた。空には牡蠣の様な色をした雲が低く垂れて居た。  
私は最一度あの女の手紙を讀んだ。彼時以來初めてあの女の書いた文字を見て、あの女の言葉を聞くのだ。その一字々々に眼がとまつて一字々々に離れ難い様な心持がした。さりながら此手紙程、心を落着けて考へて見れば見る程冷淡なものはない。殆ど考へ様もない位に自己本位である。自分の目的を果すためには、他人は如何成つても關はぬ。総合其目的は死ぬと云ふことであつても、あの女が死んだ後、一人取残されたものは如何成ることと思つて居るのであらう。あの女は、自分のためなら、私と云ふものを幾許犠牲に供しても關はぬと思つて

午後中、私は只空の雲を眺めながら坐つて居た。朝曇りの空は、其儘降りもせず、だん／＼雲の底が光つて来た。

四



あの女の手紙を見た。併し私からとは何とも云つて遣り様がない、最早あの女に此思ひを通ずる機会があらうとも思へぬ。それは可い。それよりも私は此事について此上人の手を煩はすのが堪へられない様だ。他人を通じて物を言ふ——自分の生命と替む、最奥のインテレストを他人の掌中に委ねて置く、そんな事が堪へられようか。

「日暮前、私は思ひ切つて寺を出た。そして、何日か或女と行合せてあの女の消息を聞いた先輩の家を訪ねた。

主人は北叟笑して迎へながら、「如何だ、例の女から妙な手紙が来たよ云ふぢやないか。」

「え、如何云ふ積りか解りませんが」と、言葉を探した。

「ふむ、神戶君も此間来ていろ／＼相談して居たが、何うも當人が未だそんな事を云つて居る様ぢや、二應兩親へ其旨を通じて置かなければ成るまい。勿論あゝ云ふ女のことだから本心は解らぬけれど。」

「さ、左様ですな。」

「で、僕から云つて遣ることに成つて居るんだが、何か君にも註文はないのか。」

「いえ、別に」と云ひかけて、「それに就て、若

し出来るなら一寸あの女に傳言がして頂きたいのですが。」

「ふむ。」

「私の方では、今度の事は既に終局を告げたものとして、何とも思つて居ないし、又此後とも何の意思もないのだから、二たび神戶君の手を煩はしてゐるんな事を云つて貰はんやうに。」

「そりや何うだ、此處に書いちゃア」と、主人は一通の封書を見せて、「これは先方の兩親へ宛てて遣るのだから、君が左様云ふ意志なら其様に書添へて遣つたら可からう。」

私は云はれる儘に、其後口へ二三行書足した。それを持つて出て、歸途に晴がりの郵便面へ投込んだ。

「あ、終局——これで終局を告げたのか、私の口からはそれより外に云へなかつた。私には別に終局がある、其終局を持つて生きて居る。私はそれを、掌に爪の立つ程握つて、僅に保つて居る。」

二三日は何事もなく済んだ。

或夕江戸川端へ来て、樓の若葉の下に、蹲りながら、近所の子供が囁々わめいて、猪牙船を操るのを見て居たが、それにも飽きて歸つて

して来た。それなら自分が小説のプロットを立てる相談相手に成つて遣らうの、女の言葉なら自分の方が少しは旨からうのと、いろ／＼並べた末に、それも強ひてとは云はぬ、若し不承知とならば、自分は目下海外に出て、自由の死所を遺言を書き立てて居るから構はないと書添へてあつた。

私は一わたり目を通したまゝ、手紙を其處へ抛出して、ぐつたりと机に凭れた。如何でも可い。最う如何成つても聞はぬ。只此儘暫く勝手として動かさずに置いて貰ひたい。恰度長途の行軍に勞れた兵卒が、階級の熱の上にも倒れたら、其儘日射病に罹つて死ぬと知りつゝ、容易に起上らないのと同じやうな心持がした。

やがて又手紙を取上げて二三行讀んだ。これで相手を翻弄した氣なのかと馬鹿々々しくもある。それでも私の身には微へた。あの女が海外へ出て果てると云ふのも、私には眞面目に思はれた。

其夜一時頃まで机に向つて居た。やつと二時ばかりの手紙を書いたが、夜が明けて見ると出す氣には成れなかつた。二たび十行餘りのものを認めた。御申出の儀は此場合出来ること

でもなからう、縱令私は今度の事を書くとしても、この上貴家に迷惑は掛けたくない、貴方や御兩親のオノアに依はる様なことは斷じて書かぬ、何れ出来上つた上は一度お目に掛けるかと、極めて餘處々々しい挨拶をした。

此返辭は幾日経つても来なかつた。

私は二たび書くよ云ふことに無理にも心を向けようとした。此儘では、世間の物笑ひはともあれ、自分自身の眼にも滑稽に見える、自分の眼に滑稽に映る位切ないことがあらうか。此状態から免れない間は、私は何をすることも出来ない、何をしても意味がない。

それでも何一つ書かなかつた。只それを書いたら出願して遣らうと云ふ書肆があつて、廣告の必要上「煤煙」といふ題を付けた。

或日、私は神戶から借りて置いた手紙を持つて、大久保の家を訪ねた。

此前の手紙の末に、「何日ぞやは、前後の考へもなく神戶先生の手を煩はして、何と思はれたのか、編の眞實のと云はれ、腹立紛れに思ひ出したこと云つて仕舞つた」とあつたのを想出して、

「此手紙の後に来たよ云ふのは、何んな手紙だ」と訊いて見た。

来ると、其留守に神戶が来たよ云ふので、机の上に置手紙があつた。開けて見ると、申からあの女の手紙が出た。私は又かと思つた。手紙はわざと落着き拂つたやうな文書で始まつた。

其後は御無沙汰に打過ぎ申候へ共、御覽りもなく入らせられ候御事と存じ上候。

御からだに御障りもおはさずやと一方ならず心にかゝり申候、最早御神懸も鎮まり遊ばされ候や、そののみ祈り居り候。

私も時のたつに從ひ却つて疲勞をおぼえ候も、今は大方回復いたし候。先日は例の發作にて、連も堪へ難き逆性念に成り、神戶先生を煩はして飛んだ御迷惑を相かけ、今更後悔いたし候。扱御書面に依り何等の意志なしとの御事だけ承知いたし大きに心安まりはいたし候へども、御筆蹟の亂れたるを拜見しては胸裂かるるまで心苦しく存候。何卒一日も早く平かなる御心にかへらせたまへ、心より祈上候。

それから一轉して、

私如き打捨て置きては何一つ出来ぬ様



「あゝ左様だ」と、神戶は四角な封筒に入れた罪  
紙を私の手に渡した。  
私はそれを手に取ったまま黙然とした。

拜啓、眞實の態度でさへ申せば、少くも  
も其瞬間に於ては凡のものの眞なるべし  
とは、予一人の認許せし所なりしと、今  
時分氣附いても早や遅時。かう成つては  
止むを得ぬ。人事關係の總ては絶  
え候。情的關係などは以ての外、理  
解關係も無之候。いづれ所望するなら  
ぬことは御互様に火葬場を通過してよ  
り、ゆる／＼委細開え上げべき機会も  
有之べく、わざと申候し候。予も君を崇  
拜するものには無之候へども、小島さん  
や私などは餘程子供ならぬ、大きなお  
方とは疾くより敬服いたし居候。されば  
こそ三枝子嬢、我が教主、マドンナ、ア  
ーメンにて誠に平穩無事の次第なるべく  
候。計らずも我が汚れたる一層に御名を  
唱ふるの餘儀なかりし罪を許したまへ。  
予が見たる人生は齒ぎしりをしての綱渡  
りなり。笑ふだけの餘裕もなきを憫れみ  
給へ。いづれ其内眞誠様。あまりに見え

たせし處、あやにく皆様御不在にてぼん  
やり歸宅いたしたる様にて候ひき。其後  
は又病院通ひに候、かしこ。

五月五日

神戶先生 御覽に

あの女の名

ずつと目を通したが、只刺戟の多い文字がぐ  
んぐん頭に響いて、ぐら／＼とする音り、何の  
事とも解らなかつた。私は手紙の紙を見詰めた  
まゝ、少時俯向いて居た。

神戶も私と一緒に手紙の文字を辿つて居た  
が、

「御同行は驚くね」と吹いた。

又言葉を次いで、それから先達て我家の姉さ  
んと云ふ人が来たよ。其話ぢや何でも阿母さん  
が病氣で、それに餘り家に許り置いても爲に好  
くないからと云ふので、一緒に旅行に出たのだ  
さうな。

「あゝ左様か。」

それなら私の手紙も其留守へ着いたのであ  
らう。何れ家の人の手を通るものと思ひなが  
ら、何時迄も本人の手へ渡らず、自分の書いた  
物が宙宇に迷ふかと思へば心苦しかった。  
私は大久保を出て、初夏の日光を浴びながら、

透き通る音の碎くる音までも聞ゆるを。  
畜生に成るか、聖者に成るか。とかく中  
層にてぼかす慾當を心得、ラブ逢りにて  
お茶を濁し、落情死と胡魔化すが、賢し  
ら人の避難所とは存じ及びながら、何と  
云つても願細胞のザイブレーションが肯  
んじないとならば、さりとて、致方もな  
く、又精論は例に依てナツシング、ナツシ  
ング、他人の云ふナツシングは知らぬこ  
と、予に有りては何うとも始末の着かぬ  
時の迷言業。せめては一柱の香の煙の本  
に思ひを乗せて、家出の計畫、死場の選  
定、最早二度とは親兄弟、友人のある里  
にてはいたさぬこと。警官の御厄介にう  
そにも頭を下げる憂き日を味ひ候こと、  
心魂に徹して懲り／＼いたし候。こゝら  
邊りが子供らしき處かとほゝゝと糸まれ申  
候。御親切なるお言葉にて、私如きも  
のまでも將來、南界の人となれとの仰  
せ、誠に有難くは候へども、將來の幸福  
とか希望とか伏なることはとんと當に致  
したることもこれなく、現在に生きるだ  
けが、やつと／＼の大事業に候。何を致  
しても屹度途中にて失望するが是迄の習

一人田圃の中の道を辿つた。顔に汗が滲んで、  
歩くのも息苦しい。一足毎にそこへのめりさう  
にも思はれた。

あゝの女の手紙——あの女は矢張りあの女だ、  
私の思ふ通りの女であつた。それにしても——  
神と人間との間にけ未だ融通がある、何となれ  
ば神は人間の造つたものだから。けれど人間と  
人間とは終に近づくべき道がない。毎日誰と誰  
と合せ眼と眼と見合せながら、別々の世界に生  
きて、別々の世界に死んで行く。こんな不可思  
議なことがあらうか。

何處へも行かぬ所がない。私は最う何處へも行  
く所がない。

私は前後を見廻して、懐から一握の銀錢を  
取出した。引金に指を掛けたまゝ、錢口を額に當  
てがつたが、又そつと懐に納つた。そして足  
早に歩き出した。

不問、氣が附くと、私は四辻に立つて居た。  
何だか見覚えのある道だと思つたら、落合から  
新井の薬師へつゞく街道であつた——あの女と  
初めて會つたあの薬師へ——私は急に後戻りを  
した。横司ヶ谷からぐるりと廻道をして、下  
宿の寺へ歸つた。

其月の末、私はあの女の家から一個の小包を

ひ、努力せぬまきから失望して置く方、  
くたびれ儲けの辛さなく、且は考へて見  
れば藝術とか云ふものも早晩自滅の運命  
を免るまじく、それも心細く候。何も致  
さぬこと、いたさぬこと。何うせ思想の  
不健全は前々四方八方より頂戴する御  
言葉。思想とは性格の一部分に過ぎざる  
べく、何様性格が病的に出来上つたから  
には、今更救済の見込みも立たず、何の道  
社には生存いたさぬが自他の幸福と覺  
悟は二三年前に定めながらも、ついで、  
今日に迄及び候誠誠に御恥かし候。計  
らずもこんな事を饒舌り立て候も、これ  
は我が爲の煙出し。尤もあらゆる人事  
關係を放棄せる上にて申上げたること  
なれば、何の他愛もなき純言同様、又誰を  
云つたなど御思ひ遊ばすだけにて今更  
は御損に候。矢張り君も死に依らざれば解  
決の着かぬお方、或は御同行の止むなき  
に立到りはせぬかと心配に候。

以下は母の申せし處、眞實の程は私一  
向存じ寄らず候へども、耳目に觸れ候ま  
まを御傳言申上候。毎もながら御親切  
よと繰り返し候。先日一寸御宅迄參上い  
を受取つた。開けて見ると、別れる時あの女に預  
けた書物であつた。私はそれを目に見えぬ挿入  
の隅に隠した。

一週間程経て、私は又あの女から一通の手紙  
を受取つた。

拜啓、前月中旬より旅に明け暮れて御無  
音に打過す申候。御著作中を御助けい  
たすことは餘りに心なく、何より不本意  
に候へども、一言用事のみ申述べ候。  
扱私こと總て計畫通りに参り準備も  
大方調ひ候へば、此夏だけは母の病氣  
もあることなれば湖南にて少しく母の  
心を慰め候後、遅くも秋までには漫遊の  
途に着くことに決定いたし候。勿論周囲  
の事情をも考へ、兩親の許可を得て、實  
際的に事を運ばせ候ものなれば、其邊は  
他事ながら御安心いたさ度候。就ては  
出發前に、今回の事につきは師友又は  
世間より色々質問をも受け居ること成  
れば、極簡単に私の態度を明かにし一  
應答へ置きたき希望に候。今日迄世に發  
言いたさず参り候は、一は新聞雜誌記者  
の質問に答ふることに餘りに馬鹿々々し

受取つた。開けて見ると、別れる時あの女に預  
けた書物であつた。私はそれを目に見えぬ挿入  
の隅に隠した。



は、且は軍に外観的事実だけ語りたりとて、多くの誤解を生むとも事實の真相など解つたものにあらざるべく、私は此處迄読んで思はず眼を上げた。あの女は恰度其通りの事を敢てしたのでぢやないか。如何して斯うぬけ／＼としたことが云へるのだらう。私は又思ひ返して讀みつづけた。

又私の小さな頭腦よりして貴方の隠てを解し得ざるは云ふ迄もなく、又貴方も私の總ての方面を御承知なきは勿論のことなるべく、且貴方は元々御創作を遊ばすことが最初よりの御考へなるべければ、それが公に成るに先立ちて、私が事件其ものに對して兎や角と云ふ挿むは御迷惑なるべしと、今迄迄控へ居りし次第に候。

私は最早讀むに堪へなかつた。つまり其後は、明日一寸歸京して見たが、近刊の豫告も出たさうだから、いづれ出版にも間がなからう。それを待つて御友や、眞面目な質問をして呉れた未見の知己にも答へたいから、出版の時目を書かせて貰ひたいと云ふのであつた。

私は直に筆を執つた。思ふさま書いて書いて書きまぢつて遣らうと思つた。

生、源は名譽、回復のために存在を許されるやうな取扱ひは逆も堪へない。私は冷酷ぢやない。只冷酷を装はねば居ても立つても居られたものでは有りませぬ。如何に何でも世間の人と同様に貴方の御口から「お前の名譽は保護して遣るとか、病氣の母親まで捨てて去るとは何と云ふ事だ」とか仰有るのは合して頂きたい。いかに決心は定めて居ても私も石ではない、又心が動き出して仕方がありません。さうかと云つて此儘兩親の傍に居ては迷惑を掛けるまでも満足に興へられよう見込はない。私は思慮の結果道理に従つたのです。あの汽車で御別れした以來の私のやうに、或パツシオンに支配されてわざといる／＼な事を遣つていらつしやるのなら知りませんが、それではなく眞實に貴方までが此前の御手紙や又は今度の御手紙のやうに私をお考へに成つていらつしやるのかと思ふと逆もたまりません。もう今日は何も彼も云はせて下さい、云ひたいことが誰にも云はれないので、私は一人で只狂ふのです。少し前のことですが、それから云はせて

下さい。御別れ後、私は何故こんなに成つたかと云ふことから云はせて下さい。それは汽車の中で承はつた最後の御言葉「あれが元です、あれが私の總ての努力を踏みつけた。」無論手紙などは遣り取りしないこと。「これが私の心にどんな印象を深く／＼残したか知れない。御想像に任せませう。王子の一夜、私は只其御言葉ばかり繰回して居た。そして生、源の好き敵一人得たと思つた。あの情熱の燃え立つた瞬間に生、源の方面の私は、其夜僅の間にどれだけの恐ろしい事を考へて見たか知れません。とても恐ろしい空想ををがいて居た。けれど其反抗心のために自分自身の苦痛を忘れて居ただけは寧ろ幸ひであつた。そのために歸宅後も兩親に對するモラル、センスなど二三日は動かなかつた。只祖母に會つた時如何にも嬉しきやうな顔附で「何でも生きてさへ歸れば結構さ、どうでもお前の好きなやうにして上げるのだから死ぬことがあるものかね」と云はれた時には、初めて聲を出して泣くことが出来た。其他の人達には何の感情も動かな

く、且は軍に外観的事実だけ語りたりとて、多くの誤解を生むとも事實の真相など解つたものにあらざるべく、私は此處迄読んで思はず眼を上げた。あの女は恰度其通りの事を敢てしたのでぢやないか。如何して斯うぬけ／＼としたことが云へるのだらう。私は又思ひ返して讀みつづけた。

又私の小さな頭腦よりして貴方の隠てを解し得ざるは云ふ迄もなく、又貴方も私の總ての方面を御承知なきは勿論のことなるべく、且貴方は元々御創作を遊ばすことが最初よりの御考へなるべければ、それが公に成るに先立ちて、私が事件其ものに對して兎や角と云ふ挿むは御迷惑なるべしと、今迄迄控へ居りし次第に候。

私は最早讀むに堪へなかつた。つまり其後は、明日一寸歸京して見たが、近刊の豫告も出たさうだから、いづれ出版にも間がなからう。それを待つて御友や、眞面目な質問をして呉れた未見の知己にも答へたいから、出版の時目を書かせて貰ひたいと云ふのであつた。

私は直に筆を執つた。思ふさま書いて書いて書きまぢつて遣らうと思つた。

「煤煙」は必ず書く。併し何時出来るか分らぬ。或は一生出来なないかも知らぬ。若し貴方に云ひたいことが有るなら、そんな事には煩着しないでし／＼發表して貰ひたい。併し貴方は是迄も随分世間へ對していろいろな事を云つて居たぢやないか。勿論あんな風で山から歸つたら、貴方の自尊心は傷けられたらう。それにしても餘りな、私でさへ見かねる迄反動的なパツシオンに驅られておいでの様だ。成程漫遊も好いでせう。併し家族と云ふものは——私の口から云へたことでは無いかも知れぬが——決してむらな出来心の思慮の下に置かるべきものではない。現在貴方のために病氣に迄成つた親を捨てて行く。少しは貴方のモラル、センスにも、訴へて見たら可からう。斯んなこと迄書いた。あの女の非常識的な言動に報いるには、自分が常識的に成る外はなかつた。

兩、三日経て、私は二十枚餘りの洋紙に鉛筆で走書した、長い／＼返事を受取つた。私は好く文字の速度が思想に及ばぬ時、鉛筆で手紙を書いた。それに倣つたものであらう。

その長い手紙は次の如く走つた。

御手紙は昨夜母の手を経て拜見いたしました。其時の氣持は逆も云へません。昨夜來、静坐をついてやつと氣が落ち着いたから此手紙を書くことにしました。少し長く云はせて下さい。私は自分の苦しまされに誠にいる／＼馬鹿げた眞似を致しまして、貴方には何とも申譯が御座いませぬ。素知らぬ顔で心にもないことをどん／＼いたして居りました。故意に貴方を傷けるやうな事も致して見ました。けれどけれどあゝでもしなないで、私は如何して居られますか。未だそんな事を云ふか憫れ果てた女だと仰有るかも知れませんが、私はあんな事をして居ても、貴方だけでは解されて居たと思つて居ました。私は大騒ぎで馬鹿げた眞似を頭に遣り出した。それでも貴方だけは私があゝでもせねば居られないと云ふことを知つて頂きたかつた。世間を相手にあゝ遣つて居るとは、餘りと云へば、餘りに見てとつて下さつた。世間を考へるだけの餘裕があれば、あんなとぼけた眞似



い。只貴方に對する敵愾心に心の大部分が占められて居た。其當時私が世間に向つて饒舌したことは——無論強ひられて口を開くのですが——世間を相手取つてなど云ふ思慮もなければ、てんで其方には頭を向ける氣にも成らない。口を開けば、只貴方を相手取つて、あの時のあの「無論書信などはしないこと」と云ふ聲を耳にしながらかつて居た。其當座私は只貴方に對する怨恨のみに充ちて居た。貴方は私が又今度の事の爲に自尊心を傷けられて、それで恨んで居るものと思つて頂いたかも知れない。それは自尊心と云ふやうなものも無いとは云はないけれど、そんな事よりも更に「私を動かしたものは別にある、口惜しくて残念でたまらなかつたことは別にある。向後自分一人で死を決行し得るか何うかと考へた時、私は迷も只ちつとしては居られなく成つた。あまりの遺憾、あまりの意氣地なき。勿論貴方を恨むといふ理由はない。只自分の意力の足らぬこと、自分が信じて居ただけ敵愾が出来て居なかつたことを感じた時の苦しきである。苦し

さの持つて行きどころがないから、夢中で神戸先生にも當つて行つた。木下にも當つて行つた。寧ろ激發を強ひて招いても狂ひ過つて居るのが最も容易であつたからでした。悪いと知りつゝ狂はして置いた。時には冷笑的な氣持にも成つた。何んな事を云つても平氣であつた。何がなしに只可笑しく、笑つて／＼留度なく笑ひたいやうな氣持が一日中つゞいたこともあつた。けれども家の者が少し心配し始めたやうに見えたので、例の避難所へ逃げ込んで、朝夕座禪ばかりして居ました。それから旅へ出ました。其處へ先日の御手紙が運れて私の手に落ちた。あれに對する私の激昂の結果は誠に考へれば子供らしいまで馬鹿らしい行爲をさせたのです。御本をお返ししたやうに姉の許へ依頼して、殊にもう私の名を書く必要はないことに成つたときまで説文して遣つたのでした。

立つた。重ね／＼の事で堪へられない。そこで仕方がないから、あの手紙を作ることにしたので。誠に何とも申しやうのない書き振りに相違御座いません。けれど私は眞面目でした。震へながらも彼の涙に書いたのです。あゝでもするよ貴方に接近する道はなかつた。それ以外に、私は貴方に對して報いる方法を知らなかつた。あんなしらばつくれた顔をしてあゝせねばならない私の心の中は誰も察しては下さるまい。私は漫遊などいふ文字を特筆大書する必要があつた。血まみれに成つた女が、さりとて死にも得せず、自分の血と肉とのつゞく限りわれとわが血に癒えつゝ最後まで戦はねばならぬと、取返しのつかぬ創傷を負ひながらよるめきまる委を隠さむが爲である。私は只貴方にのみ解されたりと信じて居たのに、かうまで成つた以上は、いつそ自分の血と肉とを以てした行爲の總てを滑稽化して、貴方に報いるのが唯一の方法であると考へた。それで私は「煤煙」の出版を待つて、私の態度を師友に向つて明かに答へるとしらばつくれたので

す。私に今日師友と云ふものが何處にありませぬか、それだけでも察して頂きたい。もと／＼眞の師友といふものはなかつたには相違ないのですけれど、師友に答へるとは即ち貴方に答へると云ふことに成る——前も思ひ切つて馬鹿なことを云つて御答へするつもりであつた。私は何をすることも皆貴方を相手にして居るのである。貴方の前に發表した自己以外に、何で他人に發表し得るいつはらぬ自己が残つて居よう。

私には自分で出来るだけの處まで貴方には接近した。あれまでも他人に接近したことが是迄あつたでせうか。他人の前にあれまで自己を表はしたことがあつたでせうか。あれ以上の發表は私の口からは出来なかつた。只藝術家たる——私は左様信じて居た——貴方の洞察力に訴へようと思つた。私は自分を見ることは何處迄も酷である。其日々々のことには誠もあり、方便もあり、遊戯もあつたには相違ない。けれども始終一貫して偽らぬ我だけは何處迄も見えて欲しい。私は最う仕方がない。今日は總て云はせていた

だきます。私は口では迷も云へぬことである。いつぞや貴方は私をスフィンクスの様な女だと仰有つた。私はスフィンクスの態度を装つてならば、何時でも貴方と相手する資格がある。けれども今これを書く間は貴方と眼と眼を見合はせることはとても出来ない。貴方は御自分を敗北者だと仰有る。私も敗北者です。けれど私の苦痛は貴方の苦痛とは全然別のもので。私は何故スフィンクスのやうな女に成らなければならぬか。敗北したことを切り感じたからです。肉體的に屈服されたかつたから勝利を得たなどと、そんな大まかなお目出たい考へでは私の性質として瞬間も居られない。私は何よりも自分の心の細微を重んずる。肉體的に何うした斯うしたは第二の問題です。敢て問ふにも及ぶまい。私は自分の心を趣味に取扱つて置くことだけは何うしても許さないので。私は深い／＼創傷を受けて仕舞つた。これは貴方だけは解つて下さるでせう。貴方にも解して頂くことが出来ないとす



然に驚かれて動いて居ると同時に、一方では余裕のある我が見て居た。餘り恐ろしいまでに激発しさうに成ると知つた時は、多くは意方でもって制してしまふ。私は自分を制する上に始終座禪の力を蓄りて居る。私は禪の思想を口に使用する資格はない。只自分を制する方便に便つて居る。いつぞや御同行した日暮里の兩忘庵は、私がたゞ物好きから彼處へお連れ申したとでも思つていらしたかも知れませんが、あれは私が三年前十日間夢中になつて坐つて見性したところなのです。それで貴方と聞ふ時あの家を一度見て置きたく成つたのです。貴方もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。それから貴方が私の心を解剖して下さい、あれにお答へいたします。私も先達で来いらく反省ばかりして居ます。が——こんなことをして居るのが今は一番心易い——私にとつて自殺は自我の完成である。自己意志の發現である。までは思ひません。私にとつて自殺はいよいよ情熱のために破船せねば成らぬと、切迫つまつた瞬間に辛うじてとる消

極的の勝利なのです。今度自分が死を決するに至つた心状態をいろ／＼振返つて見ましたが、私は貴方とお話をして居る時、又は手をとつて歩いて居る時などは、とても死ぬ氣には成れない。死を執行する勇氣はない、又派などは何うしても出ない。けれども抱擁された瞬間、涙は直に出る。同時に死の決心は成る、又實行も出来る。あの瞬間に殺されるのなら私は平然として一番容易な死に方をする。自己意志の發現だとは信じられない。更により強き我がわれの上にあると思ふ。今度私があれで死を決したのは、あの當時はどこまでも最後まで戦つたと思つたけれど、死を決するに至つた動機を更に考へれば、或意味に於て敗北であることは明かである。それは恐怖と不安と苦痛とに逆も堪へ切れなく成つたからです。決して強いものではない。最後に貴方のお手に避難所を求めた譯に成る。つまり奮闘の途中に於て恐怖と不安とがあまりに切實に迫つて來たので、實は逆も堪へられないから死ぬ氣に成る。ですから抱擁されて居る時——最

も不安な時で、そして最も情熱の熾烈な時に死にたい。尤も是は私の思想の結果ではない。私の頭は寧ろこんな死に方では承知せぬ筈である。だから私は家出前に心配したのです。若し貴方と相對して居る時に徳口を向けられたら、私は乾度自己防禦の態度をとらずには居られまいとも想像して見た。戦へるまで腕力であたらうかとも考へた、又意力をもつて平然として殺されて仕舞はうかとも考へた。自殺するよりも其方が容易には相違ない。けれども甚く敗けたやうな氣がして來たのでした。それで口惜しまぎれに、御堂でしたか、あの遺書をした。あれは自分で自分を傷つて見たのである。同時に貴方へ當てつけたのです。時に手紙を遣る氣に成つたのも同様の氣持からです。それと最一つあの遺書をして置けば、もし或事情に迫つたら自殺をする勇氣も出ると考へたのでした。貴方は私がいまか世間を相手にあんな遺書をしたものとは思つて下さるまいとは思ふが、私は誓つて云ふ、あれは貴方へ當てつけたのである。あれを受取るべき人は

貴方より外に世には一人もない。改めてあの遺書を貴方に差上げる。こゝに私の日頃から考へて居る思想上の問題を少し語らせていたゞ。私は哲學や宗教に關する讀書をしたことは殆ど數へる程しか有りません。只自分の心的經驗の過程を考へて、個人の思想發展に四つの階段を設けて見る。

一、肉の時代。  
二、肉と靈と對立の時代。  
三、靈の時代。  
四、靈肉合致の時代。

此四つは發展の階段ではあるが、又同時にこれだけ存するものと思ふ。そして意志の力による精神鍛錬に依つて最後の境地まで到達することが出来るのです。若し修養と云ふことが少しもなかつたら、何時迄経つても肉の時代にとゞまるものだと思ふ。それからこれは私が確信して居る所です。申しますが、この靈肉合致の境地は一度肉を征服して靈化し去つた境地を経た人でなければ達し得るものではない。メレヂュコフスキイの象徴主義とはどんなものです

か、是非讀んで見たく成りました。私は知らないから何とも云ふことは出来ませんが、只肉は靈の象徴で此象徴を通じてにあらざれば靈を窺ふことが出来ないと云ふ言葉は大變面白く感じました。但し靈の象徴であるといふその肉は靈肉一致の境地に達した、即ち訓練を経た肉であると思ふ。二元論の見解にあるところの肉とは區別して論ずる必要があるのでせう。私はなにもシステムティックな學說を人の前で見せる考へもないし、又其力もない。時には何とか系統を興へて自分の頭を明瞭に見たいと云ふ要求も起らないではないが、私はたゞ自身の血と肉とを以て戦つて居るまでである。血と肉とをもつて、靈肉一なる境地に泳ぎ着かむとする努力である。今でも此境地に達したと信する瞬間はある。けれども多くの瞬間は第二、第三の間に彷徨する苦悶である。闘の苦しさに堪へない時、死を考へる。けれども死は最後の勝利だとは思へない。この上は最後まで生命の續く間は戦ひます。死ねば戦場で死にます——私も今度といふ今度

はしみ／＼自分の弱さを感じました。今度私が死を決したことは貴方をしほに自分を欺いて避難所を求めたものである。しかも終に避難所へ埋没し去るわけにも行かず、新に手傷を負うて血まみれに成つて出て來た。何だか又頭が亂れて來たから止めませう。

思附き次第順序なく書いて見ますが、貴方に私を接近せしめたものは情熱であつたには相違ない。それは確です——けれども一方には私に友達がいないことです。私が本當に自分で考へ自分で感じて居ることを其儘に發表したことは殆どなかつた、なかつたのではない、出来ないやうにせしめられて居た。私は喧嘩ばかりして來たといふ。けれども自分が本當に考へることを發表して人と思想上の争ひをしたと云ふのではない。そんな事はしたくも今迄出来なかつた。私が何と云つたところでどうせ駄目だと云ふ絶望的な腹立ちまぎれに、他人を相手取つて争つて見るので、私の思想其者とは關係がない。勿論目的もない。只絶望的な恨みから無鐵砲な喧嘩をするだけのことです。



この時の私は全く態度が違ふ。貴方の前にもこれでもって現れたことが近頃は深山ある。勿論無道徳に成つて仕舞ふ。只知的に意地悪くさへ出れば可い。故意に馬鹿な顔をして見る。裏のあること許り云ふ。貴方は私に何か目的があつてやると思つて下さつたかも知れないが、そんな余裕は私にはない。ふざけて遣るのでも、じやうだんに爲るのでもない。貴方を喰ひしぼつて居るものがあることだけは見て頂きたい。私自身も決してこんな事をするのが善いこととは思つて居ません。けれど精解がましいけれど、境遇上から成らざるを得なかつた、自分では思つて居ます。これは私が後天的に受けた一面である。

それと似た様なことで、好んで他人を弄弄したり、軽く竹筵返しをする癖は、貴方からも一二度氣を附けられた。自分にとつて別に意味はない。わざ／＼骨を折つて遣つて居るのも何でもないのです。一寸眼前の知的好奇心から出るもので、お友達など云ふものに對する時の私はこの私である。第一にあの加藤さんを離れ

してしまつた。今迄接した人とは少し違つて居たから好奇心に驅られてしたのです。貴方の前にも折々こんな態度が出たやうでした。迅速に竹筵返しをすることも氣が附いては居ますが、考へて遣るのではない、反射的に出るのです。こんな事を書いて居る間に、私は何も知れない、近頃にはない程かな氣持に成つて來ました。故意とらしい態度で此間、中貴方に對したことは許して下さい。只私は不眞面目にあんな眞似をして見たのではない。それだけは認めて下さるでせう。私は貴方にお別れした以後も解されて居たところは解されたものと思つて居た。それだけは何日迄も變らないと信じて居た。未だ手紙つて居た。それ以外私は何を誰に手紙するところが有らう。私の總ての中で自分以外のものに手紙つて居るところと云へば、只私が貴方の前であんな事を遣つても、貴方には解されて居ると信じただけです。ところが何日の間にもやら世間の人から聞くやうなことを貴方から承はる身と成つた。私の態度が一變したのは無理もないと思つて

いよ失望せずには居られない。勿論勞れていらつしやる貴方の御手を勞して自分のことを小説にしてくれなどと厚顔しいことは云はないまでも、この悲壯な生き大小説をせめては二人の所有として生涯持つて居たいと思ふ。これだけの希望を撃いで居たものである。それなのに近頃貴方の御心に持つていらつしやる悲劇と私の持つて居る悲劇とが別々のものに成つて來た。私はそれが残念で／＼とてもたまらない。

それを私の兩親を御心配下さつたのは有がたい。名譽を重んじるなど御有つたのも御本意ではありません。けれど私と相談していややうな事を書かうなどとはあまりに二人を侮辱し切つた話である。物質的に二人を破壊しなくとも、あのお言葉だけで十分に踏み潰されたものではありませんか。自分のしたことは終生責任を負ふかはりに、他人から抹殺されようとする時どこまでも所有を主張する權利がある。藝術とは何んなものか知りませんが、少くともそれ自身に於て獨立したものでせう。社會の前に頭

を下けて、初めて存在を許されるやうな藝術なら餘りに憐れむべきものである。私は貴方の前にしたことは社會は眼中になかつた。どうぞせめて御筆を御執りに成る間だけでも、二人の舞臺にしていただきたい。母を御心配下さるの誠は有りがたく御禮致しますけれども、決して貴方が御想像下さるやうに、私の家の者は貴方を恨んでは居りません。私の方が恨めば母よりもつと恨んで居る筈である。母の病氣は久しい前からの持病で、そんなに甚いのも御座いませんから、何卒御安心なすつて下さい。私の母のこととは私が心配いたします。貴方はどこまでも藝術家としての威嚴を保つていただきたい。藝術上の問題にまで周囲の事情を顧慮せねば成らぬと思ふと私は残念です。私が若し藝術家であつたら貴方の様な雅量はとてもない。私はどこまでも區別する。周囲の事情を顧慮して常識的に動く時の私と、自己を主張する時の私とを混同することを憎む。私の家のために頭を下げて下さつた御心の程は誠に有りがたいので、私にも



十日、貴方に發表いたしました。私自身は私を發表する資格はない。とても申せません。金輪際云ふ譯には行かない。只貴方に願つて置きます。私に關する一切の發表の自由を御任せいたします。重ねて申しますが、今回私のいたしましたことは何處迄も私の所有である。他人の所有を許さない。——子のしたことである。いかに不名誉な形容詞を世間から浴せられたからとて、——子の名まで抹殺することは許さない。私が悪いことをしたならば、私が責任を持ちます。其御心配はして下さいませぬ。

改めて私に關する發表の權利を貴方一人の御手に譲ります。私は生涯貴の自己を自ら他人に語ることは有るまい。一切貴方に御願ひいたします。母のことは御安心下さい。又私も今迄云ひ得なかつたことを云ふことが出来たから、今後は決して見苦しい狂ひやうはしませんから、これも御安心下さい。

小島様  
御許に

あの女の名

最う少し書かせて下さいませ。先日私から送上げた手紙に『櫻煙』を御惠賜下さいたく云々と書きました。あの御惠賜といふ文字は餘程考へたのです。私は腹が立つて堪らなかつたからあゝ書いた。それを貴方はまるで違つた意味に御取り下さつた。私はあの旅行先で拜領した御手紙のやうな、あんな御心持でお書きに成つたものなら、一切御見が出來ないといふ意味だつたのです。あれでは藝術家らしい態度もなければ、同時に私をも少しも解して被せしやらない。私だけを侮辱なさるのなら未だしも堪へる。貴方御自身まで侮辱して被せしやるから、私はあんまり胸甲斐なく思つた。あれでは二人とも滅茶々にされて仕舞つたぢやありませんか。今度の御手紙の『出版前には御前に一度見せるつもりで居る』といふのも、同様の意味に於て、又二人を侮辱して居ると感じました。そんな態度で御筆が御とりに成れるものか、又私がそれを喜んで拜見いたしますと云へるものか、御考へ下さいませ。藝術家たる態度を失つておしまひになつた貴方なら、

最う貴方でもなく成つて仕舞ふ。貴方を藝術家と信ずればこそ、あれまで接近した。藝術家でもない人に、何であれ遠くから見て見るものですか。最初から断然お断りした筈です。

社會上の位置を失つたから藝術家にでも成れと、私が云つたと仰る。私にはもと／＼社會上の位置など御かまひに成る方ではないと貴方を思つて居た。社會と個人との關係なんて、私にはとても認められない。私の世界が社會とどこに相應するところが有るか。貴方と私の關係は私にとつて最初で而も唯一の社會的關係です。この外私には何處に理解ある關係がありませんか。貴方に理解されよう、知られようと思つたのは、成程私の弱身ではある。私は何うせ誰一人にも知られることなく、獨りで戦つて獨りで死んで行く身だと、覺悟は疾うにして居た。ひとりでもいい、何うでもいい、どうせ駄目だとは、私の人に對する絶望の聲である。けれど今度は貴方の洞察力に信じて自分を知られて見ようと思ふ氣に成つた。そんな希望

を起して見たのは、私が悪いには相違ない、私が弱いからには相違ない。併し一旦知られて見ようとなれば努力もし、又知られたとも信じた後に於て、ちつとも知られて居なかつたといふことに成つては、逆も堪へられない、孤獨なまづたものぢやない。先頃中の様などばけた顔でもして居るより外に、私には仕方がなかつた、あゝでもしないでは如何して居られよう。只貴方に知られて居ると思へば、私は何處へでも行つて、ひとり自分の世界の隅を最後までつゞける力も出ると思ふ。何うせ解して貰ふ見込のない社會に、しかも邪魔ばかりされて居るよりも、せめては邪魔だけでも餘りされない所へ去つて、社會とは只自分の肉を支へるだけの資料を得るために無意味な關係だけしようと考へて居るのです。唯一人と思つた貴方にも解されず生涯ををはるとすれば、あまりに孤獨の感に堪へなく成つた。でも未だ解されて居ると信じて居る。だから又こんな長たらしい事も書いて見る氣に成つたのです。未だ申上げたいことはいろいろ

有りますが、あんまりだからこれで止めませう。

私に關する一切のことは貴方の御所有だと思ひますから、何でも御發表下さいませ。其代りには他人を相手に御書きに成るものなら私は承知しない。『櫻煙』は貴方と私と唯二人の所有物だと信じて居ます。外の人に何で解るものですか。此手紙は何でも手から手へ直接に御渡しすべきものです。仕方がない。仕方がない。

私は始終わく／＼としながら、幾度も途中で行止つて又後戻りするなど、長い間かゝつてやつと讀み終つた。讀んで仕舞つた時は割合に平靜であつた。左様あるべきものが左様であつたと云ふ迄で、別段心は動かされなかつた。今更『櫻煙』は二人の所有物だと云はれても、此生きた小説を切めては二人の所有として生涯持つて居たいと云はれても、如何いふものか餘り身に沁みなかつた。二人の中の事實は何人といへども採み消すことを許さぬと云ふ。併しそれを採み消さうとしたものは、あの女自身ではなかつたのか。あの女自身が事實を抹殺し去らうとしたら、私は如何することも出來ない、幾

許無難つても濡漑しても如何することも出來ない。如何することもあの女の自由である。現にあの女は自分が血と肉とを以てした行為の總てを滑稽化して私に報いる外はないと云つたぢやないか——何だかそれが私の言葉について捲へた言葉の様に思はれるけれど。

山から歸つた當座、あの女があゝでもして居なけりや居られなかつたといふのは解つてゐる、其心持は解つて居る。併し最後に汽車の中で云つた私の言葉がそれ程あの女の機嫌を損じて居ようとは知らなかつた。勿論手紙なぞ遣り取らないと云つたのも、あの女を信ずればこそ云つたのではないか。あの女を信ずる言葉があの女の意力の足らぬこと、鏡録の出來て居ないことを諷刺したと云ふのなら——何だか解つた様でもある。只それだけに一層詰らな

併し私の前に發表した自己以外に、何で他人の前に發表し得るいはらぬ自己が残つて居ようかと云ひ、出來るだけ、私には接近した、あれまでも他人に接近したことが是迄にあらうか、あれ以上自分の口からは逆も云へない、此處を見よ、此苦しきを見て哭れぬかと云はれては、私は矢張あの女を幾々信じて居た通り



の女だと思ふ外はない。スフィックスの態度を  
 装はなければ私と握手するに堪へないと云ふ、  
 其女面舞身の像と背しく、あの女の頭の背後に  
 暴れ狂ふものは矢張り本性ではなからうか。  
 それなればこそ、あの女は自分にも涙がある  
 と云ひ、自分の苦痛は自分の口から誰に向つても  
 訴へることが出来ない、縦令訴へた所で同情  
 同感などして呉れる人はないと云ふのだ。それ  
 でなければ意味がない。あの女が自分でわざと  
 女ぢやないと云つて見たり、水につくか火に  
 つくか、兎に角中途半端では堪へられないぞ  
 と云ふのも矢張りそれで説明されよう。二六時中  
 米の様な意志の力で抑へて居るもの、一  
 寸でも隙間が有つたら忽ち異常な情態が勢  
 を得て、燃え上る火焰の中に身ごととじたく  
 と熔け去る外はない。抱擁された瞬間、涙が  
 直に出て、同時に死の覚悟は成ると云ふのも是  
 が爲ではないか、左様思へば、三年前日暮里の  
 雨、忘庵で夢中で見性したと云ふのも頷かれる。  
 あの女は自分を制御する方便として座禪の力  
 を藉りて居ると云ふ。只それ方便である、目的  
 ぢやない。徹頭徹尾あの女が禪學に依つて説明  
 されると云ふのぢやない。しかも其制御の力が  
 だん／＼弱く成つて自分が自分に負けて狂つて

行く。未来の定められた運命を明かに見ながら  
 苦悶を續けて居るものとしたら——實際生きて  
 居るだけが大事業であらう。何んな事云はう  
 が、何んな事をしようがあの女には許される。  
 あの女の性格が冷酷を通り過ぎて、時に残忍な  
 と差見えるのも無理はない。其残忍な発作から  
 あの遺書をしたのだとしたら、あの私だけに見  
 せる積りであつたと云ふ遺書も、若しあの女が  
 死んだ後に、私一人生き残つて、警察にでも捕  
 はれ、裁判官の前に曳出されて——私は何時ぞ  
 や新聞で讀んだ湯島の女殺しを想出した——  
 あの遺書を證據物件として讀上げられたら、  
 私は如何成つたことであらう。いかに私でも狂  
 ひ死の外はない。あの女は、自分の死後、半島の  
 中途跟いて来てでも、私の魂を粉砕しなければ  
 止まぬと云ふのか。成程あの女の仕さうなこ  
 とだ。それにしても何と云ふ恐ろしい復讐であ  
 らう。

尤も、こんな事を考へるのは、矢張り空想に驅ら  
 れて居るのかも知れぬ、自分一人の想像で拵へ  
 て居るだけかも知れぬ。あの女の云ふことだつ  
 て、只私の前の言葉に、後から想つて云ふのだ  
 と疑はれぬこともない。併しあの女の何れだ  
 けが、私が夢に見て居るので、何れだけが實際  
 なのか。今更あの女の實際は知りたくない、知  
 りたくない。  
 物はらぬことを云へば、其外にも数々ある。  
 あの女が、内に充實して生きて居る女だけ  
 に、外へ對しては何處か幼稚な、世間見ずとで  
 も云ふ様な所があるのは可い。それなら何故自  
 分一人の中に止まらないうで、時々自分以外の物  
 についても口を挿むのだらう。自分の悲痛を  
 切實に感ずるのは可いが、こんな悲劇を書いた  
 ものは未だ世間にならうなどと云はれるのは  
 可厭だつた。藝術家々々々と矢張り藝術家呼  
 はりをされるのも、何だか故意とらしい。それ  
 に又藝術の尊嚴と云ひ、獨立と云ひ、そんな事  
 ならあの女の説法を承はる迄もない、私の方  
 が好く知つて居る。兎に角あの女には自分の周  
 圍が見えぬ、周囲と自分の釣合が解つて居ら  
 ぬ。それだから世の中へ對してシニカルな態度  
 を執るのだ、他人を執弄するのだと云つても、  
 それが一人で左様極めて居るやうで、側から見  
 ると滑稽に成らざるを得ぬ。  
 全體自分以外のものが丸で見えないのに、自  
 分と云ふものが見えるだらうか。自分を知るの  
 は自分の周囲を知つてからのことである。あの

女が自分を非我の地位に置いて制御する習慣  
 を持つて居なかつたら疾うに狂したらうの、自  
 分を意味に取扱つて置くことだけは斷じて許さ  
 ぬのと、自分と云ふものを知り切つた様に云ふ  
 のも、餘程限定された意味に於て聞かなければ  
 成らぬ。あの女は又、自分は神の思想なぞ口に  
 する資格はないと云ふ傍から、顔に靈だとか肉  
 だとか人生觀めいたものを並べる。個人思想  
 發展の段階が果して四つの時代に分けられるも  
 のやら、それが又意思の力による精神鍛錬に依  
 つて到達せられるものやら、そんな事は私には解  
 らぬ。メレチニコフスキの象徴主義と云ふ  
 のも、只靈の救済を盾に肉を虐げる希伯來の思  
 想に對して、美と快樂とを専しまぬ希望の思想  
 を調和しようとしたまでで、あの女の云ふ様な  
 つもりぢやなからう。何れにもせよ、私はあの  
 女から主義だとか思想だとか、安價な講義めい  
 たものを聞くことを好まぬ。あの女を動かした  
 のは、そんな薄々べらなものぢやない。  
 成程、私は何日かの手紙にあの女の心持  
 を解剖して、「貴方に取つては、通例なら自己  
 否定の極限と見做される自殺も、事實上自己  
 肯定の最高潮に達したものである。自我意志の  
 極限である。貴方は生れながら自我意志を顯

示すべく運命の手に轉られて居るのだ」と、こん  
 な事を云つて遣つた。自殺を自我意志の發現だ  
 とするかしらないかは考へ様だから何方でも可  
 い。只あの女が自殺を唯一の目的だと云ふ時、  
 あの女を縛つて斷崖の上へ連れて行く者は、あ  
 の女の持つて生れた黒い運命の手でなければ成  
 らぬ。  
 見よ、此手紙の中にも一箇の殺氣が漂つて居  
 る。動かし難い決心がある。私を傷ける様なこ  
 とも敢てしたと云ふ。悪いと知りながらどんど  
 んして居たと云ふ。何んな事をしても平氣だと  
 云ふ。見かねた様を見へば可いと云ふ。こ  
 んな事は死を決した者でなければ出来ぬ。自  
 分が死ぬ覺悟をしたばかりでなく、相手も殺す  
 氣でなければ——こんな事は出来ぬ。  
 「われを理解せよ」とは、一緒に死ねと云ふこと  
 ぢやないか——最後に、  
 「それでも未だ解されて居ると信じて居る」と  
 云ふのも、私はあの女の堅い意志に引摺られ  
 て、あの女を掴んだ同じ運命の手に推込まれて  
 行く。其外に道がない。  
 併し私からはそんな手紙を送る譯には行か  
 ぬ。私の意志はあの女に通ずる由もない。  
 その夜、私は洋燈の赤い灯の下に、眼が痛ん

で薄い前世の文字が見えなく成るまで、繰返し  
 繰返し同じ手紙を讀んで居た。  
 五  
 次の朝、新聞の上で目が覚めると、私は直に  
 又あの女から手紙を思つた。七十日餘りの  
 不快な日と夜とを飛越して、此朝が直に山の朝  
 につづく様にも思つた。私は二たびあの女の  
 傍へ戻つた。  
 併しそれ許り思ひ續けては、見らなさも加は  
 つた。あの女は私の前に打明けた、私一人の  
 前に總てを發表したと云ひながら、其實何も云  
 つてやしないではないか。此長い手紙も、畢竟  
 議論が解つて、具體的には何一つ打明けては居  
 ないぢやないか。斯う自分と自分に云つて見た  
 が、自分ながら返す辭がなかつた。  
 私は此手紙に對して、返事を出したか出さぬ  
 か、能く記憶えて居らぬ。兎に角、中二日置い  
 た六月十三日の日附で、又次の様な手紙を受取  
 った。  
 拜啓、私は到底みづから己を語り得る  
 ものではない。只黙して黙へばよいのだ  
 と、好く／＼解りました。貴方の洞察力



に信頼する。どうか解してだけは居て下さい。私は何も云ひ得ない。理解ある、赤子の様な、無邪気な交はりがしたい。何處か一點相觸れた世界を持つて生きて見たい。

併し今日の様に接近することを得ずして、此土地に居ることは進も堪へない。過激な神経は益増する外ない。益人嫌ひに成る。無邪気に成ることが出来な

い。外國へ行くくと申しますのも、何れ外ではない。境遇を變へたつて自分は自分である。只海上生活をして、それからメヂエション、チャーチに寄宿して、静に思索の生活をする。傍罪のない労働をして、亂れた頭の整理をしよう、其手紙だけしたのです。

ついて此邊迄来たこともあるので、辻の拾石、加根の本の葉にも、去年の衣を取出して忘れ香を嗅ぐやうな思ひ出があつた。

最う直きだと思ふと、われながら動悸が高まつた。

あの女の苗字を標札に出した御門の前で車を降りた時には、四邊に見て居る人でもある様に、私は基でて御門を開けた。それと同時に奥の方で呼鈴が鳴つた。

「あゝ、何日かあの女から聞いた通りだ」と思ひながら、玄関に懸つた。

ん。病氣も持病の胃腹で先頃少し悪かつたのですが、最うよいのです。私から伺つても可いのですが、貴方が出て来て下されば尙やうれしい。こんな事云つて、貴方はお腹立に成るかも知れませんが、母は乾度許すと思ひます。未だ訊ねては見ませんけれど、貴方さへ御許し下されば、私は何うでも出来る。

十三日 小鳥様 御許に

總て打明けたと云ふかと思へば、二度自ら語ることが出来ないと云ふ。それが私の言葉について、如何にでも云つて居る様にも見える。併しあの女の秘密が私の考へて居る様なもので有つたら、幾度云はうとしても云ひ得ないのが當然であらう。海上生活だとか、メヂエション、チャーチだとか、そんなものが何處にあるやら、私は知らぬ。只、そんな架空に近いことでも、あの女には事實らしい。あの女なら遣りかねない様にも思はれる。そんなにして、あの女は一人何處へ行くのか、私はあの女と逢はなければ成らぬ。

様な氣がして不快だつた。

女は私の帽子を受取つて帽子掛にかけた。それから又、「此方へ」と云つて、初めてに笑つたが、私の居間にして置きました。四圍の室には誰も居ませんけれども。

「えゝ、何方でも。」

私は唯それだけ云つた。

その日、折返して返事が来た。

拜読、御手紙唯今拜見、贈手がましき御願ひ御き、入れ下され、誠にありがたく候。私は何日にも在宅、貴方の御都合よろしき日に御出頂きたく、母も其様に申し候。何も其折に申し候し候、かしこ。

私は二たび明後日の朝たづねるからと知らせて置つた。

其前の日の夕ぐれ、私は何物かが持たれる様な氣がして、部屋にも居たたまらず、寺の門前を迂路々々した。赤く燦つた門の柱に宛れながら、向側の鍛冶屋から火花が街の上へ飛んで来るのを何時迄も、眺めて居た。

いよゝ、其日の朝と成つた。

私は暗車を備つて寺の門を出た。空は晴れやかに霞んで、街の大通りに人は人出が多かつた。ぼつとした色の朝陽傘や、薄い一重に着替へた女がごろ／＼とついでた。壁の厚いじめ／＼した高層の中から出て来たので、私は彼に夏か来たやうに思つた。

白山の裏手から生垣について曲ると、新緑の匂ひが鼻の周りに迫つた。何日かの夜あの女に下さい。

女は立上つて私の側へ来た。

私は思はず其手を執つた。そして戀人が戀人を抱く様に、女の始終熱のあるやうな「貴方は思つた程冷めて居ない。」



方から云はれる迄もない、知つて居たつもりだ。またそれでなけりや、いかに私でもあんな事には成らぬ。今でも知つて居る積りです。併し貴方の口からとは何一つ聞いたことはない、何一つ打明けて貰つたこともない。今度の長い手紙だつて左様だ。あの長い文句の中に、私の聞きたいと思ふことは——肝心の事は何も書いてないぢやないか。」

私は斯う云つて相手の返辭を待たつた。女には私の云ふ意味が解つたのか解らないのか、只黙つて見返した。

「ね、此上哲學を語ることだけは、お互に止めましょう」と、眞正面に相手の顔を見ながら、「私は最う哲學ぢや生きること死ぬることも出来な

い。」  
女は顔に點頭いた。  
「ぢや、云つて下さい。貴方は如何云ふわけに家に居られないのか、家出をしなけりや成らぬのか、それが聞きたい。あの手紙にあるだけの事ぢや——あれ位の事なら、何も家出をするには及ばない、そんな事をして、兩親に心配を掛ける必要はない。」  
女は私を見る眼を反らせた。それが恰度、此男は尙且自分を解して哭れない、駄目だ」と

「あれは？」  
「姉ですよ」と女は打撃る様に云つた。「あゝ子供なんぞ可厭だ、子供を生むなぞと云ふことは考へて見るだけでも堪らない。」  
又机の前に坐つて、「夜晩く、此處に斯うして坐つて居ると、瓦斯の燃える音が大風の様にすよ。」

私は机の眞前に突出した桃色の瓦斯の花笠に気が附いた。それから段々本立に眼を移して、其中にニイツムの「ツアラストラ」の英譯があるのを見附けて、「あんなのを讀むのか」と訊いて見た。

「え、他人から讀んで見よと勧められたので、一寸。」

「で、解つたのか。」  
「矢張解らない所が多い。解つても剪断なぞ讀んで居る方が何の位面白いかわからない。」

「左様」と、私は黙つて仕舞つた。  
少時左様して居たが、  
「では、最うお母様にお目にかゝりたいから——」と云つた。

「え」と、女は立上つた。  
やがて母親といふ人に逢つた。時儀の挨拶をしてからも、此場のことには何一つ言出ら

云ふ様にも取れる。又そんな事が——長い間苦しい思ひをして隠して来た胸の奥の秘密が、云へと云はれたとて、自分の口から云へるものかと云ふ様にも取れる。私はもどかしく成つた、われを忘れて急ぎ込んで来た。

「如何しても家出をしなけりや成らぬと云ふ譯があるのか、如何しても生きて居られぬと云ふ譯があるのか？」

「私だつて」と、女は顔を背向けるやうにして、相手の聲に凭れながら、「私だつて、生きられるものなら、如何してでも生きて居たい。」

「それなら何故——如何して」と、私は女の顔を覗き込むやうにした。女の顔は破る、許りに充血して、雨眼には一杯涙が溜つて居た。

「それが——それが如何しても云はれない？え、云へない？」

女は俯向いたまゝ點頭いた。  
私は無然として腕を組んだ。  
「ぢや訊かない。強ひて聞かうとはしません」と、良有つて云つた。「では、私が思つて居る通りに思つても可いんですね、私が信じて居る通りに信じて——」

「それでも可い、私は貴方の方へ行く所へ行く。」  
「え、云へない？」  
女は俯向いたまゝ點頭いた。  
私は無然として腕を組んだ。  
「ぢや訊かない。強ひて聞かうとはしません」と、良有つて云つた。「では、私が思つて居る通りに思つても可いんですね、私が信じて居る通りに信じて——」

それぢや、私にはそれよりも好く解つて居るのだらうか。自分ながら覺えない。

母の去つた後で、「あゝして始終側に隨つて居られるのですから、それだけでも私には堪へられない」と、女が云つた。

午後の三時近く、私は其家を辭した。門を出ると共に、急に物足らぬやうな、取返し附かぬやうな心持がした。折角あの女に逢つて、あれだけ話もして居ながら、何れだけ打解けたと云ふでもない。互に心はちぐはぐの儘思ひ／＼のこと言合つて別れたやうでもある。あの女もあんな話をすると、わざ／＼私を喚んだ譯でもなからう。私は——私は只下手な役者のやうな身振をして居た。そして、あんな約束だけして仕舞つた。未だしもあの約束があるから、あの女と自分を繋いで居るとは思ふ。左様は思ふものの、あんな約束が何の役に立たう。

私は易々と一大事の約束をした——如何にも安々と。私は一日中身振をして居たと云はれる、身振をして他人の魂を玩具にしたとも云

斯う云ひながら、私は如何にも自分が憫れに見えた。こんなに迄しなければ、此女に近づくことが出来ぬかと思ふと堪らない。何も聞かずに、此儘隨つて行く。左様するより外に、私の落着く所はない。

女は私の肘に取違つた。  
「来て下さい。私の行く所へ、此度、此度。」

私はそつと女の手を執つて懐中の拳銃を握らせた。女は強くそれを握つたまゝ、鼻の上に顔を伏せて居た。

やゝ有つて、「併し、私にとつては死ぬ資格は生きたる資格と同じだ。死ぬ必要がなく成つてからでなきや、何うも死にともない。それには——書きかけた『櫻煙』だけは書いて置きたい。其間待つて呉れるでせうね。」

女は不意に顔を上げた。  
「私の方でも、いよく家を出る迄には、矢張準備も入りますから——」

二人は當もなく顔を見合せて坐つた。  
部屋の障子はわざと開放してあつた。斜に内庭を越して、應接間らしい洋館の窓が見渡された。此時、濃い芭蕉の葉の蔭に成つた窓の中に、ちらと女の影が見えた。何でも抱かれた孩兒の足と、抱いた人の紅い脛帯の邊りらしい。

はれる。それで居ながら、あんな一日延ばしのことを云つた。死に行く者に、何處に書きかけたものを書上げて行く必要があらう。あゝ、私程當に成らぬ卑しい人間はない。

私は寺へ歸るや否や自分の部屋へ歸込んで、其儘壁の上に倒れた。倒れたまゝ、暫く起上らなかつた。

併し、私は私としても、あの女は何の爲にあんな約束をしたのだらう。一旦遣つて見て失敗つた、其同じ相手を相手として、何の爲にあの女が輕々しくあんな約束をしたものであらう。それも二人の心持がしつくり合つたと云ふのなら可い、それなら聞えた話だが——いや、あの女は只道具として私を使ふのだらう。あの女はあの女一人の道を行く。其道伴として、私を連れて行く氣だらう。

あの女は心の中で何んな事を思つて居たか知らぬ。只、あの女の思ひ入つた顔色を見ると、私は萬事を抛つ、萬事を抛つてあの女に隨つて行く。私は自分で自分を當にする事が出来ぬ。只、あの女を信ずるが故に、自分自身をも信ずることが出来る。

此言葉を想出した時、私は急に救はれたやうに思つた。縦合途中で私が崩折れたとて、あ



の女は行く所迄私を連れて行かずには止むまい。  
私は直に筆を執つて長い手紙を書いた。今日あの女に對して居た時の不真面目な態度も、自分で責めて自分で白状した。其最後へ持つて行つて、

「私は悪魔かも知れぬ、併し悪魔はそれが恰に畫かれた程黒いものではない」と、沙翁の先驅者マアロウの一句を附加へた。

其手紙を手に外へ出ようとしたが、何時の間にもやら夜も更けたと見えて、車裡は寢室まつて居た。玄關脇の移戸をがたびしさせながら、やつと庭へ降りた。小走りに街の角迄行つて、郵便筒へ抛り込んだが、急に又それを取返した。い様な心持もした。

私は人通りの絶えた坂道を一人とぼくと戻つて来た。

こんな手紙を通つたとて、如何なるものかと云ふ気が頗りに仕出した。こんな手紙を通つて、今更何様しようとしても、私は女の前に自分を同輩しようとして居る。幾許自分を責めて、寸毫も憚れないやうな風を装つて見ても、矢張り女の顔を覗きしようとする下心がある。そんな事をした所で何に成らう。あの女に今日

の私の態度が解らぬ筈はない。私の心の中は見透されて居たに違ひない。

併し——と、又考へ直しても見た。それ程迄にして、私があの女に隨いて行く、あの女に離れまいとする心持は、あの女も察して呉れなからうか。成程、私は第三者かも知れぬ。あの女はあの女自身のために死ぬので、私の爲に死んで呉れるのではない。それを知りながら、私は尙且あの女から離れられぬ、あの女を思ひ切ることが出来ぬ——私は是迄他人が自分の爲に死ぬものだと思つて居た。自分が他人の爲に死なうとは思ひも寄らなかつた。何んなロマンヌに於ても自分が主人公に成れると思つた。主人公として生れて来たと思つた。併し今度は如何考へて見ても自分が主人公ぢやない、シテぢやない、ワキだ、ウレに過ぎない。そして、これが二つない自分の一生のをはりなのか、かうして終る前世であつたのか。

門のくゞりを押して這入ると、石帯が一條ほの白くつゞいて、正面には本堂の大屋根が眞黒に輝いて見えた。私は何ものにか脅かされた様にぞつとした。

こそ——と移戸を開けて、車裡から本堂を脱けようとした。須彌壇の前には、宵の勤行に上

重んずる大貴方を重んずる。自分を犯さざる如く貴方も犯さない。自分を可愛がるだけ貴方を可愛がる。自分を憎むだけ貴方を憎む。優待もする、虐待もする。何年経たないでも、消息が絶えても、自分を信じる力のある間は同様に貴方を信じて居る。誓つた事は忘れない。あの誓ひのある間は、終りの日の希望を持つて、今日の目に生きて居る。私は貴方の前に私の内に隠れて居るものの總てを出す。狂せずしては居まい。私の此方でもつて貴方も狂はせて仕舞ふ。貴方は氣違ひに成らなければ眞面目な人間には成れない、私と同じものには成れつことがない。そして二人一緒に狂死をしようと思ふのです。情死ぢやない。狂死だ。狂死です。二人の男と女とが或ものの爲にだまされて居るやうな情死なぞ、いやだ——知らずにだまされて居るのならそれで可いけれど、知つてだまされて居る譯には行かない。そんな難かしいことは出来ない。私は狂死でいい、長く生きられようとも思はないけれど、生きられる迄生きて見る。狂死が免れぬ

けた御燈明が一つ消え残つて、四邊に微かな光を投げた。しつとりと輪軸が垂れて、金色の蓮華の塵埃に埋れて黒ずんだのが目に附く。

第三者だと云つた、その同じ人が私のことを牡丹燈籠の中の男の標だとも云つたさうな。牡丹燈籠は讀んだことがないから何んな男か知らぬ。只女に取殺されると云ふ意味かも知れない。あの女に取殺されると云ふのなら——私はそれだけで満足する、満足しなければ成らぬ。

やがて私は毎夜の様に一人で蒲團を敷いた。油燈に火屋の煙つた洋燈を吹消して、ごろりと其上に横に成つた。そしてまじ／＼としながら長い一夜を明かした。

明くる日からは、只前に出した手紙の返事のみ待たれた。それが二日経つても三日経つても来ない。私は日に／＼不安な心持に襲はれて来た。終ひには、彼の一日で萬事が去つた様にも思つた。

やつと九日目に一封の手紙を受取つた。其酒印が相州ヶヶ崎とある。私は胸を毒かせながら封を切つた。

必然の運命なら最う恐れない。今迄これを恐れて居たから、火を棄てて米につくと云つた。最う恐れない。火につく、火の中へ行く。

私がないも貴方を道具にしようなどと、そんな問題ではない、そんなお安いことではない。道具に使ふのなら、何も貴方を俵たすとも外に作らうと思へば人のないこともない。あれまで自分を打明けたい人、自分を解して下さつたと思ふ人、其人を自分以外の路傍の人とは如何しても思へない。離れることは逆も出来なく成つた。生きるにも死ぬるにも關係なし

には逆も出来なく成つた。けれども如何にしたつて同じものには成れないぢやないの、如何したつて成れないぢやないの。私は貴方と同じものには如何したつて成れない。だから貴方は私と一緒に死ねるか、私だけでも殺して下さらねば成らぬ。私を殺して下さることが出来ないなら、最う仕方がない、貴方が私と同じ様なものに成つて下さる外はない。それには狂して下さいと願ふのです。貴方の意志を殺さなければ駄目だ。だから私の行く

誠に有難く、御面會後は混沌の中に住んで、私より手紙を差上げる處ではなかつた。御許下さいませ。翌日の御手紙は拝見しました。最う恐るしくて仕方がなかつた。容易に誓つて下さる程、容易に私に従つて下さる程怖ろしくて成らない。讀み了つた後は恐怖心より外になり。それに續いて取留めもない猜疑心にも苦しんだ。それで今迄筆を執ることは止めて居たのです。

かうして居ると、暗い方へ／＼と段々入つて行くやうだ。手を執つて居る人を見ると黒い。随つて自分を見れば、なに自分が黒いのだ。悪魔は輪に畫かれた程黒くはないと思へない。もつと／＼黒いやうだ。飽迄も黒いが可い。世に處女程の悪魔がどこにあるか。それだから處女の背りを重んずるのです。聖なるもの程或意味に於て最も恐るべく恐なるものはないぢや有りませんか。恐れは極度に恐れはない。平氣なものである。大膽なものである。沈着なものである。只願命に眞面目に成つて仕舞つた。最う信じ、最う信じる、貴方を信じる。自分を

重んずる大貴方を重んずる。自分を犯さざる如く貴方も犯さない。自分を可愛がるだけ貴方を可愛がる。自分を憎むだけ貴方を憎む。優待もする、虐待もする。何年経たないでも、消息が絶えても、自分を信じる力のある間は同様に貴方を信じて居る。誓つた事は忘れない。あの誓ひのある間は、終りの日の希望を持つて、今日の目に生きて居る。私は貴方の前に私の内に隠れて居るものの總てを出す。狂せずしては居まい。私の此方でもつて貴方も狂はせて仕舞ふ。貴方は氣違ひに成らなければ眞面目な人間には成れない、私と同じものには成れつことがない。そして二人一緒に狂死をしようと思ふのです。情死ぢやない。狂死だ。狂死です。二人の男と女とが或ものの爲にだまされて居るやうな情死なぞ、いやだ——知らずにだまされて居るのならそれで可いけれど、知つてだまされて居る譯には行かない。そんな難かしいことは出来ない。私は狂死でいい、長く生きられようとも思はないけれど、生きられる迄生きて見る。狂死が免れぬ



所へ来て、私と一機に狂死して下さいと願つたのです。それより外私には道がない。御承知下さつたのですね、確かなね、信じて可いのですね。若しそんな事は出来ない、お前と同じ様なものなどに成れるものと仰有るなら、今の間に斷つていただきます。さすれば私にも他に考へがある。

それでは父の許しを得て、いよいよ出發の日が定まる迄は御無沙汰いたします。今度家出をするについては全然両親が安心する程にしたいと思ひますから、貴方からの御手紙もしばらく止めて頂きたい。併し此手紙が御手に落ちたか何うか氣に成りますから、此返事だけは、女子大野内水野節子の名にして、只安否を問ねる様なものを下さい。此手紙も家の中で書く自由がないので遣へて書いたのですから御察下さいませ。一昨日から書きたいと思つて居たのですが、雨が降つて外へ出ることが出来なかつたため没れたのです。出發の際には最一度お目にかゝりたい、送つて下さいますか。今度は少し速大な考へで計畫を立てたの

ですから、貴方も其氣に成つて下さい。私は非常に性急で、時々立つても坐つても居られない様に成るけれども、又それだけ一方では人一倍辛抱強い所もある。これは一方に、他人よりも弱味が有るから自然から成つたものらしい。いづれ委しいことは御目にかゝつた上、其日迄貴方は私のことを忘れて居て下さい、そして御心の總てを御作の方へ使つて下さい。では暫く御無沙汰いたします。此地には七月下旬迄滞在。一度米國へ行くより外に仕方がない、それでなければ両親の心が安んない。御機嫌よう。

六月二十四日  
小島様 御許に  
追伸、郵便局に親戚のものが居ますから表には法名を用ひました。

あの女の名拜

心置くこともあるまい。私も許されて其最期を見届けに行く。二人はかくして日本といふ國から消えるのだ。私はこんな事迄思ひ遣つた。直に筆を執つて返事を認めた。最初は極簡潔に済ます積りであつたが、段々長く成つた。で、又それを破つて、今度はペン尖で蚊の様な小文字を綴つた。

折返して其返事が来た。拜啓、御手紙は只今落手、直に拜見しました。私は迷もかうして居られぬ所を、昨日今日と何うにか胡麻化して、かうして居るのでは有りませんか。何卒来て下さい。すつかり御話して御相談がしたい。私は手紙では如何しても書けぬ、書く時は何とか苦しまぎれの迷言業に成つて仕舞ふ。来て下さい。此手紙は明日おそく御手許へ参ることでせうから、後日の朝八時三十分名古屋行の列車で御出下さらば、十時半には此處へ着、晴天ならば散歩にかこつけて、私停車場迄お迎へに参り居り候。雨天ならば散歩にも一人行くことを許されませんか何

極端と極端とを結び合せたやうな、バラドックスめいた文句が数珠繋ぎに並べてあつたのを見ても、あゝ云ふのが御家の御用手段だとは固より知る筈がない。只、私に最うあゝいふバラドックスを聞くのが煩く成つた。自分でもバラドックスに倦れた。此期に及んで理窟は云ひたくなひ。死ぬにしても理窟で死にたくない。少し許りの期間さへしなかつたなら死ぬにも及ばぬやうな死方はしたくない。

あの女は何故いつまでも理窟を云つて居るのだらう。あの女を動かすものは理窟ぢやない、暗い事實である、怖ろしい運命である——それとも私の想像して居ることは單に私の想像に止まるのではないか、私は只自分の感情を誇大して居るに過ぎぬのではないか。若し左様だとしたら——そんな事は云ふにも忍びない。私は、水に濡れて、助けを呼ばうにも聲が出ないやうな心持がした、手應へない水を引掻きながら涙み上らうと焦心つて居る様な心持がした。併しあの女が私の前に内隠れて居るもの總てを出さうと云ふのは、矢張り事實を指したものでないか——他人より弱味を持つて居ると云ふのも、氣遣ひに成らなければ自分と

同じものには成れないと云ふのも、それなればこそ狂ひ死に死ぬのだ、私も共に狂はせぬには置かぬと云ふのだ。私は赤道直下に近い加州の労働者の中に交りながら、二人の男女が裸體の儘狂ひ廻るさまを想像して見た、狂ひに狂つた卑劣一人づつ行つて行つて行つて——何れにもせよ、あの女はあの女の云ふ通り長ら生きられる身ぢやない。それにしても、私にだけは何故かの儘に打明けて呉れぬのだらう。私は最うあの女の眞實を知らなければ、如何することも出来ない。あの日、あの儘別れたのが、今に成つては残念で成らぬ。兎に角一度逢ひたい。逢つて自分の思ふ通りを明らかに言つて見たい、そしてあの女の顔を見たい。

左様した上で、若し私の思つた通りなら、最早両親の前にも強ひて隠して居るにも及ぶまい。両親といへども、それを聞いたなら、手を束ねて、あの女の自決を傍觀する外はなからう。あの女の超人間とも云ふべき努力に免じて、切めてはあの女の心の儘に最期所を選ばしむる外はなからう。あの女にしても、両親の納得の上で、人目にかゝらぬ他所の國へ死に行く様に成れば、

辛茅ヶ崎前——この貸別荘から三日餘のところ——御投宿下された、私は十一時頃其方へ参り居り候。何れ其折にと申残し候。

二二日十一時半  
小島様 御許に

あの女の名拜

私は一議もなく明二十九日の朝、指定の汽車で立つことに極めた。それには旅費にも差支へたので、いろ／＼思案の末、古い洋服を二二着抱へて街へ出た。やがて若干の金子を懐に入れて、夕飯時に寺へ戻つた。見ると、机の上は前と同じ型の封筒に入れて、同じ手で書いた手紙が載せてあつた。私は封を切る間も手が震へた。先日來母は非常に心配して、少しも眼を離さず、私は考へることすら自由を得ず候。過日の御手紙と同時に水廻りも手紙参りしたため、母の疑ひを引き、同じ所より二通の手紙来るいはれなし、是非に見せよとのことに、生むなく見せ申候。最早母の前に公然と出来るだけのことを致すより外なく、兎も角も御出していた



き御話いたすこと、今の所許されまうにもなく、又言出された譯にもあらず、ほとほと困り果て候。あの御手紙に對して申上げたことも、又承はりたことも、数々有之候へども、今は考へることも書くことも思ふに任せず候まゝしばらく御待ち頂きたく候。今と成りては、私、も好い考へは出でず、兎に角貴方に御任せいたし置き候。尙少しく意思を得ば、私より何とか聞え上げべく候。勿々、二十八日早朝、  
 小島様 御許に  
 あの女の名

は、尙更自分で時を明けなければ成らぬ。どうせ雨の前の打明けのものだとすれば、却てそれが都合だとも思はれた。私は急に身支度をして立上つた。白洋袴の裾を裏返して、横巻吹雪のする雨の中に蠅傘の柄をかたげながら、電車の停車場まで急いだ。新橋へ着いた時は、九時に近く、八時三十分發といふのは間に合はなかつた。止むを得ず持合所の片手に腰を下して見たが、心が苛々して静手と坐つて居られさうにもなかつた。火を焚かぬ暖爐は殊更ひつそりとして、其上の欄に掛けた襦袢の中に、時々浴衣を着て雨傘を持つた男の姿が映るのも、しつぼうを寒い。

いふやうな、一種の不安が湧く。十町餘り電車に揺られて、丘と畑と松林の中を行くと、やがて海岸に近い平家建の旅館の門へ着いた。泊客の少い頃と見えて、私は直に海を見晴した奥の間へ案内された。座に着くと、茶を啜る間もなく、女中に傍附けて、硯箱を持って來させた。  
 「此近所に木村別荘と云ふのがあるのかい」と訊いて見た。  
 「へえ、御座います。家から料理を入れて居るのやでして、何でもお歳を召したお方と若い娘はんとお女中二人切りで泊つておいでやさうな。」  
 「ふむ、其處へ手紙を持って行つて貰ひたいのだが。」  
 「ええ、請有りみせん、風呂番の平どんを遣りませでな。一寸呼んで來まほうか。」  
 「ああ、左様して貰ひたいね。」  
 私に其後で彼方の母親へ宛てて手紙を書かうとした。汽車の中でも文書を考へて來たが、差當つては只胸が躍つて、字體も文章も成さなかつた。  
 やつと書き終つて、それを平どんと云ふ爺に持たせて遣つたが、其結果が案じられて、使が

歸つて來る迄は立つても居られぬやうな氣がした。母親が其手紙を受取つた時の驚きも、それから娘を喚び附けて氣問するさまも、まさしくと眼に見えた。  
 間もなく風呂番の爺が戻つて來て、「お手紙は誰に受取りました。後から直に何方へ参りますからと、斯う云ふ御返事で御座いましたと傳へた。」  
 「で、何かい、何んな人が挨拶に出て來たのか。」  
 「ええと、何でも五十恰好の品の好え奥様でしたよ。」  
 「ああ左様か、何うも御苦勞さまと、其儘爺を歸させた。」  
 いや、此處へ母親に來て貰ふとして、借何と言出したものであらう。私は只わく／＼とした。何だか目も眩くやうな大事件に成りさうな氣もして、どうも自分の手には負へさうなものだ。

「不圖、電室に二三人の泊客があるやうな氣合がしたので、急に宿の女中を喚んだ。」  
 「一寸内談があるのだからね、私の許へ御客があつたら、何處か隣の明いてる室へ通して貰ひたい。」

「斯う云ひながら、私は何となく氣が落した。女中は畏まつて退いた。其後は只何とあして心を静めようと努めた。やがて又女中が來て、「お出に成りました」と告げた。  
 私は直に別室に行つて面會した。母親と云ふ人は、毎例の通り喜子のしやかな、穩かな物の言振ではあるが、何處か他人に言さぬと云ふ風が見えた。そこへ氣が附くと、私は俄にしどろもどろに成つた。  
 「兎に角あの方が彼様迄して、親を捨てても、米利加などへ行かうとなさるについては、矢張り御兩親にも云はれぬやうな點があるかと思はれます。私は其點を——」  
 私は其點を知つて居ると云ひたかつた。併し私は本當に其點を知つて居ようか。母親よりもあの女に接近して、あの女の眞實を知つて居ようか。いや、何を云つて居るのやら自分でも分らなく成つた。  
 「で、如何しても米利加三里迄行かねば成らぬものなら、あの方も最う其點を隠して被せしやる場合ではない。私が聞いて居ることは私の口から申しても可いが、其前に最一度あの方に逢つて確と心持を問ねて見たい」と、そ



やねちやと悪汗を掻いて、枕元の蚊帳がしつとりと垂れたのも、何となく思々しい。私には思はず引開の上で起直つた。

不意に障子を開けて、女中が有明を下げて行かうとした。  
「おい」と呼び留めて、「雨戸を開けて呉れないか。」  
「へえ只今」と云つたまま、女中は縁側を断つて行つた。

やがて彼方の端から雨戸を繰る音が聞えた。さつと一枚此室の前の戸を引いた時、日は案外高かつた。  
あゝ、茅ヶ崎の夜が明けた。あの女に近く寝て居たのだ。

私は直に立上つて合敷をしに降りた。それから九時迄時計の針の進むのがもどかしかつた。強ち九時に行くとも約束はしなかつたが、餘り早くから出掛けるのも気が置かれた。

やがて風呂番の爺を案内に連れて宿を出た。門を出てから一町餘り、田圃道の三叉に分れる所迄来ると、「此道左へ取ると直ですよ」と、前に立つた爺が云つた。「あれ、彼處へ来るのが其お嬢さんでねえか。あの別荘に泊つて居るお嬢さんですよ。」

私ははつと思つて前方を見た。片方が松林の丘で、片方はちよろ／＼と露の生えた淺い沼に成つてゐる小池を、俯向き膝ちに此方へ這つて来るのは確に其人らしい。何時になく袴を着けて居らぬので、最初は自分の眼を疑つたが、向うでも此方の二人が眼についたと思えて、急に佇立つた。

「あゝ左様だ。ちや、最う可いから歸つてお呉れ。」  
斯う云つて、私は爺を歸らせた。それを見ると、女はくると向直つて引返した。私も其跡に眼いて足早に駆け出したが、女は林の中途から枝折戸を開けて、「一寸振返つて見たまゝ、ずん／＼戸の上へ上つて行つた。そして私の眼にはきちん／＼お太鼓に結んだ帯の空色だけが昨に彫りつけられた様に残つた。

私は少許枝折戸の前に立つて居たが、誰も出て来ない様子がないので、思切つて其中へ進入つた。そして壊れ掛けた坂道をだん／＼上つて行つた。それを登り詰ると、一面に砂利を敷いた庭に成つて、住別荘の縁側が一日に見えた。母子の二人は縁側に出て迎へられた。一通り時儀の挨拶が済むと、

「餘りいらつしやらないから、私おひに上らうと思つたんです」と、女はちらと前を出して笑つた。そして母親の顔を見遣つた。  
「えゝ」と云つたまま、私は手持無沙汰に控へた。

母親の顔色はどうも勝れなかつた。それでも努めて四方山の話をせられた。茅ヶ崎と云ふ所は松原と砂山ばかりで、これと云ふ取柄もない、只海岸の空気が好いとかで、大抵は病人の来る所だと云ふやうな話も出た。

「で、其後御持病の方は」と、私は間の悪いたづね方をした。  
「行都御座います、此方へ参りましてからは、毎日御陶しいお天気が續きまして、矢張りどうも」と、如何にも大儀さうに見えた。

私はしみ／＼氣の毒に成つた。  
「何分不自由な土地で御座いますして、それに連れて参つた女中も、先達で宅の都合で歸しましたから、尙更行届かぬ勝ちで」と云ひながら、茶盆を持つて次の間へ立たれた。  
そして、其儘少時出て来られなかつた。何と言出し候もないので、私はたい座敷の中を見廻した。夏場三四ヶ月の間、家族同様の遊樂の客を當てに建てた安普請のこととて、奥行もな

ければ、何一つ裝飾らしいものもない。只壁の柱に女持の銀時計を鎖のまゝ釣して、其下に四五冊の書物の散らばつたのが目につく。

私は二たび正面に女の顔を見た。女の顔は、今笑つた人とは思はれぬ程底暗く、しかも傲慢に見えた。其眼の色が人を脅かすやうな。

「大變顔色が悪い」と、あつて私が云つた。  
「左様」と、両手で頬を抑へるやうにしたが、「昨夜此とも眠らなかつたもたから。」

私は只女の顔を見詰めた。  
「一晩中同じ様な事はかり云つて居るのですもの。そりや最ら堪らない。」

私は思はず次の間を見遣つた。明け放した障子の間から、長火鉢の前で何か捜し物でもして居るらしい母親の姿がちらと見えた。

「だつて、阿母様の身に成つたら——」  
「ですから、此處へ来て静手と母の介抱をして居るんです」と、女は聲を小さくして押替せる様に云つた。「併しそれも偽善です。私は最う偽善でなしに母の介抱さへ出来なく成つた。個で私の爲に氣を揉んで呉れる人の苦痛を此上長びかすのは堪へられない。貴方も左様思つて下さいませう。」

「そんな事を、貴方は」と云つたが、私は次ぐ

べき言葉もなかつた。  
やゝ有つて又言葉を懶いだ。  
「では、貴方は如何しても亞米利加へ行く人なんでしょうね——今度の様な事がなくとも。」

「私は最う堪へられない。斯うして静手と話をして居るのも辛い。」  
斯う云ふ女の聲は暖れて居た。

「私は最う聲も出なく成つた——此處へ来てからは、夜も殆ど眠つたことがない。如何しても眠られなく成つた。物を喰へることも厭に成つた。膳に向つて食物を見るのも堪へられない。」

「貴方は、そ、それで如何する積りだ。」  
「如何も成らぬ。如何かして下さい。」  
女の手は鐵の熊手の様に青と洋袴の腰を掴んだ。

次の間の母は外へでも出たのか、其邊に見えなかつた。  
私は静に其手を執つて側へ除けた。

「今度来たのはと言出したが、其聲は自分ながら變つて居た。今度此處へ来たのは、先達で逢つた時に言残したことを言ひに来たのです。」  
女はすつくと顔を上げた。濡みを持つた其眼は底光りをして、髪の手根元まで充血した顔の色が、恰度燭臺の上に燃える蠟燭の火の様に

思はれた——今にも燃え盡きて仕舞ひさうな。私は思はず眼を反した。  
「あの時は、如何しても口へ出なかつたが、今日は思切つて云つて見る。それを訊かずには、何うも辛抱が出来さうにもない。」

「何卒仰有つて下さい、何でも構ひませんか——私も一思ひに云つて下さつた方が可い。」  
「何んな事でも。」

私はそれ限り黙つて仕舞つた。  
女も静手と見返して居たが、其儘身體をずらして、相手の胸膝の間に顔を埋めた。それが如何にも狂人の残酷な心から、鬼を誘惑して、同じ道に引込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふ様に見えた。

私は上からそれを見下したまま、「只一つこれが聞きたい、これを聞かぬ間は——」と云ひかけ、又口を噤んだ。

女は目の當り落ちて来る打撃を待つやうに、静手として動かなかつた。

「貴方の口からこれ聞きたいと思つたのは、何も昨日今日のことぢやない。貴方と云ふ人を知つた初めから——貴方は最初から自分アブノーマルな女だとは云つて居た、女ぢやないとも云つた。併し其精神生活の異常といふのは



「両親にも友達にも云へぬやうな性質のものか。如何しても家族とも朋友とも離れて行かねば成らぬやうな——」

「女は俺と私の腕を掴んだ。」

「そして私一人にそれを明かして呉れたのか——いや、最少し判然云つて下さい。貴方は自分でマニヤクだと云ふのか、あのエロトマニヤクだと——ね色情狂だと云ふのか。」

「何とも名状の出来ぬ、押殺したやうな聲が聞えた。それと共に、夏の薄い洋袴を通して、ぼたぼたと煮えるやうな涙の跡に滲むを思えた。」

「私は斧を振上げて人殺しをした様な心持がした。これから如何成るか云ふ考へもない。只揮舞の様に波打つ女の胴體を眺めて居た。」

「私はこれが云ひたかつたのだ」と、良久時して口を開いた。それぢや、貴方はそんな事を何時から知つた。何時から自分でそんな體裁が分つたのです。」

「小さい時から、未だほんの子供の時分から——其時分から違つて居た。」

「そんな時分から今日迄——誰にも云はずに隠し通して来たのですね。」

「女は黙つて點頭した。」

「私は目の當り受苦しつゝ、ある魂の祟魔を見

「で、向うちや貴女方だと云ふことを知つて居たのですか。」

「いえ、そんな事は有りませぬ。」

「母親も側で聞いて居たが、此時そつと座を立たれた。」

「私は急に向直つた。」

「ね、私は二人の間で話した話を阿母様に云ふかも知れないから、貴方も方々思つて居て下さい。」

「女の顔の筋は見る／＼堅く成つた。」

「兎に角、一度宿で阿母様にお目に掛つた上、私は直に東京へ歸らうと思ひますから。」

「女は俯向いたまゝ點頭した。」

「それが行く行けば、何の故障もなく亞米利加へ行くことが出来る様な話に成るかも知れない。併し——」

「私は相手の手を握つた。」

「最うこれで何日かはれるやら分らぬ。縱令如何成つても、貴方は貴方の計畫通りにどん／＼違つて下さい。私も自分の書きかけた物だけは書く。そして貴方の行く所へ行く準備をするから。」

「女も黙く振り回した。」

「私は何時迄も立ちとまないやうな、又急ぎ立

るやうに思つた。あゝ女は勞れたのだ、自己のマニヤと闘ふのに勞れたのだ。

不圖、茶の間の方で人の氣合がした。二人はつと離れた。

「母が歸つたのです」と、女は涙に膨れた顔に寂しい笑ひを返して云つた。

そして、急に立上つて、私の側へ来た。其處なら、次の間からは合の様に隠れて見えない。

私は顔に鬢の毛の觸れるのを思えた。

五月雨の空は底照りがして、空気が息の塞る程蒸暑い。

折柄、宿の若者らしい半纏を着た男が、黒塗の箱を下げて坂を登つて来た。それが勝手口の方へ廻ると、間もなく、母親は自分で膳を座敷へ運ばれた。女も立つてそれを各自の前に直した。

「何も御座いませんが、私共も一緒に御招待いたしますから。」

斯う言つて、母親は座に着いたが、何うも此處はひどい所で御座いまして、海邊と申しまして、お肴が不自由でと寂しい笑ひ方をした。

「大分飽が好く漁れる様で御座いますね」と、私も箸を執りながら云つた。

「はあ、最う毎日々々飽ばかりで。」

「道理で、昨宵も飽を食べさせられました。」

「本様でせう。」

三人は顔を見合せて笑つた。

併し其笑ひは直に後から消えた。大風の吹いた跡の様に、如何しても座が白けて見えた。

食事が済んだ後も、言葉の纏積がなさに、斯んなことを云つた。

「何時か彼の宿には、國木田獨歩が死んだ後で、大勢自然派の文士が集つたと云ふぢや有りませんか。」

「如何ですか」と云つたが、女は何か想ひ出した様に、貴方、伊野さんと云ふ方御存じぢやないか。」

「伊野とは？」

「あの、半部主義とやら」と云つて、母親の方を振り回した。

「いえ、知りません。貴方こそ能く御存じですね。」

「え、あの人が此家へ来ましたから」と、少時黙つて居たが、好く一人で何でも仰有る方ね。大變酔つていらして、此縁側へ掛けたまゝ長い間しやべつてお歸りなさいましたよ。」

私は此女から斯んな話を聞くのが不快だつた。

てられる心持で、別荘を辭した。

いよ／＼別れを告げて、女に背を向けた時に急に世の中が暗く成つた様に思つた。宿へ歸つてからも、只彌まへ所のないやうな氣持がついた。

一時間許り持つたが、如何したのか母親の姿が見えぬ。私は父それが氣に成つた。終ひには立つても坐しても居られない様な氣がして、上草履の襪履へ下りた。

海の水は油の様に黒ずんで、雲の切れ目から射す日光に、折々海面が照つたり陰つたりする。

見ると、渾に人だかりがしてゐる。遠目だから能くは分らぬが、七八人の通商らしいのが寄つてたかつて唾々騒いで居るらしい。砂山の背後から走つて来る子供もあつた。私は、不圖、水死人だなど云ふ様な氣がした。で、何氣なく裏木戸を開けて、段々其方へ近づいた。近づいて見ると、漁師が網を乾して居るのだと分つた。

私が網を通つても、振向きもせず、こつ／＼と網を乾して居る。

私は其處から外れて、砂の上へ引上げた小舟の舷に網を掛けた。海に向うの風が思はれる。外に風がないか何ぞの様に、何故選りに選つて

「亞米利加へは行くのだらう。あの女が一時奇習する筈たといふ、海邊とやらの禰宗の布教所と云ふのも、何となく殺風景に聞える。併し私は只あの女の亡骸を運んで行くのだ、生きた亡骸を運んで行く——それと聞いたら、両親も其亡骸だけなりとも私に呉れなからうか。」

不圖、私の名を呼ばれたやうな氣がして振り回つた。宿の女中が縁側に立つて手を振つて居るのが見える。私は直に立上つた。

室へ歸ると、被方の母親が待つて居られた。私は其前に坐つて一大事を言出さうとした、思ひ切つて云はうとした。併し如何しても口へ出ない。現在生みの親を前に置いて、そんな事が云へるものかと思つた。が、それよりも私には、現實の光の下に、そんな傳奇小説めいた事を言出すのがどうも堪へられなかつた。縱令言出しても時笑ひに過ぎない様に思はれた。で、たうとう何も言出さずに、其場だけをつくるつて別れた。

玄圃へ送り出して、一人引同した時、私は自分でもあの女のマニヤを信じて居ないのぢやないかと思つた。左様いふマニヤが有り得ようか、矢張り自分の想像で誇大して居るのぢやなからうか。あの女にしても——あの怖ろしい多感性が



只、此一つだけ書く。此世に自分が生れて来た記念として、これ一つだけは残して置く。此小説の世に出る頃、少くとも、私は此國には居なからう。小説ぢやない、遺書である。二人のために遺書を書く。

左様思ふ中から、何うもそんな事には成らぬやうな気がした。私の意志に反して、頗るそんな気がする。何にもせよ、これさへ書上げたなら、私は直様あの女の許へ走つて、あの女に合するのだ、それ迄だ、それ迄だと思ひながら、如何いふものが筆が通まぬ。殆ど一字も書けぬ。

それには金銭上の煩ひも有つた。

其月の末、私は故郷の母から絶えて久しい手紙を受取つた。そして、其中に三百圓の爲替が封じてあつた。手紙の文言に依ると、お前の方へは黙つて居たが、去年の暮、山林はたうとう人手に渡した、其金子で始めたことも、案の定、失敗にをはつた、お前には重々済まぬと思ひながら是迄隠して来た、それは呉れぬも勘辨して貰ひたい、いろ／＼骨折つて、此頃やつと半分足らず取戻した、其中二百圓は度々せつかれるので、阿江の両親に渡した、後金だけ其方へ送るから如何でも好い様にして貰ひたい、折角身體を厭つて呉れよとあるばかりで、其外の

事は何一つ書いてない。

私は何となく胸をついた。あれ許りの山林さへ無くしたら、これから母親の老後を送る道はない。此手紙の字體にも文言にも、どこか年寄染みた所があるのを見ても、老先が思ひ遣られる。親一人子一人の間で、何んか親にして、私の外に前途を見て遣るものが何處にあらうぞ。

阿江のことは只考へないことに極めた。因より私がない後の母親の身が託されよう筈もない。

私は切めてそれだけの金子でも其儘返り返さうかとも思つた。左様思ひながら、矢張それ下手を附けた。

八月と九月とは白紙の儘過ぎた。十月に入つて、初めてあの女の消息を聞く。神戸の許へ淺間山の麓から出したもので、私と二人の名宛にしてあつた。私は今其手紙を持たぬ。それに對して、何んな事を云つて遣つたものか、それも記憶えて居らぬ。只此處に其返辭がある。

御啓、御手紙は確に落手いたし候。心苦しさに堪へず候。たとひ何んな物を書くと、二たびポストに投げ込むやうな

失態は必ず／＼いふすまじく候。何卒御許したいといたすべく、只々後悔の外無之候。今日理へられて此處に歸り候ため、御返事おくれたるに候。あしからず、右のみ、かしこ。

十月十九日夕  
あの女の名

此處とは信州の松本である。同じく二十四日の日附で、

御啓、御手紙は只今有見いたしました。私の意志は決して變りません、茅ヶ崎以來變りません。けれども四日淺間の麓から差上げた手紙はあれは貴方に宛てました。過日米後附して居る通り、咄嗟に妙な氣持に成つて、最う駄目かと思つて、あんな事を書いて仕舞つたのです。間接に心變りを仄めかすのなんのと、そんな思慮分別どころか、最う切迫して来た様な氣持が頭に仕出したので、精一お餘裕を附けて、あれだけの手紙が書けたのです。全く滅茶々な事を申したと、後で後悔いたしました。自分の意志が變つたか何うかと云ふことは、今日迄改めて反省し

自製を困難にして、感情の暴ぶが儘に任せたりは、自分ながら不安の念に堪へないこともあらう。それが爲に苦悶が内部に洩れて、烈しい倫理上の葛藤に對する不健全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して快しむ——そんな事がないとも云はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとしたら——併し——と、良有つて又考へた。併しあの女の狂氣を私から解き出すことが出来ないとしたら、事實でも想像でも、何方にしても同じことである。いづれにもせよ、女はヒステリカルで、男はアブノーマルだ。救はるべき所は少しもない。

私は手を敲いて女中を喚んだ。

「停車場迄車を一臺、直に。」

「の一寸暇がかりりますが、矢張停車場迄喚びに遣りますので。」

「左様か、ぢや歩いて行かう。」

私は直に身支度をして立上つた。沼津發の上りに乗込んだ時は、やう／＼日も黃昏れて、雨の粒がはた／＼と窓の硝子を打つた。列車の中には一人も相乗の客がない。私はごろりと横に成つた。何だか自分で自分の檻を造つて行くやうな心持もした。

六

山から戻つた當座の持合せも盡きて、私はおひおひ浮世の金子につまる身と成つた。

他に上面の出来る當事も無い。折ふし故郷の家に残つた山林のことも想出しては見たが、今にも如何成るやら分らぬ私の身で、それ許りの物にも手を着ける氣には流石に成れぬ。私はやう／＼現實と云ふものから包圍せられる苦しさを覚えて来た。

其中にも、あの女からの手紙はつゞく。七月八日付の手紙には、

あの日以来、母親は中々安心どころか、思ひも寄らぬ鬱鬱をめぐらして、あり儘にては逆も始末に成らず、私渡米の儀につきては非常に口角がかり、一方ならぬ心配をしはじめ候次第、まして父などに我々の意中を明かしなすれば、何んな事に成るやも知れず、實行の上に困難を來すことと存候云々。

あ、矢張私は世間見ずであつた。如何したつて、普通の人は私達の思ふ様になぞ考へて呉れるものでない。手を動かせば動かすだけ、餘計に縛りつけの綱が緊つて行くばかりである。

私は手紙を持つたまま、身内がわな／＼と様々に思つた。

次の日、又一通の手紙を受取つた。性急な走り、

昨夜はまた三時餘りも母に口証かれました。最う家に居るのも、家の者の世話に成るのも、日増しにいやに成るばかりです。母は暇さへあれば私の部屋に来て居ます。

昨日差出しました手紙に、あまり家の者が心配するやうなら、彼地に在る同貴方とは書信の往復もしなくても可いと、場合に依つては申して仕舞ふ様に書きました。が、そんな事は出来さうもない。あれは取返さず親を厭ふことに成る。あれはただ取り消します云々。

其後、書信はふつと絶えた。

又その心に掛つた。一旦茅ヶ崎を引上げて、自宅へ戻つたとは知らせて来たが、今も未だ東京に居る。如何やら分らぬ。私はあの女を思ふ時、天の地角、只々を廻むやうな要合のない心持がした。此世の女を思ふとも思へない。

兎に角、私は書きかけた物を書かうと努めた。



たことさへない。只許して頂きたいのは、決して意思が變つたのではないけれど、時々あんなに成つて仕様がなない。私の目下の境遇と云へば、漸く家の者の眼を離されたこと云ふ迄で、其日々々の生き易い道をたづねては今日を終るに止まつて、少しも事が進んでは行かないのです。丸で見込がないのです。今の状態を幾許辛抱して見た所で、何日に成つたらと考へると最う堪へられなく成つて仕舞ふ。其瞬間の自諷を仕かねてついあんな事も書いたり、又は彼方此方と居所を變へて見るのです。時々出来ませぬ歌などを拵へて見ようと言を折るのですから、あれは許して下さい。

意思が變つたのぢや決してないのです、此處まで。

これで見ると、私は度々あの女の意思が如何の斯うのと云つて遣つたものらしい。自分で自分が不安に思はれる所から、却てそんな事を女に向つて云つたのであらう。

次に一箇月置いて、十一月二十二日の日附の

「ははは」の報告が出て、それ位迄運んだと、承はるの嬉しい。けれども大凡何日頃迄に書終る御豫定か、切めてそれだけでも聞かせて置いて下さい。安心はして待つて居るもの、何だか富度の無い様な氣持がして成らぬ。かうして待つて待つて、生きてさへ居れば、或日が来ると貴方が来て下さると云ふだけでは、時々心細く成つて仕舞ふ。それに私は此頃いけなく成つた。前程氣を附けて居るけれども、本當の自分とは關係のない出来心がふい／＼と起つて、何方が何うだか譯が分らなく成つて、つい撥送れて仕舞ひさうな氣がして成らぬ。理由はないけれども矢先に激昂しちまつて、何か書かずに居られなく成るので、頭を過ることを何でも其時々に書いて仕舞つては、後で大間違ひをして居るのではないかと心配にも成るし、又先達で神戸先生と貴方とに宛てた手紙と歌との様なことを考へると冷汗が出るし、幸ひ大概忘れて仕舞つたけれども、實は何をして居たら可いかわからない。

悲しくて／＼一晩も泣き通して、仰向け

もの。

御手紙は拜見。私は安心して居る。未だ辛抱も出来ぬから落着いて書上げて、總て準備をして下さい。夢も最う何でもなし。一時の現象だつた。實は家であまり久しく押木に掛けられて、息も吐けないやうな、壓服された氣持で居たのが、やつと出られたので、俄にそこいらの辛抱棒が緩んで方々妙に成つて来て、始末に成らなく成つたのでせう。けれども今はすつかり取戻した。此家に来てからは落着いて居ます。只最う歩くことは餘り出来なく成つた。肩が張つて来て、苦しくて、毎日家に許り引籠つて居る。平日座禪をすれば、後半日の力が出て来る。座禪をすまだけの體力のある間は、乾座禪が出来ると信じた。讀書位では容易に心が聚らない。それから木た何でもしなければ成らぬ、片附けなければ成らぬことも残つてゐる。それもする覺悟はして居る。

私、斯う云ふ状態です。未だ辛抱が出来ると信じて居る、又せねば成らぬ

寝るから涙が顔の方を流れて冷たく成つて仕舞ふ程だのに、何が悲しいのだから留めもないし、時々可笑しく成つて来て、一人で筆を出して笑ふのは見つともないと思つても、如何しても只可笑しく成るので、いよ／＼氣が遣つたのかと思ふけれども、なに、宿の人が来れば上手に話も出来るとし、母や姉から手紙が来れば、ちやんと母や姉に對するやうな返事を出すことも出来るから、未だ／＼確かだと思つて居る。

大抵何ぞ被考へては居るけれども別段自分のことなど思つて居るのでもなければ、他人の事や東京の事なんか考へたことは無論ない。只時々家のことや貴方のことや何か思ひ出して、母のこと、父にウイールヘルム、テルの話を聞いた餘程昔のことを如何にか想ひ出して悲しく成つたけれども、他人事の様な氣がして涙が出る。洋燈の灯をちつと見て居ると、自己にある私の部屋の赤いホヤの瓦斯がコオ／＼云つて燃えて居るのを思ひ出して、一度歸つて見たく成つたけれども、あんな物は如何でも可いと思つちま

と思ひ定めて居ます。云々。

追かけて、二十五日附の手紙には、更に思ひ詰めた様に、たゞ、近頃私は大變弱く成つて来たことに氣が附いた。昨夜から最うちやんとして仕舞ひました。乾度換選を切開いて出来る様にするので、動搖しないで居て下さい。當分此家を出ないことにしました。

とあつた。

かうして、私はあの女から来る手紙の中に生きて居た。其外に云ふべきことも書くべきこともない。小説は只反古が續いて行くばかりで焦燥れば焦燥る程、いよ／＼抄取らぬ。つゝまやかにして居たが、斯うの金子も盡きた。それを見かねてであらう、或人の手で私の小説は都下の或新聞へ掲載されることに成つた。其豫告も出た。

あの女の手紙も最早残り少なくなつた。此處に日附の分らぬものが一通ある。

此處はポストのない山の中の田舎ですから、郵便も遅く成ります。

つた。榮土裏の寺とやらへも一度行かうかと思つて、飯田町迄の切符を買つたけれど、汽車が来てから、そんな事をしても仕方がないと思つて、レールの中へ捨てて歸つて来て仕舞つた。

それから私の仕事、仕事と云つたから何事かと思つて頂いたのでせうが、ほんの氣まぐれに過ぎない。只私の姉に残して行くものを書いて居るので、それも別に深く考へて書いて居るのではない。三十枚許り夢話の様なものを書いて見ました。手が震へて、字が餘り亂れて居るので、書直しをするのです。生きて居る間は、斯う云ふことでも遣つて居ないと、他人に向つて飛んだ間違ひをするから、最う恐ろしくつて／＼。今度と云ふ今度は先達ばかりして仕舞つた。其時々氣分に任せて亂暴な手紙をつい出して、最う後悔ばかりしたし、後で端書で取消を出すやら、近頃は本當に馬鹿なことばかり繰り返したので、最う恐ろしいから手紙を書くことはふつ／＼止めにしました。其中で姉にだけ上げる氣になつたのは、姉は誠に／＼センチメンタルな優しい人



で、私の所へ間近に手紙を呉れる、書物を何度となく送つて呉れる、何か書いたら見せて呉れる、と云ふのです。私は如何したら可いか分らない。それで姉の所へ送らうと思つちまつた。私は残念だが何を云ふか少し疑はしいから許して下さい。

小島様 御許に

あの女の名

これを讀んだ時、私はまさしくあの女の衰へたさまを眼に見る様に思つた。最う躊躇して居る所ではない。即座に押つた筆を捨て、あの女の許へ走らうかと思つた。左様思ふ下から、切めて此作だけでも、又思ひ返す氣にも成つた。

私は返事の代りに、イブセンの「ヘッダ、ガブラア」を一冊送つた。別に如何云ふつもりもないが、女主人公ヘッダの性格と、其猛烈な復讐の念から男が畢生の力を盡めた草紙を火中する所とが、多少思ひ當る節もあつたので、折返して端書が来た。

不思議なればこれだけの事を云はせて

頂く。今後は重要な事がなければ、其日の来る迄さし控へますが、ヘッダ、ガブラアは昨夜讀み終へた處です。一海よりの夫人と二つ讀みました。

惠藤拜

それが何故不思議だらう。何だかあの女にも似ない様な心持がした。それを其儘通して置くのは、如何やら二人が命懸けで仕ようとして居ることを二たび飯事にして仕舞ひさうな、不安な心持もしたが、矢張其儘にして置いた。

次の日、私は一通の手紙を受取つた。小形の汚けた袋で、それを破つて二、三行讀むと、思はず顔色が變つた。

私は非人情で申します。私の意思は全然變りました。自分のことは自分で處理いたします。尤も死ぬのでもなければ狂するのでもない。人と關係ある位置に身を置くことは、私には最う堪へられない。信州の土地は去ります。死ぬのではないと云ふことだけ御承知願ひます。其

他總て私に關することは放棄して頂きます。以上、確かな心で斷言します。

十二月九日

小島様 御許に

あの女の名

私は手紙を其處へ抛り出したまゝ、二たび取上げて見ようと思はず、腰子と障子の棧を見詰めて居た。其間にだん／＼心も落着いた。昨日あんな愛書を送つて、今日こんな手紙を呉れる。あの女の情だ。あの女からこんな日に逢つたのも、今度が初めてと云ふ譯ぢやない。私は最初からこんな手紙を持設けて居た様にも思つた。併し今度のは是迄とは違ふ。これは皆他人の前でしたのだ。他人の爲にしたと云へる。今度二人切りの間である。誰も知らぬ二人の間で、私はたうとうあの女から投出されたのだ。最早取附く氣もない。

思へば、長い間であつた。私はあの女——あの女と云ふよりは、自分があの女の爲に抛つた過去に對する未／＼から、如何してもあの女から離れまいとした。あの女と離れたが以後、私の手には何ものも残らぬ。それが辛さに、何んな波身にも堪へて来た。昨日と今日と定まらぬ

あの女の出来心に探られながら、矢張あの女にいつ着いて居た。最後迄くつき着いて行かうとした。身命を賭しても

清石に、私は勞れた。此上また立上るだけの方もない。最う如何成つても構はぬ。此儘かうして置いて貰ひたい。ぐざと短刀で胸を貫かれた手負が、次第にのた打ち廻る方も尖せて、生臭い血汐の中に平臥つたまゝ、静手として動かないやうに、只かうして置いて貰ひたい。此儘動かさずに置いて貰ひたい。

あの女は如何成ることであらう。固より自分の責任など眼中に置く女ではない。心變りの動機もたづねるには及ばぬ。あの女の身に成れば、何日迄くつき着いて貰ひたいやうな男の来る日が待つて居られようぞ。斯う成るのが當然かも知れぬ。それにしても、あの女は信州を去つて何處へ行くのか。手紙には、くれ／＼も死ぬのではないとある。死ぬのでもなく、狂するのでもなく、人間と關係を斷つと云へば、豫々あの女の待つて居た通り、何處かの僧院へでも這入るのであらう。山奥の僧院の中に、足僧の淨い生活を嘗んで、目の前に迫つた終の目を待つとすれば、あの女に取つて是得勝勝なことであらうか。いかに私でもそれを邪魔すること

とは出来ぬ。

只、私は如何成ることぞ。あの女は去つた。行先も分らぬ。糞令分つたとしても、僧院の塀は高くして安りに入ることを許さぬ。石垣にでも頭を打附けて血反吐を吐く外はなからう。

私はそれでも机の前を動かさなかつた。良ともすれば戸外へ飛出して、足の向いた方へ行つて仕舞ひたい様な氣がするのを、呢と懐へて動くまいとした。これが一年前なら、私は直様押出して、街の中を若い如くして彷彿たものだ。うらうると河津の店から突出された治兵衛の様に、世の中を呪ふやうな眼附をして——併し今日はそれ所ぢやない、そんな眼附をして済まされる譯のものぢやない。一生の一日の様に思はれる、切めて今日一日だけでも一人て居たい。一人てしみる、此寂しさを味つて見たい。

夜が来た。小僧が来て、ガラ／＼と本堂のぐりりの戸を締つた。其音が一しきり長く、後は又一時に夜とした。

人氣のない寺の中が急に氣に成つた。最う懶はぬ。誰でも可いから人の顔が見たい。成らうことなら見ず知らずの他人の顔が——私は懐へ切れずに立上つた。其儘ふいと戸外へ出た。知らず／＼、漆端についてお茶の水へ

来た。それから柳原河岸を眞直に兩國の橋を渡つた。不圖、何處迄も眞直に行つて見る氣に成つた。只眞直に——市川から行徳の向うまでも。眞直に傍眼も振らず歩いて行くと云ふことが、今の心持に添ふ様にも思はれた。

幾つも橋を渡つた、大きなものも小さいものも。田舎道へ出た。又橋を渡つた。だん／＼夜も深けて来るらしく、終ひに大きな川の縁へ出た。川に添つて、一直並行い町家が長く、一軒あやしげな商人宿で、未だ大戸を下さずにあるのを見附けて、つと軒をくゞつた。

十五六の個々の小女が出て来て、襟掛けの儘の給仕をした。床へ入つてから、一時を打つても、階下では賑やかな話聲が止まなかつた。

明くる朝、裏の河は戸川だと分つた。鴻の姿も見えた。何處を如何歩いて来たのか、其日の夕暮れ、私は千住の大橋を北から南へ渡らうとした。遠い旅路の果に、やう／＼此處迄辿り着いた様な氣がして、ぐつたりと橋の欄干に凭れた。見ると、私よりも前に同じ欄干に倚つかゝつて、腰手と水の面に見入つて居る若い男がある。退潮と見えて、芥の浮いたどろ／＼した水が、橋代に







の女の出来心に操られて右したり左したりしながら、私にはそれが自分の思想に表現を興へ、自分の感情に形體を興へ、又自分の夢に實在性を興へるもの様に思はれた。そして、それが私の生きる唯一の道だと信じた。

只、何處かに無理があつた、始終物足らぬ所があつた。勿論あの女も普通の女ぢやない。あの女の身の周囲には、何物か常人の持つて居らぬ力がある。あの女の背後には陽光がある。それが只私の幻影とも思はれぬ。只私があの女を理想化して見て居るばかりとも思はれぬ。併し何處かに無理があつた。自分ながら強ひて左様して居るやうな形跡があつた。目のあたりあの女の實際とあの女の上に書いた幻影とが喰ひ違つて居るのを見て、私は只あの女から離れともなさに、強ひてそれを見まいとした、考へまいと努めた。

それだけにしても、矢張り離れる時には離れた。只あの女と離れた上は、私の自由だ。あの女の代り、私は私の思ふ儘に幻影をつくる。幻影を不朽にする。それに依つて、私は失つたものを取戻すのだ。其外に、私の救はれる道はない。

私は二たび現實の世界から空想の世界へ逃げた。二たび死物狂ひに成つて製作に取りかゝつた。

一日、僅かながらも原稿紙が嵩んで行つた。あの女とは別れたが、あの女のために書くのだと云ふ心持は離れない。一字といへども、一行と云へども、皆あの女の爲に書くのだと思つた。私は極力あの女を理想化した、誇張もした、文飾もした。それでも未だあの女の實際には及ばぬ様な気がした。これが出来上つた上、あの女が見たら、あの女は如何思ふだらう、何と思つて讀んで呉れるだらう。私はあの女の爲に、あの女に代つて書いて居る。

それにはいろいろ苦しいこともあつた。殆ど前例のない境遇に立つて書いて居るだけ、一寸した世間の取沙汰でも、著と胸に激して、二三日筆の執れないこともある。そんな時は、毎もこれが最後だと思つた。これを最後に書く。これが済んだ日は、私が此世から解放される日だ。従ふそんな事には成らぬにしても、二たび文筆に携はるやうなことは有るまい。左様思つて、自ら安んじた。私はこんな卑屈な状態に陥りながら、女と一緒にならうとして死に思ひ、其女にも捨てられて、自分で自分の顛末を

綴らねば成らぬと云ふやうな。こんな状態に成りながら、私は未だ自分にも何處かへロイアクな要素が残つて居ると信じて、一日の金を偷まうとしたのだ。これさへ済んだら、私の身は如何成るか分らぬと思つた。左様思ふ間から、私は能く如何も成らぬと云ふことを知つて居た。切めて文筆を賣つて口を糊すことだけは止めたいと思つても、それさへ心に任せぬのぢやないかとも思はれた。

かうして自分の胸甲斐ない心根を知つて居るだけ、私は一しほあの女が崇高に見えた。離れて居るだけ、一しほ高い山の巔にかゝつた雲か、野に燃える陽炎の様に思はれた。それ程人界を離れたものの様に、あの女を思ひ込んで仕舞つた。

あの女が霞を喰つて生きるなら、私は土の中に棲んで泥を嘗める。私は出来るだけ自分と云ふものを眞黒な色で描かうとした。意氣地のない、異腹つばい、其時自分の利益を忘れることの出来ぬ男として、殆ど取柄のない男として表はさうとした。私は自分の上に何の宗教も加へないつもりであつた。あゝ併し何事ぞ、私はそんな事をしながら、かうして自分で自分を非難して置きさへすれば、他人は最早自分を非

難する権利がないか何ぞの様に思つて居た。何と云ふ淺ましい心根であらう。其間にも、だん／＼年の暮に迫つた。私の小説が紙上に掲載される時間も近づいた。私はうか／＼側視をしては居られなく成つた。あの女との消息もふつ／＼と絶えたが、何事もなく自家に居ると云ふことだけは、何處からともなく傳はつた。あの女の氣性としても、そんな密はないがと思ひながら、そんな事に心を使つて居る暇もなかつた。

一月一日、初めて私の小説が紙上にあらはれた。小説らしい小説を書くのも初めてなら、勿論新聞に出るなぞと云ふことも初めてである。即日一人の女から書簡が来た。つゞいて田舎の女からも手紙が寄せた。いづれも何んな物を書くと案じて居たが、先は安心したと云ふ意味であつた。私はそれに力を得た。

小説は日に／＼出た。毎朝自分の書いた物の挿畫を見るのも楽しみに成つた。挿畫はカマトの様な小形の筆を省いたものであつた。只、其中にも、何となく淺ましい心持が失せない。本當に好きな者の名は、他人に云ふのも可厭なものであらう。他人に一寸漏らしただけでも、噂が抜ける様に思はれる。それを、

小説とは云へ、斯うして日々自分の秘密を隠け出して行くのは、自分自身の爲にも可厭ぢやないか。どんな話らぬものでも、秘密にさへして置けば、自分の眼にも有難く見える。此世の中にローマンスを賣す唯一のものは秘密である。私は其ローマンスがしつかり捕へたさに、自分の手でローマンスを壊して行く。私は只寂しかつた。一字書き一行綴る毎に、何とも云はれぬ淋しさに襲はれた。

それに、漸く日々の掲載に追はれ出した。最初それでも二十回分許り出来上つて居たが、四／＼間に附かれて、其日々々に出る分を前の日に書く外はない。何とも晩も机に懸つて居て、それでも未だ間に合はなかつた。斯う成れば、最早精神の労働ではない、肉體の労働である。

一月二月と経つて、山の夜の年回日も過つて来た。其頃或雑誌に、あの女の書いた脚本が載せられると云ふ噂が立つた。それを聞いても、私はどうも信じられぬ。今更あの女がそんな事をとも思つたが、噂は矢張り事實と成つた。大袈裟な廣告も出た。が、實物について見れば、夫程でもない。「退京」と云ふ題で、女主人公に第一人女の

友誼を配して、退京の言葉に従はず家を出ると云ふ筋、最後に一人の文科大學生を新橋へ喚んで無理矢理別れを告げる幕があつた。二人の中を暗示するものと云へば云へる。

勿論あの女が何んな事をしたとて、何んな物を書いたとて、私の知つたことではない。でも可厭な心持がした。何んなつもりで書いたのかは知らぬが、自分で書くのさへ可厭だと思ふもの、あの女には尙更書かせたくない。作の好い悪いに拘らず、書いて貰ひたくない。あの女には、只黙つて居て貰ひたい。私の書いた物なぞも、手に觸れても見ないと思ふ程、夕風に立つ池のさざ波の様に見做して、一人高く行ひ澄まして居て貰ひたい。左様されたら、私は堪らなく寂しからう。寂しくとも、私の眼に映じたあの女としては、左様して居て貰はねばならぬ。

あの女の最後の手紙に、人と人との關係を斷つて自分で處理するとあつたのはこんな事を指したのか、自宅に居て、こんな物を書いて日を送ると云ふことであつたのか。私は二たび其脚本を讀み回した。長い間、あの女に消息に無縁で居たので、活字に印刷されたあの女の名を見るだけでも胸が躍つた。



あの女自身に擬した女主人公の登場とあるのを見ては、目の前にあの女の姿が泛ぶ。女の友達と云ふのは勿論木下らしい。をかしい事には、二人の女の顔立やら風采やらがあべこべに成つて居た。此二人の對話の中に、父親が二人のことを心配して、何方か一人だけでも結婚して呉れたら乾度片方の意思も變るだらうと云つて居るが、私達はそんなに見えてせうかなぞと笑ひながら話合ふ所があつて、それから新時代の女性らしい議論がいろいろ並べてあつたが、何の事か能く解らぬ。解らぬ解らぬ解つたつもりで居るやうな風も見えた。併し二人が父親の前へ喚ばれて、意見をされながら、如何しても家出をすると言ひ張る、それなら理由を云へと云はれても、押黙つたまゝ、口を開かぬ。そこに云ふに云はれぬ力があつた。

父「とき子！ 其涙は何の涙ぢや？」  
娘「(泣聲にて) 御父さんには解りません。父、私に解らぬ。道理の解らぬ様な父ぢやないと言ふに。」  
父「お前の様な剛情者が泣く程悲しい譯があるなら、明かに申したら可からう。何、最う何、申すことに御座いませんか。只」

家を出して頂きます。これからは自身のために生きてますから。  
(とき子退場)

とき子と云ふのは女主人公の假名である。この父子の對話には、私は實感を以て讀まされた。併し家出の理由として只自分自身のため生きるるとしか云はぬのは、云ひたくても云へぬのか、それとも云ふべき理由がないのか。私はどうも外に云ふ事がないのではないかと云ふやうな氣が仕出した。あの女は愈々ぼぼはぬ、愈々秘密にする。其秘密に釣られて、私はあの女の周圍に幻影をうかべ、一人でロマンスを作つて居たのぢやないか。これで見れば、家庭の掃蕩と云ふものも、ほんの單純な尙氣ないものに過ぎぬ。勿論此脚本が本氣で書かれたものとは思はぬが、それにしても心にもない事は書けなからう。こんなのが本當の所ぢやないのか、これが本當だとしたら最う悲劇ぢやない喜劇だ、物笑ひだ。左様成るのが悲しさに、私は何れだけ心を盡したらう、あの女が語らなければ、私は尙更話らないのだ。それとても、最う仕方ない。

し斯う成れば愈々此作の外に頼む所はない、此作の中に自分の長い夢を託して、切めて影を固定する外に生きる道はない。  
私は今一度縮の様に勞れた身體を起した。餘りに筆の滞つた時は、人に顔を見られるかしきも忘れて、新聞社へ出かけた。社の輪轉機の側で一枚宛書く後から活字に頼んで貰つた。そんなにして漸く一日分を纏めた。  
五月のある日、私は社の樓上でやつとをはりの一回を書上げた。最う一時間も待てば明日の初版が刷れると云はれて、つくねんと待つて居た。やがてしつとりとインキの匂ひのする新聞紙を買つて、それを讀みながら戻つて来た。  
神樂坂の下で電車を降りた時は、兩側の席に夕日の影が射して居た。眞白に輝いた土地の藝者らしいのが、不常着のまま、抜衣紋をしながらぶらぶらと歩いて居るのにも出逢つた。私は不圖其邊で夕飯を済まして行くつもりになつて、坂の上の社來からやゝ引込んだ西洋料理屋へ這入つた。  
二階へ上つたが、折悪しく何處とやらの生徒の會合があるとかで、椅子段の上の狭い部屋へ通された。どつかと身體を椅子に投出したまま、流れた物の來る道つらつらとして待つて

居た。  
明日からは何を爲しよう。

こんな心持がぼつと白雪に包まれたやうな頭の中にも湧き、今日迄はそれでも爲ることが有つた。明日からは何にも爲ることがない、爲ることばかりでなく、何を爲る力もない様に思はれる。  
彼は最う不慣れた人間に成つたのか——自分にとつても不慣れた。  
私は地の底へ落ちて行くやうな心持がした。隣の部屋からは、しつかりもなく懸々しい、しかも若やかな會衆の聲が聞えた。  
矢鱈に強い酒をあふつて見たが、如何しても酔を成さぬ。そこ／＼にして其家を出た。  
九時頃私はいろ／＼世話を成つた處のつもりで、或家の玄関に立つた。鈴が鳴ると、ばた／＼と子供が大勢出て来た。中には寢巻を着代へたまゝのもあつた。私は何と云ふこともなく人の世が變らしい様に思つた。  
主人はぢつと私の顔を見ながら、  
「如何したと訊かれた。  
私は昏れた顔を隠す様にして、やつと今日書いて仕舞ひました。」  
「左様か。」

其儘少時言葉が途絶えた。  
「どうも、氣が滅入つて——これさへ書いて仕舞つたらと思つて居ましたが、矢張り不可せん。」

やゝ在つて、私は訴へる様に云つた。  
「そりや、小説を書上げたつて、そんなに愉快なものぢやないかと、主人は軽く笑はれた。  
一時間許りして、其處を離した。二たび突土へ引回して、寺の門をくぐつた。玄関から自分の部屋へ戻つて、灯火を點けて蒲團を敷くまで、さも他人の事でもして遣るやうに、只器械的に手や足を動かして居た。さて帯を解かうとして、不圖、一週間許り前に故郷から手紙が来たことを想出した。それが其儘見すにある。私は自分で見たくない手紙だと、いづれ見ではかなはぬものを知りつゝ、かうして封も切らずに捨てて置く事がある。  
私はそれを机の奥から出して、思ひ切つて讀み下した。子供の書いたやうな大きな文字で、  
此中ばたよりもないが、息がたておはし候や。私もまめに候故御安心下され候。五月二十一日は父の法事、せひ／＼とどおかへりなされたく。

江ごと来らく内に居りましたが、此春再縁して、むこを取りました。右御知らせ申上候。  
私其地へまゐりたく、念じ居候。  
五月九日  
要吉との  
は、か

「わたり目を通したまゝ、ぐる／＼と巻いて封へ突込む。直に洋燈を吹消して横に成つた。小僧が窓の戸を閉め忘れたと見えて、障子の紙がぼんやりと白く映る。私はそれが氣にかりながら、二たび起きて閉める氣にも成れない。  
江が再縁した。到頭他人の妻に——それも私が自分で左様させたのだ、自分で手を下してあの女の貞操を破らせたやうなものだ。何んな女でもあゝした上に、あゝして、あれだけ長く打捨て置けば、かう成らぬ女はあるまい、かう成つて行くのが當然であらう。私は暗にそれを豫期して居たのだ。かう成るのを待つて居たのだ。私は左様云ふ非道な男であつた。  
斯う思ひ捨て、私は強つて眠らうとした。此上あの女のことを考へるのは、あの女に對して、いやが上にも済まない様な氣がしたのだ。」



併し、私は眞實それを豫期して居たのか、それで可かつたのか、私は数々の女を知るには知つた。が、自分の爲に生れた女だと思つたのは、あの女の外になかつた。あの女だけは、此世に生れた時から自分の妻に極つて居たものと思つた。私は凡ての缺點を自認した上でも、只心の底からあの女を愛して居たことだけは誰の前でも云ひたい。成程打撃つても置いた、虐待もした。そんなにしても、毫も自分で疚しく感じない程、私はあの女を愛して居たのだ。あの女の身にしたら、随分富に成らぬ良夫でもあつたらう。是からも如何成るか分らぬ。併し何處でどんな不行跡な一生を送つたにしても、最後にはあの女の許へ歸つて行く積りであつた。あの女も私を待つて居て呉れるものと思つた。よぼ／＼と杖に縋つて、やう／＼辿り着いた私を背戸に迎へて、私の白髪頭を抱いて呉れるものは、あの女の外にならなかつた。私はあの女の一生を歌にして仕舞はうと思つた。昔の物語の中の歌に——併し左様思ふ中から、左様は成らぬと云ふことも知つて居た。今日の様な日があるよと云ふことも。

そして、愈々今日の日が来た。固よりあの女から裏切られたとは思はぬ。此方が無法なことをして居たのだから、あの女が悪いとは思はない。只後から／＼幻影の覺めて行く、其醜惡の寂しさに堪へぬ。誰に不足の言ひ様もないが、只物足らぬ。あの女が再び見ず知らずの男に嫁ぐ。私の知つて居る女が二たび他の男を知ると、何だか美しい物の汚れて行く様な気がして成らぬ。

併しこんな事を思ふのは我ながらはしたない。最う何も思ふまいと心に誓つて、頭から夜着を引被つた。とろ／＼と寝入つたかと思ふと、何か痛ろしい夢を見た様な気がして、はつと眼を覺ました。何んな夢を見たのか能く記憶えて居らぬ、只、今にも直ぐ如何かして遣らねば成らぬ、私があんな女を殺つて遣らねば成らぬ——そんな気がするばかりで、前後には何も記憶えて居らぬ。

手を隠下した。女は背後を見せたまゝ見回らうともせぬ。ぐつと夜師の張つた棒に、早や下の溜の真中にかゝつた。

彌江だ、彌江に相違ない。それにしても、あの女が我乗りの妻に——あの夜乗りと夫婦に成つたのか。

私は少時薄紙に包まれたやうな二人の姿を見送つて居たが、いやな思ひ返すのだ、あの女は今盗まれて行くのだ。斯う思ひ返すと共に、私は盗二無二驅出した。川添ひの堤について、何處迄もと夜師の姿を見かけた。如何しても水の足が早い。初めはそれでも夜師の影を見失はぬ様に居たが、一里行き、二里行く間にたうとう見失つた。それでも夢中に成つて歸けた。

其間、雨は籠突くばかりに降つた。四邊はだんだん暗く成つた。時々振返つては見當をつけた。つめた稲葉山も、霧に隠れて見えぬ。何時の間にかやう／＼と離れた。今は方角さへ分らぬ。私は一人途方に暮れた。

まゝよと、足に任せて歩いて居ると、目の前に白壁の土蔵が見えた。何でも寺の御堂の裏手らしい。前へ進ると、門の扉に昔菊の紋のついて居たのを太政官の御布令で割がした跡がある。これは彌江の實家ぢやないか。今頃こんな所へ来たのだから、あの女が悪いとは思はない。只後から／＼幻影の覺めて行く、其醜惡の寂しさに堪へぬ。誰に不足の言ひ様もないが、只物足らぬ。あの女が再び見ず知らずの男に嫁ぐ。私の知つて居る女が二たび他の男を知ると、何だか美しい物の汚れて行く様な気がして成らぬ。

私は長良の橋の上立つて居た。しと／＼と降る雨の中に、傘を降しながら橋の下を眺めて居た。河原の石はづぶ濡れに濡れても、未だ水な所へ来る筈はない。夢だと思ひながら、くぐりを押して這入つた。物音を聞きつけたのか、玄關の障子を細目に開けて、そつと女の顔が覗く。

彌江だ。

其途端に、又びしやりと障子を閉めた。私は一人雨の中に立つて居た。やがて又くぐりの聞く音がして、我を着た大男が這入つて来た。じろ／＼と私の顔を見ながら背戸の方へ廻つて行く。あの男だ——彌江と一緒に夜に乘つて居た男に違ひない。

夢だ、夢なら醒めよとあせつた。私は聲を上げて叫んだ。其聲に驚かされて、眼を開く。夜は明けたりしい。窓の障子も白んだが、四邊は未だ森として物音一つ聞えぬ。私は夜着を脱ぎ返す様にしながら寝返りを打つた。夢を見た様でもある。只そんな事を續げざまに考へて居たにせよ。それにしても、何處からあんな事を思ひ着いたのであらう。あの女と夜乗りの妻——何うやらそれがあの女の行末を暗示する様にも思はれる。あゝあの女の一生の日は暮れた。如何して遣らうにも、最う如何することも出来ない。

私はあの女を知つたそも／＼から、二人の中



ひが鼻を打った。私は驚いて巻煙草を見た。薄  
い紙の下に、髪が一筋捲き込まれて、それが  
上から透いて見える。あゝ、これだなと思つて、  
少時それを見詰めて居たが、其儘窓の外へ捨て  
た。最う次の一本に手をつける氣もない。  
考へて見れば、私は是迄何事をするにも事  
儀の様な氣がして居た。幾許自分では眞實のつ  
もりで居ても、何處かに遊戯分子が加はつて居  
た。何事も遣つて見づくであつた。未だ事  
だ、事だといふやうな心持が半分して居る  
間に、こんな事になつて仕舞つた。取返しにつ  
かぬ境遇に——少くともあの女の上を取  
返しの着かぬものにして仕舞つた。斯う成つて  
から、私はあの女を戀ふのか、戀ふるのが  
罪惡になつてからあの女を戀ふる因縁であつた  
のか。  
私は戀の悲劇を知つた。戀に不忠實なる者の  
みが、眞の戀も知る、戀の悲劇も知る。一生  
忠實にをはる人は、只戀の滑稽な半面をのみ知  
つて終るのだと、私は日頃そんな事を思つて居  
た。成程、私は戀の悲劇を知つた。併し私の  
知りたいと思つたのは、かうした悲劇であつた  
のか。  
あゝ、小説もをばつた。小説と共に人生が終

店先へ行つて、其雑誌を買つて歸つた。それを  
机の上にひろげた時は、わな／＼と指先が戦へ  
た。  
それは臨時増刊として、所謂驚くべき手紙を  
集めたもので、あの女のも其一つであつた。今、  
其概略を抜く。  
偽らざる告白  
私はストイックが所好です。堅忍にして  
情に動せざる底のものでなければ人間は駄  
目だと思ひます。女々しいといふことをあ  
らゆる意味で憎みます。男は勿論ですが、  
女でも平生から生死得脱の工夫はして置く  
べきです。従容として死につくだけの覺  
悟は何人でも日頃いたして置くべきだと思  
ひます。  
修養の或階段に於て、人は是非とも禁欲主  
義で行かねばならぬと、私は信ずる。無  
論思想上にて、これが人生に於ける最上の  
主義では決してない。修養の極致は心の  
欲する所に従つて進めざるを云ふ。平妙  
の境でなくてはならぬ。併し精神鍛錬が不  
十分な爲に、私などは遺憾ながら時とし  
て風潮と身體とが一つに出ない。誠に取づ  
べきことであるが、今日の私の境界に於

八

るものなら——小説は終つても人生はつづく。  
長たらしい、小説にも成らぬ人生がつづく。小  
説や重の興へる慰安と云ふ様なものが有るな  
ら、それは最後の眞の後は——大詰の幕が下  
りた後には、人生がないと云ふことである。あ  
あ、人生のローマンスを生き延びた人間が悔め  
な、而もやぐざなものはなからう。  
あの女——あの女と云つても、色々ごつち  
やに成つた、此自叙傳を書始めてから、始終あ  
の女と云つて来た、其女である。此處迄あの女  
で通して来たのだから、いつそ終ひ迄あの女で  
通さうかと思ふ。尤も小説の中で人の名を附  
ける位大げしいものはない。若し本名と云ふ  
様なものがあるならそれに越したものはなから  
う。其本名が云はれぬとすれば、矢張りあの女で  
済まして置く。  
私はあの女を離れて小説を書くことと云つた、あ  
の女を離れて、あの女の上に描いた幻影に形を  
與へると云つた。併し左様云ふ中から矢張りあ  
の女のために書くのだと云ふ心持は離れない。  
今こそあれ、かうして中が絶えて居るにしても、  
これさへ出来上つたら——あの女から何とか云

には仕方がない。それで實行上に於ては禁  
欲主義で行かねば成らぬ。この階段を通過  
せぬことには、一步も先に出ることが出来  
ぬのである。止むを得ぬと云ふ外ありませ  
ぬ。  
今日の小説に描出されてある人生を偽らぬ  
人生だとか、眞の人生だとか云ふのは許す  
まじきことである。眞の人生は向上せむと  
する努力無間であらねばならぬ。眞の自  
然地、大自在の解脱境に到達せむとする向  
上の道程でなくては成らぬ。一切の欲望を  
征服し、一切の誘惑と闘つて徹底せる自我  
を發揮するところに人生はあるのである。  
私が小説を讀まぬのも小説中の人物に同  
情同感する譯に參らぬのも、之が爲であ  
る。自意識が強いからと云ふやうなことも  
無いはあるまい。併しそんな事ではない。  
同情するだけの價値がないと認めるからせ  
ぬので、同情がないと云ふのは誤合が違  
ふのである。「煤煙」の中の朋子の如き者に  
對しては、未だ同情する譯には行かぬ。あ  
れでは軽い、要吉の如き人物にも同情する  
ことは出来ぬ。私は寧ろ阿江を愛する。  
今一つ、私が小説に興味のもてぬのは、

つて呉れもしよう。幾合あの女からは何とも云  
はぬにしても、何とかして近づく道もあらう。  
私は心の奥にこんな未練があつた。何處かの界  
にこんな卑しい考へを持つて居た。  
それが、小説は終つても何のこともない、何  
の音信もない。一日と経ち二日と過ぎる。私は  
毎日洞穴に面して呼吸をして居るやうな心持  
で日を送つた。  
尤も、未だ残つた仕事はある。如何かして  
書上げた小説を一冊に纏めて置きたいと思つて  
も、どうも思はずに出来ない。かねて約束があつた  
本屋は、此頃出版物の取締が厳しいと云ふの  
で、それとなく當局の意向を引いて見たところ、  
どうも駄目らしいので残念ながら、一度持つ  
て歸つたスタラップ、ブツクを返して来た。そ  
れでもと思つて、外に知合の本屋を呼んで話し  
て見たが、これも二の足を踏んだ。スタラップ、  
ブツクの上には、徒らに埃がつもつた。  
其間に、月もかはつた。何處からともなく、あ  
の女が又告げめいたものを書いたと云ふ噂が傳  
はつた。頭あの女から音信があつた。一年半  
かゝつて、「煤煙」を書いた報復は與へられた。  
最う可い、何んな事でも書くが可い。  
私は日中の炎天に萎せながら、雑誌屋の

私の頭が何方かと云へば科學的に出来て  
居るからである。何を見ても聞いても直ぐ  
抽象化する癖があるのです。骨ばかりし  
か見ぬ癖があるのです。具體の世界にはか  
り住んで居ることが出来ないのです。世間  
の事や日常の生活の事に興味を有てぬの  
も此故でせう。  
近頃いろ／＼の方々から「煤煙」のことに就  
て御質問を受けます。無論「私」と「煤煙」と  
は關係がある。少くとも朋子と私は  
關係がある。併し「煤煙」が既に藝術品で  
ある以上は、藝術の堂に參じたことのない  
私などは、一步半歩も立入ることは出来ま  
せぬ。たとひ事實と相應の點があらうとも  
作者の想像は自由なのでせう。其邊の事を  
私が彼處と申しますのは、潔しとせざる  
ところですから御返辭は致しません。  
只私が禪と云ふことに多少關係がありま  
した爲に、私の行為によつて、又あの「煤  
煙」に依つて、禪と云ふものが變なことに曲  
解されて、禪とは宜しくないものだ、危險  
なものだ、人を誤るものなどと早合點を  
なされる方が若しあるとすれば、それは大き  
な間違ひなのでして、私の行為が原因と



成つてそんな誤解を来たすとすれば、誠に申すべく思ひます。斯道の前に立つて罪を感ぜずには居られませぬ。就ては私の口から申せませぬだけのことを及ばずながら申して置くだけの義務があるかと思ひますので、私など建も云ふだけの資格はないのですけれど、少し云はせて頂きます、具眼の士の一笑にも値せぬでせう。

一體見性と云ふことは睡眠状態や夢や状態や、特殊な病的状態の中に於て實驗される様なものでは決してないのです。精神並に生理的状态の最も健全な時なので、無論覚醒状態なのですが、普通かうして居る時の覚醒状態即意識状態とは違つて、更に覺醒し、更に意識して居るでも申しませうか、意識が最高潮に達して遂に意識を超越した時なので、半意識や無意識の状態とは全然別なものです。

感官を閉塞し、心的作用を制止した幽暗と暗黒の中に、神様でも天降りするかの様にばつと光明が射込むやうなものではない。若し寂光の世界とか、永劫調和の世界とか稱するものを、斯くの如き神妙めいた、奇蹟めいたもので、特殊の状態に於て

でなければ見られぬ世界轉換の間にして消えるやうな世界、現身の儘で一寸現世を脱出して垣間見るやうな別世界であるならば、それは何程美しい世界であらうとも、楽しい世界であらうとも、私などに無関係なものです。淺草公園の活動寫眞を一寸覗いて来たのと大差ありませんまい。ところが左様ではなくて、何人も通常の状態に於て日夜見て居る此世界であるからうらしいのである。彼が即寂光土であるからういのである。決して瞬間に於て見得る特殊な世ではない。

催眠術にでもかゝつて居るやうな、不可抗の状態に陥つて居るやうな奇麗な事では、千億萬年たつても、見性などは出来ずまゝい。座禅でもして居ますと、如何にも外見は存気さうに、さも眠つてでも居る様に見えるかも知れぬが、實はきつこつはつつの大戦闘です。我々が平生「我」と思つて居るもの、エゴと稱して居るものは、實は眞の我ではない。決して實在して居るものではない。眞の我である。小我である。假想假感に過ぎぬ。千變萬化して起きては滅ぶ幻跡に過ぎぬ。この假想の我を打破し盡した

時に、眞相の我が本體を見ることが出来るのです。これを本来の面目と云つても、徹底せる自我と云つても、神と云つても、佛と云つても、何と云つても差支ありません。これが所謂即身成佛なので、靈と肉とが一枚に成つた所です。此處が所謂生死解脱の境涯です。決して耳目を閉じて外界と絶縁して死人の様に成つて居る状態ではないのです。色相即無色相なので、何もわざ／＼色相界を遠ざかる必要などはないのです。山川草木人畜、何でも一切の物を有の儘に見て、それで少しも邪魔にならぬのである。工度眞空の中に居ると同様なのである。大虚堂の中に坐つて居ると同様なのである。水晶宮裡に居ると云ふか、萬里の水河原の只中に坐つて居ると云ふか、とにかく云ひ知れぬ涼味を感ずるものです。古人も水を飲んで冷感自知すと云はれた通りで、逆も申様はありませぬ。

神は身を以て努力するものである。内なる一切の欲望、外なる一切の誘惑に克つて、眞の自我を發現する所にあるのである。更に廣義に云へば、神は心のことである。決して習儀録や、從容録の中に大人しく

居る譯のものではありません。神學などと云つて學問か何ぞの様に思はれては少々違ひます。神をいたしましても何一つ智識を煩はすものではありません。のみならず、今迄一大事の機に論じ合つて居た抽象的の空論などさらりと消えて仕舞ひます。自己其者を忘れて、他人の學説を追ひ求めて勤めて居たことの如何に愚かであつたかと云ふことが存じます。

私の日頃の修養上の實際を申して見ますと、精神訓練とか意力の養成だとか何とか難かしく云ひませんが、何は信おき二六時中自分の姿勢を正しく保つて居ることが一番だと思ひます。姿勢と云ふことは精神生活の上に至大の關係のあるものです。大變問題を語らぬことに片附けて仕舞ふやうですが、姿勢と云ふことは全く怖ろしい程道徳的生活の上に重大な關係がありま

の誘惑に克つて眞の生活をしようと思ふならば、まづ姿勢を整へることから始めねばなりません。姿勢が眞に正しく成れば、血液の循環、呼吸状態、其他の生理的状态がちゃんと整つて来ます。生理状態がちゃんと整つて来れば、決して欲情などは起るものぢやありません。起さうと思つても起つて来るものではありません。起らな

來る様に成るので。反撥的なことを直にして仕舞ふといふやうなことが無くなるのです。何も感じない、無神経だと云ふのは、外見は同じでも、其間に大變相違があります。

諄く申す様ですが、姿勢を整へると云ふことは生理的状态を整へること、生理的状态を整へると云ふことは外來の刺激に對する抵抗力を増さしめることである。欲情を制御せしめむが爲の事である。更に進めば制御の必要もなきに到らしめむが爲のことである。此處が修養の極致で、解脱の境とか、至善の境とか、理想の境とか何とか云ふ様ないろ／＼面倒な言葉は要するに此處を指したものでせう。此處が不斷に繼續すれば、二六時中この境界に遊ぶことが出来る様になれば、其人は聖人である、達人である、大悟の士である、眞の人である、自然の人である。然るに私共になると繼續すると云ふことが出来ぬ。それ故或時は自由な境に居るが、或時は不自由な境に落ちる。今日なほ不自然な一段を超越し得ぬのもこれが爲である。習儀が不十分な爲に動搖するからである。恥ぢざるを得ぬ。



私は過去の半生涯に於て何一つとしてしなかつた。何一つの仕事もしなかつた。此努力だけが私の唯一の事業なのである。私の生命なのである。誇りなのである。これを抜き去つた時、私は零なのである。此力の盡きた時は私の死です。努力は價値を生む。私が身を以てなしたる努力は私にとつては無上の價値あるものである。何物にもかへられぬ。この前にはあらゆるものを犠牲にしても惜しからざりてまで思ふのである。

勿論修養の極致に於て自殺など成立しやう筈のないは當然である。併し不軌にして中途に奮闘力が盡きるかも知れぬ。既に克たむと思へば、己を殺すより外に道はない。自殺によつて勝利を得る外に道はない。斯くして一代の戦闘史を一貫させるより外に致方がない。遺憾である。併し止むを得ぬのである。この死は死の勝利ではない。勝利の死である。勇者の死である。權威ある死である。世を厭ふが爲ではない。厭世など云ふことは許すまじき積着なこと、私は思つて居る。人間はそんな受身なことでは駄目である。人格の力は

自然の力を征服し得るものである。人生は無量弱から無量強に達する過程ではないか。

佛教がシロツペンハウエルの厭世主義の如きものであつて、私が其影響を受けて厭世的な考へでも有つて居るかのやうに御察し下され御教示下さつた方もあつた。併し私は信ずる。佛教は決してそんなものではない。涅槃寂滅とは死ではない。未來的のものではない。従つて又佛教がそんなものであつたにせよ、私は人の思念の爲に死ぬるには行かぬ。生命は佛教よりも高價なものである。私は私の平生の努力の價値を高價なる生命よりも更に高しと思ひ、更に尊しと思へばこそ死しても遺憾なしと思つたのである。又思ふのである。今後よりよく活きむが爲に或は佛教を使ふかも知れぬ。併し佛教の爲に使はれる譯には参らぬのです。以上。

何日ぞや、あの女の手紙に、「櫻子が済んだら、いろ／＼親切にたづねて呉れた師友や未見の知己に、一應自分の態度を明かにして置く積りだ」とあつたが、畢竟これがそれなんだらう。

點かあらうとも、其邊の事は彼は云ひたくはない。なぞと、妙に繕んだ物の言振をするのは卑怯である。あの女の一身だけではない、他人の家の秘密を許くことにも當るのだもの、私だつてそんな事をすりや如何成るか位のことは考へて見た。それだけの用意もした、覺悟もした。それだけの思ひをして仕上げた仕事でも、あの女が朋子でないと云ひたけりや、それも構はない。何なりとも云ふが可い。只、あの女自身は本來何者なのか、明白に名告つてからにして貰ひたい。

それには又、あの女が自分達のために神學が世間に誤解されたからと云つて、自分で神學の講義を始めたのも解らない。神學の奥義を講ずるには別に其人がある。敢てあの女を煩はすにも及ぶまい。あの女が本當に神學のために世間の誤解を解く氣なら、先づ眞先に自分の暗い半面の歴史から曝け出して、それに依つて神學の享けた汚名を、ぐぐべきである。それを爲し得ないで、只あの女の様な事を云つて居るのぢや、千萬言を費しても何の足にも成るまい。何の足にも成らぬばかりでなく、いよ／＼以て神學は危険なものだと思はせるかも知れない。それ程の事があの女には分らぬだらうか、分つて居て遺

つてるとすりや、何と云ふ空々しい仕事であらう。餘りのことに、又白ばつて居るのぢやないかと思はれる。が、心に成つて、二たび彼の當時の態度を回顧すのだとすりや、あの女の心持は最早私の考へにも頼る。何うもそれ程ぢやない、それ程深層な女とは思へない。第一、何處か幼稚な所があつた。こんな物を書いても、本當に神學のために精進得たつもりで居るのぢやないか。本氣で書いて居るのぢやないか。見よ、何處かむきに成つて居る所がある、思ひ込んで所がある。

これが本氣だとすりや、此外にあの女がないとすりや、隠して居るのも空惚けて居るのでもない、無いのだとすりや——最う何も云ふな、云つて呉れるな。あの女が神に没頭して、あの女の不安と云ひ恐怖と云ふものも、こんな所から割出されたものだとすりや、まつたく世話はない。論じて語つて見れば、こんな事だらうとは、時々思はんでなかつた。あの女の云ふ理窟が内々此方の心持に合はなかつたことも、一度や二度ではない。が、斯う明らかに打出されて見ると、何とも言ひ様のない氣持である。

尤も、其後では、そんな事を云つて白ばつて居る見ただけで、今日自分に師友と云ふものが何處にあらうか、それだけでも察して呉れとは云つて来たが、一旦云つた言葉を反古にするのはあの女の常だからわざ／＼答立する迄もない。如何にも公明正大な論旨である。誰に聞かれても差支はない。それだけに、又誰からでも聞けるやうな議論である。あの女に特殊な所がない、あの女の日からでなきて聞けないやうな所がない。私の目から見れば、あの女自身について何一つ詰つちや居ない。

成程、あの女の修養については詰つて居る。が、何故其修養が妨げられるのか。中途に奮闘力が盡きて自ら殺さなければならぬと云ふのも、何者の爲せる業ぞ。そんな不安や恐怖は何處から来るのか、あの女は何も云はない。昔から裏面の消息については一切洩らさない。それにしても、それを明かさないう程なら、こんな物を書く必要が何處にあらう。書いても意味はない。

私ももつと變つた女だと思つた、變つた所のある女だと思つた。「櫻子」の中の朋子が小説を讀まないと思ふのも、あの女の性格から推して、何處迄も自分の生活を生かすに忙しく、小説の中の男や女と一緒に成つて泣いたり笑つたりして居られないのだとした。私は其外に考へ様がなかつた。あの女の云ふ様だと、如何やら道々先生でも云ひさうなことで、世間は好からうが、矢張り私の云ふ様であつて貰ひたい。

又、ある時、あの女が自分の癖として、間々一種の恍惚状態に陥ることがある。あらゆる感覺と情調とが調和して、無念無想、限なく光明が照渡るやうに、頭の中はそよとの影を亂すものもない。同時に、諸々の活力が横溢して、自意識と存在の意識との頂點に達するものである。此状態は日夜時を定めずして起る。かうして一緒に散歩して居ながら起ることもあると云ふのを聞いて、それが見性の實験を仄めかしたものは知らないから私は的切極細の發作前に於ける症候だと思つた。慣令それぢやないにしても、あの女にはそんな様な持病があるのだらうと思つた。一つは、死の勝利の女主人公を連想したからでもある。が、私のつもり



ちや、最近あの女にはあの女に特殊な情みがあると思つたので、見性が夢幻状態であらうが、意識状態であらうが、意識を超越しようがしなからうが、そんな事は私の知つた事ぢやない。

併し、此方で如何思つても、相手が左様でなければ仕方がない。幾許あせつて見ても遠慮して見ても、あの女は矢張禪學の産んだ子らしい。禪學から生れて禪學で死なうとしたものらしい。私がそれを如何することが出来よう。

只、あの女のために、一身の破滅ばかりか、何も知らぬ家族の者の一生の運命にも取返し難い變動を来したことを思ふと、いかにも隔されて居たとは認めたくない。虚誕でも可い、何時迄も隔されて居たい。

あの女も、それなら何と思つて、私の前に心にもない振舞をして見せたのだらう。あの女は親子ぢやないかも知れぬ。只親子の様に物を言つて、親子の様に振舞つた。あの女の云つたことにも爲たことにも始終暗い影が作つた。

成らぬのを、無理矢理書くのだから堪らない。後の一つなどは、締切りの日限を越しても出来ぬので、遠方から毎日催促の使者が来た。終ひには、只其使者に立つた人が氣の毒さに筆を握るやうに成つた。

可い。手紙にも脈々其跡がある。あれが皆狂言か、狂言なら狂言でも可い。何の積りでそんな狂言をついたか——私は許さない、許すことが出来ない。

私は驚愕を握つた。指が曲つて伸びない程握り緊めて、連二無二書き續けた。次の日も一日机の前に坐つて居た。やつと書上げた物を讀んで見ると、まはり冗い厭味や揚足ばかりで、少しも急所を突いて居ない。私は落膽してペンを抛り出した。一旦は其儘棄てて仕舞はうかと

幾日待つても返事は来なかつた——そんなものに返事を出す必要がないと云ふやうでもある。私は後悔もした、苛立ちもした。そして、だん／＼不静に成つた。

私の手には只スクラップ、ブックが一冊残つた——毎日自分の手で「復讐」の切抜を貼つて置いた、あのスクラップ、ブックが。

分は文字通りの放浪者に成つたのぢやなからうか。あの女——あの女ともあれ限りに成つた。かうして此儘をはるの物が相當であらう。少くとも無事だ。それにしても、長い夢を見たものだ。あの女を知つてから、今日迄、あれだけ人騒がせもしながら、あれが悉皆私の夢なのか、自分一人でつくつて居た幻影だと云ふのか——私はそんな男なのか。

だ。あの女は只其影法師だ。影法師に似て居るばかりだ。こんな事を思つて、思ひ詰めては、俄に激罪することもあつた。

九

夏が来た。此頃から漸く死んで行く人が厭えるらしい。淋しい等ではあるが、時々思ひがけない時分に葬禮の鉦が鳴つた。そんな事が二三日つゞくこともあつた。

あゝ、今日も又誰か死んださうな。本堂の裏の薄暗い部屋の中で、柔びた筆を握りながら、そんな事を思ふ日もあつた。須彌壇の前には、日に／＼白、青、金色の蓮華が幾対となく殖えて行つた。夜に成ると、鼠が造花の罫を喰べようとして夜どほし騒ぐのが、廣い御堂の中だけにうすら淋しい。

「あゝ、小早川か。しばらく」と、私も相手の顔を見上げながら云つた。此露天に酒でも飲んだのであらう、髪の毛を長く生ばして、華美な袴をつけた細面の顔を眞赤にして居る。「何方へ」と、つい其嬉しさうな容子に釣られて訊ねた。



つた。  
 「あ、今直に行くよ」と、不意に頭の上で小早川が大きな聲を出した。  
 其聲を聴くべに眼を移すと、松本樓の軒から、縁の葉がぐれに、二三人組の女禪を着た體妓らしいのが此方を覗いて、小手拍きをして居た。あのおとなしい男が何日の間にこんな事をする様になつたらう。

「何でも構はず書いたら可いぢやないか。そんな時に却て好い物が出来るかも知れんよ」と云ひ云ひ小早川は立上つた。  
 「兎に角書く氣がないでもない、僕から云つておくことにしようね。」  
 「左様さな」と云ひながら、未だ心が極まらなかつた。  
 「ぢや、今日は失禮するよ」と、一寸私の顔を見て悪い顔しながら向うへ走つて行つた。  
 私は又正面へ向直つたが、不圖噴泉の水が出て居ないのに氣がついた。今迄それに氣が附かなかつたものか、青銅の鶴も豪石も干上つて、池の水はどんよりと濁んで居た。日盛りの炎熱に蘆棚の葉も濡れて、四邊に人も見えぬ。私は俄に淋しく成つた。  
 最う歸らう——矢張歸る外はない。

かう思つて立上つたが、足許がよろ／＼して、それを踏み應へると、急に眼が眩むやうに思つた。又その／＼と歩き出した。  
 あ、他の小説もはつた。  
 私は又其言葉を想ひ出した。おれの一生のロマンスは終つた。明日から自分を待つものは無味な、極めてプロゼイクな長たらしい月日に外ならぬ。而も自分には甘い思ひ出すらない。すべてが悪い夢であつた。あの女自身も私の夢であつた。只、あの女の顔——あの顔だけは夢ぢやない。如何してもロマンズの女主人人公の持つ顔だ。ロマンズの中の女でなけりや、あんな顔は持つて居らぬ。あの顔だけは生きて居る。あの顔だけは忘れられぬ——あ、是非がない。私の息のある限り、あの女は私を支配しなければぢまひ。

あの女の顔——私はいつそ顔と云ふ題で小説を書いて見ようかと思つた。  
 明るる例、私は俳人で小説家で、日出新聞の文藝部主任といふ人の訪問を受けた。昨夜小早川君からの手紙に接したが、次の小説を是非書いて貰ひたい、日限は二週間後に迫つて居ると云ふ話であつた。  
 一さ、書きたいには書きたいのですがと、私

の言葉は濁つた。  
 一餘り急いでお氣の毒ですが、なに書きかけきへすりや、書けますよ」と至極無造作に云はれた。  
 それを聞くと、私は長命寺の櫻餅といふ話を想ひ出さず居られなかつた。或時此人が小説を載せ始めたが、一向に未だ趣向が纏まつて居らぬ。で、主人公を向島へ散歩に遣つたまま、九日の間櫻餅を食はせて置いたといふ話である。  
 「私も好く腹案もないのに書出すことも有るんですが、其間には如何か成りますよ。」  
 「いえ、一つ書かうと思ふことも有るには有りますが。」  
 「それを如何です。」  
 「何だかそれが——幾書いても書き盡されぬ様でもあるし、又一日か二日書けば、直ぐお仕舞に成るやうな氣もするのよ。」  
 「は、は」と、其人は象の様な鼻の上に小髭を寄せて笑つた。  
 兎に角、私も如何にかして書くつもりになつて送り出した。御堂の青い墨の上に新しい絹の羽織がいかにも涼しきうに見えた。  
 私は机の前へ引回すと、俄に氣が苛々して来

た。あの女の顔——すべてが消え去つた中に、あの顔だけ残つた。何方を向いても可厭な思ひ出の中に、只一つあの顔だけが私の瞳子の底に燃着けられたやうに残つた。これが私の今の實感ぢやないか。其實感を後から藝術化して行く——何といふ變則な生活であらう。  
 それにつれて、時々聞くともなく聞いたあの女の情報も思合はされた。三松學會へ老子の講義を聴きに行つたと云ふ噂も傳はつた。麻布とやらの僧堂へ座禪に通ふとも聞いた。殊に三松學會では、あの女と知つた外の生徒が黒板にいたづら書きをしたのを、あの女は黙つて立つて行つて、それを拭き消したまふ、二たび座に着いたと云ふやうな噂もあつた。それさへ逸話と云ふものに興味をもたぬ私には、たゞ可厭に思はれた。  
 三日の間、いろ／＼思ひ悩んだ擧句、如何しても出来さうもないので、二たび斷りを云つて止めることにした。私はさき／＼陳謝の辭を列ねた。  
 恰度、其手紙を出した日の夕方であつた。私は神樂坂の下から電車に乗つた。車掌臺に飛乗つたまふ、車臺の中を覗くと、不圖、思はぬものが眼にとまつた。

あの女だ。何うもあの女らしい。  
 着て居る浴衣の模様にも、セルの袴の輪目にも見覚えはないが、夏袴の様に顔こそこけたれ、あの子供染めた髪のかき癖と云ひ、あの女の顔に違ひない。  
 私は俄に胸の動悸が打つて、遺物の袴に覆まつたまま、たじ／＼と眼が眩んで行く様におぼえた。  
 線路の交叉點で、がた／＼と車臺が揺れると、其機みに乗客の頭が皆動いた。あの女は不圖此方に向いたが、私の居るのには氣も附かぬらしい。其儘俯向いて膝の上に載せた女禪模様の風呂敷包みの端をいぢつて居た。  
 如何せう、如何して呉れよう。  
 そんな心持が私の胸の中に渦巻いた。未だ如何しようとも心が定まらぬ間に、電車は水道橋の停留所へ着いた。此處であの女は自由行に乗替へるのだと思つたから、一足先に私は電車を降りた。そして、道の真中に突立つたまま、後から降りる人々を見守つて居た。  
 やがてあの女の顔も見えた。車掌に切符を渡して、足許に氣を附けながら踏みを離れたが、仰向く拍子に私の姿を見附けた。見る／＼顔の色が暗く成つた。屹と唇を噛んだまふ、私を

目直して直直に近づいた。そして突然、  
 「何處かへ行きませう。え、何處かへ行つて好く話をしませう。」  
 又例の負け嫌ひがと、少時女の顔を見下して居たが、  
 「え、行きませう」と云つて、直に足を轉じた。  
 私は先に立つて水道橋を渡つた。女も直ぐ後から跟いて来た。日はもう高家の町の屋根に隠れて、夏の夕べの長い餘光のつゞく頃ほひであつた。控れ違ふ人の足どりも忙しかつた。私はとゞく／＼胸の中から、不圖、初めてこの女に逢つた日のことを想ひ出した。夏と冬の違ひはあれ、時刻も恰度今時分なら、場所も矢張此處だつた。かうして私の後から跟いて来た女は、不意に私を呼び留めて、  
 「何處かへ行きませう。此儘自宅へは歸りたくない」と、あの時も矢張左様云つた。それでも、私は女を伴れて他人の家の屋根の下に這入るのが快しさに、  
 「それぢや、空に星のかややく下へ」と逃れるやうなことを云つた。そして二人で上野の森へ行つた。森の下で、  
 「如何かして呉れ、如何かして仕舞つて呉れ」



と、身体を擦附けられながら、私は如何なる事も出来なかつた。私はあの女の熱湯の様な涙を人の世のものではない様に思った。小説の中の女が脱け出して来て物をぶふ様にも思った。そして、長い、釘影を描いた。此女の上に、何んなことにも成らば成れ、俺も二たび彼の様な眞似はせぬ。

私は急に自分以外の役に扮した役者のやうな、不自然な力と覺束なさをおぼえた。三叉に成つた街の角に立つて、「一寸思案して見たが、半町程先に赤煉瓦の塼をめぐらした三層樓の旅館に目を留めて、

「彼の家が好いでせう」と、頭でしゃくつた。「何方でも」と、女は軽く頭を下げた。私は其口元に微かな反語の影が泛んだ様にも思つたが、其儘思ひ切つて旅館の軒をくぐつた。

帳場に居た丸顔の主婦さんは、二人の異様な容子に目を留めて、じろく／＼と見て居たが、やがて、

「何卒お上り下さいませ」と聲を掛けた。暗い廊下を通つて、奥まつた一室へ案内された。二人は、いろ／＼持運ぶ女中には目も呉れず、座敷の片隅へ寄つて、互に面を見合せたま

ま坐つた。二人ながら何とも言出さぬ。「あの、お風呂をお召しに成りますか」と、女中は私の背後に手を突いて訊ねた。

私は一寸振回つたが、「いや、這入らない」と云つた限り、又向直つた。女中も其儘引下つた。

私は二たび目の前に女を見据えた。顔面筋肉の表情の一點一劃をも見逃さざればかりに見据えた。女は思ひの外に寛れて居た。夏場薄着の所爲でもあらうが、日頃から人並外れた進肩が、一際ほつそりとして、何處やら力なげに見えた。只、何時見ても、下腿だけは二重に括れて初々しい。

あゝ、私は何れだけ此顔に飢えて居たらう。だん／＼見て居る間に、私の心は淡雪が土の中へ沁み込むやうに溶けた。私の眼には霧が溜つた。今度逢つたら、何時何處で逢つても、何よりも先づ第一番に、

「未だ死なないのか、何時死ぬんだい」と云つて遣らうと思つた。唯今迄も左様思つて居た。何處も心の中で繰返して居た。それも最う口へは出ない。餘り口を利かぬので、女の方から微かに唇を開いた。

「如何爲さいまして、え？」と、此女の癖として少し首を右へ傾げた。

其聲を聞くと、私は又俄に胸が早鐘を撞くやうに躍つた。何か言はうとしても、物を言つたら解が顔へて情られようかとなほ黙つて居ると、女はずつと身体を延して、男の膝の上に顔を伏せようとしたが、間が隔つて居て届かない。それでも、私は強く腕組をしたまゝ、手を借すことも爲し得なかつた。

女はやがて起直つたまゝ、冷笑を含んだ眼元に、凝手と私の容子を眺めて居たが、つと膝をずらして何へ寄つて来た。

な、何を爲る氣だらう。私が何も爲し得ないのを見て、海山に功を積んだ手だれ女の態度を學ばうとするのか。今に見よ、如何するものかと云ふやうな心持がむらむらと起つた。

そこへ、西洋風に成つた入口の扉を開けて、女中が膳部を運んで来た。「貴方は夕飯を上るか。」女は只頭を掉つた。「ぢや、最晩つと後にするから、其處に左様して置いて下さい」と云つたが、二たび「おい、お」と喚び戻して、

「何でも可いから、酒の棚をして持つて来て呉れ。」

女中は畏まつて退いた。私は手酌でつゞけ様に酒をあふつた。此家の器は、建物の見かけが立派なのに似合はず、能代物の下等なもので、酒も悪かつた。つんと頭へ来さうなのを、我慢して、又蓋をかされた。初めから女には伯めようとしなかつたが、女も見かねたのか、不器用な手酌で酌をしようとした。

私は一寸其顔を見返したが、「ぢや、最ら止めませう。」かう云つて、蓋を下に置いた。口の中がえがらいやうで心持が悪い。

何時の間にか、大粒の雨がぼつり／＼降つて居た。開放した窓と、隣の土蔵との間に三尺にも足らぬので、土窖の中にも居るやうに蒸暑しい。そこへ、次の間から音も立てずに雨戸を締つて来た、盲目師の長平傘を着た宿の若者らしいのが小腰を屈めて、

「御免下さい。え、露雨が来ますですかし、一寸戸を閉めさせて頂きますと云つたまゝ、又次から次へ西戸を押して行つた。悉皆閉め終つた頃には、最う土沙降りになつて、掃をつたふ

雨の音がやかましく聞えた。室の中は人音が籠つたやうで、少しほ息苦しい。

「最う何時でせう」と、女はうつとりとしたやうな顔をして云つた。「おい、最う何時頃だい」と、私は更に膝を下げに来た女中に訊いた。

「へえと、女中は二たび膳を下に置いて、「今し方十時を打ちましたか。」

「あゝ左様か。」女は女中が扉を閉めて廊下へ出たのを見るとき、何やら急に落着かぬ素振に成つた。

「私、最ら自宅へは歸れない。」私は黙つて女の容子を見て居た。「本當に最ら歸られないと云つて、不圖、私の容子に氣が附いたのか、下から顔を見込んでやうにしたが、私、今日から貴方の寺へ押掛けで行つても宜う御座いますか。」

「来る氣が有つたら、被入しやいな。」

「何も致しませんよ。」

「何も爲なくつても宜う御座んす。」

「何れも爲なくつても宜う御座んす。」

「併し、あれぢや可厭だ。外の事を要求なすつちや、一緒に棲むだけ。」

「私は何を云ふのかと思つた。此頃、大禪寺へは行かないんですか。寺で寝て居るのなら、彼處でも可いんでせう。」



んですから。」

私は返辭をすることも忘れた。

何の爲にこんな事を云ふのだらう。一時の座興か、それともあの女に繋がる私の執着を根柢から覆さうための作話か。いづれにしても興の醒めたことには違ひない。

室の中は彌々むらむらとして、じとくくと肌汗が滲んだ。そこへ足長の蚊が来てへばり着く。女も額に汗掻いて、ぼつと上氣した。

「最う私共も臥りますから、お床をと、女中が這入つて来た。」

「そんなに晩いのか」と、私も今更今日の成行を思つたが、直に如何成るものかと思ひ返した。

「如何しませう。自宅へ電報でも打つて置ませうか」と、女は又急におどくして来た。

私にはそれが憐れに見えた。

「それが可いでせう」と云つて、女中に吩咐けて電報用紙を持つて来させた。此方の居場は省いたが、女の言ふ通りに文句を認めて、二たび車夫に持たせて電信局まで遣つた。

「寢ませう。左様して居ても仕方がない。」

かう云つて、私は蚊帳の中へ這入つた。

恰度一時間許りしてから、宿の戸をどんとと敲く者がある。四邊が寢籠まつて居るだけ

に、それが手に取る様に聞える。

女は急に半身を起した。

「お宅から」と、私も聲を呑んだ。

やがて、廊下を走る女中の足音がして、前に遣つた帳場の車夫が戻つて来たものと分つた。

私は寝苦しい一夜を明かした。朝、目を覺ますと、敷蒲團は寝汗に冷々として、身體は綿の様に疲れて居た。

未だ薄明りの間から、女は起上つた。私もつづいて顔を洗ひに立つた。洗面所には早起きの客が二三人居たが、どうも容子が日本人らしくない。間の延びた顔をして、じろく二人を眺めて居る。やがて顔を洗つて仕舞ふと、皆こそこせと二階へ上つて行つた。

あ、支那人の下宿！二人は支那人の下宿に泊つて居たのか。

左様云へば、昨夜からどうも變だと思つたことが、一々點頭かれる様でもあつた。何だか、其邊の柱や壁迄が薄汚れて居るやうにも思はれ出したが、それも思ひ返せば、昨夜といふ一夜の宿には應はしいかも知れぬ。

そこへに合歌をしたまへ、座敷へ引回した。女は先へ戻つて、鏡臺の前に寢籠れ髪を直して居たが、

一被處に居たのは、皆な支那人の様ですね」と云つても、わざと右に左に柄を持扱つたまま、振回らうとしなかつた。

私も窓の闕に腰を掛けたまへ、黙つてそれを見て居た。これから二人の身の處置を如何したものであらう。決心次第で、直にも此處を立たなければ成らぬと思ひながら、これからの事よりも、昨夜の一夜が心に懸つた。

女は朝筋から朝へかけて、思つたよりも拵せて居た。

何だかぐつたりして、骨の折れるやうなことは考へたくな。

其間、女は指先で生毛の様な顔の後れ毛を直したまへ、鏡臺を片寄せて、鏡面に顔を見合せた。何か云つたらしいが、能く分らぬ。

途端に女中が顔を出して、

「あの、此方様へお出にお出に成つた方が」と、二葉の名刺を出した。

「え、私の所へ？」と云つたまへ、私の顔色はさつと變つた。

「女關に待つてお出ですが、此方へお通し申しましたも。」

名刺の主はそれでも神戸と最一人の知人であつた。昨夜から二人の跡をたづね廻つて、やつ

と突留めたと云ふことである。何でも女の出て出した電報から足が附いて、郵便局で訊くと、直に此處だと知れたさうな。私は餘りのだしなさに身の置場もないやうな心持がした。

十

あの朝、あの様にして別れた限り、あの女の消息はふつと絶えた。偶、あの女が自宅へ戻つてから、私のことを無様に罵つて、無理にあんな所へ連れて行かれたとやら、如何されたとやら云つて居るとは聞いた。あの女が正可そんな事も云ふまいと思つた。又あの女だからそんな事言ひかねないとも思つた。何れにしても、私にはそんな事は如何でも可い。私は只あの女に逢ひたかつた。あの女の代りにと思つて「櫻櫻」を書いたのだが、一度あの女に逢つてからは、そんな小説など見かへる氣もない。自分の描いた女では、自分を満足させることは出来ない。縱令何んな女でも、何んな背景のない女であつたにしても、矢張あの女の側に居

たい。過去のことなどは如何でも構はぬ。最うあの女の心を動かさうとも思はぬから、強ひて物を言はんでも可い。物は言はんでも、只あの女の顔を見てさへ居りや可い。逢ひたいと思ふ時、自由に逢ふことが出来さへすりや、其上の望みはない。私はそれで深山だ。其日が来るのを、かうして氣長に何日迄も待つて居る——何日迄も。

あの女を思ふ日はつゞいても、あの女が如何して居るかも知らない。何をして、何を考へて居るやら、昔日分らない。私は暗がりを手探りで歩くやうな、遺瀾のない思ひがした。こんな思ひが募つては、ふらくくと等を飛出して見ても、さて、何處へ行くといふ氣もない。一足づつあの女の棲家に近づいて、夕方の暗まされにぐるりと垣根の外を一周りして来ることもあつた。自分ながら、昔の人情本の中にもありさうな、意氣地のない今様ぐうたら男の身の上も思ひ合はされて、流石に後日たい。

秋へかけて、しとくと長雨がつづいた。日に日に單衣の肌ざはりがうすら寒う成つて行く。私も外出を止めて、机の前に坐つたまへ、雨に濡れた石塔を見て暮した。石塔は圓いのも、角なものも、五輪の形をしたのもあつた。此間か

ら墓地の移轉が始まつて、片端から掘削して何處かへ引いて行つたが、それも止んだ。其跡を地均して、二階建ちの長屋が建つと云ふことであつた。それが雨のために抄取らなかつたのを、やつと雨合を見て、土臺を据えて細い柱を立てた。明くる日は最う屋根屋が来て、木羽板で屋根を葺き始めた。壁下地に取かゝるのもあつた。

私は所在なきに、毎日電からそれを見て居た。こんなにして、此窓の前にも長屋が建つ様になつたら、今に此部屋も見捨てる外はない。其上、又見知らぬ家族の中へ這入つて行くのも可厭だし、そしたら、寧ろ——私は不圖故國へ歸つて見たいと云ふやうな心が泛んだ。何處へも行く所がないとしたら、人間は矢張生れた國へかへる外はない。すべて傷いた者、敗れた者の歸つて行く故里へ——が左様思ふ下から、自分で自分を裏切るやうな、冷やかな笑ひが泛んだ。私は二たび脚江を見ては成らぬ。

矢張東京に居るんだ。東京に居たとて、別段當事もないが、切めてあの女の住んで居る所に居るのだと思へば、縱令顔は見いても、聲は聞かないでも、いさゝかの思ひ遣りに成らぬこともない。あの女と同じ土地に、同じ呼吸をして、



あの女も歳を取るのだ——私も歳を取って行く。あの女が生きて居る間は、私も生きて居なければ成らぬ。

それからこれへ、斯んなことを想ひつゞけては、氣勞れに勞れて、其儘うとく寝入ることもあつた。此日も、疊の上に肘枕をしたまゝ、思はず轉寢をしたと見えて、眼を覺ました時には、朝から降りつゞいた雨の曲も響つて居た。私は起上つて、庫裡の流元へ顔を洗ひに下りた。

何やら川口で案内を乞ふ聲がする。誰も出て行かぬと見えて、先朝から幾度も繰り返して喚んで居る。何うもそれが女の聲らしい。

私は歸りしなに茶の間を覗いて見たが、鐵瓶の湯が吹いて居るのに、誰も居ない。裏へでも出て居るか、縁側に立つて見廻したが、其邊に姿も見えぬ。で、止むを得ず、引回して、自分で上へ出て見た。

この小窓の内に浴衣を着て、乳呑兒を十文字に背負つた女が、片手にびしょ濡れの蜘蛛傘を下げて、格子戸の中に立つて居たが、私の顔を見ると突然お叩頭を二つ三つした。

「何か御用ですか」と、私は立つたまゝ云つた。

「へえ、あの此方が正定院様で？」

「あの、一寸伺ひますが」と帯の間からよれ／＼に成つた紙片を取出して、「私は斯う云ふ者を尋ねて参りましたが、角の新屋さんで訊きますと、四十三番地は此方一軒だと云ふことで——」

私は其紙片を手にとつて見た。成程、築土八幡町四十三番地大工職丹羽辰五郎とある。

「これは番地が間違つて居るやうなことが有りませぬか、私も能くは知らないんだが。」

「へえ」と、女は當惑さうな顔をしたが、「で、若しや此方で何つたら分るかと思ひまして。」

「左様ですねえ。住職でも居たら分るかも知れんが、何しろ此寺の中にや左様云ふ人は居ないやうですよ。」

「へえ」と、いよいよ沙出しさうな顔に成つた。其顔が如何にもあどけない。背中に子供を負つては居るものの、母親自身未だほんの子供の顔にも見えた。

「如何したら伺ひので御座いますらね。」

「さ」と、私はそつと胸弱さうな子供の寝顔から眼を離して、「交番で訊いて見たのですか、交番で訊けば先の人か此邊に居さへすりや大抵分るでせう。」

「左様ですか、何うも有難う御座いました」と、女は丁寧に頭を下げて、やがて「さ」と出て

行つた。門迄行くと、關の上に子供を下して、二たび背負ひ直して居るやうであつた。

私はそれを見送つたまゝ、部屋に引戻した。何と云ふこともなく、即江があんなにして自分を尋ねて来たらと云ふやうなことが思はれた。他人の子を生んで、内懐をはだけながら、乳房を荷ませて居る所なども、まさしくと眼に見えた。

その日は頭痛を被つて寢て仕舞つた。

何時の間にか、私は酒に親しむ癖がついた。「櫻樓」を書いて居た頃、夜遅く迄書き續けて、眼が冴えて眠られさうもない時、冷酒をあふつて床に入り／＼したのが癖に成つたのであらう。

近頃は庫裡の板の間に酒樽を据えて置いて、存口からたぶ／＼と湯呑に注いで来て、それをぐいぐい飲りながら筆を振ることもあつた。

一度出遣つた「櫻樓」も、本屋の番頭が此儘にするのは餘り残念だから一册宛分本にして出して見たいと云ふのに、うかと思はれて、私もついでに其氣に成つた。そのの校正やら、氣に入らぬ所を直すやらで、年の暮は忙しく廻つた。明けの春、第一巻が市上に出たが、案じた程の事もなく済んだ。第二巻は二月の半ばに出した。それだけならば何事もなかつたものを、本屋が故意に出版局を後らしたとかで、名義人

「さや、前の千香さんだ。あの女は去年の暮に廣業しましたよ。」

半ば待設けたことながら、私は間の悪い思ひをして一寸返辭にもまごつた。

少時すると、又お直の聲がして、「貴方、失禮ですけれども、何誰やらでしたのね」と訊く。

「随分薄情だね。」

「あら——だつて電話ぢや分りませぬわね、ね、ですから是非被入して頂戴な。千香さんが居ないから、そんなにお見限りなさるものぢやありませんよ。」

「左様なら」と、電話を切らうとした。

「ね、お待ち申して居りますよ、乾度ですよ」と云ふ聲が、未だ聞えて居た。

元の座へ戻つて腰を下すと一積に、何とも云はれぬ可厭な心持がした。何と思つてあんな眞似をしたらうと思つても、最う追附かない。

左様思ふと、此儘にするのが一層不問な様な氣もした。で、何がなし追かけられるやうな心持で其家を出た。電車道に沿うて、銀座の方へ歩いて行つたが、何處へ行かうと云ふ當もない。

小早川は如何して居るだらう。急に逢つて見たいやんな氣がした。いつそ今夜はあの男を喚出

として、私は法廷へ喚出された。此小説の世に出るためには、おそかれ早かれ、いづれ不祥な事が起らでは止むまいと思ひながら、事が事なので、それが爲に作物までも滑稽化されたやうな心持もして、思々しきの遺場もない。

それでも、生れて初めての場へ出ると云ふこととに、一種の好奇心がないでもなかつた。私の前には、請負師らしい、でつぶり肥つた男が、抵當物件の買取か何かで裁判長の訊問を受けながら、分り切つた罪跡を晦まきうとして、つべこべ述べ立てて居た。それを煩いと思つて聞きながら、傍聴席に控へて居ると、間もなく喚ばれて榎木の前に立つた。取調べは三分間許りで済んだ。

私は法廷を出て、待たせて置いた腕車に乗らうとしたが、何うも此儘歸る氣にも成れない。

で、車夫だけかへして、一人日比谷公園の門を這入つた。少時木立の中をくゞつて歩いたが、噴井の池の畔へ出ると、急に思ひ附いて松本樓の二階へ上つた。片隅の卓に腰を下して頰杖をついたまゝ、眼を瞑つた。

何らせこんな事が落ちだらう。

私はせせら笑ひたいやうな心持に成つた。自分も他人も笑つて仕舞ひたいやうな——その

下から、ずん／＼地の底へ落ちて行くやうな氣もした、木の根に纏つた指の力が脱けて行くやうな。

生麥酒の大蓋が行列をつくる頃、私の顔もほてつて来た。夕日の射す窓から噴井の飛沫を見下しながら、何日ぞや小早川が雛妓を伴れて居るのに此處で出逢つたことを想出した。あの後、小早川と雛妓とは時の種にも成つた。あゝして酔はれるものなら、自分も二たび酔つて見たい。

私は椅子の背に凭れたまゝ、昔知つた女の冷たい髪を毛を心に描いて居た。

やがて、つと立上つて電話室へ這入つた。手早く電話帳を繰つて、下谷の一九一三番へ繋いで、女中頭のお直と云ふのを喚んで貰つた。間もなく聞き覚えのある聲がして、「何誰? 何方様やらでしたのね」と、案外生真面目な訊ね様である。

それに出鼻を押かれて、其儘切つて仕舞はうかとも思つたが、又思ひ直して、「高砂屋の千香は未だ居るのかい」と訊いて見た。

「千香さん——居ますよ。」

「何だぜ、二三年前に出て居ただぜ。」



して、あの男一流の悪戯を相手に飯事でもするやうな遊び方でも見て居ようかと思つた。私は最う何處へ行つても傍觀者の側に立つ外はない。

一時間後には、池の中の旗亭の一間に胡坐をかいて居た。障子の腰硝子を透して、黝黒い池の水を眺めては、時々想出したやうに、盃を上げた。此家へ着くと、私は直に手紙を持たせて小早川を呼びに遣つた。それと一緒に、大抵當りをつけた悪戯を名指して三人許り掛けて置いた。その一人は問もなく遣つて来た。お客の顔馴染がないので、一寸顔馴染がなさうであつたが、女中の側へ寄つて行つて、何やら耳こすりをした。

「左様ねえ」と、女中は私の顔を見て笑つて居る。  
「百合ちゃんも来るのよ、今度は甘えたやうな聲を出して、人並外れた猪頭を頼げた。  
「誰も来ないさ、お前一人を喚んだのよ。」  
「左様、嬉しいいわねえ」と、鏡子を取上げて、「お酌！」  
私はその人を呑んだやうな言葉を聞くと、つい返辭も出さびれた。  
早く小早川が遣つて来て呉れたらと、心の中心

に念じた。やつと使の車夫が戻つて来たところ、小早川は三時頃に宿を出たまゝ未だ歸らない。此頃は好く腹におそく成るから、お歸りの程も分らないと云ふ口上である。私は思はず舌打をした。

「何方か被入しやられないの」と、側から猪頭が口を出した。  
「うむ」と云つたが、又氣を更へて、「此頃小早川は相變らず遣つて来るかい。」  
「え、被入してよ。あの、それ、あの方でせう。一昨日——一昨日の晩も御目にかゝつたわ。」  
「今夜邊り如何だらうね。何處かへ来て居ないかしら。」  
「あ、屹度被入してよ。電話で訊いて見ませうか。」  
「うむ」と、私は笑つて點頭した。  
直に駈出さうとした時、廊下で若い女の聲がした。

「あら、百合ちゃんだ」と、其儘駈出して、「一人でべちゃやくちやと喋舌つて居たが、そんな事云つても、私知らないわ」と、鼻へかゝつたやうな聲も聞えた。  
三人とも揃つて這入つて来た。一番後から来た

た柄の小さいのが、私の顔を見て、何やらうそを笑つて居たが、突然、  
「しばらく」と云つた。  
「私を知つて居るのかい。」  
「知つて居てよ。何日か日比谷公園でお目にかつたわ。」  
「能く記憶えて居るね。」  
「え、感心でしょ。」

私は不圖此子の可愛らしい味嚼齒に目を留めた。一張羅の女袴に帯を矢の字に結んで、頭からは水の滴るやうな化粧をして居るものの、両手に赤く凍瘡の出来て居るのも側々しい。かうしてむくつた男が来て、踏躰するのを待つて居るのだと思ふと、何やら悪戯を解の様にして眺めて居る小早川の心持も解つたやうな氣がした。併しいよいよ小早川が来ぬとすれば、如何したら可からう。相手と同じ水準に下つて洒落を云つたり、役者の噂をしたりするのが面白かつたら、どうも手持無沙汰で成らぬ。色氣附いたのが、わざと知氣ないやうな物の言樣をするのも煩かつた。

「誰か一人掛けませうか、悪戯さんばかりぢやありませんわ。」  
女中がかう云ふのにつれて、直ぐそれぢや

と云つて頼んだ。何事も女中任せにした。二三人電話を掛けて、最後に一人やつと来ることに成つた。

其間に小早川が遣つて来るかと心待ちに待つたが、矢張来ない。私は火桶を抱へたまゝ、ちびり／＼盃を飲んだ。やがて言のせぬやうに襖を開けて、一人の奴が半身をあらはした。  
「姐さん、お先きへ」と云つて、ぱた／＼と襖を讀つたが、悪戯どもとは一人も顔馴染がないらしい。

「悪戯さん、お盃」と、女中が取次いだ。  
「有難う」と受けたまゝ、妙に俯向き加減にして顔を上げない。  
私は這入つて来た時から、此女の顔が氣に成つた。折々波む様にして、選手と其横顔に見入つた。稍面長の顔で頸が二重に括れて居る。只髪は艶濃い。それが爲に、何處か下中でも見える。矢張自分から似させようと思つて居るんだと思ひ返した。  
三味線を下に置くのを見て、私は女の顔へ火桶を押して遣つた。  
「一夜が深けた所爲か、寒いな。」  
「冷えますことと、女は其側へ寄話ふやうにして、兩手の指を拵合せながら襦の上を見詰め

て居た。何處か人控れたやうな所も見えないが、又何處か含羞んで居るらしい様子もあつた。二三言三言談話もした。ふる／＼と腰帯が斷ち切れさうな細い聲を出して、物を言ふたび齒齦の沁むやうに息を吸ふ癖があつた。私にはそれもあの女を想出させる種であつた。

其間、悪戯どもは勝手な事をして遊んで居たが、好い加減にして切上げることにした。がやがやと立上つて、鈴々迎ひに来た腕車に乗つてかへつた。私は一足後れて出た。  
戸外の冷たい風に吹かれて、ふら／＼と反橋の上迄来かゝつた時、背後から棲をとつて駆けて来た女が、  
「御一緒に参りませう」と云つて、びたりと寄添ふやうにした。  
夕の夜の深更とて全く人通りがない。向側の待合でも戸を閉めたのか、何もの書割のやうな二階の灯も見えぬ。私は池のまはりも積りながら大膽に歩いて行つた。自分ちや酔はない積りで居ても、間からの飲みつけで大分元気が怪しい。一寸した十塊に頼いて、意氣地もなく膝を突いた。

「あ、危い」と、女は聲を上げて駆け寄つた。  
「まあ速いこと」と、手を貸して扶け起したが

ら、一私や又急いだもんだから、こら、こんなに動悸がして」と、せい／＼息をはずませながら立つて居る。私は夜目にも女の白い呼吸を見るやうに思つた。

「ね、私の行く所へ行かないかと云つて見た。何となく左様云はなさや成らぬやうな氣がした。  
「え、と云つて、少時言葉を送切らしたが、小さい聲で、「お見送り申ませう。」  
何だ、作聲をしてと思つたが、其儘何とも云はずに歩き出した。見橋を渡つて仰町へ出ると、来たらほら往來の人の影も見えた。私は、不圖何をするのかと思つた。暗がりの街を女の手を引いて歩く。あの女に似た女の手を、私は堪らないやうな氣持に成つた。  
一寸用事を想出したから、今夜は歸るよと云出した。  
「え、お歸りに成るの。」  
「今夜は歸るんだ」と、四邊を見廻して車夫の提灯に眼を附けながら、「明日にも喚んだら来て呉れるだらうね。」  
「何卒」と、女は頭を下げた。  
私は直に腕車を喚んで乗つた。二二間駈出した時には、女は未だ其處に立つて居たが、二度目



にはばたくと駆けて行く後姿が見えた。一里の夜道は、提灯の灯も水つて、膝掛の下ながら膝坊主が千切れる様に冷たかつた。朝、目を覺まして、平常の寢床の中で寝て居るのだと気が付いた時には何だか心強いやうな心持がした。其中から底に水が差して来るやうな寂しさもあつた。あゝ、常に——恨にと云ふことは、人間にはない。

一日ぶらくして居たが、夕方に成るのを待遠しいやうな気がして、外出の用意をした。何をしに行く。

電車を降りて、少時清水堂通りでぶらぶらしながら、軒洋燈のつく頃を見計つて、つと山樂の軒をくぐつた。家の中の普請をしたと見えて、前とは座敷の模様も變つて居た。私は着花を入れて来た女中を見回つて、

「お直さんが居たら、一寸来て貰つて呉れと頼んだ。」

「ええ、何でした」と、慌けた面を上げ、「お直さんを喚びますか。」

「あゝ」と云つたまま、脇息に凭れて足を投出した。

「やがてお直が段梯子を上つて来た。一まずと、仰山に驚いたらしい顔をして口を

「如何もしないさ。」

「それだつて——あ、左様だ、昨日電話を掛けて下さつたのは、貴方でしたらう。」

「あゝ、飛んだ事をしたね。」

「何ですよ。だつて、何うも聞いたやうな聲だと思つても、能く分らないし——左様ぢやありませんか。最う二年越しですよ。」

「左様かい。」

「時に、千香さんね」と、何やら聲を低めて、「あの女も可憐な事をしましたよ。」

「へえ、驚業したと云ふぢやないか。」

「そりや、引くには引きましたけれどね、自宅へ引いて、頭頭病で死にましたの。」

「死んだ？」

「私はきりとした。」

「眞個怖い體質でしたからね。それに、矢張りこんな商賣をして居ちや、如何してもね。」

「ぢや、何だね」と云つたが、何を云はうとしたのか、つい附忘れして其先が出なかつた。因より其女ともさしたる譯があつたのぢやない。只肉と肉との關係である。それも錢で購はれた一通りのものに過ぎぬ。それにしても——私は

「其間、好い日那でも日附けるさ。」

「左様ですね、精々氣を付けて授けませうよ。」

「から云つたまま、初心さうに巻煙草の吹發で火鉢の灰を掻均らして居る。」

「一つは髪が結方が違つて居る所爲でもあつたらう。昨夜あれ程迄に似たと思つたものが、今見ると左程でもない。何處か似てゐる所はないかしらと思つても、如何見ても、矢張り普通の藝者である。私は騙されたやうな氣もした。」

「あの女が死んだとしたら——」

「私は不意にこんな事を想つた。此家で知つた前の女は死んだ。兎に角に其暖かい息に觸れたおぼえもある女が死んだ。斯うして私の知つた女が一人宛おひく死んで行つたとしたら——そして、私一人後に取残されたとしたら——」

「何時の間やら、女は脇に垂れた私の手を執つて、一本指を弄つて居た。私の注意を惹くやうにそつと手の甲を撫でて見たりした。それに氣が附いてからも、私はわざと知らぬ顔をして其儘地つて置いた。」

「私、此方へ来て居ても、お稽古には毎日吉原迄行つてますよ」と、女は其手を離しながら云つた。

「随分大儀な話だね。」

冷たい手で抱かれるやうな心持がした。「本當に可憐なんですよ」と、お直は何氣なく言葉をつけた。「お寺詣りでもしてお上げなさいな。」

「らむ、左様でもしようかね。兎に角新聞に迄明はれた仲なんだから。」

「ええ、ことにやうく笑つて居たが、何の事とも解らなかつたらしい。」

「で、今夜は——急に眞顔をつくつて、誰か喚んで来ませうね。」

「さ。」

「何ですええ、そんな陰氣な顔をして、一つ景氣をお附けなさいよ。」

「そんな事を云はれると、いよく屈送するのだが、それでも、吉三郎の補助と云ふなア、此家へ来るかい」と訊いて見た。

「お直は一寸首を傾けたが、「此頃に出たんでせう。」

「左様らしいね。」

「ぢや、補助さん掛けますか。」

「あゝ。」

「一人置いてけ抛りにされて、酒盃を下に置いたまゝ、まじりと松に目の出の床の懸軸を見ていると、やがて「此方」と云ふ聲が段梯子の

「ええ、だつて、それ位のこと。それに親爺が彼方に居るものだから。」

「何だい、親爺さんは。」

「親爺ですか」と、一寸此方を見たが、「吉原の相間。」

「私は思はず其顔を見返した。相間と云ふもの、爲水春水の「梅屋」で讀んだ外には知らぬ。只、左様聞けば、此女がわざとらしい嬌羞を含んだ中にも、少しも思ひ上つた所のない、藝者らしい張さへ持たぬ様に見えたのも、今更思ひ合はされる。」

「女は何氣なく語りつづけた。」

「あんな商賣をして居ながら、本當に變人ですよ。第一お人湯が嫌ひで、幾許押出すやうにしても、一月に一度位しき入らない。」

「不思議だねえ、それが本當なら。」

「ええ、眞個なの。」

「こんな事から、お座敷ではベコ／＼頭を下げて居るだけ、家では又我儘で手に負へぬ、始終氣六かしい顔をして、妻子にも小言の絶間がない、其爲家中の折合がわるく、阿母さんが改訂で二度目の棲を執るやうに成つたんだと、そんな事迄話して聞かせた。最後に、

「私、それでも阿母さんより阿父さんの方が好

「ええ、だつて、それ位のこと。それに親爺が彼方に居るものだから。」

「何だい、親爺さんは。」

「親爺ですか」と、一寸此方を見たが、「吉原の相間。」

「私は思はず其顔を見返した。相間と云ふもの、爲水春水の「梅屋」で讀んだ外には知らぬ。只、左様聞けば、此女がわざとらしい嬌羞を含んだ中にも、少しも思ひ上つた所のない、藝者らしい張さへ持たぬ様に見えたのも、今更思ひ合はされる。」

「女は何氣なく語りつづけた。」

「あんな商賣をして居ながら、本當に變人ですよ。第一お人湯が嫌ひで、幾許押出すやうにしても、一月に一度位しき入らない。」

「不思議だねえ、それが本當なら。」

「ええ、眞個なの。」

「こんな事から、お座敷ではベコ／＼頭を下げて居るだけ、家では又我儘で手に負へぬ、始終氣六かしい顔をして、妻子にも小言の絶間がない、其爲家中の折合がわるく、阿母さんが改訂で二度目の棲を執るやうに成つたんだと、そんな事迄話して聞かせた。最後に、

「私、それでも阿母さんより阿父さんの方が好



「いよいよと云つた。  
何の爲に此女がこんな話をしたのか、私には解らない。」  
其夜、一時近く、私は此家を出た。  
「今度吉原のお師匠さんのお渡ひが常盤華壇であるんですが、貴方も来て下さらない？」と、歸りに女が云つた。  
「お前さんも出るのかい」と訊くと、  
「ええ、お都合に詰らないものを。」  
「何だい。云つて御覽なさいな。」  
「本當に引立たなくつて、詰らないもの。賤儀の船頭と、それから名取が五人揃つて、新しく手の附いたものを一つと。」  
「賤儀の船頭なら好いぢやないか、私も二三年前歌舞伎の藤間の渡ひで見たやうだ。」  
「好う御座んしたでせうね。藤間さんのは土臺が舞臺踊りですから、私達のは云はゞ座敷踊りで、只、お座敷ぢや矢張ね。」  
「そんなものかい。」  
「ですが、本當に被入して下さるの。」  
「お邪魔に成るんでなけりや、見せて貰はうね。」  
「ぢや、乾度、宜う御座んすか。」  
「あ、乾度。」

二人は言葉番番へ別れた。  
十一  
朝晴れの日は、私は手に持った鴉べんを抛出して、疊の上に寝轉んだま、天井を見詰めて居た。廊下を小走りに来る女の足音がして、  
「朝からお勞れ？」と、楚妻の聲が聞えた。  
「思はずばかりと眼を閉くと、  
「まあ眼を覺ましてお坐んなさいな。好い物が参りましたよ」と、蓬葉な口の利方をして、手に持ったものを枕頭に置いた。  
「何です」と云ひさま、起直つて見ると、小本に型どつた番組に花柳歌代として、扇子と手拭とが添へてある。  
「へえ」と云つて手に取りながら、「誰が持つて来ましたか。」  
「左様ですね。六十位の肥太つた婆さんに、てら／＼した坊主頭の男が隨いて——二人とも身形はちやんとして居ましたよ。お婆さんが白襟紋附なら、片方も仙平の袴を穿いて、そりやア流とした服装でしたよ。」  
「未だ居るんすか。」  
「いえ、最う歸りました」と、楚妻は一寸間の悪さうにしながら、「只ね、此方に小島さんと仰有

した。花道脇には常陸山かと思はれる角力取りが居る。長髪で誇を穿いた男は浪花節語りや雲右衛門らしい。何處にも色街の勢力がうかゞはれた。  
幕が上ると、山嶽の上に、ずらりと並んだ長唄連中の三味線に伴つて、八つか九つ位の分不相應に大きな聲を上げた女の子が、日傘を翻して千代紙の草紙を抱へたまゝ、ちよこ／＼と花道から出て来た。蝶に振るの振も美しい。番組を見ると、河内樓おしんとあつた。大きなリボンを下げた花環なども舞臺へ持出された。  
次は濱松風で、此兵衛に成つた女の調子外れな聲が聞き苦しい。私はかうして一人講相手もなく見知らぬ人々の間に挟まれて居るのが段々不安に成つた。終には舞臺よりも其方が氣に成り出した。で、少時廊下へ出て彼方此方見廻して居たが、別に仕様もないので、又元の座へ戻らうとすると、後から追越るやうにして舞助が跟いて来た。  
「好く来て下さつたわねえ」と云つて、前へ廻りながら、「何時の間にか被入したの。」  
「先刻から——最う歸らうかと思つてる。」  
「如何して、折角被入したんぢやありませんか」と、急に鼻聲に成つて、

「最う二つで私の番だから、それだけでも見ていらして下さいな。」  
「あ、と、私は何方とも附かぬ返辭をした。  
「私が好い加減に云つて、酒井様のお邸へ何つたついでに廻らせましたのよ。」  
「何だかお婆さんの人も居たと云ふが、それがお師匠さんだらうね。」  
「え、左様なの」と云ふ時、又幕が開いたらしく、  
「ぢや、宜う御座んすか。乾度被坐しやいよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駈けて行つた。  
其幕が下りると、直に又遣つて来た。伏目に足袋の爪先を見ながら、小さい聲で、「此間は失禮しましたわね」と云く。  
「それに、如何しても逢つてお話ししたいことがあるんですが、一足先きに彼の家へ行つて待つて居て下さらない？」  
「だつて、今夜は忙しいのだらう」と云ふと、  
「い、え、聞はないの、私、如何かして行くから。」  
「左様、乾度来られるね。」

兎に角、私は三種の物を地袋の上に置いた。赤や草色で縁取つた包紙を見て居ると、薄暗い室の中が急に明るく成つたやうにも思はれる。明るく目の方、それとなく山嶽を行つて見ると、女は遠出と云ふので来なかつた。私は約束でも間違へられたやうな氣がして、す／＼と戻つた。歸る途すがら、不圖、三月二十一日も最う四五日の間に來るのだと思つた。去年の今頃は一生懸命に小説を綴つて居た。今年はこの道歩いて居る。來年は如何成ることぞ。かうして年毎に違つた年同日を繰り返しながら、私の身は終に如何成つて行くことであらう。  
いよいよお渡ひの目が来た。一寸氣が重い様にも思つたが、それでも午後三時頃から出掛けで見た。入口から素張しい氣で、何だか脅かされるやうな心持もした。二階の廣間に假の舞臺をかけて、見物席は竹で仕切つてあるが、それも減茶々々、只黒山のやうな人の頭がざわざわとして、正面に垂れた幕の金字さへ濁つた空氣にぼんやりと霞んで見える。其中を舞臺下に結つて眉を引いた女が右往左往に人を分けて歩く。私は隅の方の柱に死れたまゝ、其邊に舞助が居ると、頭を長くして場内を見渡

る方が被坐かと訊いて、此三品を差出して、何分御座んにと云つた限り、さつさと歸つて行きましたよ。門前に脚車が待つて居るやうでした。  
「ふむ」と云つたまゝ、私は番組を掲げて見た。本書を二つ折にして、上り藤を桃色で摺込んだ上に、  
一、種高三番更 千歳更 中  
とあるのを手初めに、番組の次第が並べて書いてある。手習ひ子だの、潮浪だのと順に様々行くと本の方に、一、賤儀帯として、其下に舞助の名が出て居るのを見附けた。  
「踊のお渡ひですか」と、無から覗き込むやうにして楚妻が云つた。「好う御座んすねえ、本當に綺麗ですから。」  
楚妻はそれから自分が小さい時に琴のお渡ひに出た話を長々と始めた。何でも他人の持つて居るものを、自分も持つて居た様に云はなきや氣の済まない質だと知つて居るので、只、え、え、と空返辭をしながら、やつと追返して、又餘念もなく其番組に見入つた。  
私の所へこんな物を持つて來る筈はない。いづれ舞助が寄越したものは思ふが、それにしても

「最う二つで私の番だから、それだけでも見ていらして下さいな。」  
「あ、と、私は何方とも附かぬ返辭をした。  
「私が好い加減に云つて、酒井様のお邸へ何つたついでに廻らせましたのよ。」  
「何だかお婆さんの人も居たと云ふが、それがお師匠さんだらうね。」  
「え、左様なの」と云ふ時、又幕が開いたらしく、  
「ぢや、宜う御座んすか。乾度被坐しやいよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駈けて行つた。  
其幕が下りると、直に又遣つて来た。伏目に足袋の爪先を見ながら、小さい聲で、「此間は失禮しましたわね」と云く。  
「それに、如何しても逢つてお話ししたいことがあるんですが、一足先きに彼の家へ行つて待つて居て下さらない？」  
「だつて、今夜は忙しいのだらう」と云ふと、  
「い、え、聞はないの、私、如何かして行くから。」  
「左様、乾度来られるね。」

「最う二つで私の番だから、それだけでも見ていらして下さいな。」  
「あ、と、私は何方とも附かぬ返辭をした。  
「私が好い加減に云つて、酒井様のお邸へ何つたついでに廻らせましたのよ。」  
「何だかお婆さんの人も居たと云ふが、それがお師匠さんだらうね。」  
「え、左様なの」と云ふ時、又幕が開いたらしく、  
「ぢや、宜う御座んすか。乾度被坐しやいよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駈けて行つた。  
其幕が下りると、直に又遣つて来た。伏目に足袋の爪先を見ながら、小さい聲で、「此間は失禮しましたわね」と云く。  
「それに、如何しても逢つてお話ししたいことがあるんですが、一足先きに彼の家へ行つて待つて居て下さらない？」  
「だつて、今夜は忙しいのだらう」と云ふと、  
「い、え、聞はないの、私、如何かして行くから。」  
「左様、乾度来られるね。」



「貴方も乾度ですよ」と念を押した。次の幕は何が出たか知らぬ。いよ／＼此女の出る番に成つたが、吾妻八景とでも云ふやうな新曲の素節で、歌の文句からして今めかしい。私は柱の蔭から見て居たが、それが済むのを待つて、匆卒に賑やかな人いきれの中を逃れ出た。

戸外はとつぷりと日が暮れて居た。四疊半の下座敷で、水焔爐にかけた鍋の物から沸々と湯気の立つのを見守りながら、私は箸を附けようとしなかつた。「何うも失禮しました」と、お直が這入つて来た。「今日は何方のお歸り？」

「今迄お歌さんのお遊び。」  
「あゝ、左様でした。何でせう、あの人も出たのでせう。」

「なに、そんな譯でもないのさ。」  
それから、いろ／＼出物の噂などをして、段々芝居の話に移つた。此家の主婦さんが紀の國屋蕨屋だと云ふことも聞いた。そんなに芝居がお厭でないなら、千鳥會に附合つて貰ひたいとも云はれた。私は何心なく承諾した。「それぢや、此次の總行には乾度切符を送りませうから。」

お直が外の座敷へ行くと、私は又一人に成つた。待遠しくもあれば、退屈もした。何の爲に私に先へ行つて待つて居れと云つたのか、疑へばそれも分らない。何だか、口から出せの言葉に受けたやうで、馬鹿々々しくも思はれて来た。

其間に柱時計は十時を打つた。今頃かうしてこんな處に、私は何をして居るのだらう。私は、不圖、あの女に對して申譯のないやうな気がした。あの朝別れた限り振向いても笑れぬあの女に對して——私は未だそんな気があるのだらうか。あんなに迄突進されて居ながら、未だそんな気があるのかと思ふと、自分ながら冷汗が流れる、誰にも云ふことの出来ないやうな冷たい汗が流れる。

十一時を打つた時には、私の身中水に浸つたやうな疲労を覺えた。天井から下つた電球が薄暗いのも氣にかゝる。いつそ思ひ切つて此儘歸らうかとも思つた。俄にどや／＼と足音がして、段梯子の下で何やら啾／＼女の聲も聞えた。私は思はず耳を敏やがて女中が十能に火を持つて来て、「お待遠さま、酒と見えましたよ。」

「お拂つて居るのかい。」  
女中は只私の顔を見て笑つて居る。「好いよ、私一人で行くから——聞はないで下さいな」と、襖の外で駄々を捏ねて居るらしい。

「まあ好いからお主人さまいよと、お直の聲も交つた。  
女中の手に倚つかゝつたまま、一日じろりと室の中を見渡したが、よ／＼と跟けて来て、べつたり其處へ坐つた。其儘だらしく兩臂を出して、備臺の上に顔を伏せて仕舞つた。  
「如何したんです、難助さん。さ、起きて被差しやいよ」と、女中が二三度肩を揺振つたが、  
「好いよ」と云つたまま、女中は顔を背向けた。  
女中は私を見回りながらにや／＼として、冷たく成つた鏡子を下げた。  
私は少時凝手として、女の耳朶のうしろに後れ毛のへばり附いたのを眺めて居たが、  
「おい／＼と揺起して見た。」何處でそんなに飲まれたんだい。」

「おや／＼、此人は可笑しな事を云ふよ。」  
女はむつくり起上つた。其眼の色が變つて居る。  
「如何だつて可いぢやないか、他人のことなぞ。」

私はこれでも約束したんだから、未だ殺におなつ姐さんや冬次さんが居残つて居たのを逃げるやうにして来て上げたんぢやないの。来る早々可笑しなことなぞ云はれちやア埋まらないと前先の荒いことを云つたが、急にがつくりとして「貴方は普通の人よりもしつこいんだよ。」私は黙つて相手の顔を眺めた。何を解にこんな悪態を吐くのかと怪しみながら、此女が何日になく向ッ腹を立てて、やゝ氣色ばんだ顔のほんのりと色づいたのも憎からず思つた。

「何をてるのよ」と、女は氣味悪さうに訊ねた。餘り相手が何とも云はぬので、却て無氣味らしい。  
「お前さんの顔を見て居るのさ。美しい女と云ふものは怒れば怒る程美しく成るものだね。」  
「馬鹿にしてるよ、本當に」と云ひ捨てたまゝ、つと立上つて襖の外へ出て行つた。何處へ行くのだらうと、其後姿を見送るながら、私は何となく引續んで抱緊めて置りたいやうな心持もした。

其儘、女は暫く戻つて来なかつた。  
「ね、貴方一寸と、お直が這入つて来て、「難助さん、最う歸しても可いでせう。如何しても、今夜顔を出さなきや濟まないお座敷があるんで

すつて、あんな事に成りや、如何してもね、そんな義理も有るでせうから。」  
「あゝ左様かと、私はお直の口を締めてやうにして、「左様云ふ譯なら、私も最う歸らうよ。」  
かう云つて立上つたが、帯を締め直しながら、何だかお直の手前も氣の引けるやうな氣がした。そんな譯があるからこそ、来た時からぶり他人に當り散したのだなと、大方詰めたものの、それなら、何故わざ／＼私を待たせて置いたのだらう、待たせて置いて如何する障りだつたらう。

「何うも濟みませんねえ」と、お直は背後から帯の襟を直して居たが、「ぢや、最う一本熱いのを焼けて来ますから、それだけ上つて被入しやうよ。」  
「うむ」と云つて、一寸躊躇したが、「矢張りさうよ。」  
いよ／＼立つ間隙に成つて、難助は玄關迄送り出した。私はそれを後目にかけたまゝ、黙つて輿車に乗つた。

其後、しばらく彼の邊りから遠ざかつた。目の細つにつれて、女のこととも忘れるともなく忘れた。女の顔さへ想出せぬやうな氣もした。或朝、新聞を見て居ると、噂の種の中へ組入れ

た小形の寫眞が何うも難助らしい。何心なく讀んで行くと、此頃大根河岸の日那とやらを採なして、吉原の榎間權川のなごしに身乗りをして居ると云ふやうなことである。私は苦笑ひをしたが新聞を抛り出した。  
それよりも、私の心を波立たせるやうなことが一つあつた。  
ある日のこと、私は郵便脚夫の手から一冊の雑誌を受取つた。かねて此雑誌には「小説に描かれたるモデルの感想」といふ記事の中に、あの女の談話が出るの聞いて居たので、何かなし落着かないやうな心持がして、直様封を解く氣には成れない。今頃に成つて、あの女も何を云ふことが有るのだらう。何なりとも云ふが可い。あの女はあの女で勝手なことをして居るが可い。私は私でそんな物は見ずに置くばかりと、其儘押入の中へ抛り込んだ。兎に角、私は同じ見るにしても、一刺でも後へ延ばして置きたかつた。

夕方からぶらりと戸外へ出た。打水の香の心地よく、浴衣の新柄が誰の様に店頭に掲される時節であつた。電車を降り、私の足はおのづと山樂の軒をくぐつた。  
「まあ随分お見限りでしたなえ」と、お直が愛想







「あゝ左様か、それなら恰度好いや。僕は初日に行つて見たけれど、明日も行くから向うで逢ふことにしよう。」

「だつて僕は分らないよ。」

「如何して？」

「如何と云ふこともないけれど、僕は君の様にあの役者が別段品風と云ふ譯でもないもんな。」

「だから此後品風に成つてお呉れよ。折角戻つて来たかと思ふと、又大阪へ行つて仕舞はれちや皆案が困るから。」

「それぢや、僕一人の方で引止めて置くやうだね」と笑つて、「君は又何かい、例の所から皆案を連れて行くのかい。」

「そんな見つともないことは最うしないさ」と云つたが、急に浮かぬ顔をして、「此頃一寸可厭な事があるんだよ。」

「何だい、それは。」

「うむ、何でもないがね」と、稍言ひ辛いやうにしたが、「小まんと云ふ體裁を知つて居たらう。近い間に、あの子が如何か成つて仕舞ひさうだね。相手は何者だか分らないが、只榮太の奴め欲張つてるものだから、未だ大丈夫の標だけれど。」

「何かい、榮太と云ふのは其家の如きんかい。」

「あゝ」と、下唇を噛んで居る。

「私は小早川が去年から諸般を引張廻して、日夜あの邊りに人浸つて居ながら、一人も如何することも出来ない、男を知らぬ女をむさ／＼と踏み躪るやうな、そんな眞面目の出来ない、性分だと知つて居るだけ、それぢや君の方から先へ如何かして仕舞つたら可なりさうなものだとも云へない。少時相手の顔をまじ／＼と見守つて居たが、

「矢張仕方がないね、生きた人間だもの。」

「まア左様さな。」

「それとは違ふがね、僕は近頃如何云ふものか生きた女を見ても心が動かない。昔から畫ける女を見て心を動かすと云ふことは果敢ないものか。譬にもしたやうだが、あの豊國や國貞のなまめかしい姿勢をした女の顔を見ると、大に心が動く。それで居て、實際の女を見ては——實際の女に接して見ても、何うも欲望さへ起らない。餘り何だから生理的に如何かしたんぢやないかとも思ふが。」

「そりや、左様だらう」と、小早川は氣の乗らぬやうな返辭をした。

「併し何だぜ、君が體裁ばかり相手にして如何することも出来ないよ云ふのも、矢張同じやう

な心持ちやないのかねえ。」

「そんなんぢや無いよ」と云つたが、それでも稍氣の晴れたやうな顔をして、いろ／＼小まんの話をして聞かせた。あの子だけは自分のことを思つて居る、此方で思つて居ることも知つて居るらしい。他の體裁と一緒に喚んでも、あの子だけは如何しても自分の側に坐らなく成つた。暗がりへ連れて行くと、あの子の自分を見る眼が大きく成るなぞと、そんな話を幾つもしてから、二人とも巻煙草の盡きる頃に、「それぢや、明日は給の女を見るつもりで體裁を見においでな。」

「あゝ」と、私は笑つて返事をしなかつた。

小早川を玄關へ送出して、大戸の掛金を卸してから再び部屋へ戻つた。ぐつたりと身體中勞れたやうに思つたが、眼だけは湧えて限られさうもない。一人ぼつねんと考へ込むのも可厭だし、書物を開けても讀む氣には尙更成らぬ。毎もなら酒でも飲むのだが、此夏偶とした出来心で禁酒してから、こんな時には自分で自分の身を持ってあげむ外はない。切めてもつと小早川を止めて置けば可かつたとも思ひ出した。

床柱に凭れたまゝ、凝手と洋燈の火屋を見て居たが、押入から蒲團を出してごろりと横に成

でなけりや何も知らぬ女だと、オスカア、ワイルドが云つた。換言すれば、自分を自由にする女か、それでなけりや自分の自由に成る女だと云ふことであらう。私は一生の間に其何れにも出逢つたと信じた。一人があの子なら、一人は隅江をそれに覆した。そして、二人とも極力其體型に當て嵌めようとした。併し事實は二人とも夫程の女ではない。何方も並の女であつた。あれが女の當前だ、あんなのが當前の女だと思ふと、私は女の仕事について女を憎む氣にも成れぬ。憎むことさへ出来ぬ。只要するに自分とは他人であつたと思ふ外はない——二人とも終に路傍の人であつた。

私はこれでも私のために生れた女、生れた時から私に戀して居るやうな女が一人はあると思つた。私の爲に生れて、私の爲に死ぬ、終首途迄も隨いて来るやうな女が——私を理解してなりとも、或は理解せずとも可い——そんな女が一人はあると思つて居た。

「私はいよ／＼こんな長い間の夢も捨てなければ成らぬのか。」

此廣い世の中に、私の考へて居るやうな女が一人も居ないとすりや、私には世の中がないと云ふに均しい。不圖、死と云ふことを、何か忘れ

て居た道伴侶を想出してでもした様に考へて見た。昔は死を想ふ毎に、何とも云はれぬ恐怖の念が伴つた。其恐怖の念が却て死に近づかせようとした。死と云ふものを何か懐かしいもの、親しいものの様に思はせた。恰度崖の上に立つて下を覗下した時、日既いて、あゝ怖いなと思ふ傍から、むら／＼と飛び下りて見たく成るやうなものであらう。流石に今はそんな恐怖の念もない。只、死なぞと云ふことを考へるたびに——これは私一人に限つたことであらう——一種の羞恥の念が伴はずには置かぬ。他人は知らず、私は滅多に死なぞと云ふことを口にする資格はない。人並にそんな事を云へる身ぢやないと云ふやうな氣がして、つい自分で自分の考へを反す様に成つた。

冬の薄日が本堂の蔭をくゞつて、斜めに影を落す頃、障子の棧にび／＼と羽音を立てて、死残つた蒼蠅の飛廻るのがうるさく耳に附く。初めは目に入らなかつたが、其姿を見附けると、鉛筆の尖で突殺さうとした。幾度も押へようとしては逃がした。それでも、遠くへは逃げようともせず又元の所へ歸つて来て、白い障子の紙に突當りながら、び／＼と體回して居る。

「おい、自宅に居るか」と、聲を掛けたものがあ

る。

「あゝ」と返辭をした。

小早川は玄關へ廻らずに、墓場の木戸を開けて入つて来たものらしい。がらりと外から障子を開けて、窓の口へ頭を出した。

「まア上れな。」

「うむ」と云つたまゝ、背中に日影を當てて立つて居る。

「如何したんだい。」

「只睡いよ」と、やけに手の甲で眼を擦つたが、下駄を履いで廊下から上つて来た。

「何だかたぼ／＼として居る。影が薄いやうだね。」

「ふむ」と、鳥打帽を下に置かうとして、不圖、そこに落散つて居る一枚刷の辻番附を取上げながら、

「おや、斯んな物があるね。」

「あゝ、それかい。そりやア何さ、山樂のお直が送つて呉れたの。」

「何だ、ぢや未だ彼の家へ行つて居るんだね。」

「いや、夏頃から一度も行かない。只ね、何時か鯉之助の見連に誘はれて行く約束をしたものだから、それで今度送つて寄越したのだから。」



つた。暫く眼の前をちら／＼と光る物が飛んで  
行つたが、やがてそれも止んだ。時間は何れだ  
け経つた後とも分らぬ。  
「太陽が——太陽が上る。」  
私は聲を上げて飛び上つた。真夜中に、真暗  
な中から太陽が昇る。圓い銅色をしたものが  
つる／＼と昇る。

不圖、それが無消すやうに消えた。  
私は暗闇の中に腕組をして坐つて居た。何と  
云ふ理由もなく、最久永久に太陽が上らぬやう  
な気がした。此儘、二たび目の光を見なかつた  
ら——人間と人間とが手と手で探り合ふやうに  
成つたら——私は思はず両手を出して壁に觸  
つて見た。

やがて又蒲團の上へ突伏したまゝ、寝入つて仕  
舞つた。  
朝、目の覺めた時には、何よりも先づ朝の光を  
見るのが嬉しかった。ねと／＼した頸筋の汗を  
寝巻の袖で拭きながら、今日の芝居行を思ひ遣  
つた。一週も早く人の顔が見たい、人の居る所  
へ行きたい。

午後を済まして、直に出掛けて行つた。久松  
町で電車を降りて、橋を一つ渡ると、軒並木色の  
半暖簾を垂れた芝居茶屋が見えて、睨み合は  
ひで、頭の前から足の先迄千鳥の紋散らしです  
よと云ひかけて、一お持ちなさいよ、今立つて  
来さうですから。」

かう云つて、お金は頭を延ばして其女を見守  
つた。私も一緒に成つて見て居たが、其女は  
狭い假花道の上に立ちながら、何やら同じ樹の  
者と話をして居る。一言云つては笑ふたびに、  
口許の締りが弛んで前草が遠慮なく出る。私は  
其表情の何處かに智慧の足らぬ女の様な気が  
仕出した。

間もなく、下座の三味線が鳴つて幕が開いた。  
其女も立ちかけたまゝ元の座に歸つた。一番  
日は座附作者ながしの新作物で、眞面目には  
見て居られないやうなもの、それでも女どもの  
瞳子は目じろぎもせず舞臺に聚つた。私もそ  
れに釣られて段々舞臺に見惚れた。が、舞臺の  
上の發展を辿るよりも、衣裳の色や背景の取合  
せから、私の連想はあらぬ方へ走り勝ちであつ  
た。終ひには舞臺を見ながら、私は私で別の  
事を考へて居た。

やがて、ゆる／＼と観帳の下りた時、私は  
ほつと息を吐いた。同時に、機敷の上下へ連ね  
た御園白粉の提灯に、ぼつと灯が入つた。土間  
中が又が／＼と陽氣立つ、私は俄に寂しく

積樽やらに、おのづと人の心も浮立つ。私は軒  
提灯の屋敷を見い／＼、座の横手へ曲つて、三  
軒目の茶屋へ這入つた。机の前に、頭のてらて  
らと柔けた番頭らしい男が控へて居て、  
「ええ、山樂さんの御連中ですか。最久疾くに  
開いて居ります。何卒直に小屋の方へ——あ  
あ、誰か御案内を」と、氣の引けるやうな聲で呼  
ばはつた。

私は茶屋の烙印を捺した福草履を穿いて、男  
衆に連れられて行つた。恰度幕の下りた所と  
見えて、が／＼と人立がして居る。樹の中に  
は、見知越しの山樂の女隠居が居て、座を譲り  
ながら、「何うも、今日は御苦勞様」と、小さな  
胡麻鹽の端を下げた。

「ええ」と云つたまゝ、背後を振向くと、其處  
には小早川と、其外三四人知合の者も来て居  
た。「や、や」と挨拶を交したが、最後に又小早  
川に向つて、「如何だい」と訊くと、  
「うむ」と云つて笑つて居る。  
「そりやア助之助が好いんですよ。今度は紀の  
國屋一人の芝居ですね」と前の隠居が引受けて  
云つた。

「ぢや、好い鹽梅ですね。」  
こんな事を云ひながら、私は周囲を見渡した。  
成つた。何だか自分などの来る所ではない所へ  
来て居るやうな、何とも云はれぬ淋しさが萌し  
た。  
「おい、一寸出よう。」  
私は小早川に促されて廊下へ出た。一緒に  
隨いて来た隠居どもにせがまれて、小間物店  
前に立つて、小早川がいろいろな物を買はされ  
て居るのを少時辛抱して見て居たが、つと反れ  
て、一人三階へ上つて見た。機敷裏の欄干に凭  
れて、土埃に塗れた町の屋根を見下しながら、  
冷たい風に當つた。

「智慧の始まる所に美は終る。」  
誰やらの云つたことが想出された。紀の國屋  
氣狂ひの女が美しいのは、あの女が馬鹿だか  
らだ。智慧が足りないから美しいのだ。私は一  
人で左様極めて、美しい女の智慧が足りないの  
は肉感的なものだとも思つた。只肉感を満足さ  
せるために生れて来たやうにも、男の思ひもの  
に成る女の様にも思はれた。あの女が意氣振り  
にして居るだけ、一層そんな氣がする。こんな  
のが女と云ふものであらう、これ以上女に望  
むのは男の無理であらう——併し異性を侮る  
位、私には寂しいことはない。

やがて場内がどよめくので降りて来たが、不

何方を見ても女連ばかりである。小早川はそ  
つと私の肩を敲いて、  
「彼處に居るのは皆吉原の連中だよ。あ、今  
恰度向うを向いた、あれが例の松子なんだよ。」  
「何處だい、分らないね。」  
「うむ、今立上つたのさ。そら此方を向いたら  
う。」

富士前の箱せ、こまじいのが、小早川と眼を  
見合せて、一寸目撃したまゝ、直に又知らぬ顔  
をして彼方此方見廻して居る。小早川は何か考へ  
て居たらしいが、又氣を取直して、  
「それから、君に是非紹介して置くものがある  
よ。あの樹から一つ、二つ、三つ目で、お婆さん  
連の揃つて居るのがあるだらう。」

「あ、あの舞臺に取附の樹かい。」  
「左様、あの中に一人若い女が居るだらう。好  
く見たまへ、一寸眼が綺麗だからさ。」  
「左様だねえ」と云つたが、他の人の肩と肩との  
間に、前髪と銀首返しの太い輪だけしか見えな  
い。  
「魚河岸の如だと云ふが、一寸見ると素人ぢ  
やないやうだよ。ね、お金さんと、小早川は無  
に居る女中を見返つた。  
「ええ、そりやア全く。それに紀の國屋氣狂

私は其前を通り抜けて元の座に戻つた。直に  
中幕の幕が開いた。歌舞伎十八番の内鳴神上  
人と云ふので、濃霧の前に四本柱の庵をしつ  
らへ、其中に結露して、天下國土に雨降らさじ  
と上人一生の祈願を籠めて居る。朝廷を恨む  
筋あつてのことである。そこへ雲の經間、天  
子の敕諭を受けて、國土のため上人の心を  
薄かし其作法を破らんと、はる／＼山に分入つ  
てくる。

經間、扮した鯉之助が、揚幕を出て、花道  
の七三にとまつた時には、何處かで、  
「あれ、鯉ちゃんかと、溜息を吐いた女があつ  
た。本舞臺へ来て、二人の青坊主を相手に去に  
し男の戀しさを語る。語るに伴れて、振がある。  
男に逢ひに北山へ、橋を跨いで川を渡るやうな、  
仇つばい振がある。其振よりも、役者の少し顔  
へを帯びた聲が私の心を惹いた。其聲の色よ  
りも、物を云ふたびに、折角美しい顔の造作をく  
づして仕舞ひさう、なあの汚い口元が——そし  
て、あれも男が女に扮して居るのだと思ふ時、

中が又が／＼と陽氣立つ、私は俄に寂しく



私は一しほ心をそゝられるやうな気がした。自分ながら如何したことであらう。

私は矢張り繪に書いた女に焦れるのだ。まことの女よりも繪に書いた女に、女でない女に、焦れても、如何することも出来ない女に、あゝ女でない女が戀しい。

私は鳴神上人も舞臺も忘れて、只絶間帳に見入った。絶間帳と云ふことも忘れて、只目の女に見入った。絶間帳の白も耳に入らねば、種も目に映らぬ。私の眼中には、只女があつた、女でない女があつた。

幕が下りてからも、少時女の姿が眼を離れなかつた。

「あゝ、好い、好い」と、背後で小早川の聲がした。

「本當に好う御座んすわねえ。」

「全く好い女に成るわねえ。」

彼方此方の女の口から感嘆の聲が出た。

「併しあの口元は變くろしいね」と、一人の男がわざとらしく云つた。

「それが好いんだよ、其巧い所が」と、私は思はず口を出した。「何處迄も揃つた女と云ふものは、餘り好くない。何處か一所缺けた方が却て其美を添へる。女は左様したものだよ。」

「大變な御執心ねえ、貴方」と、お金も憫れた様

「喚んで来てお呉れ。」

「左様ですか、最う歸つて居ますかしら。」

「歸つては居るさ。疲勞れたなぞと我儘を云つたらね、鯉ちゃんの言得があるから、一寸でも顔を出すやうに、私が左様云つたつて。」

「左様申しませうね」と、女中は階下へ降りて行つた。

「おい、お松どん」と、追かけて喚んで見たが、返辭をしない。今夜小早川は何か非常に興奮して居る様に見えた。

「ね、小早川さん、私達送つて呉れなきや可厭アよ」と、おづ／＼座蒲團の上に乗つて居た雛妓が、小まぢやくれた言葉をした。

「ね、私も、今一人が云つた。」

「大丈夫だよ」と云ふものの、小早川自身落着いては居なかつた。

鏡子が出て、私は一つ受けて見たが、はら／＼して、自分が先へ酔はずには居られない様な気がした。早く酔を買はうとして、時給の御燈火鉢に凭つかゝつたまゝ、引つかけ／＼盃を襲

ねた。

やがて芝居で見たのと、三人ばかり彼が這入つて来た。

「あら、皆さん」と断寄るやうにして、「先刻は

に云つた。

「あゝ執心だよ。あんな女なら何時迄も見て居たいね。」

「それぢや、一寸此處へ来させませうか。」

「うんにや、私は役者の素顔なぞ見たつて仕様がなない。そんなものを見たいとは思はない。」

「ぢや、髪を着せたまゝ、側へ引附けて置かうと云ふんでね。随分貴方も物好きね。」

「あゝ物好きだよ。こんなのが色氣違ひになるのかも知れない。」

「さうね、色氣違ひとも違ふわ」と、稍宥めるやうな調子で云つた。お金は私が腹を立てたと思つたのであらう。

私は何だか初めから云つたことが取返されたら取返したい様に思つた。

後は何だ、太郎冠者の喜劇ぢや語らないね。最う歸らう」と、小早川が言出した。

皆總立に成つた。私も一緒に立上つた。

茶屋の二階へ戻つた時、小早川が私を側へ喚んで、

「これから彼の子連二人作れて吉原へ行くんだ。君も一緒に駆け」と云つた。

「僕は」と云つて見たが、

「東海も行くぢやないか。君が附合はぬと云ふ

何うも失禮を。」

それを序開きに、役者の噂が始まつた。渦巻が如何の蝶々が如何のと、情人の噂でもするやうに、何處も同じ話が繰回された。駄洒落の囃

囃返しもまじつた。小早川は一人でそれを引受けて切つて廻さうとした。

今一人の東海と云ふのは、只にや／＼と笑つて聞いて居る。

「此方は好いわねえ、本當に大人しくつてなぞと云ふ女もあつた。」

私は盃を襲るに伴つて、だん／＼土の底へでも沈んで行く様に思はれて来た。周囲と自分との距離れた心持が、芝居に居た時よりも一際強く身に迫つた。かうして自分一人取残されたやうな気がして、小早川も憎かつた、女どもも憎らしい。自分でも迎へて寂しい心持を誘ひもした。誘ふが儘に涙も出さうな心持に成つた。泣きたい、泣いたら泣いて見たい。私はそつと隣に坐つた、友達の腕に凭れるやうにした。

「如何した。顔色が悪いぞ」と、東海も可成酔つて居るらしい。

「え、如何したんだ。氣持でも悪いのか」と、小早川は巫山戯て居た手を止めて訊いた。それを

法はないと、一口に押附けた。

小早川が吉原で遊ぶと云つても、只引手茶屋へ藝者や雛妓を喚んで騒ぐだけに止まつて、それから中へは一步も踏込んだことがない。それも聞いて居たので、何を見せびらかす氣なのか、見せるなら見て遣らうと云ふやうな氣にも成つた。

間もなく、五臺の腕車が北を向いて景氣よく走つた。晴い町、明るい街を幾つも駈抜けた。

やがて五十間を這入つて、仲ノ町を水道尻の方へ、信濃義と掛行燈をした店頭で掃棒を下した。店の火鉢にあたつて居た女どもが皆立上つて、

「おや、被入しやい」と口々に。

一同二階へ上つた。五十餘りの眼のぎよるりとした女中が隨つて来た。

「お土産」と云つて、小早川が裏朱の小さな重箱を差出した。

「おや、お芝居のお歸りですね、皆さんお揃ひで。」

「鯉ちゃんの聽見さ。」

「左様々々、今日は左様でしたわねえ。それぢや、小夏ちゃんや松子さんも行つて居たでせう。」

「あゝ、だから其連中に逢ひに来たのさ、早く

機に、私は東海の膝へ顔を伏せて仕舞つた。

「なに、酔つたんだらう。僕が預つて居るから可い」と、東海が云つて呉れた。

私は兩手で顔を押へたまゝ、傍の見る日も憚らず、思ふが儘に涙を流して泣いた。何故泣けるのか、自分にも分らぬ。只、後から／＼留皮もなく涙の出て来るのが、子供の様に嬉しかつた。其間、東海はそつと私の背中を撫でて居た。

少時経つと、又小早川が側へ来て、

「如何だい、心持は。若し吐く様だったら吐いて仕舞つた方が可いぜ。」

私は只涙を拭いた。

「如何で御座います。枕を持って参りますから、少時横にお成りなすつたら」と、女中が氣を利かせた。

「左様だねえ」と、小早川は一寸考へて居たが、「いつそ此男だけ何様かへ送つて仕舞つたら如何だらう。」

「それが可い」と、東海まで同じだ。

「おい／＼」と、私はむつくり起上りながら、「そんな無暗な事をしちや不可い。」

「なに、好いから黙つておいでよ。」

かう云つて、小早川は何やらお松と隣合せた



「さ、起きたら」と、私の手を執つて引起した。

私は小早川に手を離されたまま、戸外へ出た。足許がふら／＼として、一歩毎に頭の心がつきんと痛む。仲ノ町はひっそりとして深けたらしい。

「何處へ連れて行くんだい」と、私は不意に街の真中に立停つた。

「好いんだよ、僕が置いて行つて上げるから」と、小早川も振返つて促すやうにした。

「そりや好いけれど、あの家だと一寸困るんだが。」

「如何したんだい、そりや。」

「なに、何でもないんだよ」と、わざと言ひ替すやうにしながら、「只ね、あの家へは一度来たやうに思ふからさ。それも一昔前に。」

「一體誰だい、そんなのが有れば早くぶやア可いのに。」

「何と云ふ花魁なの、お調染はと、お松も剛へ寄つて来た。」

私はそんな事を訊かれるのが、堪らなく可厭なので、

「名前を忘れたよ」と云つて、すた／＼と歩き出した。

「私のことを知つて居るのかい。」

「それは記憶えてまさアね。同じちよ／＼いんさいの國ぢやないの。」

「ふむ」と云つたまま、そんな事迄話してあつたかと、一人顔が根らむ様に思つた。

女は何氣なく、「併し考へて見ると長いわねえ。私が此處へ来てから六年日だから、恰度五年目よ。」

私は思はず女の顔が見られた。「能く辛抱したものだね、それにしても。」

「え、随分長かつたわ——何だか、恥かしいやらねえ。」

大黒様のひろい段梯子を上る時、私は自分ながら胸の蕪くの覺えた。引附では、お松が又顔を覚めて、

「そんなのがお有んなさるのなら、仰有つて下さらなきや困りますよ」とも云つた。

私は投出すやうにして、「何と云つたよ、薄水と云ふ女が居るか。」

「薄水さんなら居ますよ」と、言下に云はれた。

私は直に其女の新造の手へ移されて、未だ明いて居た女の部屋へ連れて行かれた。そして、宛然自由意志のない子供の様に、衣を剥がれて、敷いてある蒲團の上に寝かされた。私もされるが儘にされて居た。

次の間で、新造が脱ぎ捨てた着物を纏んで居るのを、薄目を開いて見い、部屋の中を見廻した。屏風の蔭に成つて能くは分らぬが、夜具戸棚に掛けた萌黄の風呂敷のやうなものにも、硝子の蓋をした裸人形にも、長火鉢にも、鏡にも、それ／＼見覚えがある様な氣がした。

此席でなければ見られないやうな風俗が心を惹く。以、此大きな家の中に三味線や太鼓の音もせぬ。夜は静かであつた。

たと見えて、間もなく前後を忘れた。時々はつとして目を覺ましたが、直に又寝入つた。朝に成つて下着が長火鉢に火を入れに来た物音を聞いて、むつくり頭を上げた。

女は未だ正體もなく寝入つて居る。

「おい／＼と喚んで見たが、一向返辭をせぬ。どす黒い眼瞼に、うつすら白眼をして、がつくりと目を開いたまゝ、側に何んな男が寝て居ても氣にもかゝらぬ様に、すや／＼と寝入つて居る。私は疑手と其顔に見入つた。そして、何とも云はれぬあはれを身におぼえた。

茶屋に居残つた連中が昨夜の間に引上げたと聞いて、日の光を浴びて此席を出るのが可厭きに、其日は頭をぐ／＼して一日中此部屋で暮した。私はそれが目の目も拜めぬ日蔭の國に居るやうな氣がして、何となく心を惹いた。日蔭者が日蔭者を相手にして生きて居るやうな心持もした。

女は私の顔を知らぬ新造に向つて、私が以前如何にもしげ／＼此處に通つたやうなことを云つた。そして、素晴らしい全盛な遊びでもした様に吹聴した。私は只女が嫌ましかつた。

「それぢや、同じお國ぢやあるし、幼馴染とでも云ふんだわねえ」と、新造はさも氣の無ささう

間もなく、廊下に重草履の音がして、障子の外で止まつたかと思ふと、すうと身丈のひよろ長い女が這入つて来た。本地に金輪の籠のある桶を着たまゝ、長火鉢の前に片膝立てて坐つたが、いきなり長煙管を出して、二三服すば／＼と煙草を吸つた。私は息を凝らして見て居た。電燈の光を眞正面に浴びる所爲か、眞白な横顔が死骸に白粉でも塗つたやうで、濱島田に紅白鞠ひ交ぜの奴をかけたのも加て薄ら淋しい。

やがて煙管を抛り出して、桶を脱いでふはりと衣箱に掛けたまゝ、女は枕元へ寄つて来た。

「貴方、お睡つてらつしやるの。」

「いゝや。」

「大變睡つて被入したことねえ。それでも好く忘れずに来て下すつたわね」と、蒲團の上に片肘を突いて、だん／＼顔を側へ寄せて来た。

私は此女の聲に一番記憶が残つて居る様に思つた。

「作れの男は如何したい」と、私はわざと外の事を訊いた。

「如何ですか。最うお歸りに成つたでせうよ。」

私は黙つて居た。

「だつて、可いぢやありませんか。今夜は泊つたつて可いでせう。貴方は此とも泊らない人でな挨拶をした。

「あ、だけれども此人は薄情だから、五年の間、顔も見せないんだもの。」

「本當に花魁が可哀想ですわねえ。其理合せに、これから此と来て上げて下さいませよ。」

私は其五年の間、何をしても来たらず。今の私はあの時分の私ぢやない。そんな事を思ふと、不圖味氣ないやうな心持がした。

二人に成つた時、女はこんな事を言出した。「ね、本當のところ、私來年の三月で年明が明けるのだから、それ迄だと思つて来て下さらないの。又、これ限りに成つちや、實際離いわ。」

「へえ、來年の三月かい。」

「こんな事は誰にも云はないんですけれど、まつたく三月の三十一日よ。それに如何してもね、年明前に成ると、何んな人でも客が落ちるの。どうせ今に居ない女だと思ふと、お客の方でも詰らないのでせう。」

「ぢや、私にも三月迄と期限を附けるんだね。」







「何處へとは、女の許なの。」  
「左様さね、まア女の許でも可い。」  
「女は少時考へる様にして、「素人？」  
「いや。」

「ぢや、不見轉？ 不見轉はお止しなさいよ、汚いから」と、顔を覆めた。

「そんな者ぢやないさ」と云つたが、「實はね、私は或女と心中しかけたことがあるんだけせ。」

「まア」と、兩女とも聲を揃へて云つた。  
「そんな事論でせう」と、女は私の顔を下から覗く様にして、「あゝ、論だ、論だ。」

「誰ぢやないさ」と云つたが、軽々しくこんな事を言出したのが、自分で自分を侮つて居るやうにも思はれた。

「へえ」と、新造は道理らしい顔をして、「で、二人とも助かつて。相手は如何したの。」  
「相手は自分で居るさ。」

「でも、能く左様して居られるわねえ。」  
「なに、初めから私のことなど何とも思つちや居ないんだから——女は左様云つてるよ。」  
「訝しいわねえ。」

兩女ともそれきりであつた。  
「だから何だよ、女と云ふものは決して私にぞ惚れるもんぢやない——生れてから一度も惚

れられたこともないし、又惚れられたとも思つちや居ない。そんな自信は無く成つたね。」

「だつて、そりやア——」  
「いや」と、相手の言葉を抑へる様にして、「お前さんにだつて、決して惚れて貰はうとも、惚れられたとも思つて居ないから、それだけは安心してお坐でなさい。」

「だつて、そりやア無理だわ」と、女も抗ふ様によつた。「ね、此方でも成程と思ふ迄信實を見せて呉れないんぢやア——女の方でも惚れよう惚れようとして居るんだけれど、それ迄通つて来る人がないんですよ。」

「何だ、其方で惚れる迄通へると云ふんか、少々押が強いやうだね」と云つたが、自分の方が可厭味の様にも思はれた。

其夜は十一時頃に切上げて戻つた。  
歸りがけに、女が、「私から手紙上げて可いの」と訊いた。

「そりやア手紙が来たつて構はないけれど、讀まん間から中味の分つてるやうな手紙なら、まア貰はん方が可いね。」

「だつて、私には旨い事が云へないんですよ。」  
「ぢや、私が教へて遣らうか。何なら此處に和

手本を書いて置くから、其通りに書いて送つて貰つても可い。」

「そんなんでも可いの」と笑つて居る。  
「あゝ、手紙ばかりぢやない、二人向ひ合つて云ふ言葉でも、出来る事なら前に教へて置いて、其通りに云つて貰はうかと思ふよ。世の中に私の思ふやうな返辭をして呉れる女は一人もない。私はそれが悲しいんだよ。仕方がなければ、私の口寫して、本人の心から出たのでなくとも可い、唯女の口から私の思ふやうな事が云つて貰ひたい。」

「随分面白いことを云ふのね。」  
女は新造をかへり見て薄笑ひをした。  
私は其儘表へ飛出した。何時になく興奮して、「誰でも可い」と口走つた。眞實のものがなければ、誰で満足する外はない。私は誰に生きたる様に生きたのだ、先方に貰はない、此方ばかりの影に生きたのだ。

こんな事を尋へ戻る迄思ひつゞけた。  
其後私はしげ／＼大門をくぐる様に成つた。年の内にも二三度行つた。何をしても三月迄だと云ふことも、私の足を近くした。

年が明けてから、十日餘り遠のいて、或夜十一時近く行つて見た。矢張座敷が明いて居た。何

時か女も云つて居たが、本當に客がないらしい。客と云つたら、私一人の様でもある。私の様な者の外には来る者がいないのかも知れぬ。

「何だか寂しいやうだね」と云ふと、  
「ええ」と云つて、懐手の儘帯の中へ首をちりめながら、「それでも三月三十一日迄は辛い勤めをしなけりや成らぬのよ。」

私は女が可憐らしいやうな気がした。  
其居掛けの朝、十時頃に目を覺まして、掻巻を被つたまゝ、長火鉢の側で茶を吸つて居ると、不圖、向うの座敷から三味線の音が聞え出した。

私は思はず耳を敏てた。  
「東さんの部屋へ清元の師匠が来て居るのよ。」

かう云つて、女も耳を澄まして居たが、「ああ、私も三味線でも出来たら如何か成るんだがね」と、打楽の様に云つた。

「ねえ、貴方」と、女は少時して又私の注意を掻亂すやうにしながら、「私が此處を出たら二三日東京見物をさして呉れないの。私未だ淺草の近所しか東京を知らないのよ。」

「あゝ好いとも、そんな事位なら容易い御用だ。」  
「それから、芝居にも一日行きたいわ。」

「だん／＼出て来るね。ま、それも可いとして、併しいよ／＼此處を出るとなりや、何處ぞに差支が有りやしないかい。」

「何ですつて」と大業に云つたが、急に又萎れて見せて、「餘り意氣地がない様だわねえ、満六

年の間こんな商賣をして居ながら、年期が明けても誰も引取手がないと云ふやうな。そりやね、私だつて長い月日のことだから些とやそつとは可愛いか憎いかと思つたこともあつたのよ。それが如何云ふものか今日迄續かなかつたの。私の方から振つたばかりでもないのですけれどねえ。まア因縁がないのでせうよ。」

私は何だか此女の言葉にも世相の一片が含まれて居るやうな気がして、其儘開けてにもきれなかつた。

「それぢや、此家を出たら差詰め如何する氣なんだい。私が訊く譯もないけれど。」

「ええ、仕方がないから一先づ故國へ歸らうかと思ふの。今ぢや、まア左様思つてゐるのよ。」  
私はうそ／＼と女の顔を見乍ら、「併し、今更田舎へ歸つて暮せるかい。」

「だつて仕方がないぢやありませんか。こんな處に居りやこそ、かうして居るもの、外へ出たら私なんぞに東京で口過ぎは出来ませんもの。」

成程、かう云ふ女を一人突離したら、如何成ることであらう。私の眼には、だん／＼暗闇から暗闇へ落ちて行つて、芥子の間に蓋いて居る女がうぢや／＼と見えた。

「まア、故國へ歸つて、當分兩親の手傳ひでもして暮しませうよ。」

「それもた様だね」と云つたが、「でも、兩親があるから可いや。家ぢや何をして居るんだい。」

「私の家？ 私の家は關毛屋よ。」  
此後、女は私の顔を見るたびに、「最う七十日の生命ね」とか、「又五日減つたわね」とか、そんな事を繰回した。

「乾度見物をさせて呉れなきや可厭よ。私はそれだけが楽しみにして居るんだから」と、念を押すこともあつた。

私も此女に逢へなく成る日が近づくのだと思ひながら、又それが待遠の様に思はれた。此女に對してつくつた果敢ないロイマンヌが——私にとつては最後のロイマンヌである——日に日に縮まつて行くこと知りながら、私は其東の間の生命を樂しんだ。實際又期限が切つてあつて、將來がないと云ふことを外にしては、私にして居ることは只の女郎買ひに過ぎぬ。

二月の月は最も足繁く通つた。月の末に行



くと、女が「最う後一月よ」と云つた。  
 「それから私、少し無理なんだけれど、引越ひがしたいのよ。」  
 「せすにだつて済むことだらう。」  
 「えい、だつて六年も居て引越ひ一つしないよ云ふのも、餘り意氣地がないやうだもの。それに五十圓も有つたら出来ることなんだから。」  
 「そんな金子は、私には出来さうもないね。」  
 「かう云つて相手に成らなかつた。佛し金子の都合さへ着いたら、何んな事でもして遣らうと云ふやうな腹もあつた。」  
 三月は懐中の都合やら何やらして、大門をくぐることも間違に成つた。十三日の夜、宵に一寸行つた限りで、其後は顔も見せなかつた。女からは手紙で、  
 だん／＼日も迫つて来たので心配をして居る。それに、未だはつきり分らないけれど、かねて申上げてある日より三日前に出られるかも知れん。いろ／＼相談もあるから、是非一度来て下さい」と云つて来た。如何も仕様がな。返事も出さまいとは思つたが、騙して居たやうに思はれるのも可厭なので、  
 今は都合がわるい。それ迄には乾度行く

と書いて出した。  
 其間に、二十五日過ぎても、當にしたものが届かぬ。私は氣を苛立ちながら、一日々々と過した。時々如何でも可いと云ふやうな氣にも成つた。漸く一字も書いてない長篇物を抵當にして、本屋から金子を借りることにした。それが二十八日の夕方迄には持つて来るといふ、其日の朝である。私は又女から一封の手紙を受取つた。  
 いろ／＼御心配をかけたが、私も今日お店を出て、只今お品どんの所へ引取りました。それに就いては、直き／＼お目にかゝつて御相談したいことも候故、此手紙が第一度お越し下されたく待人候。若し御都合あるなら、私より御近所迄参りて、車やによんで貰つてもよろしく。只々御人ませの御侍人候。  
 日附は三月二十七日、笠岡たつかと本名を書いて、別に千束町一丁目八十五番地高橋さく方としてあつた。  
 昨日御出たものと見える。それなら最う可いわと云ふやうな安心もあつた。新造の家を訪ねて行くと思ふのが可厭だけれど、兎に角、日記に金子が手に入るのを待つて出掛けることに

した。  
 十二階の下から吉原病院の裏へ出る町筋で、二三度横町をまごつきながら、やつと目指す家を訊ね當てた。竹の出格子の前に立つて、ぐづぐづして居たが、やがて思ひ切つて案内を乞ふと、  
 「何誰」と云つて、今迄洋燈の下に俯向いたまま、せつせと針を運んで居た娘が立つて来た。  
 「あの、此方に昨日吉原を出た女が居るでせうか。」  
 「薄水さんですか」と、娘も如才のない顔附をして、「えい、居ますよ。ですが、只今阿母さんと一緒に仲居買物に出かけたんですがね。」  
 私は一寸當惑した。  
 「まあ上つてお待ちなさいませよ。直に歸つて来ますでせうから。」  
 「なに、それぢや其邊を彷徨いて、後に又来ますから、二人が歸つたら、私が来たこと云ふことを云つて置いて下さい。」  
 「えい、左様申します。」  
 私はあわてて其軒を離れた。掘井戸の流しに置きさうにしながら表通りへ出た。別に行く處もないので、公園へ這入つて、觀音堂を一周りした。其邊で逢はぬかとも思つたが、何うも

見掛けない。  
 やがて大分取つた積りで、又千束町の家へ行つて見た。矢張前の娘が出て来て、  
 「未だ歸りませんのよ。お氣の毒様ですねえ。何なら私の外に誰も居ませんから、何卒上つてお待ちなすつて。」  
 私も如何しようかと思つたが、到頭上つて待つことにした。娘は缺歯を出したり寫眞帖を出したりして取持つて置いて、又裁縫を取上げながら、  
 「これ薄水さんのよ」と、悠然笑つた。  
 「ふいむ」と云つたまゝ、私は只餘念もなく針を運んで行く手許を見守つて居た。  
 一時間許りして、やつと二人が戻つて来た。「大變お待たせしたのよ」と、娘が出迎へると、  
 「左様か、そりや済まない／＼」と、お品どんは足袋の埃を拂ひながら上つて来て、「ついで、此人がもつと行かう／＼と云ふものだから、一足づつ兩國迄行つて仕舞つたの。何うもお待ちなして済みませぬね。」  
 から云ふ間から、後ろで薄水のおたつが何やら云つたのを聞附けて、「なにさ、それで何の御利益もなしさ。本當に御勞れ儲けで話らない」とこれにも相手に成つて居る。

薄水は少し離れて坐つて、一寸目録をしたまま兩手を膝の上に置いて居る。何時の間にから脚指にかはつて、黒縮細の羽織を着流した容子が、何處か品好くも見えた。こんな所へ訪ねて来て、こんな風にして逢へば、何うやら深い仲でもありさうな。私は何だか羞恥いやうな氣がして顔を背向けた。  
 お品どんは一人で脚指に喋舌つて居たが、不意に話を止めて、「おや／＼こんな事を云つてゐる間に晩く成つて仕舞つたよ。お前さん方何處かへ行くのなら早く出掛けたらな」と、女の方へ向いて、  
 「何だらう、お前さん其委で可いだらう。」  
 女は一寸自分の襟の邊りを見て點頭した。  
 「ぢや早くお出掛けなさい。私達は最う寝るから晩く成つても可いんだよ。」  
 二人は立上つた。お品どんは路口まで送出して、私の袂を控へる様にしながら、「泊つても可いんですよ」と囁いた。  
 表通りへ出ると、女は袂から羽二重の襟巻を出して頸に巻きながら、肩を並べて、  
 「私、昨日出ると、直にあの手紙を書いて出したのよ。」  
 「だから、それを見て遣つて来たんぢやない



「何だらうね、それでも気がのう／＼したらうね。」  
「え、何が何だか未だ分らないのよ。」  
「私は又女が可憐らしくも成った。」  
「ぼつり／＼飲んで居たが、十一時頃に勘定をして立つた。女には折詰を持たせて、とにかく其夜は歸すことにした。人通りの絶えた暗い街を女を乗せた暗車が駈けて行つた。」  
「次の朝、私は又女を連れ出した。」  
「何處へ行くのよ、今日は。」  
「東京見物をさせて遣るのぢやないか。何處へでも、黙つて聞いて来たらしい。」  
「え、と、女は何やら浮かぬ顔をして、「私、昨宵歸つたら故國から手紙が来て居たのよ。」  
「ふむ、それで？」  
「それでね、何でも早く歸つて来いって云ふんです。親爺が餘程性急に成つて居るらしいから、私もね、寧ろ最う東京なんぞ知らなきや知らんでも可いから、一日も早く歸らうかと思つてるのよ。」

私は黙つて五六歩移したが、「で、何日歸らうと云ふんだい。」  
「明日にも、明日の夜汽車では如何でせう。」  
「それでも可いさ」と云つて、又少時黙つて居たが、「如何だい、今日一日は私に呉れないかい。」  
「おや、如何して」と、女は急に甘えた聲を出して、「明日歸るつたつて、それ迄は最う離れやしませんよ。」  
「併し何だぞ、餘り好い所へ連れて行くんぢやないんだぞ。」  
「何處でも可いのよ。」  
二人は花屋敷の前から觀音堂の裏手へ出た。小さな觀音堂の前に石の反橋がかゝつて、龜の子が幾つも朝露の目影に甲羅を干して居る。私は一寸其前に立ちつたが、  
「これが淡島明神と云ふんだ。女を護りの神様だと云ふからお詣りをしないか。」  
「左様」と云つたまゝ、女は細細傘を裏手に立てかけて置いて、帯の間から紙入を出して小銭を投げた。「一寸昨日の綱に觸つただけで、手を合せて拜む。」  
私は此方に立つて寝不足の眼をしばたきながら見て居た。不圖、あの女を連れ出して、最初新井の薬師へ行つた時のことが心に泛んだ。只

も知らぬ、あの時も左様であつた——あの時も時々女が身動きをするたびに、衣擦れの音を夢の様に聞きながら、私は一種の不安をおぼえた。私は殆ど現在を忘れた。  
やがて電車が新宿へ着いた。人込の中にまごまごして居る女の手を引張りながら、又中野行の電車に乗移つた。間もなく終點へ着く。  
「此處だよ」と、私は先に立上つた。  
「左様、最う来たの。」  
何處へ連れて行かれるのか、行く處迄行くんだと云ふ了簡で尻を落着けて居た女は、不意に左様云はれたので驚したやうな顔をして居る。  
「さア／＼早くするんだよ」と、急ぎ立てる様にして停車場の外へ出た。  
「そんなに急いだつて歩かれないのよ」と、女は足許を気にしながら畑中の小路を踏いて来る。

私はそれでも足を早めて薬師の門前へ来た。三年前と物の様子も別に變つては居なかつた。山門には鳩も居る。豆賣の婆さんも未だ生きて居る。御堂の中には蠟燭の裸火が行列をして、香の煙が渦を巻いて居る。今日も又しつとりとした土の上を木の葉の圓い蔭が鮮かに匂ふやう

な穏かな日である。すべてが元の儘である、元の儘である。  
「此處は何様が祭つてあるの」と、女は昨日の下に立つて禮拜をしてから私の方を向いて訊いた。私は女の顔を見詰めたまゝ返辭をすることも忘れた。  
「何處か淺草の觀音様のやうねえ」と、何氣なく四邊を見廻して居る。  
「あゝ、これは薬師さんだよ。」  
私はやつと氣が附いた様に云つた。  
「左様、お薬師さんなの」と、矢張り此方を見廻して居たが、「あれ、一寸あれを御覽なさい」と、急に私の袖を掴んで引張りながら、「あれは何でせう、あれが葉の綱と云ふんでせう。女の髪のもで縛つた綱——何だか怖らしいやうだわね。」  
かう云つて、女は尻込する様にした。  
「なに、あれは何だよ、日の悪い女が自分の髪を切つて薬師様へ上げる、それが段々溜ると、あゝして綱に縛つて仕舞つて置くんだよ。何しろ何十年と溜つたんだから、あんなに成るんだね。」  
「だつて、可厭なものね。」  
「ぢや、最う此處を出よう。」

女を連れて名所廻りと云ふことも心を惹かぬではないが、實は此女が廓を出たら一所に三年前の舊跡廻りをしようとか、かねて心に思つて居たのだ——それに依つて、私の長いローマンヌの大詰の幕を閉ぢよう。

「大それた折鶴ですねえ」と、女は何心なく仰へ寄つて来た。「天井一杯に下つて居るんですよ。それが皆青や赤や五色の紙で、尤も中には色の褪めたものもあるわ。」  
「あれは皆女が上げるんだよ。一日に一羽宛折つて、百日の間に百羽上げると、大抵の願ひ事が叶ふんだとさ。」  
「左様、本當に。」  
「まア、左様思ふんだよ。」  
私はずん／＼歩き出した。仲居を抜けて、雷門から電車に乗つた。上野で降りて、又山の手線に乗換へた。  
「もし一寸、これは田舎へ行くんぢやないの。」  
「あゝ、田舎に好い所があるんだよ。」  
「左様」と云つたまゝ、女は別に深く訊ねようとしなかつた。  
私も物を言はなかつた。二人並んで腰掛けたら、成べく顔も見ないやうにした。かうして女を連れて歩く。女は何處へ連れて行かれると

私は裏門の方へ出て行つた。女も別に不足な顔もせず隨つて来た。少時村中の生垣について歩いたが、やがて田圃の中の街道へ出た。三年前に通つた道を其儘踏附けようとするのである。  
「あゝ、今日こそ本當に延び／＼するわねえ」と、女は襟んだ細細傘を眼の上に翳しながら、四邊の景色を見渡した。  
「木林が茂んで、圃の影が青う生びて居る。何處からともなく、ちよろ／＼と水の音も聞える。」  
「あゝ、これがあの女なら——あの女であつて呉れたら。」  
私は並んで歩きながら幾度も心の中で叫んだ。私は今こんな事をして居る。こんな事をしてやつと生きて居る。あの女は何をして居るだらう、今の今、何をして居るだらう。  
私は堪らないやうな心持に成つた。石でも木でも可い、何でも可い、冷たい堅いものが抱緊めて見たい。  
橋の袂迄来ると、つと女を遣過して置いて、路傍の草の中に足を投出して仕舞つた。  
女は其儘氣も附かずに行つたと見えて、少時して、「おや」と振回つた。

私は裏門の方へ出て行つた。女も別に不足な顔もせず隨つて来た。少時村中の生垣について歩いたが、やがて田圃の中の街道へ出た。三年前に通つた道を其儘踏附けようとするのである。  
「あゝ、今日こそ本當に延び／＼するわねえ」と、女は襟んだ細細傘を眼の上に翳しながら、四邊の景色を見渡した。  
「木林が茂んで、圃の影が青う生びて居る。何處からともなく、ちよろ／＼と水の音も聞える。」  
「あゝ、これがあの女なら——あの女であつて呉れたら。」  
私は並んで歩きながら幾度も心の中で叫んだ。私は今こんな事をして居る。こんな事をしてやつと生きて居る。あの女は何をして居るだらう、今の今、何をして居るだらう。  
私は堪らないやうな心持に成つた。石でも木でも可い、何でも可い、冷たい堅いものが抱緊めて見たい。  
橋の袂迄来ると、つと女を遣過して置いて、路傍の草の中に足を投出して仕舞つた。  
女は其儘氣も附かずに行つたと見えて、少時して、「おや」と振回つた。

「明日にも、明日の夜汽車では如何でせう。」  
「それでも可いさ」と云つて、又少時黙つて居たが、「如何だい、今日一日は私に呉れないかい。」  
「おや、如何して」と、女は急に甘えた聲を出して、「明日歸るつたつて、それ迄は最う離れやしませんよ。」  
「併し何だぞ、餘り好い所へ連れて行くんぢやないんだぞ。」  
「何處でも可いのよ。」  
二人は花屋敷の前から觀音堂の裏手へ出た。小さな觀音堂の前に石の反橋がかゝつて、龜の子が幾つも朝露の目影に甲羅を干して居る。私は一寸其前に立ちつたが、  
「これが淡島明神と云ふんだ。女を護りの神様だと云ふからお詣りをしないか。」  
「左様」と云つたまゝ、女は細細傘を裏手に立てかけて置いて、帯の間から紙入を出して小銭を投げた。「一寸昨日の綱に觸つただけで、手を合せて拜む。」  
私は此方に立つて寝不足の眼をしばたきながら見て居た。不圖、あの女を連れ出して、最初新井の薬師へ行つた時のことが心に泛んだ。只

私は裏門の方へ出て行つた。女も別に不足な顔もせず隨つて来た。少時村中の生垣について歩いたが、やがて田圃の中の街道へ出た。三年前に通つた道を其儘踏附けようとするのである。  
「あゝ、今日こそ本當に延び／＼するわねえ」と、女は襟んだ細細傘を眼の上に翳しながら、四邊の景色を見渡した。  
「木林が茂んで、圃の影が青う生びて居る。何處からともなく、ちよろ／＼と水の音も聞える。」  
「あゝ、これがあの女なら——あの女であつて呉れたら。」  
私は並んで歩きながら幾度も心の中で叫んだ。私は今こんな事をして居る。こんな事をしてやつと生きて居る。あの女は何をして居るだらう、今の今、何をして居るだらう。  
私は堪らないやうな心持に成つた。石でも木でも可い、何でも可い、冷たい堅いものが抱緊めて見たい。  
橋の袂迄来ると、つと女を遣過して置いて、路傍の草の中に足を投出して仕舞つた。  
女は其儘氣も附かずに行つたと見えて、少時して、「おや」と振回つた。



「如何したの、貴方」と、立つて居る。少時左様して待つて居たが、餘り私が立つて行かぬので、又側へ戻つて来た。

「本當に貴方は酷いよ、私を一人遣つてさ」と、肩の間から顔を覗き込むやうにしたが、私は物を言ふ氣もなかつた。

女も其處に居んだまゝ、黙つて、静手と待つて居た。やがて、

「もし」と、前とは丸で違つたおつ／＼した聲で、「如何かなすつたの、ええ？ 心持でも悪いんぢやないの。」

それでも、なほ押黙つて居た。

「如何なの。私には云はれない？」

私は急に振返つた。裏手と顔を見合せて居たが、つと其顔を抱へて——女も私を支へようとした手で、堅く私の着物を掴んで居た。

やがて私は女を突隠す様にして、其儘青草の中に顔埋めて仕舞つた。

其夜、銀座裏の宿に着いた時、私は女に向つていろ／＼言辭がましいことを云つた。

「さぞ驚いたらうね。如何かすると、私はあんな風に成るんだから——心では別な事を考へて居ながら、ついあんな事をして仕舞ふ。」

こんな事も云つた。こんな事を云ふ位なら、

云はぬ方が使したとも思つた。

「構ひませんよ、あんな事と云つたまゝ、女は別に口を利かなかつた。

如何いふものか、彼時から言葉少なに成つた。夜店でも見に行かうかと誘つたが、それにも應じなかつた。そして、早くから寝ることにした。寝る時に、事本當の事を話して仕舞はう、あの女の事も打明けて話さうかとも思つたが、又思ひ返して止めた。

明くる朝、女の方から、「最う東京も見たくない。疲勞れて外を歩く位なら、此處にからして居る方が可い」と言出した。

それでもお品さんの所に預けてある荷物も持つて来なけりや成らぬし、土産物も最少し買ひ足したいと云ふので、午頃から一人で出掛けることにした。私は買物だの、汽車買だの、お品さんの家で厄介に成つた總だの、それから歸つた當座の小遣錢などを見詰つて、若干の金子を女の手渡しした。

「まア、それだけにして呉れ。私も明日からの小遣が要るから。」

「これだけで深山ですよ。いろ／＼何うも御迷惑を掛けて済みません。」

女の出で行つた後で、私は物に追かけられる

やうな、静手として居られぬやうな心持もしながら、矢張其宿屋にころ／＼して居た。

夕方、女は大きな行李を車に積んで戻つて来た。お品さんも、其娘も見送りに隨つて来た。四人一緒に夕飯を喰べに近所迄出かけたが、切符も行李も宿屋の番頭に置いて置いて、銀座の夜店を見ながら、停車場の方へ歩いて行つた。四人に成つてからは、別に話をする機會もなかつた。

午後八時の夜汽車で立つことにした。いよいよ汽車に乗る前に、女は私を片處へ呼んで、

「着いたら直に手紙をうしますよ。貴方も時々おたよりを聞かして下さいな——私、何だか最う一度お目にかかれるやうな氣がして成らんのよ。」

「有難う。併し私からは手紙は出さんよ。まア、先の事は約束しない方が可い。」

かう云つて、私は笑ひながら手を離した。間もなく汽車は出た。お品母子は二三間出出して送見送つた。私はぼつ／＼として踵を回した。出口の石段の上に立つて居ると、

「おゝ、小島君ぢやないか」と、背後から来て、私の肩を叩いたものがある。見ると、それが神戸であつた。

「おゝ、暫く」と云つたが、實際神戸とは暫く疎しく暮したので、私の方からは極りの悪いやうな思ひもした。

「本當に暫くだつたね」と、神戸は心置なく物を言ひながら、「君歸るのか、歸るのなら一緒に歸らう。」

二人は迷立つて石段を降りた。後の二人は遠くから目撃をしたまゝ、何處かへ消えて行つた。

銀座街まで来ると、神戸が振返つて、

「如何だ、別に用事がなかつたら、最少し話して行かうぢやないか」と言ひ出した。

「左様だね」と、二人は又街の角のビーヤホールへ這入つた。

二人は酒を飲みながら話した。話の種は酒と共に盡きなかつた。それでも、神戸はあの女の話には觸れない様にした。私も素より口になかつた。

其處を出たのは十二時に近かつた。須田町迄来ると、最う江戸川行の電車がない。神戸も其處で降りて、一所に歩いて歸らうとした。

夜の街は静かであつた。

神戸は線路の上を歩きながら、

「あの女が此頃ちよい／＼僕の許へ来るよ。素晴らしい風姿をして——如何したのか。」

「如何したんだらうね。」

私はこんな返辭しか出来なかつた。

「併し彼の時分から見ると、あの女も歳を取つたよ。今ぢや未だ歳を取つて却て美しく成つたやうだが、女は變るものだね。」

他人からあの女の噂を聞くのが、私は只怪しいやうな心持がした。

神戸は又言葉を續けた。「それにしても、何時迄あゝして居る氣なのか、いづれ一生あゝして居る積りだらうか、それぢや單ならぬ。殊に君は一層左様だらう。あんな事をして居られるは、君の落着く時はない。」

私は黙つて線路の敷石の上を歩いて行つた。

「實際あの女の心持は僕にも分らないね。自分では大に分つてるのだらうが、仰から見りや、矢張分らないと云つたが、解を低らして、併し何だね、男が女のために苦しむのは、決して女から嫌はれるためぢやない。女は決して男を嫌ひはせぬ。只愛するとも云はぬ。又愛せぬとも云はぬ。偶々寄つて来て意味のあるやうな事を云ふかと思ふと、又元の所へ戻つて、不然として居る。如何してあゝ平然として居られるかと思ふ程平然として生きて居る。それも何か申渡のあるやうなことを遣つてるのなら

可い。それなら此方が諦めもする。左様ぢやないんだ、左様ぢやないんだから困る。かうして有哉無哉の間に釣つて置かれるのが一番辛いんだよ。」

神戸は何時の間にやら自分のことを云つてるらしい。私の事を一所にして話して呉れるのは——私の最う女の心が分らぬと云ふのでもない、それだけに何もしない——あの男の好意であらうで、

「君のあの女は如何して居るんだい」と訊いて見た。

「如何もしない。あの儘だ、あの儘に生きて居る。僕はそれで餘り堪らなく成ると、寧ろ向うで僕を捨てて呉れたらと思ふよ。如何云ふ手段でも可いから左様云ふ意志を明白に示して呉れたら——そしたら、とにかく片が附く。時には死んで仕舞つて呉れたらと思ふことさへある。」

だん／＼酒の酔が醒めて来たので、神戸の聲は鋭かつた。私は只聲を存んだ。

「そんな殘酷な事さへ思ふことがある」と、神戸は薄笑ひを洩しながら、

「併し女は死にもせぬ、捨ててもせぬ。只、此處に女が歳を取る——女の頭に白髪が生えると



い馴染の文を失くしたやうな。日暮に、何と思つたか梵妻が窓の側へ立つて、

「吉原が火事ですつてねえ。此處からぢや駄目ですけれど、表の坂へ出て御覧なさい。眞黒な煙が空一杯に見えて、そりや凄まじいものですよ。」

「こんな處から見えるなア雲ぢやないのですか。」

「ええ、雲ですか煙ですか、何しろ大變なものですから、一週見て被入しやいよ。」

私は別に出て見る氣もなかつた。

梵妻は一寸型合が無さきうにして、

「何ですか、南千住が危いと云ふことですねえ。」と云ひ足した。

「明くる朝、新聞を見ると、一面大火の記事で埋めて、淺草の地圖を挟んだのが、大半眞黒に塗られて居る。女郎の逃げ惑ふさまや、消防や救助隊の活動振が挿畫添へて載せてある。思つたよりも一層酷かつたらしい。」

私は十日前に原を出た薄米のことを思ひ遣つた。昨夜からまたび／＼それを思つた。六年も居ながら、僅かのことで此災難に遇はずに済んだのが何うやら偶然とも思はれない。あの女が

後悔がして見たい。」

二人は街の眞中に立つて手を握り合つた。神戶も興奮して、云ふことが一々私の代りに云つて居る様にも思はれる。何も彼も知合つた昔の友は矢張懐かしい。

「お、最う水道橋へ来た」と云つて、神戶は立ち止つた。「ぢや、此處で別れようか。」

「今夜は併し面白かつた」と、私は二たび手を出した。

二人は堅く握り合つた。

やがて、神戶は其處に客待をして居る脚車に乗つた。私は漆についてと／＼と戻つて行つた。

十四

毎日、うつら／＼として日が経つた。何も考へない、何も思ふまいとした。考へることも、思ふこともないやうな氣もした。滅多に部屋の中からも出なかつた。

一週間許りして薄米から音信があつた。それは只無事に着いた知せと、世話に成つた禮とで、固より心にとまるものでもない。

恰度四月九日午後一時頃のことである。私は鎌湯の戻りに神樂坂迄用達に行つたが、坂の

折ふし、私は東京には居ないと云つたことも思ひ合された。

其日の午過ぎ、私の到頭を跡に見に出かけた。坂本の通りを眞直に行つて、覺神社の傍から曲らうとしたが、巡査が立つて居て這入らせない。又一二町行くと、其處から千束町の方へ抜ける。私は大勢の彌次馬の後に隨いて行つた。

「何々權立市場」と云ふ札を立てたのが幾らもあつた。女郎が汚れた顔をして、夜具に凭れながら、所在なげに往來の人を見送つて居るのを見受けた。其中に信濃善立退場と云ふ札も目に留まつた。吉原納院の裏手へ出ると、木柵の間から一面に煙跡の緒い土が見えた。所々土藏の焼け残つたのが、ぼつくり立つて居るのも、一しほ荒涼の氣を添へる。未だ壁の下から煙の積んだのからぶす／＼と煙が出て居るものもある。それでも場所柄だけに大方板圍ひをして、其上に横の名を染出した旗がはた／＼と風に靡くのも物寂しい。

私はそれから吉原奥の上へ出て見たが、只見波す限りの眞野原と云ふ外はない。直に又千束町へ引回した。此邊にお品どんの家があつた筈だと、瀾に添うて、二三度露路をまごつきながら、やつと訪ね當てた。格子の外から聲をかけた

下から鈴を鳴らして、二三人號外賣が走つて来る。近頃珍らしいなと思つたが、其儘氣にも止めなかつた。歸り途に、不圖氣が附くと、電信柱の前に人だかりがして居る。何心なく立寄つて見ると、今の號外が貼附けてあつて、「吉原大火、江戸町二丁目より出火し、今尙延焼中」とある。私はわけもなく胸が滿いた。

朝からどんよりして生暖かい風の吹く日であつた。私は部屋の中に坐つて居ても、始終吉原の火事が氣がかりで落着かれない。第二第三の號外が出る。其たびに一々それを買はせて見た。午後四時頃には風上の京街にも延焼して、大黒樓にも火がかゝつた。風下は五十間を拂ひ、吉原堤を越え山谷方面にも飛火して、今や殆ど帝都の北門を管め盡さうとして居る。終に軍隊の出動を見たとあつた。

あゝ、吉原が滅びる、何となく人の心に一種の感慨を傳へて行く。兎に角二百年の歴史を持つた色街である。あれで崩れたとは云へ、あの位傳説と習慣とで堅められた色街が、他所の國にもあらうか。國の誇りには成らぬかも知れぬが、誇りには成らぬ誇りである。私は一人でもし／＼と舊いものの滅びて行く殘惜しさを味つた——恰度、一本だけ残して置いた古



て居る。盗竊にばたくと椅子段を駆け降りる音がして、一人の女が上草履のまゝ、  
「あれ、吉村さん、突然其男の脚元へ籠りついた。」

「まあ今度は大變よ。私達も着のみ着の儘で、かうして居る外に着替さへ持つて出ないのですもの。餘り心細いから、今恰度貴方の所へ手紙を書いて出さうとして居た所なのよ」と、袂から鞆に成った紙片を出して、それを開めながら両手を合せる様にして、「本當に好く来て下さつたわねえ。」

それにつれて男が何やら云つて居る。  
私はそつと時がりの方へ立退いた。そして、生垣について足早に其處を去つた。

やがて足を強めながら、  
「俺も最う東京に用はない」と、不圖こんな心が浮んだ。

あの女の心が分らぬと云ふが、それも最う分らぬ度を越して、私にさへ何の味ひもない。あの女が生きて居るから、自分も生きて居る。あの女の住む所に住んで居る。そんな意地を出して見た所で今更何に成らうぞ。又そんな意地を生きたる私ぢやない。そんな私ぢやない。それよりも故國へ歸つて、最う一通静かな所で寝

て見たい。少し振に母親の顔も見たい。  
私はあんなにきれながら、矢張あの女のことを好く思つて居る。他人から見たら見苦しかうが、心の底ぢや、矢張好意を持つて居る。そんな仕事のない好意の、これが最後の表示として、私は東京を去らう。東京を。

本氣で左様極めたと云ふでもなく、又極めぬでもなく、それでも考へることだけは一心に考へつて居た。そして暗い町、暗い町と押つて歩きながら、當もなしに彷徨つて行つた。

「何時お歸りなすつたんです。私は又——」と、梵音が云ひ掛けた時、急に想ひ出した。私は寺へ歸つたのだ。寺へ歸つて、自分の部屋に坐つて居るのだ。

「私や又、玄關の戸も明いてるし、洋燈も背の儘とぼつて居たものですから、如何なすつたかと思つて——」

私は俯向いたまゝ、只「えッ——」と顎で返辭をして居た。併し向うが云ふだけのことを云つて仕舞つてからも、何と返辭をして可いかわからぬ。二人ともまじ／＼として、少時話が絶えた。  
「最う何時でせう」と、真あつて、私から言出した。

「あの——、私は迷つて呼び留めた。あの、明日の朝五時が打つたら、直に起して下さいませんか。」

「五時に？」と可憐なやうな顔をして、「何處かへいらつしやいます。」

「え、一寸故郷へ歸つて来ようかと思つて。」

「あ、左様ですか——宜しう御座います。」

「それぢや、何卒五時には間違ひなく。」

「え、大丈夫ですよ」と、片手に洋燈を持つて立上つた。

「あの——それから此事は、後で訪ねて来る者があつても、誰にも仰有つて下さらぬやうに。」

「故郷へお立ちに成つたと云ふことですか。」

「え、左様ですと云つたが、梵妻の何やら胸に落ちなさうな笑ひ顔を見ると、私は又むきに成つて頼んだ。何處も同じ事を繰返して、しつこく念を押した。」

「大丈夫ですよ、そんなに仰有らなくとも」と、梵妻も終にじれつたさうな返辭をしたが、其儘部屋の外へ出て、そろ／＼と襖を閉めながら、「それぢや、最うお臥みなさい。」

「お臥みなさい」と、聲に應じて云つたものの、梵妻の姿が襖の外に隠れると、私は急に最う一度嘔び返して顔が見たいやうな氣がした。

如何云ふ譯だか、私にも分らない。私は只胸一杯に成つて居た。

大團圓

次の日の夕ぐれ、私は袖一つ持たずに手ぶらで最早の停車場へ降りた。僅か許りの書物と身の周りのものとは、そつくり其儘あの寺に捨て置いて置いた。何とも言ひ残しては来なかつたが、二三年も持主があらはれなかつたら、其中には如何かして突れるだらう。此後、誰合何處で暮すにしても、最う諸道具などのある身には成りたくない。

私は改札口で驛犬に切符を渡さうとして、不圖、古原を出た女のことか心に泛んだ。あの女も、十日前には、此處を通つて、此欄干にも手を觸れたらう——が、直に又思ひ返して、車夫を喚んだ。最うあの女にも用はない筈である。

長良の橋を渡つて、町を出外れた辻堂の前で驛車をかへした。それから長い堤の上を一人てく／＼と歩いて行つた。堤の片側は何處迄も笹が／＼と歩いて、片側は青の菰がほの黒く夕風に靡いた。見ると、麓の崩んだ農夫がそのそと堤の上へのぼつて来て、「一寸春庭びをしながら、自分の前をせか／＼と村の方へ戻つ

「左様ですな」と、一寸背後を見返るやうにしたが、最う晚いんですよ。一時過ぎれば二時にも成りませうか。」

「そんなものでせうね。」

左様云つたまゝ、又一人で考へ込んで仕舞つた。

「最うお臥みなさいました。寢床を取つて上げますから」と、梵妻は襖の端に立つたまゝ云つた。

「え、寢ませうと、我ながら無愛想な返辭が出た。」

「御免なさいませよ、こんな旨い服装をして」と云ひながら、身體で襖を押し開ける様にして入つて来た。成程、寝巻に細帯一つで、勝手知つた押入から夜具を出して敷いて呉れるのを、私は只まじ／＼と見守つた。何だか、日頃から餘り好かない様に思つて居た此女までが、今夜は取分け懐かしい。私の物の言ひ様に依つちや、此女でも年寄つた大を捨て、三人の子供を残して、私と一緒に走らなうとも限らぬやうな氣もする。

「さ、早くお臥みなさいなと、梵妻は夜着の足許の方へ廻つて、一寸叩き附けながら、襖の端に置いた藁洋燈を取上げようとした。

追附くまいとした。

やがて、又一人如の時から唐紙を捲いだ男が出て来た。其後に手甲を穿めた女房らしいものつゞいた。そして、前の爺さんと出會頭に向つて聲を掛けた。私は思はず足を留めた。村には一面に夕霧がかゝつたが、何處からでも目標にされた自家の裏の大櫓が見えない。私はこんな事にも胸が痛いた。

又そろ／＼と歩き出した。村の取附の一軒家では、昔戸から、雷の火があか／＼と見えた。何處であらう、竹藪の向うから赤子の泣く聲も聞えた。それが歸れ／＼に、弱く、さも悲しげに泣く。何時迄も泣く。幾許他の事に心を向けようとしても、如何しても其聲が耳について離れない。

私の心は遠い昔にかへつた。高い木の梢で、夜な／＼赤ん坊が野袋に血を吸はれて泣くと云ふ、子供の時に聞いた話も想ひ出された。村の中程の十字街へ来て、前の三人が横へ反れたのを見ると、私は思はず騒出した。

家の跡は一見に見逃へる程明るく成つて居た。邸の周りを取巻いた木立も代り拂はれて、只桑畑の中に、立ちの低い母屋と掘井戸の屋形



だけが残つて居た。勿論、土蔵も門も何處へ行つたやら影さへ見えない。思へば、番信も途絶えがちな、丸三年の留守の間、母はそんな物でも賣つてかつ、生活を立てて居たのである。

私は少時屋敷跡の空を見上げたまま、立つて居たが、又思ひ返して、前の板橋を渡つた。そして、草に埋もれた数石傳ひに母屋の軒下へ近づいた。其時家の中から入口の聞き戸を開けて、つと出て来た白髪のお婆さんがあつた。其顔に見覚えがない。向うでも私を見知らぬのか、じろじろと私の顔を眺めて居たが、やがて地面にくつ附く程頭を下げて、其儘表の方へ出て行つた。私は入れ違ひに上間へ這入つた。

上間の中は眞暗で、一足動いても、柱に打突かりさうな気がした。私は少時間の中に目を凝らして居たが、不同、中間の杉戸を曳かれて、佛間から微かな光が射して居るのに気が附いた。それを目當に物をも言はず、つか／＼と上つて行つて、圓の上に立つたまま、奥を覗き込んだ。佛壇には、丁字の立つた燈明が一つ消え残つて居るばかりで、佛屋の隅々が妙に薄暗い。それでも、段々暗がり慣れて、佛壇の前に何やら驚くものが眼についた。一人の老婆が幾枚も蒲

團を積んで、それに背を凭せて寝て居るらしい。顔を見ると、それ程年を取つて居るやうでもない。圓々と子供らしい顔をして居るが、頭髪は一筋も残さず眞白に見えた。向うでは早く此方の姿が眼に附いたと見えて、顔にお叩頭をして磨る。私は二足三足側へ近づいたが、思はず、

「阿母さんか」と喚んだ。

矢敷お婆、だ、三年前に別れた母親のお顔に相違ない。あ、この顔り果てたことわい。

「誰だと思つたら、阿母さんか。私ですよ。只今東京から着きました。」

それが耳へ入つたのか入らぬのか、老婆は前と同じ様に凝視してお叩頭をして居る。

「如何したのです、え？ 私が分らないのですか。」

斯う云つて、やをら老婆の肩に手を掛けたが、俄に悪い前表でも見附けたやうに、胸の動悸が打出した。私は涙手と其顔に見入つた。

何日か一度中風に罹つたとは聞いた。半身不随の難病だとは聞いても、其後格別使ひもないので、心には掛りながら忘れともなく忘れて居たが、被時からこんな事に成つて居たのか、こんな、現在我子の見舞も附かぬやうな、手組ない有様になつて仕舞つたのか。

「ね、物が言へるんですか。物を言つて下さい、何とか言つて下さい。」

私は老婆の冷たい手を握つたまま、只遺漸なしに揺振つた。揺振りながら、たら／＼と涙が頬に傳はつた。

老婆はけりりとして相手の顔を見て居る。

私は思はず其手を離した。感ぜぬない腕はぐたりと肩から垂れ下つた。それを見ると、私は思はずよ／＼と立上つた。誰か来て呉れぬか、か来て謝が聞かして貰ひたいと思つたが、其儘又其處へ倒れて仕舞つた。

あ、子は終に親の側へ歸つた。私は敢う何處へも行かない、何處へも行かぬ所はない。

(前四十三号)

# 袈 装 御 前

人物  
袈 装 御 前  
衣、 袈 装 師 前  
遠 藤 武 者 盛 遠  
波 邊 左 衛 門 尉 五  
松 ヶ 枝  
兵 五  
本 作  
其他に番匠、仕丁、侍女など数人。

## 第一場

渡邊橋供養の場  
正面に太鼓形の橋、橋の袂に渡邊橋普請場とした標示杭立つ。それに柳の樹をあしらふ。舞臺上手と下手に假屋立ち並び、幔幕を張渡してある。假屋の前に櫻

の二本三本の時、春の末、夕まぐれ。凡て橋供養終へて人散じたる光景。櫻の花、間を置いてひら／＼と散る。下手の普請小屋の中に大釜を据ゑ、其下に火燃ゆ。番匠ども五六人打興じて居る。そこへ仕丁三人下手より来る。

仕丁一 やれ／＼清んだぞ。これで今日の役目も首尾よく済んどと云ふものぢや。

仕丁二 左様とも、幸ひ風もなく日も暖かに、結構な渡り初めでおじやつたわい。

仕丁三 これから悠りと骨休めの振舞ひに有附くのぢや。(小屋の中を見て) や、お主達は早や始めて居るな。

番匠一 いや最う行列の長さに待ち勞れて、内密でちよつびり始めた所ぢや。お前方も此處へわせられい。

番匠ども さアわせられい／＼。

仕丁一 俺も早い奴等ぢや。

仕丁二三 それでは仲間へ這入るか。番匠ども さア／＼。

大釜の周りに四座して、釜の中の白丁を取出し、皆々酒を酌む。盃順々に廻る。

仕丁一 さて／＼今日の賑ひは殿いことぢやつたの。近年橋供養もつゞく中に、此様な人出は見ぬことぢやい。

仕丁二 加茂の祭も斯程では有るまい。何さま禁裏からの教使は立つ、仁和寺の御坊が導師で、袂の衣を着た大衆が渡り初めをするよふからに、京洛中の男女が擧つて出たのぢや。それにしてもいかう賑ひもなく、負傷人も出ず、無事に済んで何よりぢや。

仕丁一 俺は又餘りな人出に、折角袈装した今にも如何ぞ成りやせぬかと、大抵心配したことぢやないがな。

番匠一 何を言ふぞい。津の國の番匠が腕に燃をかけて仕上げた仕事ぢや。間違ひが有つて堪るか。

仕丁一 何ぢやと。

番匠二 まア／＼、堪もない理合は止めぬかやい。お奉行様の耳へでも入つたら事ぢや。したが、今日のお奉行様、お歳は若いが物の







らりと鎌刀を捨てて。蓋轉ぶ。兵刃々々。
集兵一人、下手より出て、走く。はアア。
盛遠 (腹巻をかなぐり捨てて) これを其方に預けたぞ。

よろしく、袈裟の袂を追うて入る。
老番匠、一旦尻餅をついたが、起上つて、其後を見詰む。日の暮れる心持にて舞臺面次第に暗く成る。 幕

第二場

衣川住家の場

鳥羽の里、衣川住家の體。蓋轉の軒朽ちて、上手に障子を閉め切つた佛間。正面二重には、白地の襖、其前に二枚折の屏風を立てて、燈の釜に湯沸る。下手に柵代門。
母衣川、四十九歳、切下髪、未だ残んの色香失せやらぬ建機、昔の美しさを思はせる風情、後ろ向きに坐つて、釜の湯加減を見て居る。門前には、一人の托鉢僧、口の中で讀經せる所にて、幕開く。

衣川 (讀經の聲に聞耳を立てて、向直りながら)

盛遠 物をも言はず、其扉に手を掛けて押開け、衣川を突除ける様にして、ぬつと入る。衣川は其扉と一様に倒れむとして、漸く踏み留まり、此無法な闖入者を眺めて居たが、
衣川 や、其方は盛遠——ま、珍らしい、好うおじやつたな。いと、いそ／＼空穿らうとして、相手の血相變へた容子に気が附き、急に怖気がさして立竈む。

盛遠 いかにも盛遠ぢや、久し振に伯母御前を見舞ひに参つた。親手と衣川の容子を見返したが、俄に憤怒の聲見く。伯母御前、何故其様に俺の顔を見詰めてぢや。

衣川 (たじ／＼として) さ、何もわざわざ和殿の顔を見るとさふではないが、お、それそれ、和殿も子供の折には毎日の様に此處へ来てつて、阿とまとも一緒に遊ばされたものぢやが、おひ／＼男に成るに任せ、院の北面へ出仕する様に成つては、お宮仕への暇なさ、ふつり足も遠絶えたのに、何と申うて今日のお出——と思つての事ぢやいな。ま、其方へ上らつしやいな。
盛遠 (阿とまの語を聞いて顔色を變へたか、右らぬ體に香脫石の上に登つて、膝に腰打掛

ら、) あい、又毎もの托鉢の御出家さうな。どれ、お布施を遣せませう。(と言ひつゝ、立上つて納戸へ入り、再び初穂を盆に載せて出て来たが、香脫石の上の庭下駄を穿いて、門の傍へ近寄つた。手頭を数珠を掛けて居る。さ、心ばかりのお布施ぢやぞえ。

托鉢僧 命頂戴、南無阿彌陀佛。(と誦し終つて、初穂を頭陀袋に受け、鉢の中から衣川の顔を覗き込む様にしながら) 今日も白河から四條の邊り迄参ります。何か京へお言傳でも御座らぬかな。

衣川 さいたア、此中娘の便りも聞かぬが、使りのないのは無事な證據。其間文でも認めて置いて、又頼むことに爲ますわいな。

托鉢僧 任にお前様は有恩な仁ぢや。當時波邊黨の中でも美男の聞え高い、耳殿を智に取つて、此方の娘御と二人並べて置いたら、定めて嫁の様である。何事も前の世で善根を積まれた應報ぢや、南無阿彌陀佛々々々々々。(花道へかゝつて退場。)

衣川 (護手と其後姿を見送つて居たが、つと身を引いて) 今日九月十三日、月こそ遊べ、亡くなられた阿とまが父御の連夜、わが身が彼の子を抱へて奥州から戻つてからも十

く、併し伯母御前には御息災にて何より重く。
衣川 (遠くから廻る様に) 二重、上つて、和殿も世因で嬉しいわいの。それに此春は又波邊橋の橋供養に奉行の役を勤めて、いかい名譽の事さうな。阿兄持遠殿にも、草葉の盛から囃お喜び。
盛遠 (じり／＼と向直つて) 波邊橋の供養のこと、誰から何と聞かれた。

衣川 さ、誰から聞いたとたけれど、それは最う此邊り迄大層な評判ぢやわいな。(二たび盛遠の容子に眼を附けて) 其方、何故其様に雲へてぢや。まア怖らしい眼をして此伯母を如何する氣ぢや。

盛遠 お、一問の節、伯母御前の命を貰ふのぢや。と、言ひささ、伯母の小腕取つて扱ひ伏せ、片手にすりりと腰の刀を抜放つ。

衣川 悲鳴を上げて、身を落着きなから、何とし給ふ、盛遠殿、妾のためには和殿は明、重殿のためには妾は伯母、殊に母御の没られてからは、此伯母が手に掛けて育てた和殿、親とも子とも思はれよ、恨みを受ける覺えはない。誰が何の様な言をして、斯く聲目をば見せたまふぞ。

三年、あゝ思へば早いものぢやなア。どれ、花でも手折つて佛に遣せましょ。と、片手に剪刀を執つて、口の中で稱名を唱へながら、庭前の枯槎女郎花など切つて居たが、再び二重へ上り、障子を附けて佛間に入る。其時金色をした佛壇が見えて、又障子に隠れる。靜に鉦の音ひびく。

遠藤武者盛遠 (袴衣を着て足に草履の扮装、顔色憔悴し、頭髪少々伸び、思ひ切つたる面持にて) 花道を新けて来たが突然門の扉も破れよとばかり打叩く。物まう、案内の音ひびく。

鉦の音止む。
盛遠 誰ぞ有らぬか。盛遠が参つた。早く出て門を開けられい。

衣川 (佛間を出て、訝しげに四邊を見廻しながら) 何々、板は居やらぬか。誰やら門に案内が有るぞ。

返辭なし。首を傾けながら庭に降りて門の中より聲を掛く。
衣川 誰ぢや、氣た、ましい、何人ぢや。(盛遠、應へず。そつと扉を細目に開けて) 何人にて坐すぞ。

盛遠 い、他人の謔言でない。今も和殿の言はれし通り、坊より阿とまとわれ、野邊に波邊ひ川に漁りして、共に誦びしことを忘れ給はずば、折に賜つての殿れにも有本は二人を都合せむぞ。伯母御前の口づから宣ひしこと、とも忘れ、まるに何日の間にやら我を差替き、一門の真に袈裟をたまひしことぞ心得ね。現在の伯母に欺かれ、可憐女子を人に奪られた。此恨み伯母なりとて親なりとて容赦が成らうや。

衣川 そ、そりや無頼ぢや、其恨みは餘りに無頼ぢや。和殿が左程執心なりや、何故早う沙汰はしてたらぬ。老先短い親の身は、一日も思ふ娘に好い智取つて、初孫の顔見たいものと、そればかりに愛身を盡すぞや。少しは子を持つた親の心も的んでたもいな。

盛遠 え、親の心おのれが知らうや。盛遠こそは三年が間、われから此家へも遠ざかつて、人知れず心の筋手を包んで来たものの、先づ波邊橋の供養の日に、久しや、袈裟の姿を見掛けてより、女執の念二たび燃え立つて、晝とも夜とも分たれば、身は空穿の脱殻の如く、命は草葉の露も同然、戀には人の死なぬものは、斯く成り果つるも元はと言



へば誰がためぞ、同じ命を取らるゝなら、伯母御前、和御寮を殺してわれも死ぬわ。(と、衣川の頸髪とつて惹起しながら刃を胸元に擬す。)

衣川 まア〜待つて、少時待つてたも。

盛遠 待てとは未練な。

衣川 未練とも言へ、申法とも言へ、親一人子一人の袈裟を置いては死にともない。宥してたべ、盛遠殿。(と、手を相合せて伏拝む。)

盛遠 (擬手とそれを見て居たが、)ナリや、左程に命が惜しいか。

衣川 命惜しくば、刃が手から袈裟を取戻して、われに返せ。

盛遠 出来ぬと有らば、それも可い、盛遠一人やみ〜と見殺しには爲れまいぞ。

衣川 いえ〜、待つてたも。今は是非に及ばぬ、其方の心の晴れる様に爲ようわいな。

盛遠 なに、阿とまをわれに返さうとな。

衣川 今袈裟を此家へ喚んで、和殿に會はさう程に、其後は二人で兎に角——兎に角此處を離してたもいの。

盛遠 乾度さうか。(思はず、衣川を捕へた手を離してたもいの。)

衣川 (半は身を起して、つく〜袈裟の頰を眺めて居たが、はら〜と落涙して、)娘か、好う来てたもつた。此母はな、犯せる罪とてなけれども、身に振りがゝる大難に、所詮生きては居られぬわいの。

袈裟 え〜。(飛び立つ。)

衣川 さ、何も言はずに此刀で、(と、傍の手箱の中から小刀を取り出して、わが子の前に置く。)

袈裟 (後ろへ下りながら、)まア何としてぞ。母様。お氣でも狂ひしか。阿とまに傳へ其様な——さ、心を落着けて様子を話して下され、言を聞かせて下されいなア。

衣川 (袖で頰を蔽うて居たが、)様子と言ふは今朝のこと、何日になく彼の盛遠が訪ねて来て、子どもの折の事を言立て、是非なく袈裟をわれに返せ、さらば母の命を取ると、刃を胸へ突きつけてのつ引させぬ無理難題。

袈裟 (思はず知らず、)あの遠藤盛遠どの——

衣川 和女、何とか爲やつたか。

袈裟 いえ、何とも致しませぬ。(と言へど、心の中には何時ぞやの邂逅が浮んで来る心持。短き間、)それから何と爲されましたえ。

を放つ。が、併し後に至つて互が方へ返り忠など爲さば、和御寮を初め、袈裟、互、一門殺らず難殺しにして、思ひを晴らす心が得たか。

衣川 (身を戦はせながら、)あいなア。

盛遠 うむ、それだに間違へ給はずば、一命にも及ぶまい。では又夕方に御意得申すぞ。(わざと慈悲なし眼に睨み廻して、舞臺ト手より退場。)

衣川 (少時其後を見送つて居たが、)如何せう、如何せう、如何せうぞいなア。

と、泣き沈む。やがて備間から料紙と硯箱を持つて来て、一字々々考へては書く。やつと認め終ると、も一度読み直して、吐息を吐きながら、文箱に入れた。手を叩いて侍女を喚ぶ。

衣川 楓々。

女の童 (襖を開けて出て、)召しましたか。

衣川 大儀ながら此文箱を持つて、並の里の互が邸へ行き、袈裟に手渡ししたたもいなう。

備へて何事も言ふまいぞや。

女の童 はアい。(元の襖から退場。)

衣川 (擬手と一箇所を見詰めて居たが、はらはらと落涙して、顔を上げ、)あ、ひよん

衣川 さ、それぢやに依つて、盛遠の思ひを晴らさずば、無慈悲な刃に殺されるは一定、さりて互が心を破らうではない。いろいろ思ひ悩んだ上、人手に保つて憂目を見むより、切めて和女の手にかゝつて果てようと、思ひ定めて居るのぢやわいなア。(と、袈裟の膝に取懸つて、さめんと泣く。)

袈裟 (やう〜涙を拂ひ、)母様、最う泣いて下さりませぬ。阿とまは心を決めました。親のためには、さらぬ承美もする習ひ。お命に代ります。縁を結びの神様も、哀れと思し下されませう。

衣川 なに、何と言やる。

袈裟 盛遠殿に會ひますわいな。

衣川 いや〜、和女に其様な憂目を見せては、此母が直殿に面目ない。何卒交を手に懸けて——

袈裟 え、最う、何も何も言うて下さりませぬ。(と、畳の上に伏沈む。)

衣川 (と、和代門に案内の音聞ゆ。衣川、そつと頭を擡ぐ。)

盛遠 (門の扉を開けて入りながら、)先刻の約

な事に成つたわいな。いつそ撫を喚び戻さうか——したが、今の盛遠が有様、よも其儘には差指くまい。親の身として、わが子に道ならぬ道の手引をする。一定來世は地獄に墮ちよう。あ、如何したら可からうぞいな。(と、身を悶えて泣き伏す。)

稍長き沈黙。舞臺次第々に暗く成る、黄昏の心持。

袈裟御前 (楓と共に急ぎ足で登場、花道の中程に、息切れのする體にて停る。)

あ、何とやら氣がかりな、心細い文の御消息。母様の身に大事なにかえ。

女の童 いえ〜、御案じなさる様では御座りませぬ。

二人和代門の前迄来る。女の童門の扉を開けて置いて、裏口へ廻る。

袈裟 (門の中に入つて、)母様々々、阿とまが参りました。(と言へど、答へなし。)

まア日も暮れたに燈火も點けず、如何なされたことやら。(と、だん〜縁鼻に近づく。)

女の童 奥より燈火を持つて出づ。

袈裟 (母の倒れて居るのを見て、)まア母様、そこにお坐遊ばしたか。風邪のお心地と承はりましたが、何の様で御座りまするぞえ。

東によつて盛遠が参つた。

衣川 お〜。(と、飛び上つたが、後ろに袈裟を隠しながら、わな〜と戦へて居る。)

盛遠 伯母御前、何と爲された。(づか〜と縁の前迄進んで、)なに、そこに居やるは袈裟御前ではないか。(と、二重へ上つて、)幼馴染の盛遠なるわ。なにも、其様に怖がることはない。これへ出ませ、さ、これへ出ませい。(と、矢處に傍へ寄らうとする。)

衣川 あの、それは——(と、兩手に盛遠を支へようとする。袈裟、袖屏風をして、小鳥の様に慄へて居る。)

盛遠 え、邪魔ひるぐな。(と、拳を上げて打たずむ氣勢。)

袈裟 もし——(と、二人の中へ割つて這入つた。)

盛遠どの——(兩膝をとんと突いて、片手に衣川を庇ふ様にしながら、擬手と盛遠の顔を見上げたが、其眼には決心の色見えて、男に對する恐怖と憎悪とが聞つて居る。)

は云へ、其憎悪は物狂ほしい愛着と雙一重障りのものである。)

盛遠 お、阿とまか——(と、傍へ寄らうとしたが、女の顔を見ると、何となく其威に打たるゝやうな心持がして寄添ひ得ない。)

盛遠 (門の扉を開けて入りながら、)先刻の約

衣川 (と、和代門に案内の音聞ゆ。衣川、そつと頭を擡ぐ。)

盛遠 (門の扉を開けて入りながら、)先刻の約

衣川 (と、和代門に案内の音聞ゆ。衣川、そつと頭を擡ぐ。)

盛遠 (門の扉を開けて入りながら、)先刻の約

衣川 (と、和代門に案内の音聞ゆ。衣川、そつと頭を擡ぐ。)

盛遠 (門の扉を開けて入りながら、)先刻の約



袈裟 (眼もて盛遠の後を追つたが、見る／＼緊張した唇のまはりの筋肉が弛む。) お、お、お——(と、聲を上げて泣伏した。直ぐに又屹と顔を上上げて。) 阿とまぢや、阿とまで御座んす。其阿とまをお前は何と爲されますぞえ。

盛遠 お、知れたこと。此懸かなはず生きて居ない盛遠、武士と生れて、弓矢に死ぬるも一定、懸に死ぬるも一定。世の心なきが笑は、笑へ、和御前を殺してわれも死なうと、疾くより覺悟を定めて来たわ。

袈裟 え、(と、思はず顔を上げたが、又しをしを差伸向く。) 衣川 (後ろではら／＼と氣を揉んで居たが、前へ乗出して、) そ、そりや其方を言ふのぢや。

袈裟 母様、もしツ——(と、衣川を制して、) お前は彼方に居て下されませ。阿とまが好い様に致します。な、(母を宥めて、佛間へ連れて行く。やがて又懐へ手を差入れたま、しを／＼と出て来て、や、離れた所へ坐る。)

盛遠は始終眼を離さず袈裟の舉動を見詰めたま、何とも言はない。

(顔を上げて見ても、又言出しかねたが、やつと、) もし、盛遠どの。小さい時からお前の氣性、言出し、は話かぬ人と知らぬではなけれど、昔の事を思つたりや、阿とまを哀れとはおぼさぬか。思ひ返して、宥してはたまらぬかいの。

盛遠 なに、哀れと思へ——それは此方で言ふこと。宥せとは、此盛遠に一人死ねと言ふのぢやな。

袈裟 いえ／＼、左様ではなけれど、何を言ふにも、われは人妻。

盛遠 え、言ふも無益。其人妻には誰が成つた、斯く成る上は命くらへ、誰彼の宗教が成らうや。和御前が不詳、盛遠が不詳、加へては其が不詳、三人の不詳が一度に来るとも、宿業なれば是非もなや。いづれにしても、三人に一人、所詮生きては居られまい。袈裟御前、心を留めて返答されよ。(むつくと立上つた。)

袈裟 え、三人に一人——(と言ひつしたま、差伸いて物を案ずるさま。や、暫くして、) 盛遠さま——(問、) お前のお心やうやう合點が行きました。

能う彼の暴れ者が歸つたなう。(と、袈裟の後から寄添ひて、心配さうに其顔を見上げ、) 袈裟、立上つたま、盛遠の後影を見送つて居たが、母と顔を見合せて、上から見下しながら、物は言はず、せりり来る涙にぶる／＼と身を振らす體。だん／＼折れようとして、途中から急に衣川へ背を向け聲なく下に伏沈む。其間、家の裏にある昔置の立樹の梢に、夜明けの心持にて、茜色の光射す。

第三場

頁の邸宅

舞臺や、下手寄りにはまはり縁を廻した織造りの座敷、庭を踏んで、上手に障子を閉切つた高置が見え、波面が兩方を繋ぐ。恰度その波面の上澄りに十四夜の月が出て居る。座前の泉石、すべて中古武家の好み。連邊左衛門尉、二十三歳、名古屋山三に似たやうな若男子、新製の小袖に袴を

着けたばかりで、縁に近い座敷の脇に凭れ、打寛いだる體にて、盃を舉ぐ。袈裟御前、坂子を取つて、つゝまじやかに酌をして居る。火風の冷火ゆらいで、微かに二人の顔を掠む。

頁 (盃を下に置いて、) あ、先朝より、何とやら氣がかりな和女の容子、氣分でも勝れぬか、それとも何か心に係る——

袈裟 いえ／＼、左様な事は御座りませぬ。其それなら最そつと浮立つて、一つ酒三も遊しては何ぢや。母御の病氣も、案じたよりけ事なく済んで、それも重疊、見られ、今宵の月かな月を、夫婦の中も彼の様に缺けたることもないではないか。

袈裟 はい、お心を煩はして済みませぬ。其——親のいたづきとは云へ、女の手で障りもなく一夜を外に明した、それさへお咎めもなく、お優しい言葉に聞くに附け、何や彼や案じ過ぎて、——

頁 はて、何を言らぬ。それより如何ぢや、これを一つ和女に上げよ。(と、盃を獻す。)

袈裟 (叩頭をして、それを受けた。) 爰も今宵は酔ひまする。

袈裟 から成り行くも、昔宿世の因果、誓がも縁で御座りませう。阿とまはお心に随ひまする——(したが爰は未だ良人のある身、重きが上の小夜衣、人目を取つ、袈裟はよも爲せまい。盛遠どの、まこと妾を思つてなら、一思ひに、わ——其を殺して下されいなう。

盛遠 なに、頁を殺せ——とな。

袈裟 今更お前は後れてか、それでは先朝御有つたのも——

盛遠 お、和御前さへ其心なら、何とて盛遠が後れを取らうや。して、其手段は。袈裟 其手段は——お、左様ぢや、妾はこれより家へ戻つて、左衛門尉に髪を洗はせ、酒に酔はせて高置にそつと寝させて置きますう程に、其濡れた髪を摸つて打つて下さりませ。盛遠 (兩り上つて、) 大膽成儀。それでは、明日の夜九ツの鐘を合圖に——

袈裟 え、——屹度。盛遠 屹度言葉を番へたぞよ。袈裟 袂を衝へたま、佛に點頭く。盛遠、香殿石の上へ飛び下りて、新代門より出て行く。

盃の報酬がつづく。頁 (や、酒のまはりたる心持。それは希代な事ぢや、では、如何である、月を看に、一曲所望は出来まいか。)

袈裟 (笑顏を見せて點頭きながら) 拙い調へも、時の興——

頁 (はた／＼と手と打つて、侍女を喚び寄せ、奥の間から筑紫琴を取つておじや。)

侍女 はア、(思場。)

頁 和女が我家へ来てから、早や三年、和女と一緒に琴も来たのぢやな。

袈裟 琴も手馴れる、妻も古びる——

頁 は、い、い、い。

袈裟 はい、

侍女二人、一面の琴を拂して出で、それを袈裟御前の前に置く。袈裟、それに、見入られたま、心に眞面目な表情と成る。

一つづつ琴爪をはめながら、物を案ずる體。やがて緑の音に伴つて、しめやかな唄に成る。

露深き浅きが原に迷ふ身の、いとと關路に入るぞ悲しき、(急に琴の手を止めて、) もし、人に斬られて死ぬ時は、佛に成らぬと云ふことぢやが、ほん



の事で御座りませうか。  
亘 はて、異な事を訊くものぢや。佛に成るか  
成らぬか、其様なことは女子の云ふものでな  
い。したが、琴の音色も沈み、何うやら手許も  
情さうな。最早や琴は止めにしやれさ。

亘 え、うと／＼と成る。袈裟は不圖琴  
の手を止めて、其の顔を見遣つたが、いよ  
いよ寝入つた様子に、つと琴を押除け膝  
で押寄つて、親手と五分間餘りも良人の  
寝顔を見詰めて居る。顔面の筋肉次第に  
痙攣する様に震へて、床へ切れずに、わつ  
と聲を出さうとして袂を咬み締めながら  
伏し込む。

侍女 (襖の中に) はア—  
袈裟 (二たび亘の傍へ取つて返して、手を掛  
け、手を打つ。)

「ぢかえ。  
松ヶ枝 好い段かいな。したが、夜に入つて、不  
意に髪をお洗ひなされたのは、如何いふ調で  
御座いますぞえ。松ヶ枝には何うも合點が参  
りませぬ。  
袈裟 え、(稍ぎくりしたが、直ぐに又心を  
落附けて、) お、それ／＼、今宵は菊月望  
の夜。此夜若い女子が髪を洗ひ、薄化粧して  
臥せる時は、一生男に捨てられぬと、昔の  
譬話にも有るさうぢやないか。  
松ヶ枝 まあ左様かいな。私は又好い歳をし  
て、つひぞ其様な話も聞きませなんだ。左様  
云ふ事なら、私も白粉も好うつけて、たと  
可憎しがつてお貰ひ遊ばせや。さア／＼、お  
愛も最う出来ました。つい一寸下へ行て、盥  
の水を明けて参りますぞえ。  
袈裟 いろ／＼大儀であつた。したが、其水を  
明けやつたら、最う此處へは来んでも可い程  
に、ゆつくり臥んでたもい。  
松ヶ枝 いえ／＼、最一度参ります。  
袈裟 い、やいの、和女の來てたらぬ方が、  
却て妾の都合が可い。な、な。  
松ヶ枝 ま、左様で御座りましたか。それなれ  
ば、最う参りませぬ。御機嫌好うお臥み遊ば

けて搖起しなから、) もしつ、夜風も寒う成  
りました。彼方へ御座つて御寝成されませぬ  
か。  
亘 (むつくり起上つて、) あ、何時の間にか  
らうと／＼寝入つたと見える。夜も深けた  
か。和女も來やれ、彼方へ参つて寝ると致さ  
う。

袈裟 はい、妾は後から—  
亘、足許や、危き心持にて、侍女に作  
れられて次の間に入る。袈裟は立上つて  
其後を見送つて居たが、良人の姿が襖の  
外に隠れると、思はずたじ／＼として振  
回り、べつたり亘の坐つて居た茵の上  
に坐つた。そして、いや／＼とする様に  
泣きながら二たび脇息の上に顔を伏せ  
る。

侍女二人 (襖を開けて這入つて、) 上様には、  
未だ御臥み成されませぬか。  
袈裟 (急に顔を振上げて、) 殿様は最う御寝成  
つたかえ。  
侍女 最うお臥み遊ばしました。  
袈裟 あ、左様か。妾は未だ彼方に用事も有  
る。それでは後を頼んだぞえ。(縁側へ出て、  
突當りの渡廊へ通ふ開き戸に入る。)

せや。(何やら呑込み顔に、襖を開けて降り  
て行く。)  
袈裟 (襖の閉つた後を稍久しく眺めて居たが、  
又もや後ろ向きに吸り上げる體、やがて正  
面を向くと共に、片袖づつ互みがり涙に涙  
を抑へて、) あ、幾たび泣いても返らぬこ  
と—涙に顔を汚しては死顔を見られるのも  
取かしい。切めて化粧を仕直して置かうわい  
な。  
二たび鏡立に向つて、紅血、白粉刷毛な  
ど取出して、顔をつくる。其間不圖顔を  
上げて伸上つたが、物に襲はれる様にお  
なわなと身を戦はして思はず手に持つた  
紅血を取落す。紅血鏡の縁に當りて二つ  
に割る。氣が附いて、屹とそれを見遣つ  
たが、だん／＼其眼を鏡の中に移して、  
自分の顔が映るのを見ると、又急に飛び  
立つ。  
お、妾を誰に見しよとて顔を粧るのぢや、  
死顔に化粧して—誰に見せようよ云ふの  
ぢや。(稍長き間、) 誰でもない、遠藤武者盛  
遠どの、お前に見せるのぢや。お前でなくて  
誰か有らう。わしやお前に—身體は上げら  
れぬ。それで—それで、此首を上げるのぢ

侍女二人、其後にて、脇息、茵、其他酒  
宴の器を取片づけ、最後にばた／＼と雨  
戸を閉めて行く。それと同時に、上手の  
高殿にばつと灯火が點つて、障子に二人  
の女の影法師が映る。

松ヶ枝 はい／＼長まりました。(障子を開け  
て、蝶を退出さうとする。)  
袈裟、片手に濡髪を交へたま、鏡立に  
向つて坐つて居る。傍に金指輪の櫛笄を  
置いて、すべて髪を洗つた後の體。  
袈裟 (松ヶ枝の方を見遣つて、) 最う好いわい  
なア。

松ヶ枝 え、煩い編め。(と、二たび袈裟の後  
ろへ廻つて、あるじの髪を胸もて梳き上げな  
がら、) ほんに、上様のお髪は好いお髪ぢや。  
天然に有るといふ、蘭者の香りを焚きこめて、  
中宮様の黄金の冠を被せても、乾度好う似  
合ひませうぞえ。  
袈裟 (暫時黙したる後、) 其方にも好いと見え

や。お前に殺されるのぢや。(はた／＼と笑  
つて、) あ、可愛いか、可愛かる。妾もお  
前を可憐しう思うて居る—お前を此處に待  
つて居る、一人寝て待つて居る。お前の足音  
が次第に此部屋へ近づいて、枕元に立つ迄待  
つて居る。闇の中に白刃が閃く迄凝手と眼を  
開いて待つて居る—  
きり／＼と前を咬みしばつて、當處もな  
く宙宇を見詰めて居たが、ばつたりと壁  
の上に伏し轉んだ。月の前を怪しげな雲  
が走つて、草叢に蟲の音すだく。  
(やがて又そろ／＼と頭を擡げた。一時興奮  
した感情も二たび鎮静したらしい。) あ、  
妾は矢張り良人のために死ぬのぢや。母様、亘  
どの、宥して下さい。妾故に數多の人の命に  
も係はる種儀、それが悲しさに、わが身一つ  
を失ひます。袈裟をあはれと思召さば、後  
の世の御同向を偏へに頼みますわいなア。  
鐘の音微かに響いて来る。  
あ、あれは—妾を死出に迎ひの鐘—  
障子の枠に縋つてよろ／＼と立上つたま  
ま、物音に耳でも敏てる様に、親手と庭  
前を見透して居る。月雲に隠れて庭の面  
次第に暗く成る。やがて袈裟御前、その



そと障子を閉めて、五寸程に成つてから、ばつたり閉切つたまゝ、姿を部屋の中に隠す。少時して、ふつと燈火を吹消したる體。

月光再び水の様に輝く。家の中は何處にも燈火の影射されば、月の光の當らぬ所は、黒々とて物凄しい。下手の座敷の櫓に釣つた鐵燈籠が急に光を増して、大きな宮守のへばり着いたのが、はつきりと見える。

遠藤武者盛遠、狩衣の上で襦をして、素足、下手屋臺の裏の植込の中から、のっそりと出る。四邊を窺ひ、力足を踏み堅めて、舞臺中央迄忍び寄つたが、家の櫓を出外れると、全身に眩いはかりの月光を浴びて、驚いて一足退く。今度は縁の上へ攀ひ上つたが、竹の柱を曲ると、月光の當つて居る縁側を一目散に断けて、渡廊へつゞく開き戸の櫓へ隠れる。事なく其戸を開けて内側へ這入つた様子。

少時の間、舞臺の上に動くものなし。宮守も依然として動かない。

やがて高殿の中に、「ヤツ」と云ふ掛聲。

と、突然障子を開けて、盛遠の姿が高殿に現はれた。右の手に白刃、左の脇に何やら抱へて居る。一瞬間右視左視して歸つたが、思ひ切つたさまで、高殿の欄干を越えて庭へ飛び降りた。直ぐに立上つて元來の方へ駆出した。が、右手迄駆けて行つて、何と思つたか急に足を留めた。二三歩戻つて、左の脇に抱へたものを、鐵燈籠の灯影に透して見る。盛遠の顔には驚きの表情が有つた。又、突然駆け戻つて、月光に透して見た。

盛遠 ヤツ、こりゝ袈裟が――

盛遠は白刃を取捨て、両手に袈裟の首を抱いたまゝ、大息を吐いた。其儘、地上に尻餅をついた。足摺りをして、自分で自分の腕を截いた。聲を上げて呻いた。

耳の聲 (家の中にて) ヤア曲者が這入つたと見えるぞ、者ども、出せへ〜

家の中一時に騒然と成る。

盛遠はそれにも氣が附かぬ様に、身を隠しながら、遺溺なげに袈裟の死へ頬擦をした。

高殿を開き戸から、ばら〜とツと物具を

着けて、襖物を取つた郎黨が現はれた。盛遠はヤツと氣が附いた様に振回つた。急に片膝立てて立上らうとしたが、思ひ返して、袈裟の首を胸に抱いたまゝ、地上に平這つて仕舞つた。

月黒雲に掩はれて、舞臺面だん〜暗くなる。眞の間となつた頃、幕靜かに下る。

(大正二年三月十六日)

# 欠



欠







終

